県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告3

乙隈天道町遺跡

福岡県文化財調査報告書

第86集

上巻

1989

福岡県教育委員会

60号竪穴住居跡出土鋳型（ほぼ原寸）

序

福岡県教育委員会では、県道建設に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、企画・立案の段階から埋蔵文化財の保護について十分な配慮を頂くよう協議を重ね、関係各方面に御協力を御願いしているところであります。県道久留米・筑紫野線建設に際して発掘調査を行い、ここに報告する乙隈天道町遺跡についても同様であります。

県道久留米・筑紫野線の発掘調査は昭和51年度から開始し、中断期間を挟んで13年目を迎え、従来から調査を実施した遺跡を含めて3冊目の報告書となります。この報告書が、社会教育及び文化財保護行政において広く活用され、さらに、学術分野での発展に寄与するところがあれば望外の喜びとするところであります。

調査及び報告書作成の過程で、尊い汗を流して頂いた地元の方々をはじめ、関係各位の皆様方の御協力に対し、深甚の謝意を表します。

平成元年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　　竹　井　　宏

例　言

1．本書は昭和62年度に福岡県教育委員会が福岡県土木部道路建設課から委託を受けて実施した、県道久留米・筑紫野線建設に伴なって破壊される埋蔵文化財の事前の発掘調査の記録で、県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告書の３冊目にあたる。

2．本書に収録した遺跡は、乙隈天道町遺跡（上・下巻）である。出土遺物実測図・写真図版は下巻に収録している。

3．遺構の実測図は調査担当者および調査補助員が主に作成し、製図は浜田信也・豊福弥生・原カヨ子・鶴田佳子・関久江氏の協力を得た。

4．遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物のうち土器の写真撮影等は九州歴史資料館技術主査石丸洋氏の指導のもとに矢野明美・須原悦子氏に御願いした。石製品・鉄製品・土製品は調査担当者が撮影した。巻頭図版の鋳型の写真は石丸洋氏による。

5．出土遺物の整理は岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館で行い、実測は調査担当者・福岡県教育庁文化課水ノ上和同氏の他、平田晴美・大田育子・若松三枝子・鬼木つや子・原富子・佐藤みゆき氏、製図は豊福弥生・鶴田佳子氏の協力を得た。整理期間が短かったため、本書に掲載した図はごく一部である。出土遺物は九州歴史資料館で保管している。

6．本文中、第１表に記載した面積はプラニ・メーターによる計測値で、その際、縮尺１／20の原図を使用した。計測は関久江・原カヨ子氏の協力を得た。

7．挿図で使用した方位はすべて真北である。

8．本書の執筆は、スクレーパー（第121図－１）について、県文化課水ノ江和同氏にお願いし、他は児玉が担当した。

9．本書の編集は児玉が担当した。

本　文　目　次

第１章　はじめに

第１節　調査の経過と組織 …… 1

第２節　遺構の説明の前に …… 4

第２章　位置と環境 …… 7

第３章　調査の内容 …… 13

第１節　遺跡と遺構の概要 …… 13

(1)　Ａ地区 …… 13

(2)　Ｂ地区 …… 13

第２節　遺構と遺物 …… 14

(1)　Ａ地区 …… 14

1　掘立柱建物跡 …… 14

2　溝 …… 15

(2)　Ｂ地区 …… 15

1　竪穴住居跡 …… 15

2　掘立柱建物跡 …… 130

3　方形竪穴 …… 136

4　周溝墓 …… 138

5　円形周溝 …… 143

6　祭祀土壙 …… 145

7　廃棄土壙 …… 162

8　土壙 …… 169

9　落し穴状遺構 …… 170

10　溝 …… 172

11　その他の遺物 …… 174

第４章　おわりに …… 179

挿図目次　（上巻）

第 1 図　調査風景……3
第 2 図　竪穴住居跡穴部模式図……4
第 3 図　周辺遺跡分布図（1／50,000）……折り込み
第 4 図　七板遺跡F区21号竪穴住居跡（1／60）……10
第 5 図　犬竹遺跡20号竪穴住居跡……11
第 6 図　乙隈遺跡出土銅戈……12
第 7 図　1～3号掘立柱建物実測図（1／100）……15
第 8 図　1号竪穴住居跡実測図（1／60）……16
第 9 図　2号竪穴住居跡実測図（1／60）……17
第 10 図　3号竪穴住居跡実測図（1／60）……19
第 11 図　1号廃棄土拡・3～4号竪穴住居跡付近土層図（1／60）……20
第 12 図　6～8号竪穴住居跡実測図（1／60）……25
第 13 図　9号竪穴住居跡実測図（1／60）……27
第 14 図　10号竪穴住居跡実測図（1／60）……28
第 15 図　11号竪穴住居跡実測図（1／60）……28
第 16 図　12号竪穴住居跡実測図（1／60）……29
第 17 図　13号竪穴住居跡実測図（1／60）……30
第 18 図　14・15号竪穴住居跡実測図（1／60）……31
第 19 図　16号竪穴住居跡実測図（1／60）……33
第 20 図　17・18号竪穴住居跡実測図（1／60）……34
第 21 図　19号竪穴住居跡実測図（1／60）……37
第 22 図　20号竪穴住居跡実測図（1／60）……38
第 23 図　21号竪穴住居跡実測図（1／60）……39
第 24 図　21号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）……40
第 25 図　22号竪穴住居跡実測図（1／60）……41
第 26 図　24号竪穴住居跡実測図（1／60）……43
第 27 図　25～27号竪穴住居跡実測図（1／60）……44
第 28 図　28号竪穴住居跡実測図（1／60）……45
第 29 図　30号竪穴住居跡主柱穴（P_2）実測図（1／30）……46
第 30 図　30号竪穴住居跡実測図（1／60）……47
第 31 図　31号竪穴住居跡実測図（1／60）……50

第 32 図　32・33号竪穴住居跡実測図（1／60）……51
第 33 図　34・35号竪穴住居跡実測図（1／60）……53
第 34 図　36・37号竪穴住居跡実測図（1／60）……54
第 35 図　38号竪穴住居跡実測図（1／60、1／40）……折り込み
第 36 図　39～41号竪穴住居跡実測図（1／60）……折り込み
第 37 図　42～44号竪穴住居跡実測図（1／60）……60
第 38 図　45・46号竪穴住居跡実測図（1／60）……61
第 39 図　46号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）……62
第 40 図　47・49A・B号竪穴住居跡実測図（1／60）……64
第 41 図　51号竪穴住居跡実測図（1／60）……66
第 42 図　52号竪穴住居跡実測図（1／60）……68
第 43 図　53・54号竪穴住居跡実測図（1／60）……70
第 44 図　55号竪穴住居跡実測図（1／60）……72
第 45 図　56号竪穴住居跡実測図（1／60）……73
第 46 図　57・58号竪穴住居跡実測図（1／60）……75
第 47 図　59・60号竪穴住居跡実測図（1／60）……77
第 48 図　61号竪穴住居跡実測図（1／60）……79
第 49 図　62号竪穴住居跡実測図（1／60）……80
第 50 図　66号竪穴住居跡実測図（1／60）……81
第 51 図　67号竪穴住居跡実測図（1／60）……83
第 52 図　68号竪穴住居跡実測図（1／60）……84
第 53 図　69号竪穴住居跡実測図（1／60）……87
第 54 図　70号竪穴住居跡実測図（1／60）……88
第 55 図　71号竪穴住居跡実測図（1／60）……90
第 56 図　72号竪穴住居跡実測図（1／60）……91
第 57 図　73号竪穴住居跡実測図（1／60）……92
第 58 図　74・75号竪穴住居跡実測図（1／60）……折り込み
第 59 図　76号竪穴住居跡実測図（1／60）……95
第 60 図　77号竪穴住居跡実測図（1／60）……96
第 61 図　78号竪穴住居跡実測図（1／60）……97
第 62 図　79号竪穴住居跡実測図（1／60）……98
第 63 図　80号竪穴住居跡実測図（1／60）……100
第 64 図　81号竪穴住居跡実測図（1／60）……101

第 65 図　81号竪穴住居跡カマド実測図（1／40）……102
第 66 図　82号竪穴住居跡実測図（1／60）……102
第 67 図　83号竪穴住居跡屋内土壙実測図（1／30）……103
第 68 図　83号竪穴住居跡実測図（1／60）……104
第 69 図　84号竪穴住居跡カマド実測図（1／60、1／30）……106
第 70 図　85～87号竪穴住居跡実測図（1／60）……折り込み
第 71 図　88号竪穴住居跡実測図（1／60）……111
第 72 図　89号竪穴住居跡実測図（1／60）……112
第 73 図　90号竪穴住居跡実測図（1／60）……113
第 74 図　91号竪穴住居跡実測図（1／60）……114
第 75 図　91号竪穴住居跡屋内土壙実測図（1／20）……115
第 76 図　92号竪穴住居跡実測図（1／60）……折り込み
第 77 図　92号竪穴住居跡屋内土壙実測図（1／20）……115
第 78 図　93号竪穴住居跡実測図（1／60）……119
第 79 図　95号竪穴住居跡実測図（1／60）……120
第 80 図　96号竪穴住居跡実測図（1／60）……121
第 81 図　99号竪穴住居跡実測図（1／60）……123
第 82 図　100号竪穴住居跡実測図（1／60）……124
第 83 図　101号竪穴住居跡実測図（1／60）……125
第 84 図　102号竪穴住居跡実測図（1／60）……126
第 85 図　103号竪穴住居跡実測図（1／60）……127
第 86 図　103号竪穴住居跡主柱穴（P_2）土器出土状態実測図（1／30）……128
第 87 図　106号竪穴住居跡屋内土壙実測図（1／30）……129
第 88 図　掘立柱建物柱穴遺物出土状態（1／30）……131
第 89 図　4～7号掘立柱建物実測図①（1／100）……132
第 90 図　8～13号掘立柱建物実測図②（1／100）……133
第 91 図　14～17号掘立柱建物実測図③（1／100）……134
第 92 図　18～21号掘立柱建物実測図④（1／100）……135
第 93 図　方形竪穴実測図（1／60）……137
第 94 図　1・2号周溝墓実測図（1／100）……139
第 95 図　3号周溝墓実測図（1／100）……141
第 96 図　4・5号周溝墓実測図（1／100）……142
第 97 図　1～7号円形周溝実測図（1／80）……144

第 98 図　祭祀土壙跡実測図①（1／40）……146
第 99 図　祭祀土壙跡実測図②（1／40）……147
第 100 図　祭祀土壙跡実測図③（1／40）……148
第 101 図　祭祀土壙跡実測図④（1／40）……149
第 102 図　祭祀土壙跡実測図⑤（1／40）……150
第 103 図　祭祀土壙跡実測図⑥（1／40）……151
第 104 図　祭祀土壙跡実測図⑦（1／40）……152
第 105 図　祭祀土壙跡実測図⑧（1／40）……153
第 106 図　廃棄土壙実測図①（1／60）……163
第 107 図　廃棄土壙実測図②（1／60）……164
第 108 図　廃棄土壙実測図③（1／60）……165
第 109 図　廃棄土壙実測図④（1／60）……166
第 110 図　土壙実測図（1／30）……169
第 111 図　落し穴状遺構実測図（1／30）……171
第 112 図　2 号溝土層図（1／60）……173
第 113 図　遺構配置図……180
第 114 図　竪穴住居跡竪穴部集成図……182
第 115 図　甘木市宮原遺跡Ｃ地区 3 号竪穴住居跡……184

表　目　次

表 1　竪穴住居跡計測表……176

第１章　はじめに

第１節　調査の経過と組織

調査の経過　1987年２月、筆者は吉井町で塚堂古墳・日岡古墳の調査を行っていたが、ここに報告する天道町遺跡の横を通った時、この部分に重機が導入され、擁壁工事のための掘削が行われていた。この部分は地形的にも遺跡の存在が十分予測される所であり、かつて、渡辺正気氏が銅戈の出土を報告された遺跡（註１）とは至近距離にあるため、急拠、福岡県甘木土木事務所と連絡を取り、分布調査を行った。その間、工事を中止して頂いたが、路線内は言うに及ばず、広い範囲に多量の土器片の散布が観察され、試掘調査の必要があり、甘木土木事務所と協議の結果、３月に試掘調査を実施した。その結果、路線内の内、南側には濃密な遺構の存在が確認され、北側はピットが散在する程度であった。よって、この部分の調査の必要性を甘木土木事務所に通知し、再度協議を行った。しかし、福岡県教育庁文化課で以前に行った分布調査の結果の回答文書では、ここは、要調査地点として上ってはおらず、これは文化財サイドの落ち度であり、協議は当初からつまずいた。が、埋蔵文化財が現実に存在するのであり、それを無視して県道建設を行うことは許されず、県道路建設課・甘木土木事務所の深い御理解の上、発掘調査を行うこととなった。

調査は、試掘調査の結果にのっとり、1987年８月１日より南側から重機で表土剝ぎを開始し、盆明けから作業員を導入し、調査を開始した。調査面積に対して遺構の数が異常に多く、足の踏み場もない程であり、土砂の搬出にも苦慮し、ベルト・コンベヤー20台を導入して調査を行った。遺構が何層にも重なり、そのため、実測・写真撮影にも多大の日時を要し、調査が完了したのは1988年３月15日であった。出土遺物はパン・コンテナー800箱に達し、その他に重要遺物として別に取り上げた遺物はパン・コンテナー10箱に達する。以下、調査の経過を月を追っておおまかに振りかえってみよう。

８月１日から重機を導入して表土剝ぎを開始した。筆者は県道筑紫野・三輪線第２地点（森山地区）を調査中で、天道町遺跡の表土剝ぎ・調査を並行して行った。土置場の都合で南側から表土を剝ぎ始めたが、竪穴住居跡を中心におびただしい量の遺構が顔を見せ始めた。調査区の南側から北に向って100m程の間は足の踏み場もない程で、地山（黄色・チョコレート色）は僅かで、一面が真っ黒であった。試掘時にトレンチ調査で包含層と考えていた部分は竪穴住居跡で覆土であることが解り、その様な部分が２ケ所あった。とりあえず、調査区の南側から北へ約100mまで表土剝ぎを行い、それ以北を土砂の仮置場とし、時期をみてそれ以北の表土剝ぎ

と調査を行うこととした。先述のように盆明けから作業員を導入し、調査を開始した。当初は調査区の脇に排土を置いていたが、土捨て場に困るようになり、やむをえず、ベルト・コンベヤーを20台導入して北側の仮置場とした部分に排土を捨てることにした。8月は遺構の切り合い関係を把握することに時間を費やした。

9月にはいり、調査区南側拡張部分の遺構検出を開始した。日照りと豪雨の繰り返しで調査は困難を極めたが、作業員を大量に動員して調査を続行した。遺構は、竪穴住居跡の場合は貼り床面を検出した段階でその面で確認できる遺構のみを掘り、掘立柱建物跡と認定できたものは柱痕の検出に努めたが、その他の遺構については完掘した。以降、この方法で調査を行ったが、特に竪穴住居跡の切り合いが複雑な場合は困難を極めた。県文化課日高正幸氏により、実測用の10m方眼の杭打ちをして頂いた。一部、実測を開始した。

10月は竪穴住居跡の複雑に切り合う部分の調査に終始した。調査区中央部分は特に遺構の密集するところであり、頭の痛い日々であった。遺構の実測は南側から継続して行った。好天に恵まれ、調査は順調に進んだ。

11月は調査区全体の遺構検出を目標に調査を行った。空中写真を撮影することが最大の課題となった。写真撮影は個別の小さな遺構を除いて、遺構が密集するため写真撮影台を組み立てることは危険なので、一部の遺構を除いて空中写真を撮影することにした。よって、竪穴住居跡の床面は写真撮影まで下げることができず、この時期は竪穴住居跡の床面検出とその面での遺構実測に終始した。この月の下旬は雨の日が多く、何度かの天気待ちのあと2日間の撮影を行った後、南側から竪穴住居跡の床面下の調査にはいり、重機を導入して土砂の仮置場以北の表土剝ぎを開始した。

12月にはいり、竪穴住居跡の床面下の調査を続行し、竪穴住居跡の切り合い関係の不明な部分の補足調査、貼り床面下からの新たな遺構の検出、掘立柱建物跡の不足した柱穴の確認等を行った。霜が降る季節ではあったが、新たな遺構の検出等で作業員の士気は上がり、12月を乗り切ることができた。土器の出土量は異常な程で、正月前に、パン・コンテナー500箱を九州歴史資料館に運び込んだ。

1月は正月明け後、すぐ発掘調査を再会した。12月と同様な天候で調査は困難を極めた。住居貼床面下の調査・実測、個別遺構の実測・写真撮影を行った。主に、住居の切り合い関係の再確認を行った。その過程で、遺構の切り合い関係の図面上の調整、出土遺物の再確認を行ったが、遺構があまりにも密集しており、整理の過程でも、ひとつの出土遺物の帰属関係について自信の持てないものもある。

2月も1月の調査の続行であった。初旬は住居貼床面下の完全検出を目ざしてその空中写真撮影を目的としたものであった。実測・写真撮影も並行して行った。天候は必ずしも最適ではなかったが11日に無事に空中写真撮影を終了し、さらに、下層の遺構の調査を続行した。

3月は2月の調査の継続と現場の収束であった。本来は2月で調査が完了する予定であったが、調査担当者の個人的な理由により、調査をこの月まで延長せざるを得なかった。そのことについてはどうしようもないことであったが、とりあえず、不十分ながら遺構の最小限の図化はどうにかすることができた。天道町遺跡の最終的な調査を終えたのは、筑後川に菜の花が咲く頃、3月15日であった。

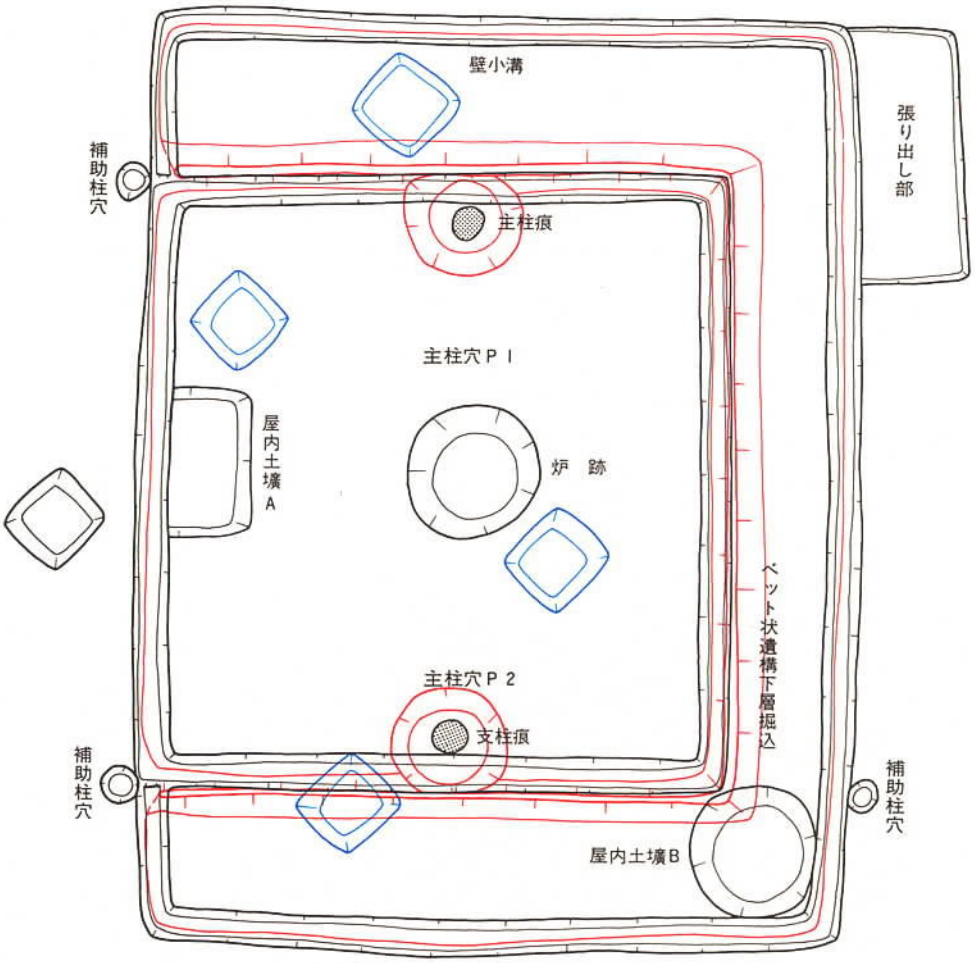
調査の組織（昭和62年度）

総　括	福岡県教育委員会	
	教育長	友　野　　隆
	文化課長	窪　田　康　徳
	文化課長技術補佐	宮小路　賀　宏
	文化課記念物係長	栗　原　和　彦
	文化課庶務係長(兼)	平　　聖　峰
	同事務主査	竹　内　洋　征
	同主任主事	沢　田　俊　夫
調　査	北筑後教育事務所	
	技術主査	児　玉　真　一

第1図　調査風景

第２節　遺構の説明の前に

天道町遺跡では遺構が複雑に切り合っており、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙・溝等の切り合い関係を示すために、３色刷りをする場合がある。また、各色で波線表示している場合もある。これらについて以下に説明を加え、遺構図の理解を容易にしたいと思う。ただし、遺構が複雑に切り合っており、竪穴住居跡の切り合い関係を正確に捕らえて図示できたか否か、掘り過ぎたり、掘り足りずに図化が混乱した場合もあり、それはこの報告書の中で不正確ながら修正している。それらのことを十分に踏まえて以下の模式図を見て頂きたい。



第２図　竪穴住居跡穴部模式図

この模式図は弥生時代終末期～古墳時代初期の土器を出土した竪穴住居跡から作成したものである。理想的に検出された遺構を想定して作成し、かつ、複数の遺構を合成したものであることを断っておきたい。

以下、具体的に説明を行う。

第２図は黒・赤・青の３色で図示している。黒・赤は竪穴部の構造上における作業過程上の新旧関係を示し、青は竪穴住居跡竪穴部に切られた古い遺構（掘立柱建物跡の一部）を示している。３色で図示した各部の個別の説明をすれば以下のようである。

竪穴部……通常の発掘調査で検出する遺構で、竪穴住居の主要部分である。種々の事例から、この外側まで竪穴住居は拡がるが、その範囲を確定できる具体的な遺構は検出していない。遺構検出面・貼床上の遺構は黒色で図化している。

（壁小溝）　周溝と一般的に呼ばれている遺構である。貼床を剝がすと壁小溝の下層の地山面に、径５～10cm程の浅いピット状の遺構が直線的に並ぶ。他の遺跡で板材をこの部分に打ち込んだ例があり、壁体保護を目的とし板、および杭等を打ち込んだ遺構であろうと考えている。

（主柱痕）　住居を廃棄する時、主柱を抜かない場合、柱が腐食して貼床面に普通径10～20cmの主柱痕を検出することができる。

（主柱穴）　厚さ１～２cmの貼床を剝がし、剝床と地山間の土（普通は黒褐色土に地山の黄色ブロックを含む）を除去すると径50cm・深さ30～50cm程のピットを検出することができる。これを主柱穴と呼び、貼床の下層で検出するので赤色で図示している。主柱が掘り抜かれている場合は主柱穴は原状を保たず貼床面から荒らされているので、黒色で図化している。

（炉　跡）　貼床面から掘りこみ、内側に粘質土を貼ったと思われ、内側が赤く、硬化している場合が多い。

（屋内土壙）　普通、竪穴部長壁の中央部分にひとつ設置されるが、時として複数の屋内土壙を設置する場合がある。それらの性格については問題が残るが、一応屋内土壙Ａ、同Ｂと使い分ける場合がある。屋内土壙Ｂは、その設置場所が一定しているわけではないが、図のように竪穴部の隅角部に検出されることが多い。

（補助柱穴）　上屋は基本的に２本の支柱で支えるが、補助柱を立てたと思われるピットを補助柱穴と呼ぶ。本遺跡ではベッド状遺構に沿ってその延長線上の壁際に検出した例（P_1・P_2）が多く、稀にP_3のよう

に、1個しか検出できなかった例もある。

（ベッド状遺構）　竪穴部の両短壁に設置する場合や〝コ〟字形に設置する場合が多い。時期がやや降る場合、本遺跡では、屋内土壙Aを除いた壁際全周に設置されている。本遺跡のベッド状遺構は竪穴部掘削時の土を盛り上げて造ったもので、地山削りだしのものは1例もない。

（ベッド状遺構下層掘込）　ベッド状遺構・貼床を全て除去して地山面まで掘り下げた時、ベッド状遺構下層に断面が逆台形の掘込が検出できる。この掘込はベッド状遺構の下層だけに限って認められる。この掘込は生活面の下層にあり、生活時には床面の下にあるので赤色で図示している。その機能については検討課題として残る。

（張り出し部）　竪穴部の壁外に長方形の浅い遺構を検出することがある。あまり、例のない遺構であるが他遺跡の事例から、住居に伴うことが判明しており、本遺跡でも検出している。その機能については今後の検討課題として残る。

以上が乙隈天道町遺跡の大部分の竪穴住居跡に伴なう個別遺構である。3色のうち、基本的には黒色は現実の生活面に存在する遺構を示し、赤色はその竪穴住居に伴なうが、生活面では貼床・ベッド状遺構の下層にあって目に見えない遺構を示している。青色は黒色で図示した遺構に切られた前代の遺構のうち、たとえば、竪穴部内の床面下の部分を示している。

しかし、本遺跡では遺構が複雑に切り合っており、発掘中に必ずしもその層位を正確に把握できなかった場合がある。よって、赤・青の線に多少の混乱が存在し、また、図が複雑になる場合は青で示すべき線を黒の破線で示した場合もある。

以上で、黒・赤・青線の意味を御理解いただけたと思う。

註　1　井上俊男・柴田泰典・渡辺正気「福岡県三井郡小郡町大字乙隈発見の二口の銅戈」（『九州考古学』14　所収）　1962

第３図　周辺遺跡分布図（１／50,000）

1．乙隈天追町遺跡
2．小郡正尻遺跡
3．小郡前伏遺跡
4．大板井遺跡
5．大板井遺跡
6．薬師堂遺跡
7．薬師東堂遺跡
8．宮巡遺跡
9．春園遺跡
10．10地点
11．立野遺跡
12．宮原遺跡
13．上々浦遺跡
14．下原遺跡
15．西原遺跡
16．高原遺跡
17．ロノ坪遺跡
18．梶原遺跡
19．柿ノ上遺跡
20．行司田遺跡
21．琴ノ宮遺跡
22．江藤遺跡
23．大木（おおき）遺跡
24．宮ノ上遺跡
25．杤（たで）野遺跡
26．中原前（なかばるまえ）遺跡
27．出口遺跡
28．東小田峯遺跡
29．隈遺跡群
30．津古古墳群
31．三国の鼻古墳
32．横隈山古墳
33．横隈狐塚遺跡
34．伊勢山遺跡
35．西中隈遺跡
36．小郡官衛遺跡
37．向築地遺跡
38．大崎小園遺跡
39．井上廃寺
40．干潟遺跡
41．東小田七板遺跡
42．西下野１号墳
43．大師堂１号墳
44．山隈窯跡群
45．焼ノ峠古墳
46．小隈１号墳
47．小隈窯跡群
48．犬竹遺跡
49．栗田遺跡
50．馬田りんりん石古墳
51．宮原古墳
52．神蔵古墳
53．小田道遺跡
54．大願寺遺跡
55．小田小塚古墳
56．小田茶臼塚古墳
57．小田集落遺跡
58．鬼の枕古墳
59．池ノ上墳墓群
60．古寺古墳墓群
61．持丸古墳群
62．柿原野田遺跡

第 2 章　位 置 と 環 境

乙隈天道町遺跡は小郡市大字乙隈・朝倉郡夜須町大字四三島にまたがって所在する。すなはち、A地区が夜須町に、B地区が小郡市に属し、B地区の調査区東端と北端が行政境である。

遺跡は宝満川の支流である草葉川北岸の低台地上に立地し、現状は田畑である。南側の水田面との比高差は4m程で、遺跡の所在する部分は西・南に向ってわずかに傾斜している。この台地は三方を東の宝満川・南の草葉川・北の曾根田川に囲まれ、起伏が乏しく、北は群集墳が存在する三輪町栗田・森山、夜須町三牟田等、山麓部へ延びている。先述の3河川流域は古くから水田耕作の適地として利用されていたと思われ、この流域に面する台地縁辺部には弥生時代前期の遺跡が散在し、それ以降、この台地は居住地区・墓地として活用されていたようである。時として、縄文時代の遺物が出土することがあるが、弥生時代以降の遺跡が多く見受けられる。また、弥生時代中期の送葬儀礼に伴う丹塗磨研土器が多く出土する地域である。

天道町遺跡に関連する周辺の遺跡を概観してみよう（第2図参照）。

乙隈遺跡（註1）……天道町遺跡の西側約100mの地点（乙隈字542番地）から、昭和36年に小能見正義氏が氏所有の畑（現在は水田）から2口の銅戈を発見し、翌37年に学会に報告された。小能見氏の話によれば甕棺墓からの出土と思われる。天道町遺跡から甕棺墓は検出されていないが、それに伴う祭祀土壙が多数存在し、本調査区の西側に甕棺墓地があると想定され、祭祀の場所の一部が本調査区内にかかっているものと思われる。なお、本書に掲載した銅戈の図は片岡宏二氏による（第6図－註2）。

犬竹遺跡（註3）……本遺跡と同じ台地上に立地し、同じく草葉川北岸の台地縁辺部に営まれている。74軒の竪穴住居跡を中心に16基の埋葬遺構等が出土している。出土遺物が遺構に伴なうか否かの記述がないので判断しにくいが、土器から見れば天道町遺跡とほぼ同時期で弥生時代中期の竪穴住居跡、同終末期～古墳時代初期の竪穴住居跡が検出されている。本遺跡と並行する時期の集落跡と考えられるが、土器の出土状態が報告されていないので細かくは判断できない。ただし、この遺跡で重要なことは武田光正氏によって明らかにされたように、「20号住居跡の周溝内施設について」（註4）である。氏は卓越した調査方法により、周溝内に幅20～30数cmの羽目板痕と杭痕を明瞭に検出された。それまで、周溝を〝壁小溝〟と呼称してきたが（註5）、氏により、その機能が実証的に明らかにされた。

東小田遺跡群（註6）……天道町遺跡と同様に県道久留米・筑紫野線の事前調査によって明らかにされた遺跡である。峯遺跡では、夜須町が行った圃場整備に伴なう調査と同様に甕棺墓を中心とする遺構が検出されている。七板遺跡F区は集落跡で弥生時代の竪穴住居跡32軒、古墳

時代の竪穴住居跡７軒、奈良時代の竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡２棟の他に土壙・溝等が検出されている。天道町遺跡のような弥生時代終末～古墳時代初期の竪穴住居跡は検出されてないが、当該時期の溝があり、調査区外にはその時期の集落が展開するものと推察される。この遺跡で注目されるのは、弥生時代後期初頭に位置ずけられている21号竪穴住居跡である。竪穴部の東側短壁に張り出し部を設け、方形の炉の周囲には北側で一部途切れるが溝を掘っている（第４図）。大型住居ではないが入念に造っている。天道町遺跡でも時期は降るが張り出し部を持つ例があり、貴重な比較資料である。

峯遺跡（註７）……上記東小田遺跡群の峯遺跡に北接する部分で、県営圃場整備事業に伴ない夜須町が調査を行った。1985年から1988年の足かけ４年にわたる調査で、竪穴住居跡約550軒、甕棺墓約600基を検出し、弥生時代の社会を考える上で極めて重要な資料が続出している。中でも10号甕棺墓とその副葬品（前漢鏡２、鉄剣１・鉄戈１・鑷子１、ガラス璧を再利用した装身具２）は国の重要文化財に指定されている。他の甕棺墓からも副葬品が検出されており、竪穴住居跡の密集度や出土品から、峯遺跡はこの地域の拠点集落であろうと考えられる。

栗田遺跡（註８）……朝倉郡三輪町栗田に所在し、県営圃場整備に伴なって発掘調査がなされた。調査地点は広範囲にわたり、それぞれＡ～Ｅ地区にわけられている。本報告の出ているＢ地区では竪穴住居跡３軒・土壙墓（木棺墓を含む）11基のほかに54基の甕棺墓が調査され、

① 甕棺墓地とそれに関わる祭祀遺構の検出。

② 甕棺墓・祭祀遺構への多量の丹塗磨研土器の供献行為。

③ 祭祀土器の再配置。

などの事が明らかにされた。Ａ～Ｃ地区の出土品は昭和53年に国の重要文化財の指定を受けている。

城山遺跡群（註９）……朝倉地方の平野の真中に独立してそびえる城山（花立山ともいう）の北西側の丘陵に営まれている。1971・1972年に調査された。

1971年の調査では、焼ノ峠古墳・松尾古墳群が調査された。焼ノ峠古墳は南面する前方後方墳で、測量図によれば周濠を含めて全長43m程である。主体部は未調査のため不明だが、周濠には供献土器が転落した状況で出土している。調査担当者の柳田康雄氏は出土土器から４世紀中頃の年代をあてている（註10）。同時に調査された松尾古墳群では方形周溝墓（１号墳）・円形周溝墓（２号溝）が各１基ずつ検出されている。周溝内から土器が出土しており、時期は焼ノ峠古墳とさほど隔たりはないようである。

1972年の調査では、城山遺跡・金山遺跡が調査された。城山遺跡では弥生時代前期後半～中期前半の甕棺墓34基・土墓（木棺墓を含む）67基が検出されている。埋葬施設は相互に切りあう場合もあるが、配列状況は整然とし、墓域の中に「広場」的な空白地区がある。金山遺跡では顕著な遺構は検出されていないが、旧石器時代～弥生時代の遺物が出土している。

金山遺跡（註11）……先述した城山遺跡の北に位置する集落跡である。表採資料を含めて出土遺物は旧石器時代～古墳時代に及ぶ。検出された遺構は弥生時代中期末～後期の竪穴住居跡で他に土壙・溝等が検出されている。竪穴部床面の柱配置で興味深い竪穴住居跡があり、天道町遺跡の竪穴住居跡を考える上で極めて興味深い遺跡である。調査担当者の井上裕弘氏により、弥生時代中期末～後期の土器の編年案が提示されている。

干潟遺跡（註12）……天道町遺跡と同様に、県道久留米・筑紫野線建設に伴なって事前調査された村落跡である。遺構の主体は奈良時代にあり、竪穴住居跡36軒・掘立柱建物18棟の他に土壙・溝・ピット群等が検出されている。奈良時代の村落を考える場合、極めて重要な遺跡ではある。

干潟遺跡（註13）……主に甕棺墓・土壙墓（木棺墓を含む）からなる埋葬遺構である。甕棺墓32基・土壙墓10基が検出され、それらは、かなり整然と配列されている。

干潟遺跡（註14）……主に甕棺墓・土壙墓（木棺墓を含む）からなる埋葬遺構で、他に古墳が1基調査されている。甕棺墓29基・土壙墓7基等が調査され、墓地の形成について考える場合、重要な遺跡である。

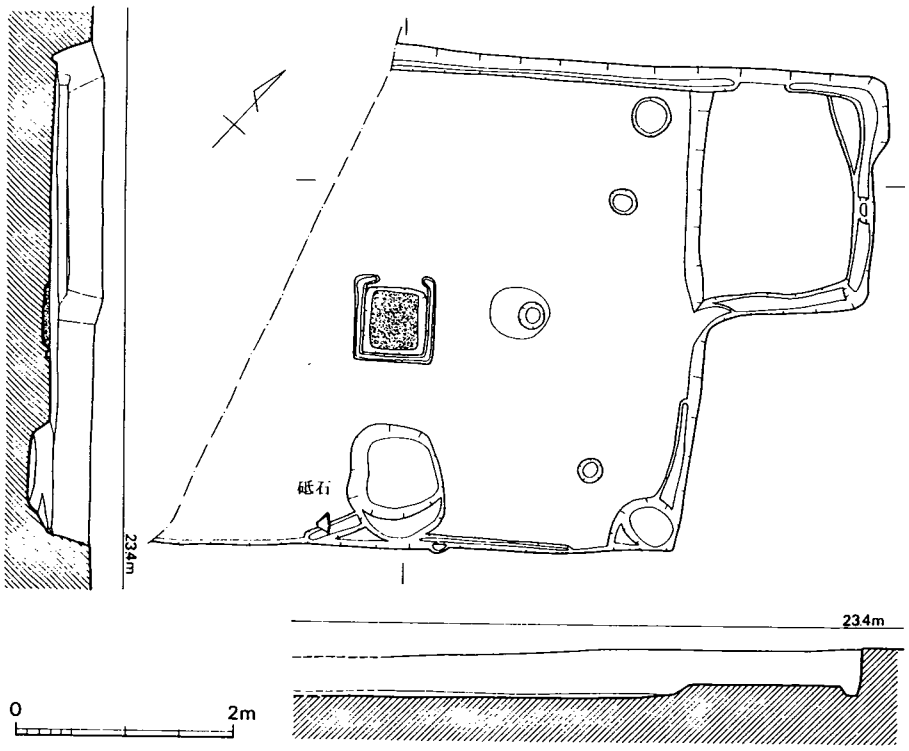
以上が宝満川東岸側で発掘調査された遺跡の主なものである。発掘調査されながら、未報告のものが多々あるが、それらは割愛する。

宝満川西岸側でも小郡市・筑紫野市教育委員会が精力的に発掘調査を行っている。なかには天道町遺跡を考えるうえで重要な遺跡もあるが、ここでは宝満川東岸側で発掘調査された遺跡に限って紹介するに留めておく。

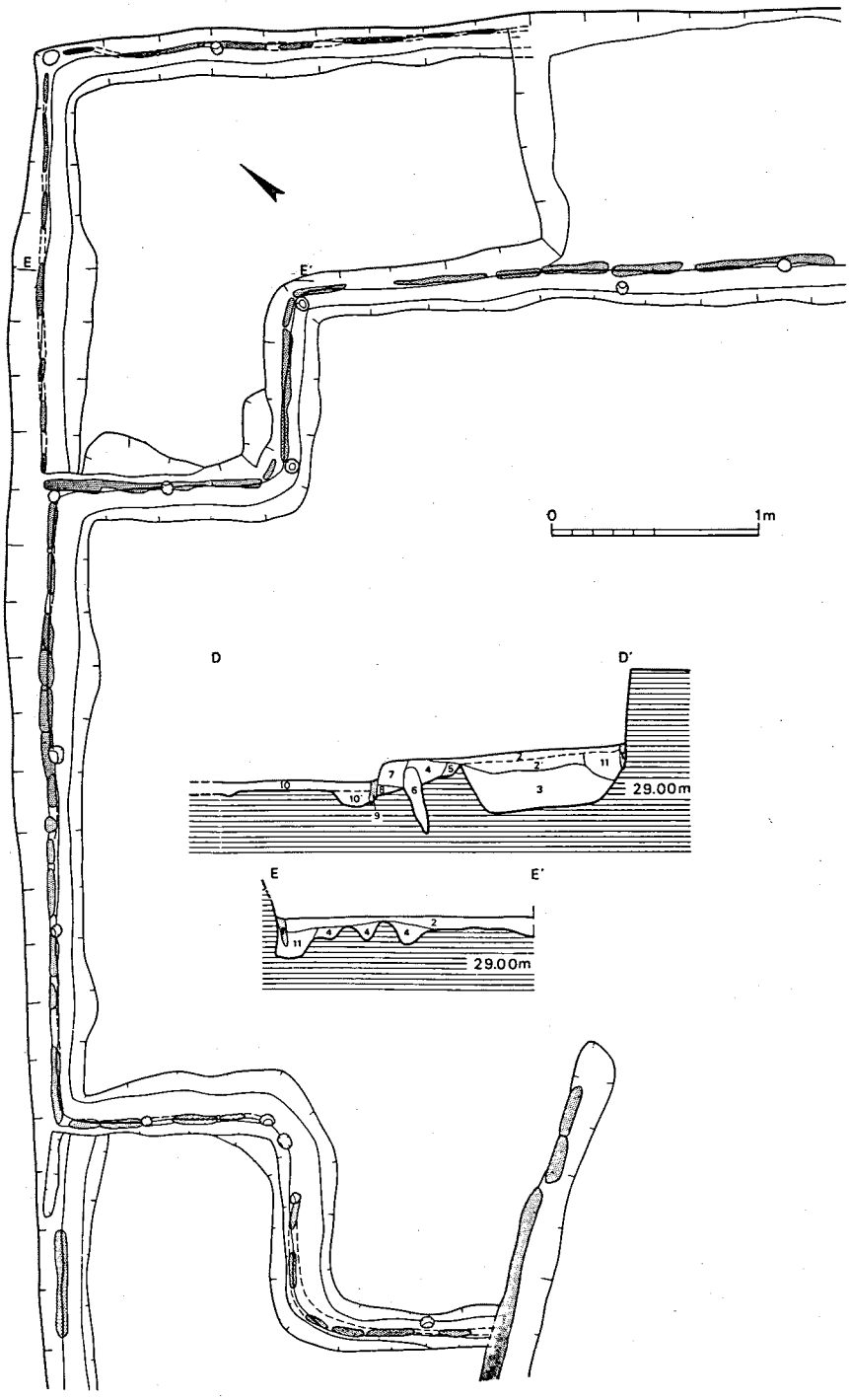
以上の記述から、天道町遺跡周辺の状況をおおむね御理解頂けたと思う。弥生時代中期には夜須町峯遺跡・七板遺跡（未報告分あり－県営圃場整備関係）、三輪町栗田遺跡等に見られるように丹塗磨研土器が甕棺墓へ大量に供献され、他地域と異なった状況がある。また、弥生時代終末期頃は三輪町犬竹遺跡のように竪穴部内で重要な遺構が発見されている。古墳時代にはいると夜須町焼ノ峠古墳の成立や、古式須恵器を焼いた窯跡が花立山の北側山麓にみられ、新たな文化の息吹きとともに、政治・経済・社会全般にわたる大変革の時代を迎える。

註　1　井上俊男・柴田泰典・渡辺正気　「福岡県三井郡小郡町大字乙隈発見の二口の銅戈」（『九州考古学』14　所収）　1962
2　片岡宏二編　『大板井遺跡』　1984　小郡市教育委員会
3　石山　勲編『犬竹遺跡』　1985　三輪町教育委員会
4　武田光正　「20号住居跡の周溝内施設について」　『犬竹遺跡』　1985　三輪町教育委員会
5　福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　2・5・8・14集
6　石山　勲編　『東小田遺跡群』(県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告　第2集)　1985

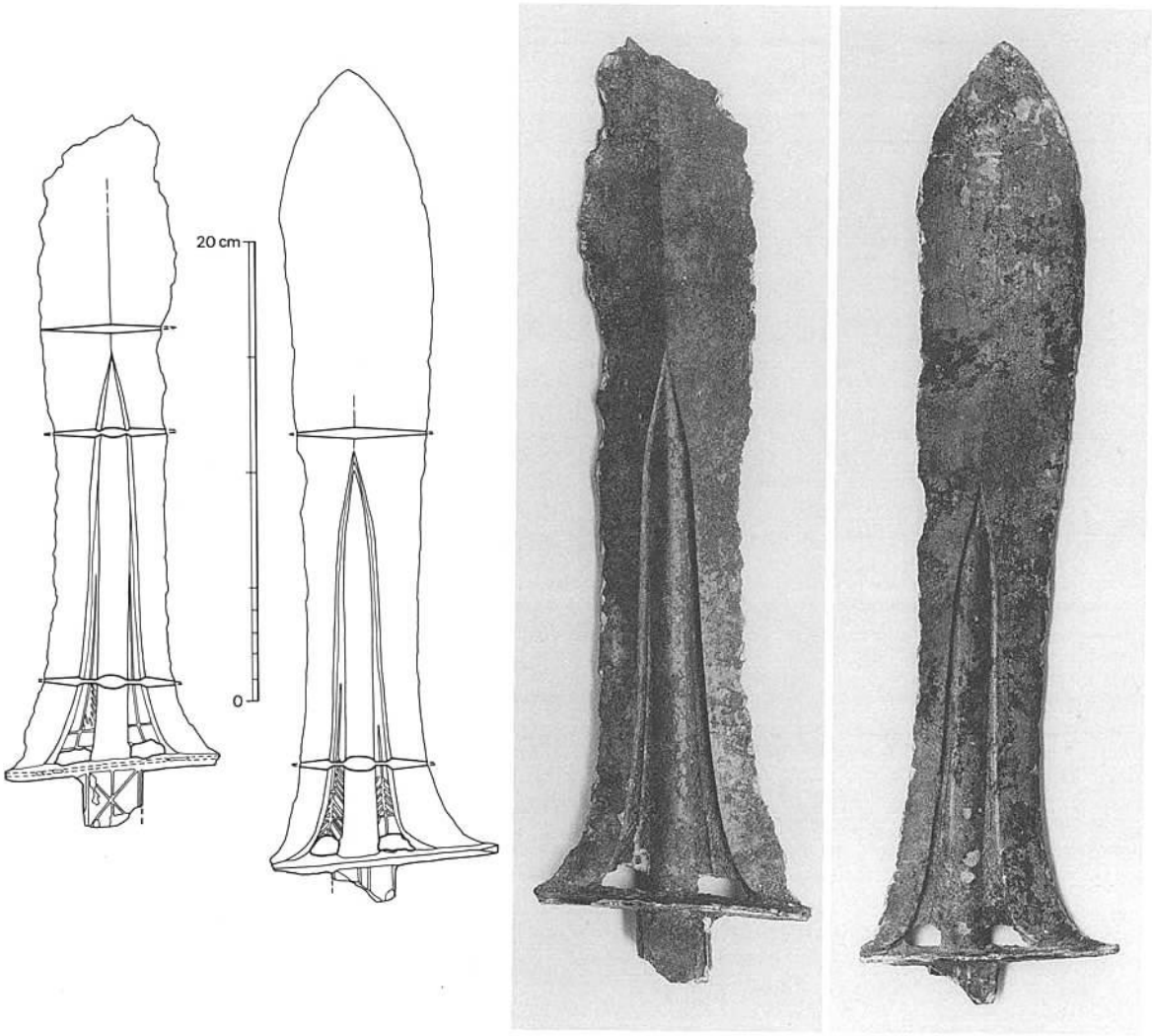
福岡県教育委員会
7　調査担当者の夜須町教育委員会佐藤正義氏の御教示に依る。
8　馬田弘稔編　『栗田遺跡（A～C地区）』　1974　三輪町教育委員会
〃　『栗田遺跡（D～E地区）』　1975　三輪町教育委員会
〃　『栗田遺跡（B地区）』　1986　三輪町教育委員会
9　柳田康雄編　『城山遺跡群』（図版編）　1971　夜須跡教育委員会
橘　昌信編　『城山遺跡群発掘調査報告書』（城山遺跡・金山遺跡）　1973　夜須町教育委員会
10　柳田康雄　「三・四世紀の土器と鏡」（『森貞二郎博士古稀記念古文化論集』所収）　1982
11　井上裕弘編　『金山遺跡』　1981　夜須町教育委員会
12　橋口達也編　『干潟遺跡』　（県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告　第1集）　1980　福岡県教育委員会
13　片岡宏二編　『干潟遺跡』　1983　小郡市教育委員会
14　速水信也編　『干潟下屋敷遺跡』　1987　小郡市教育委員会



第4図　七板遺跡F区21号竪穴住居跡（1／60）



第５図　犬竹遺跡20号竪穴住居跡



第 6 図　乙隈遺跡出土銅戈

第 3 章　遺 構 と 遺 物

第1節　遺跡と遺構の概要

天道町遺跡は小郡市と朝倉郡夜須町にわたって存在する(付図－1)。宝満川の支流の草場川右岸低台地上に営まれ、現在は田畑である。至近距離の乙隈遺跡では銅戈が甕棺から出土している。天道町遺跡では後述するように祭祀土壙を検出し、両遺跡は弥生時代中期頃の一定期間、埋葬関係遺構だけが営まれ、遺跡名は異るが本来は一つの墓域を形成していたようである。天道町遺跡では甕棺墓は検出されていないが墓域の東側周辺部にあたり、祭祀関係の遺構が密に存在することから、葬送に際する〝まつり〟が執り行われた場所の一部であったであろうと考えられる。その後一時期、方形周溝墓が営まれるが、あまり時間をおかずにこの地域は居住地として利用され始め、以降、集落関係遺構は間断的に営まれ、中世に至る。しかし、その中心は弥生時代終末～古墳時代初期の期間である。

以下に説明を加える遺構・遺物については整理期間の制約があり、図示した出土品や遺構について不十分な点が多々あるが、御容赦願いたい。

(1)　A地区（図版2、付図1）

農道の北側をA地区とし、夜須町に含まれる。中央に溝を1条(M1)、南西隅に掘立柱建物跡3棟（H1～H3）を検出した。その他、ピットがまばらに存在するが遺構としてのまとまりはない。弥生～古墳時代前期に含まれる遺構はない。試掘の結果、A地区以北ではピットすら検出されず、この地区が遺構の拡がりの北限にあたる。

(2)　B地区（図版3・4、付図1）

農道の南側をB地区とし、小郡市に含まれる。調査区の東側はすぐ夜須町である。遺構の殆どがこの地区に密集する。竪穴住居跡（107軒)、掘立柱建物跡（23棟)、祭祀土壙（44基)、廃棄土壙（18基)、溝（6条)、周溝墓（5基)、円形周溝（7基)、落し穴状遺構（5基）等のほか、多数のピットが足の踏み場もないほど存在する。遺構どうしの切り合いがすさまじく、切り合い関係の無い遺構は五指に満たない。遺構の詳細は後述するが、B地区の概要は下のようである。

① 弥生時代後期後半～古墳時代初期の竪穴住居跡の分布上の北限は2・7号竪穴住居跡で、その北12mを東西に走る溝2は、この期間のどの時期か明確ではないが、集落の北を限る遺構であろうと考えられる。

② 弥生時代の内に含まれると考えられる掘立柱建物跡（H５～H23）も溝２の南側に存在する。

③ 方形周溝墓・円形周溝も溝２の南側にしか存在しない。

④ 古墳時代後期以降の遺構（具体的にはカマドを持つ６世紀後半代以降の竪穴住居跡）は、同一時期どうしの遺構間の切り合いはなく、極めてまばらに存在する。

⑤ 奈良時代の廃棄土壙は溝５の外側にも拡がり、散漫なあり方を示すが、溝２が北限である。

以上は遺構についてであるが、本報告書の中では、調査中の遺構の切りあい関係の把握が不十分の場合が多々あり、推定復原して図示した遺構も多い。縄文時代の遺物が出土しているが、その時期の遺構は落し穴状遺構を除いて検出されず、理解に苦しむ。おそらく、弥生時代以降の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙等に破壊され尽くされたと考えるより他はない。また、弥生時代後期以降の各遺構からの出土遺物の総量は４トンのトラックに４台分あり、調査後の整理期間が短かったため、図示したのは極一部で、土器、石器の多くは写真図版だけの場合がある。しかし、これらの多くは遺構に伴なわず、流れ込んだ状況で検出した。縄文時代の出土遺物は、その他の遺物として一括して後述する。

太平洋戦争の頃、この地区の南側をほぼ東西に飛行機の誘導路を造成している。その誘導路は大刀洗飛行場から延びてきたもので、調査区を斜断し夜須町の方向に向っている。その一部は夜須町西端部の調査においても認められ、さらに、筑紫野市側に延びているようである。この誘導路によっていくつかの遺構が破壊されている。

第２節　遺構と遺物

(1)　Ａ地区

１　掘立柱建物跡

調査区の南西隅に３棟（Ｈ１～Ｈ３）検出した。３棟は切り合っているが新旧関係は不明な部分を残す。西側は麦が植わっており、南側が使用中の農道の下にあるため調査ができず、規模等については明らかにし難い。

１号掘立柱建物跡（図版２・第７図）　東西２間、南北１間分を検出したが遺構はさらに西および南に延びる。建物の全容を明らかにできなかったので棟行方向は不明である。柱配置から判断して、この建物は総柱ではなく、倉庫棟ではなかろう。建物の一辺はほぼ真東西方向を向いている。

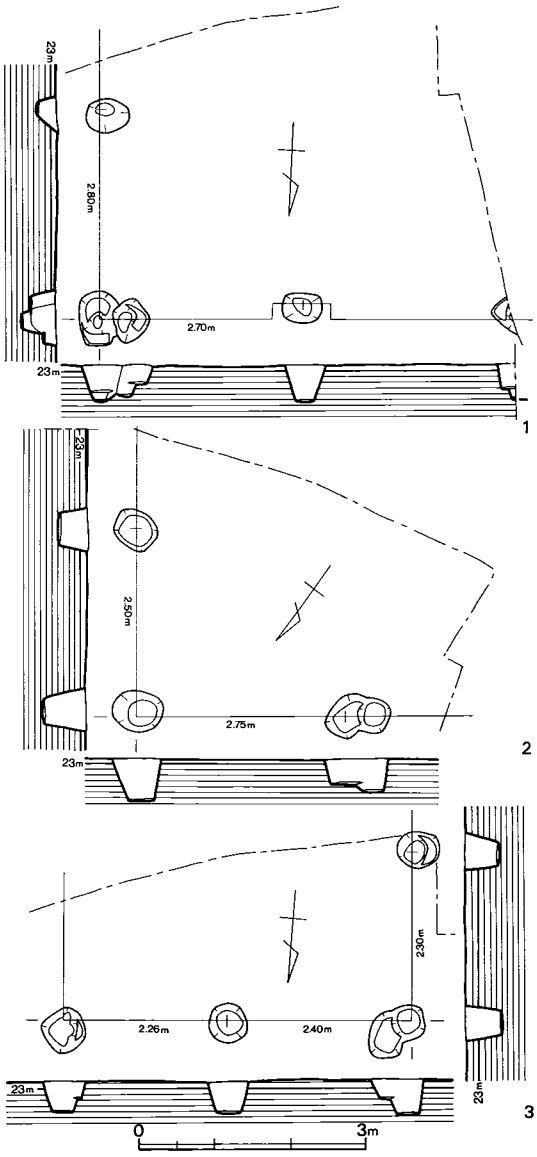
２号掘立柱建物跡（図版２・第７図）　１号に対してほぼ45°南（あるいは東）に主軸を振っ

て建てられている。１号と同様に遺構は西および南に延びる。柱配置から判断して、この建物は総柱ではなく、倉庫棟ではなかろう。

３号掘立柱建物跡（図版２・第７図）　Ｈ１と同様に建物の一辺は真東西方向を向いている。遺構は西および南に延びる。柱配置からこの建物は倉庫棟の可能性を否定できないが、１・２号と同様の建物であったと推定する。

２　溝（図版２、付図１）

溝１　Ａ地区の中央を南々東～北々西に走る溝である。近世以降のものが出土し、天道町遺跡では最も新しい遺構である。古老の話によれば、昔（その時期は不明）の行政境であろうということである。この溝はＢ地区では検出されておらず、おそらく農道の下で東側に曲がっているものと推測する。この部分の行政境は江戸時代以降、かなり変動していたようである。

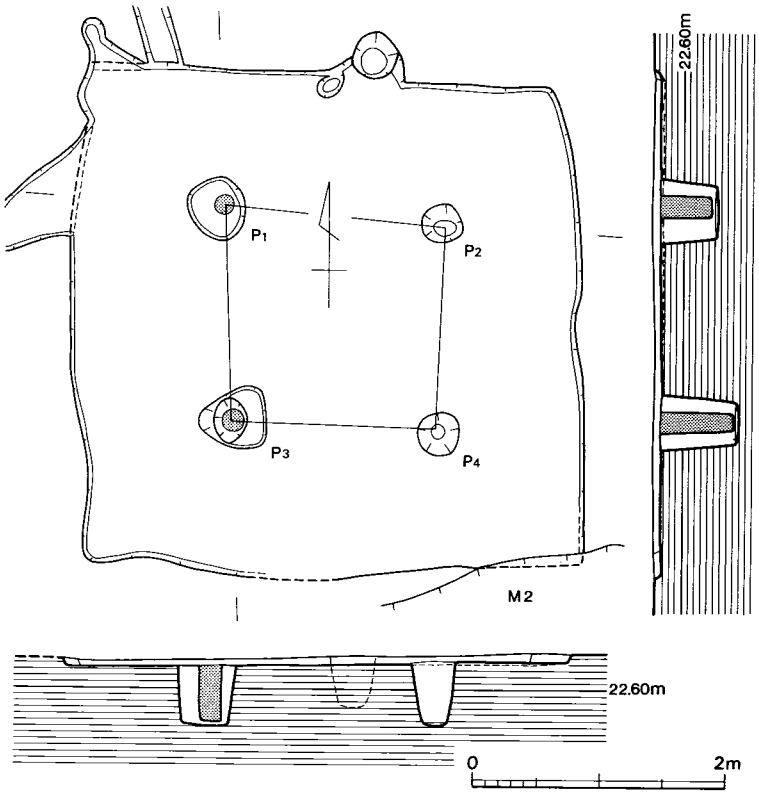


第７図　１～３号掘立柱建物実測図（１／100）

(2)　Ｂ地区

１　竪穴住居跡（付図１、表１）

天道町遺跡の竪穴住居跡の全てをＢ地区で検出した。その総数は107軒におよび、竪穴住居跡を検出した範囲はおよそ2,500m²である。この地区は表土剝ぎの段階から、一面真っ黒で地山が僅かしか視認できなかった。僅かの時期差のなかで住居が複雑に切り合っており、適切に状況を判断して調査することが困難であった。しかし、竪穴部床面下の遺構は経験的な視点から掲載図は推定復原している。この場合、問題となるのは主柱穴である。以下の図で主柱穴が不明な事例（調査担当者が判断・検出できなかった）がある。それは、地山まで掘り下げて不明な場合が多々あり、今後、竪穴住居跡の柱配置については竪穴部外のピットを含めて検討する必要がある。



第８図　１号竪穴住居跡実測図（１／60）

なお、個々の竪穴住居跡の寸法・面積・主軸方位等は、特に必要と認めない限り本文中では記述しないので、それについては第１表に依られたい。

１号竪穴住居跡（第８図）

溝２に切られてすぐ北側に存在する。４本柱ではあるが、カマドはない。遺存状態は悪く壁高は３～５㎝で、貼床も遺存しない。

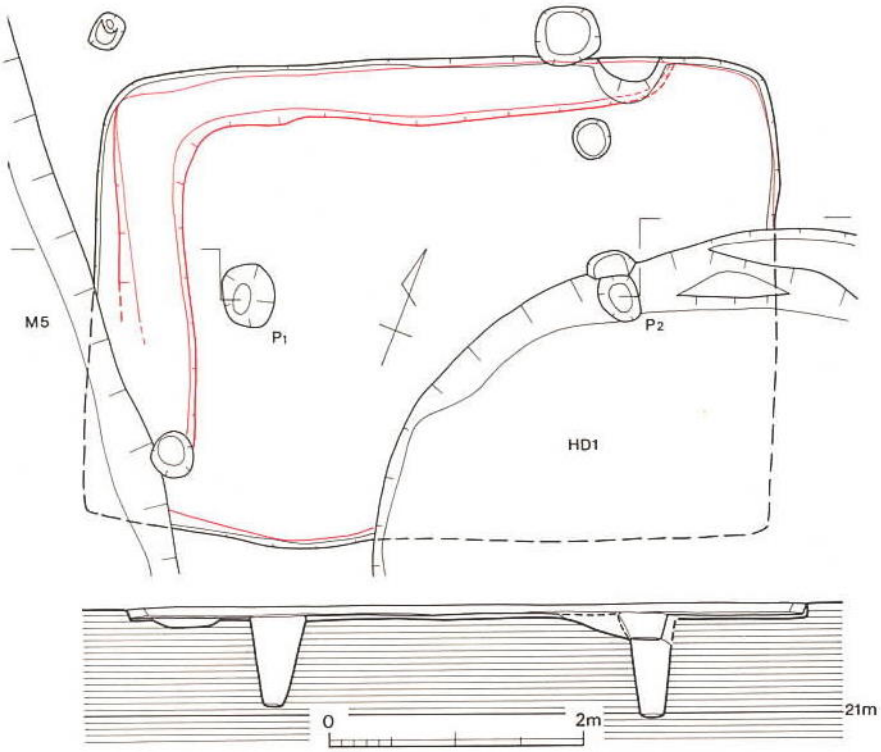
出土遺物　土器の細片が若干量出土したが、時期決定できるものではない。

２号竪穴住居跡（第９図）

南西隅を溝５に、南東隅を後世の土壙に切られる。遺存状態は悪く、壁高は５㎝程で貼床も残っていない。柱主穴はP_1・P_2で、竪穴部の両短壁にベッド状遺構が付設されていたと推定されるがすでに削平され遺存しない。

出土遺物　土器・鉄製品・石製品が出土している。

土　器　（図版77、第128～129図）　図示したのは22個体で、壷・甕・鉢・高杯・脚台付甕である。他の器種は出土していない。完形品に近いもの。図上で完形に復原されるものがあるが、本住居に確実に伴うと判断される資料はない。すべ埋土中か、南東隅の後世の土壙に切られて



第９図　２号竪穴住居跡実測図（１／60）

１号廃棄土壙埋土上層から出土したものである。１～３は壷で、土壙埋土上層から出土した。口縁部と頸部にヘラで加飾され、内外面はハケ目調整が顕著である。なお、２・３の口縁部内面は指圧痕が目立つ。４～６は球胴のカメで４・６は覆土中から、５は下層埋土から検出した。完形に復原される５は口径14cm、器高15.8cmで胴部下半の内外面に煤が付着している。６は外面に粗いタタキ目が残り、その上に部分的にハケ目立調整を施す。３個体とも砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。７～10は長胴の甕で竪穴部南側中央の覆土中から出土した。内外面はハケ目が顕著である。小型の７・８は金雲母等の砂粒を多く含み、焼成は普通で褐色～黒褐色を呈する。９は大型品で口径50cm程に復原される。口縁部は大きく外反し、端部は僅かにツマミ上げる。粗砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。10は口径20.5cm、器高32cmに復原される。底部外面は粗い磨きを施す。細砂を含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、胴部に黒斑がある。11～18は鉢で、14～17は外反する口縁部を有す。住居に伴なう状況で出土したものはない。11は厚手の粗製の鉢で、外面はタタキ目の上からナデている。内面はハケ目が若干残る。砂粒を多量に含み、焼成は普通で暗茶～黒色を呈する。12は精製された胎土で作られた鉢で、内面に暗文を施す。13は小片の反転復原図である。胎土に金雲母等の砂粒を含み、焼成

は普通で茶褐色～暗褐色を呈し、外面に黒斑がある。14・15とも反転復原図である。形状がやや異るが作り・調整は共通する。砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を基調とし、外面は黒ずむ。16・17は大きさが違うが形状・調整が共通し、胴部上半の外面に粘土の継ぎ目が残る。ともに反転復原図で、17は口径25cm、器高18cm程に復原される。砂粒を多く含み、焼成良好である。18は小片の反転復原図である。作りや調整は共通し、外反する口縁部がつけば、16・17と同じ形になる。細砂を多く含み、焼成良好で褐色～明茶色を呈する。19・20は覆土中で検出した高坏で脚部を欠失する。19は20比べてと坏部下半が深く、丸味を持った鉢状を呈し、口縁部は長く大きく外反する。20の口縁部は未発達である。磨き・暗文・ハケ目により調整を行う。砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色～黒色を呈する。21・22は甕か鉢の脚台で、覆土中から出土した。砂粒を多く含み、焼成は良好で明茶褐色～黒色を呈する。23は器台の破片資料である。小片のため、方形透かし孔は断面にしか図示できなかった。覆土中から出土し、本住居に直接伴なうものではない。内外面はハケ目調整され、焼成良好で黄褐色～黒色を呈する。

鉄製品（図版58、第120図－48）　覆土中から出土した鎌で、二つに折れていたが接合すれば、大きく折れ曲がる。本来は長さ15cmを超えるようで、木柄の着装部の幅は4cm程である。本住居が廃絶された後に捨てられたようである。

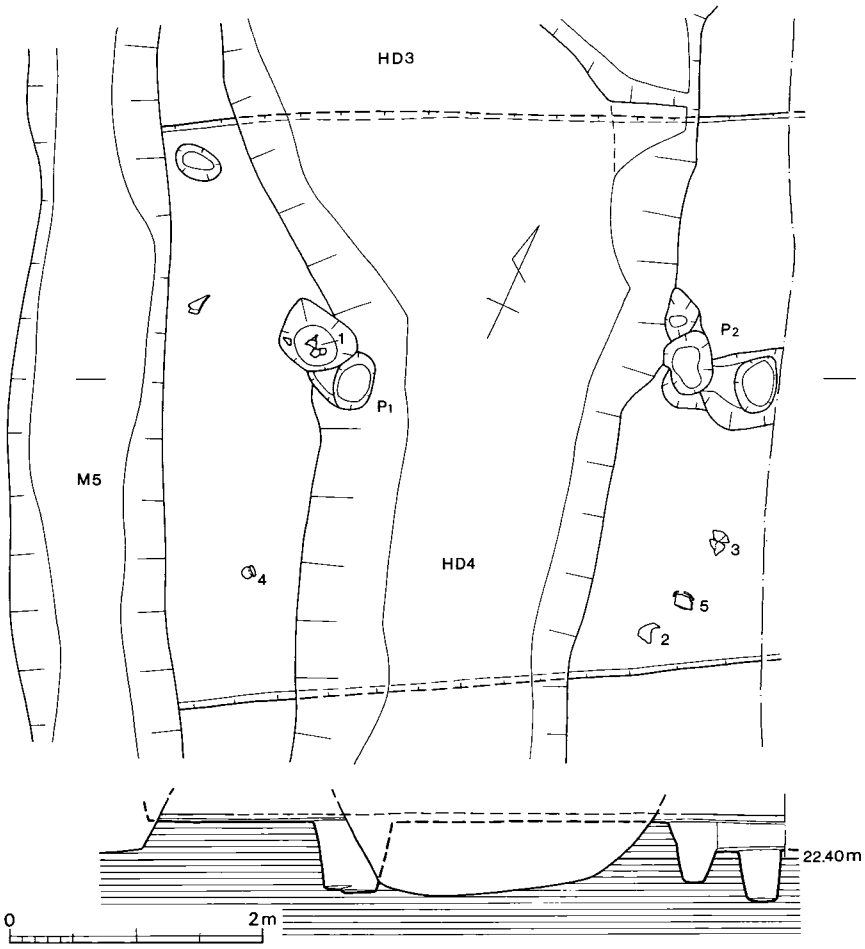
石製品（第125図－47）　覆土中から出土した砥石である。二次的な加熱で赤化している。硬質砂岩製の仕上砥である。

3号竪穴住居跡（第10・11図）

竪穴部の中央部の廃棄土壙3・4に西側を溝5切られ、東側は調査区の外に延びる。主柱穴はP_1・P_2で2本柱の住居である。東西の両短側壁に沿って〝二〟字形のベッド状遺構が存在したと思われるが、竪穴部の遺存状態が悪く、検出できなかった。主柱は引き抜かれていたようで、P_1から甕（第130図－1）が出土した。主柱を引き抜いた後の祭祀行為に依るものであろう。同様な行為は30号住居でも見られた。

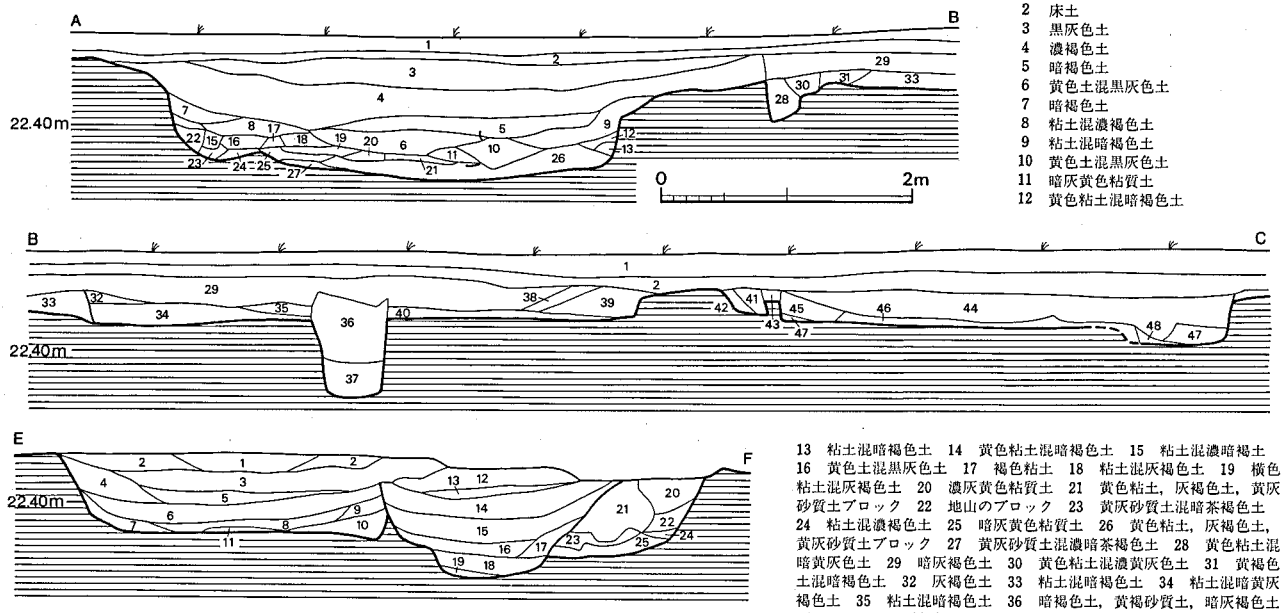
出土遺物　土器・鉄製品が出土している。出土状態から鉄製品はもちろん本住居に伴なうものではないが、出土土器のうち、本住居に直接関係する資料はP_1から出土した甕である。他の土器は床面に近い部分で検出したが、如何に図上で完形品に復原されようとも、層位的に判断して住居に伴なう土器ではない。

土　器（図版77、第130図）　図示できるのは5個体である。1はP_1内から出土したが、他の土器は住居床面近くから出土した。先述したように層位的に判断して2～5は本住居に伴なう確証はない。1は意識的に破砕して主柱穴P_1に埋納された土器である。1は口径10cm、胴部最大径21.2cm、器高25cmを測る甕で、胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で暗褐色を基調とする。2・3・5は鉢で、ともに接近して出土した。2・5は反転復原図である。5の外面はナデ調



第10図　3号竪穴住居跡実測図（1／60）

整だが、他は内外面を粗いハケ目調整を行う。2はハケ目調整の上をナデており、ハケ目が目立たない。これらは胎土に雲母片等の細砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を基調とするが、2は内底面が、3は外底面が黒色を呈する。4は完形品のまま、床面近くに転がっていた。しかし、床面との間には厚さ1cm程の間層があり、如何に完形品といえども本住居に確実に伴なうと言える確証はない。この間層についての判断が重要であるが、それは貼床面上に一般的に観察される薄い黒色の層の上層面（最終的な生活面）ではなく、流入土の上であった。それ故、この土器は本住居には伴なわないと判断した。この土器は粗いタッチの手ズクネ風のもので、内外面はハケ目調整を施している。胎土に雲母等の細砂粒を含み、焼成は良好で明茶褐色～黒色を呈する。口径8.8cm、器高8.7cmである。



1　耕作土
2　床土
3　黒灰色土
4　濃褐色土
5　暗褐色土
6　黄色土混黒灰色土
7　暗褐色土
8　粘土混濃褐色土
9　粘土混暗褐色土
10　黄色土混黒灰色土
11　暗灰黄色粘質土
12　黄色粘土混暗褐色土

1　暗黄褐色土　2　褐色土　3　黒色土　4　暗褐色土　5　黒褐色土　6　4よりやや淡い。　7　暗褐色砂質土　8　暗灰褐色土　9　黒褐色土　10　暗茶褐色土　11　暗褐色砂質土　12　茶褐色土　13　灰茶褐色土　14　淡灰茶褐色土　15　地山粒混灰茶褐色土　16　暗灰茶褐色土　17　地山粒混暗褐色土　18　地山粒混灰褐色土　19　暗灰褐色土　20　黄灰砂・黒色土ブロック　21　地山粒混褐色土　22　明褐粘土混黒色土　23　明褐粘土混茶褐色土　24　黄灰色砂質土　25　暗灰褐色土

13　粘土混暗褐色土　14　黄色粘土混暗褐色土　15　粘土混濃暗褐土　16　黄色土混黒灰色土　17　褐色粘土　18　粘土混灰褐色土　19　横色粘土混灰褐色土　20　濃灰黄色粘質土　21　黄色粘土，灰褐色土，黄灰砂質土ブロック　22　地山のブロック　23　黄灰砂質土混暗茶褐色土　24　粘土混濃褐色土　25　暗灰黄色粘質土　26　黄色粘土，灰褐色土，黄灰砂質土ブロック　27　黄灰砂質土混濃暗茶褐色土　28　黄色粘土混暗黄灰色土　29　暗灰褐色土　30　黄色粘土混濃黄灰色土　31　黄褐色土混暗褐色土　32　灰褐色土　33　粘土混暗褐色土　34　粘土混暗黄灰褐色土　35　粘土混暗褐色土　36　暗褐色土，黄褐砂質土，暗灰褐色土ブロック　37　灰黄色土，黄褐色土ブロック　38　横褐砂質土　39　暗灰褐砂質土　40　横褐色粘土，黄灰色砂質土，暗褐色土ブロック　41　暗灰褐色土　42　黄灰色土　43　暗褐色土　44　粘土ブロック混暗灰褐色土　45　粘土ブロック混濃暗灰褐色土　46　黄灰色土混暗灰褐色土　47　粘土混暗褐色土　48　濃暗黄灰色土

第11図　1号廃棄土拡・3～4号竪穴住居跡付近土層図（1／60）

鉄製品（図版57、第118図－29）　住居の東半部の覆土中から出土した鍬先である。木質の遺存はなく、木柄から外して本住居に捨てたものであろう。

4号竪穴住居跡（付図1）

個別の図は作ってない、西壁を廃棄土壙4～6に壊され、住居の過半は東側調査区外に延びる。3号竪穴住居跡と同様な平面プランであったろうと推測する。遺存状態は良くないので図示しなかった。

出土遺物　土器以外は出土していない。鉢1は住居床面に潰れた状況で検出したが、他の土器は覆土中からの出土品である。本遺跡の竪穴住居跡の土器出土状態から判断して、鉢1はこの住居に伴なうものであるが、他の土器は流入したか、意識的に投げ捨てられたものである。

土　器（図版77、第130図）　1は口径29.8cm、器高9.6cmを測る完形に復原される鉢である。内外面ともハケ目の上から、暗文を施している。外底面は擦過痕がある。端正な土器である。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。2・3の高坏は脚部は不明ながら口縁部が発達して長い。3は器面の摩滅が著しいが2はハケ目の上に暗文を施している。雲母等の細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。4は小型の深鉢で、外面は粗いハケ目調整、内面はナデ調整を行う。雲母等の細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。5は口径26.5cm、器高36.5cmの甕である。頸部直下に一条の突帯を巡らす。外面はタタキの技法を多用し、底部付近は擦過によりタタキ目をすり消している。胎土に砂粒を多く含み、器面に粗い砂粒が目立つ。焼成は良好で明茶褐色～黒色を呈し、胴部下半に黒斑がある。6は底部を欠く鉢で、反転図である。口縁部内外面、体部上半にハケ目が残り、体部下半はワラ状のもので不定方向に調整する。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で明茶褐色～黒色を呈す。7はほぼ直立する口縁を有する壺である。内外面はハケ目調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通で明茶褐色～黄褐色を呈し、外面に黒斑がある。8は破片資料で反転図である。剝落が著しいが丹塗りされていたようである。胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好で明茶褐色を呈する。

5号竪穴住居跡（付図1）

西壁を溝5に、北壁を廃棄土壙7に切られ、東壁は調査区外に存在する。2～4号住居と同様に東西の短壁に貼ったベッド状遺構を有すると考えられるが、壁の遺存状態が悪く、貼り床面すら残っていない。主柱は2本で屋根を支えていたようである。

出土遺物　土器・鉄製品が出土した。すべて流入（投棄）したもので、本住居に直接に伴なうものではない。

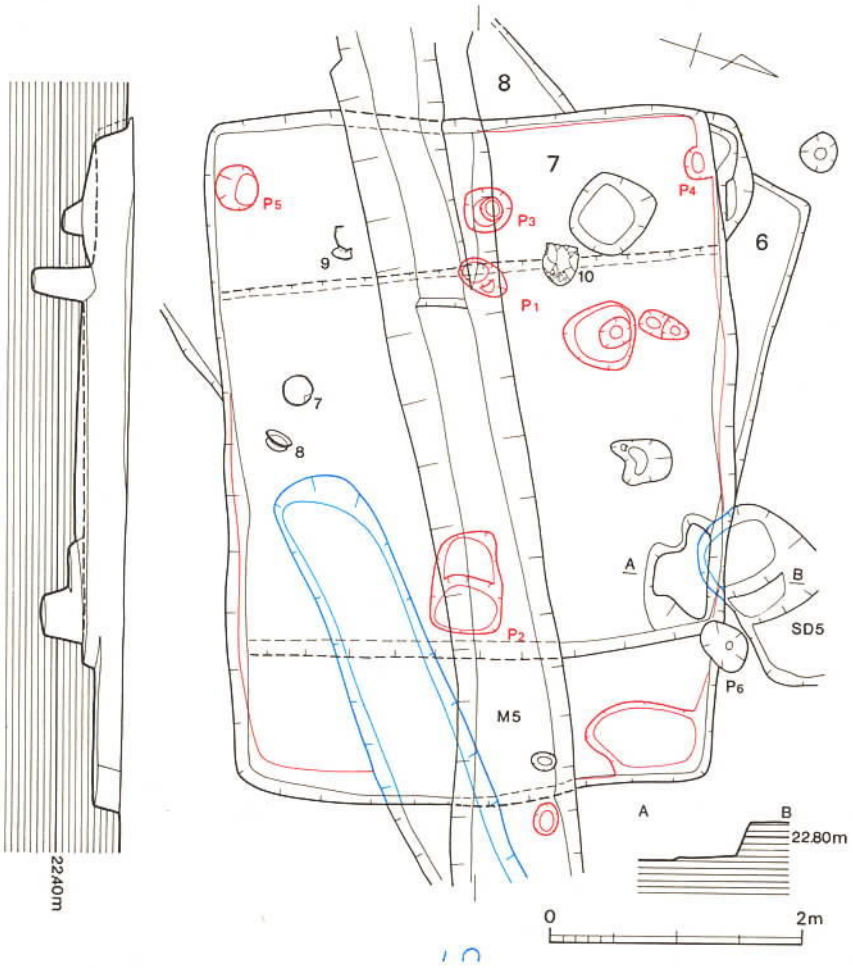
土　器（第131図）　すべて甕の破片資料である。1は小片からの反転図で、口径15.8cmに復原される。ナデ調整の際に口縁部は強く外側に折り曲げられ、端部を丸く仕上げている。残存部にハケ目は認められず、すべてナデ調整である。外面に煤が付着している。2・3は極小片

のため、傾きは正確ではない。3個体とも胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好で明茶褐色を基調とする。2は外面に煤が付着している。

鉄製品（図版57、第　図－30）　横幅11cm、縦幅5.9cmを測る鍬先で、刃部の大半を欠失する。木質は遺存しない。

6号竪穴住居跡（第12図）

溝2以南で最も北側に位置するが、ごく一部しか検出できず、実態は不明である。



第12図　6～8号竪穴住居跡実測図（1／60）

7号竪穴住居跡（第12図）

住居の中央部を溝5によって破壊される。また、本住居は弥生時代中期の祭祀土壙5・10を切っている。この時期の竪穴部平面プランの全容の知れる住居では最北端に位置している。竪

穴部平面プランは略長方形を呈するが、西壁が30cm程長い。主軸は略東西で、主柱は２本（P_1・P_2）である。両短壁にベッド状遺構を配する。床面・ベッド状遺構は粘土で貼っており、これらを除去した下層から主柱穴を検出した。柱痕は遺存せず、柱は住居を廃棄する際に引き抜いたようで、その痕跡がP_2の西側が二段掘りになって残っている。また、P_3は主柱穴P_1・P_2の延長線上にあり、P_1に対する補助柱穴と推測する。P_2に対するものは検出していない。P_4・P_5は西側ベッドの長壁際の相対する位置にあり、その性格は明確にし難いが本住居に伴なう補助柱穴と思われる。北側長壁の東側ベッドとその隅角部に不整形の地山の〝たかまり〟を検出した。この部分は祭祀土壙５と重複しており、この地山のたかまりの上に更に客土をしていたかどうかは明らかにできなかった。断面図Ａ－Ｂで示したこの遺構は竪穴部への昇降施設であろうと推測する。その際、P_6は昇降施設に伴なうピットであろうと推測するが、対になるもうひとつのピットは検出できなかった。次に、屋内土壙は、このタイプの竪穴住居跡では長側壁中央の壁際か、ベッド上の隅に存在するのが普通であるが床面では検出できなかった。ただし、北東隅のベッド貼床下で検出した土壙（赤線で図示）は、もしかしたら掘り間違えた可能性があり、屋内土壙の可能性を排除できない。

出土遺物　土器・鉄製品・石製品が出土した。図示した土器のうち、７・９・10は床面直上に潰れた状況で出土し、完形品に復原でき、本住居に伴なうと考える。11は貼床下層から、その他の土器は住居廃棄後に投棄された状況で、その多くは住居中央部のレンズ状に堆積した覆土中から出土し、一部は完形品で床面直上に位置するものもあったが、層位的には流入・投棄されたものである。７・９・10の土器と流入・投棄された土器のあいだに明確な時期差は認め難い。また、鉄製品・石製品についても流入・投棄された状況で出土した。よって、本住居に伴なう資料は７・９・10の土器だけである。

土　器（図版78～80、第132・133図）　１～７・13は鉢で６・13には外反する口縁部がつく。１は全体の¾程が残存するが底部を欠く。口径13.2cm、器高５cm程である。内面はハケ目調整され、外面に指圧痕が残る。内外面に煤が付着している。胎土に細砂粒を多く含み焼成良好で黄茶色～黒色を呈する。２は全体の⅓程が残存するが、図上で完形に復原でき、口径13.1cm、器高6.4cmを測る。内面はハケ目調整を行い、外面は上半部はヨコナデ、下半部はヘラ削りを施す。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄茶色～黒色を呈し、外面の下半部に黒斑がある。３は体部が内傾するもので、全体の⅓程が残存するが、図上で完形に復原でき、口径10.6cm、器高6.6cmを測る。外底面はヘラ削りを行い、その他は調整を行うが外面にはハケ目が残る。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄茶色～黒色を呈し、外底面に黒斑がある。４は略完形品だが口縁部のほとんどを欠失する。口径11.4cm、器高5.7cmを測る。外面の体部下半はヘラ削りを行い、他の部分はナデ調整を施している。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～灰色を呈する。５は口縁部の⅓と底部を欠失するが口径15.6cmで器高７cm程に復原される。口縁

部は僅かに内湾したものをつくり出している。外面の体部下半はヘラによりナデられている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は黄褐色～黒色、外面は黄褐色～暗灰色を呈する。6は全体の⅓程が残存し、口径17cm、器高9cm程に復原される。内面は暗文を施し、口縁部はその上からハケ目調整を行う。外面はハケ目調整の後、体部下半にヘラ削りを行う。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄茶褐色を呈する。7はほぼ完形品で口径21.4cm、器高8cmを測る。内面はハケ目調整を、外底面はハケ目の上からヘラ削りを行う。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄茶褐色～黒色を呈する。13は完形の大型品で、口径31cm、器高18.8cmを測る。内外面の上半部にハケ目が残るが、下半部は内面はナデ、外面はヘラによる調整のため、ハケ目は消えている。なお、外面はヘラによる調整痕が残る。細砂粒を多量に含み、焼成良好で黄茶褐色～黒色を呈し、黒斑がある。8は脚台付鉢だが脚台が欠失している。調整は6と酷似するが、外面はヘラ削りではなくヘラでなでている。細砂粒を多量に含み、焼成良好で黄茶褐色～黒色を呈し、黒斑がある。内外面に丹塗りされていたようで、部分的に丹塗りの痕跡が残る。口径22.6cm、現存高10.6cmである。12は高坏の脚部で透し孔はない。内面はハケ目調整を、外面はハケ目調整の後に暗文を施している。細砂粒を僅かに含み、焼成良好で褐色～黒色を呈する。10は底部の一部を欠くがほぼ完形品で、口径21.3cm、器高29.3cmを測る甕である。内外面をハケ目調整し、外部下半は擦過痕がある。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で赤褐色～黒色を呈し、体部に大きな黒斑がある。9・11は器台である。9は一部を欠失するが、口径15.2cm、器高18.6cmを測る。ハケ目調整が全面に施され、外面はタタキの上から行っている。11は器高12.4cmで外面は粗いタタキ目が残る。ともに、胎土には細砂粒を多量に含み、焼成良好で茶褐色～褐色を呈する。14は全体の½程を欠くが口径16.8cm、器高30cm程に復原できる壺である。内外面は粗いハケ目調整を行い、口縁部は強いヨコナデにより、端文内面の厚味を減じ、僅かにくぼむ。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～黒色を呈する。

鉄製品（図版57、第118図－24・27）　24は覆土中、27は投棄された土器群の中から出土した鍬先である。24は刃部の過半を欠くが、全形を伺うことはでき、横幅11.2cm、縦幅5.9cmを測る。27は破損したために、土器とともに投棄されたものである。現存する寸法は横幅7cm、縦幅4.8cmである。

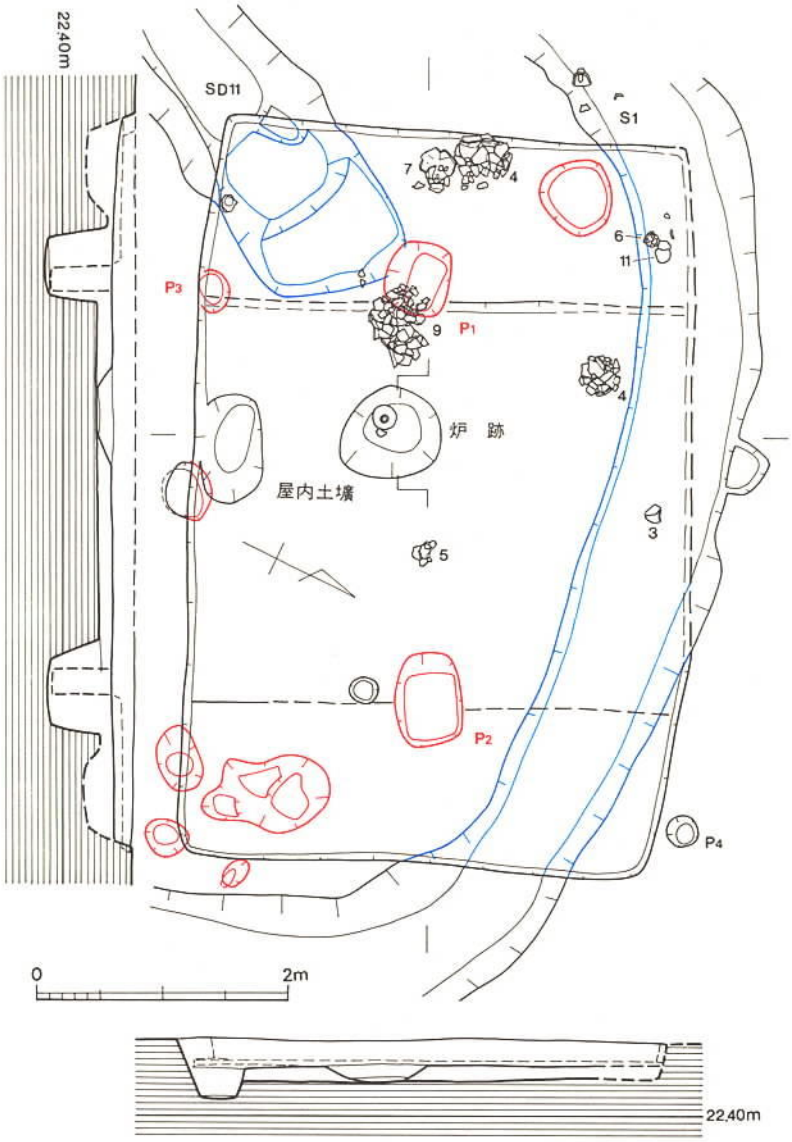
石製品（図版62、第123図－18）　完形の石庖丁で長さ11.9cm、幅4.8cmである。刃部の断面は左右均等ではない。小豆色をしているが、産地同定の分析は実施していない。

8号竪穴住居跡（図版13・14、付図1）

7号住居と重複して、その西南に存在する。切り合いが激しく実態は明確ではないが、7号住居と同様なものであろう。

9号竪穴住居跡（図版13・14、第13図）

7号住居の南側に平行して存在し、1mしか離れてない。よって、両者の共存は不可能で実



第13図　9号竪穴住居跡実測図（1／60）

質的には切りあっている。本住居は1号周溝墓・11祭祀土壙を切っている。竪穴部は略長方形を呈し、東西の両短壁にベッド状遺構を付設していたようである。主軸は略東西で主柱は2本（P_1・P_2）である。床面・ベッドは粘土で貼っており、これを除去した下層から主柱穴を検出した。柱痕を確認できなかったが、P_1横の土器(9)の出土状態から判断して、柱は引き抜く（掘り抜く）ことはなかったようである。P_3・P_4は補助柱穴であろうと推測する。しかし、各々、

対となるべき柱穴は検出できなかった。屋内土壙は南長側壁際のほぼ中央よりすこし西に寄った所に、炉跡はその北に、貼床面から切り込んで設置している。炉の底は地山直上で、貼床とその下層埋土を除去すれば炉はその痕跡を無くし、屋内土壙は20cm程の深さを残す程度になる。炉跡の周辺・内部から人工遺物は出土していない。ベッド状遺構は掘り間違えて、その一部を図化したにすぎないが、掲載図は他の竪穴住居跡から推定復原したものである。

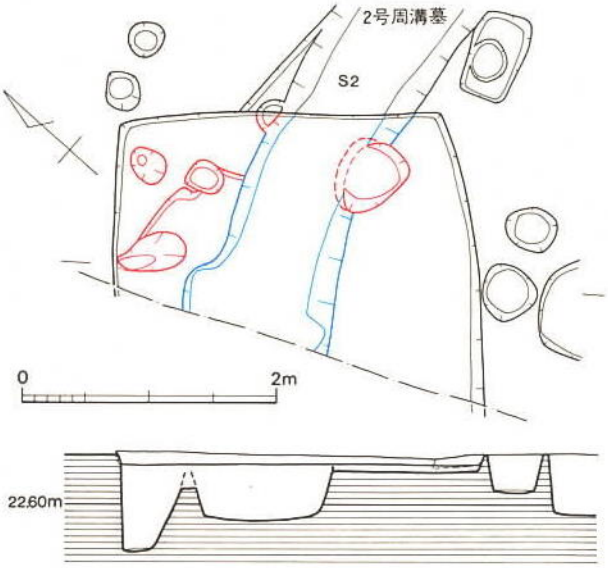
出土遺物　石製品とかなりまとまった量の土器が出土した。出土状況から、後述する土器のうち、4・6・7・9・11が直接伴なうが、他は投棄されたものであろう。この5個体の土器は床面上で潰れた状況で出土している。10は完形品だが覆土中から出土しているので、伴なわない。石製品も同様である。

土　器（図版80、第133・134図）　1は鉢部を欠失した脚台付鉢である。7号住居出土の脚部を欠失した脚台付鉢(8)と胎土・焼成・色調がよく似ており、同一個体の可能性が高い。2・3は高坏の脚部で、円形の透し孔を3ケ所に配する。2はハケ目調整の後、外面の透し孔以下をヘラ磨きする。3は外面全体にヘラ磨きを行っている。両者とも胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好で明茶褐色～茶褐色を呈し、脚裾部外面は黒色を呈する。4は底部の一部を欠くが、口径24.6cm、器高29.2cmを測る胴が球胴に近い甕である。8・9は長胴の甕で完形品の9は口径26cm、器高38cmを測り、底部は凸レンズ状を呈する。これらはハケ目を多用し、胴部下半外面は擦過痕が、9はハケ目の下にタタキ目が残る。ともに、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色～黄褐色を呈する。4は胴部下半外面に、9は外面全体に煤が付着している。5・6は坩である。5は小片の反転復原図で、口径12cm、器高9cm、6は略完形品で同じく9.9cm、9cmを測る。5は口縁部が大きく丸底部が大きく丸底を呈するようであるが、6は口縁部が短く、平底風で安定性がある。5は内面をヘラ磨きし、外面はハケ目調整を行っているが、風化してハケ目は一部しか残らない。6はハケ目調整の後、外底面はヘラ削りする。ともに、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好で褐色を呈し、外面に黒斑がある。7は二重口縁の壺で底部を欠失するが、口径25.8cm、器高32cm強を測る。口縁部と頸部にヘラで刻んで加飾し、ハケ目調整をきれいに行う。胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好で黄褐色を呈し、外面に黒斑がある。10・11は完形の鉢である。10は口径13.3cm、器高6cm、11は同じく14.7cm、5.6cmを測る。調整は共通し、内面はハケ目・ナデ調整、外面はナデ・ヘラ削りを行う。ともに胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、10は淡褐色を呈して外面に黒斑があり、11は黄褐色を呈する。

石製品（図版62・63、第123図－24）　石庖丁2点、縄文時代の石斧1点が出土している。縄文時代のものはまとめて後述する。石庖丁24は全体の⅓を欠失し、ふたつに折れて覆土中から出土した。他の1点も覆土中から検出した。小豆色を呈するが石材の供給地については石材の同定分析を行ってないので慎重を期したい。

10号竪穴住居跡（図版13・14、第14図）

9号住居の南西に1.2m離れて建てられ、大半は西側の調査区外に延びる。2号周溝墓を切って重複しており、主柱穴は検出しきれなかった。主軸方向は7・9号住居とは若干異なり、8・18号や、これらより古い11～13号住居にほぼ平行している。2～9号住居と同様に両短壁に平行してベッド状遺構を付設していたと推測する。



第14図　10号竪穴住居跡実測図（1／60）

出土遺物　若干の土器が出土した。出土遺物は全て投棄・流入したもので、本住居に直接伴なうものない。

土　器（第134図）　長胴の甕の小片である。ともに床面近くの覆土下層から検出した。口縁部の作りや、端部のクセは酷似し、ハケによる調整の仕方もよく似ている。1は復原口径24cm、2は27cmである。胎土に金雲母片等の細砂粒を含み、焼成良好である。1の内面は白黄色～黄褐色、外面は暗茶褐色を呈する。2は内面が黄褐色、外面が赤朱色である。

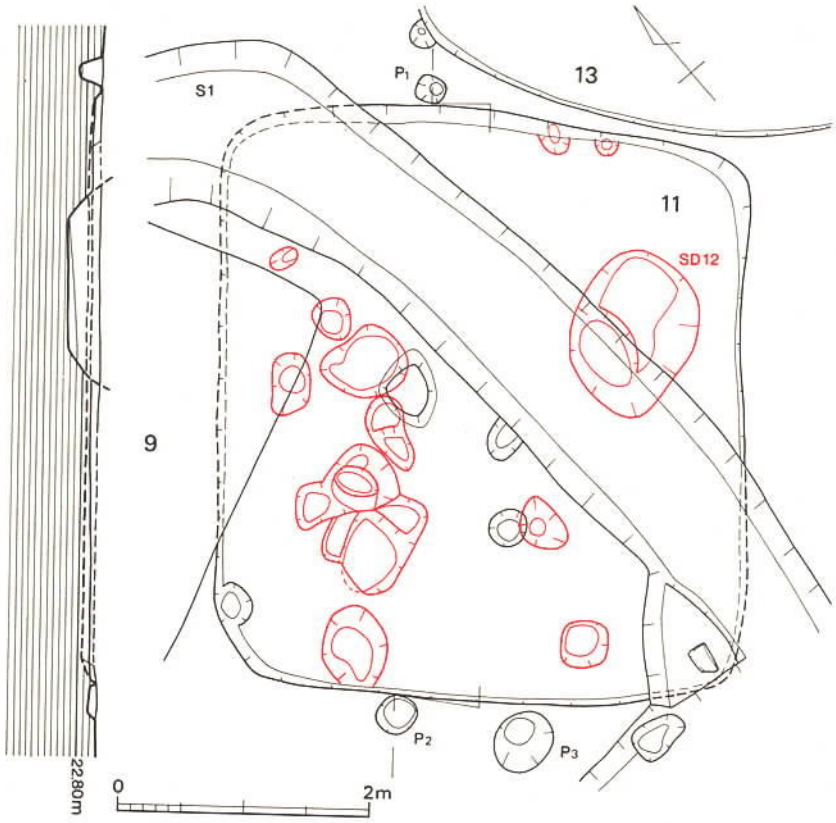
11号竪穴住居跡（図版13・14、第15図）

10号住居から3m離れて、東側に存在する。大部分を9号住居・1号周溝墓に切られている。隅円の正方形に近いプランを呈するが、細かく見ると遺存状態の良い東・西壁は弧を描いている。竪穴部内にはしっかりした主柱穴はなかった。とりあえず、P_1・P_2で断面図を作成したが、P_3を含めて、本住居の主柱穴と考えるには積極的根拠を欠く。床面は粘土で僅かに貼床をし、貼床下の地山ブロックを含む黒褐色土を除去し、住居の南東側に周溝墓に切られて、祭祀土壙12を検出した。なお、ベッド状遺構は持たないと考えられる。

出土遺物　鉄製品・石製品はもちろん、図示できる土器もあまり出土していない。

12号竪穴住居跡（図版13・14・17、第16図）

11号住居から3m離れて東側に存在する。すぐ南に近接して13号住居がある。溝5に東隅を切られるが、竪穴部の全形を知るには支障はなく、プランは隅円の長方形に近く、短壁が弧を描いている。本集落跡ではこのような平面プランを呈する住居は少ないがその代表例である。

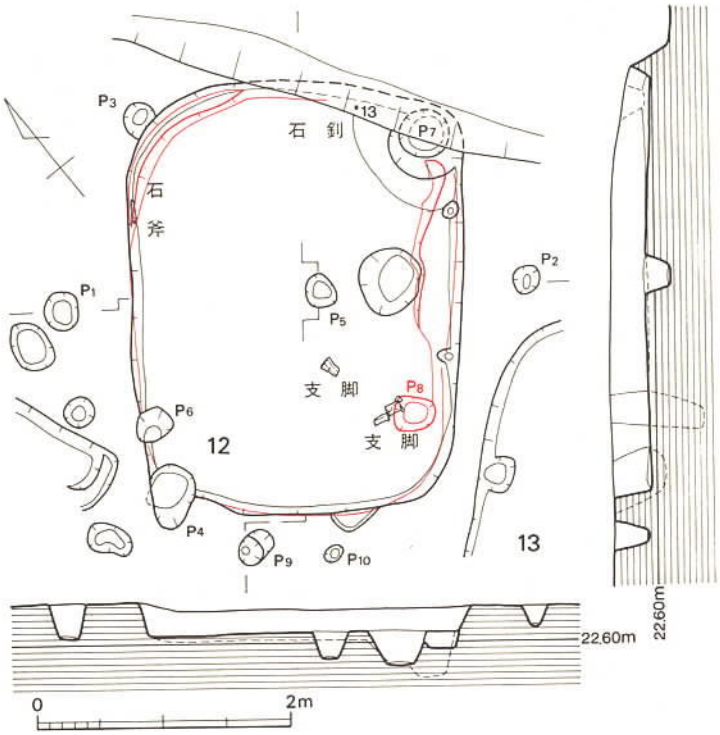


第15図　11号竪穴住居跡実測図（1／60）

規模は最小の部類に含まれる。床面の貼床はさして顕著ではなく、床面と地山との高低差はごく僅かである。主柱床は竪穴部内では検出されず、竪穴部外のP_1・P_2が主柱穴ではなかろうか、と推測されるが、他の案として、P_3・P_6（P_4）・P_7・P_8の4本柱を考えることもできよう。柱配置の問題は上屋の構造と密接な関係があり、ここでは判断を控える。また、南西の短壁から20～30cm程離れ、住居の推定中軸線をはさんで対称の位置にあるP_9・P_{10}は、補助柱穴であろうと考える。北東の短壁側の補助柱穴については溝5に切られているので存否は不明である。なお、ベッド状遺構は持たないと考えられる。

出土遺物　土器・石製品が出土した。土器では支脚が3点出土したが、脆くて、取り上げる時に原形を損ねたので図示できなかった。石製品では、砥石・石剣・石斧（鍬）が各1点ずつ出土している。石斧は縄文時代のものである。縄文時代のものは、まとめて後で説明する。

土　器（第134図）　甕の小片で、流入したものである。ともに反転図で復原口径は33cm程である。内面と口辺部はナデ調整し、外面はハケ目調整を行う。砂粒を多く含み、焼成良好で1は茶褐色、2は明茶褐色を呈し、煤が付着している。



第16図　12号竪穴住居跡実測図（1／60）

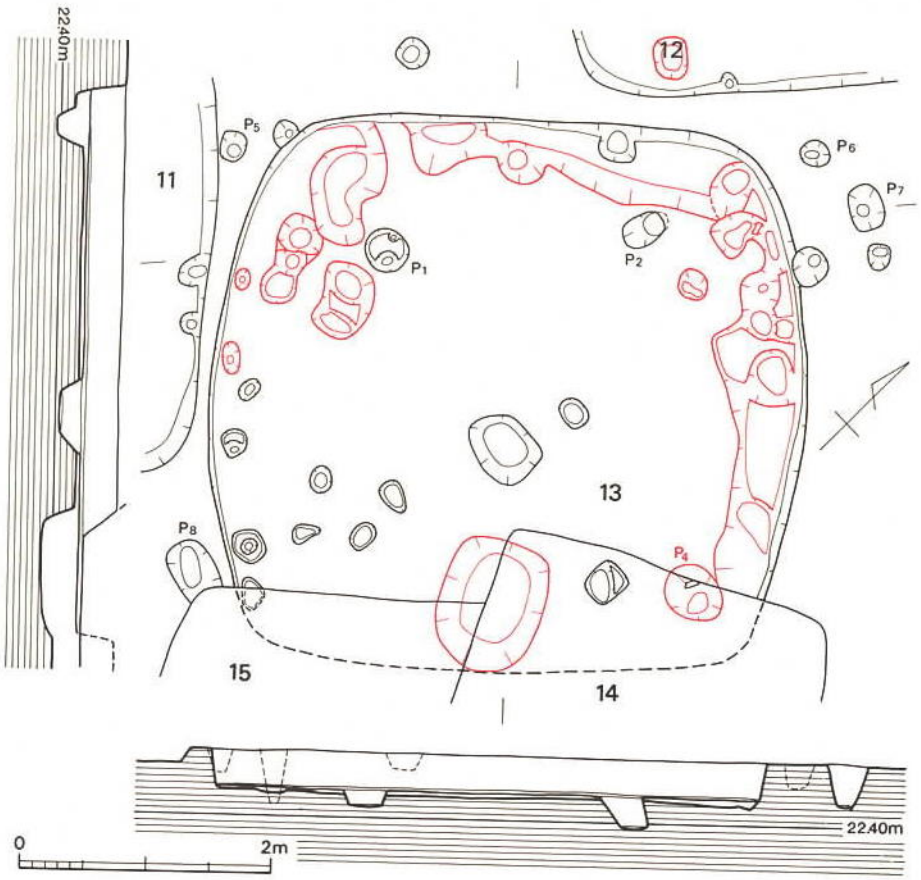
石製品（図版60、第122図－13・第126図－56）　石剣は北東短壁際の覆土中から出土した。身の大半を欠失し、現存長9.3cm、茎長6.9cm、最大幅3.2cmを測る。関部は平面観では不明確で、刃の有無で身と茎を区別される。粘板岩製である。砥石も覆土中から出土した。砂岩製の仕上砥である。中央に蛇行して幅8㎜程の浅い凹みがあり、研ぐべき道具を或る程度立てて研いだ跡であろう。

13号竪穴住居跡（図版13・14・17・第17図）

11・12号住居と接近する位置に存在し、南東側長側壁を14・15号住居から切られている。平面プランは12号住居を幅広くしたような形で、各壁は弧状を呈し、隅円方形ではない。主柱穴は12号住居と同様に地山を掘り下げたが、明確にそれと判断できるピットはなく、以下のように、ふたつの可能性が考えられる。

① 竪穴部内で、P_1・P_2・P_3（検出していないので図示していない。一応15号住居に削平されたか、浅かったと、ここでは想定しておく。）・P_4の4本柱を想定する。

② 竪穴部外の西・北隅のP_5・P_6（P_7）、同様に14・15号住居から切られている東・南隅にもピットが存在したと想定し、やはり、4本柱を考える。



第17図　13号竪穴住居跡実測図（1／60）

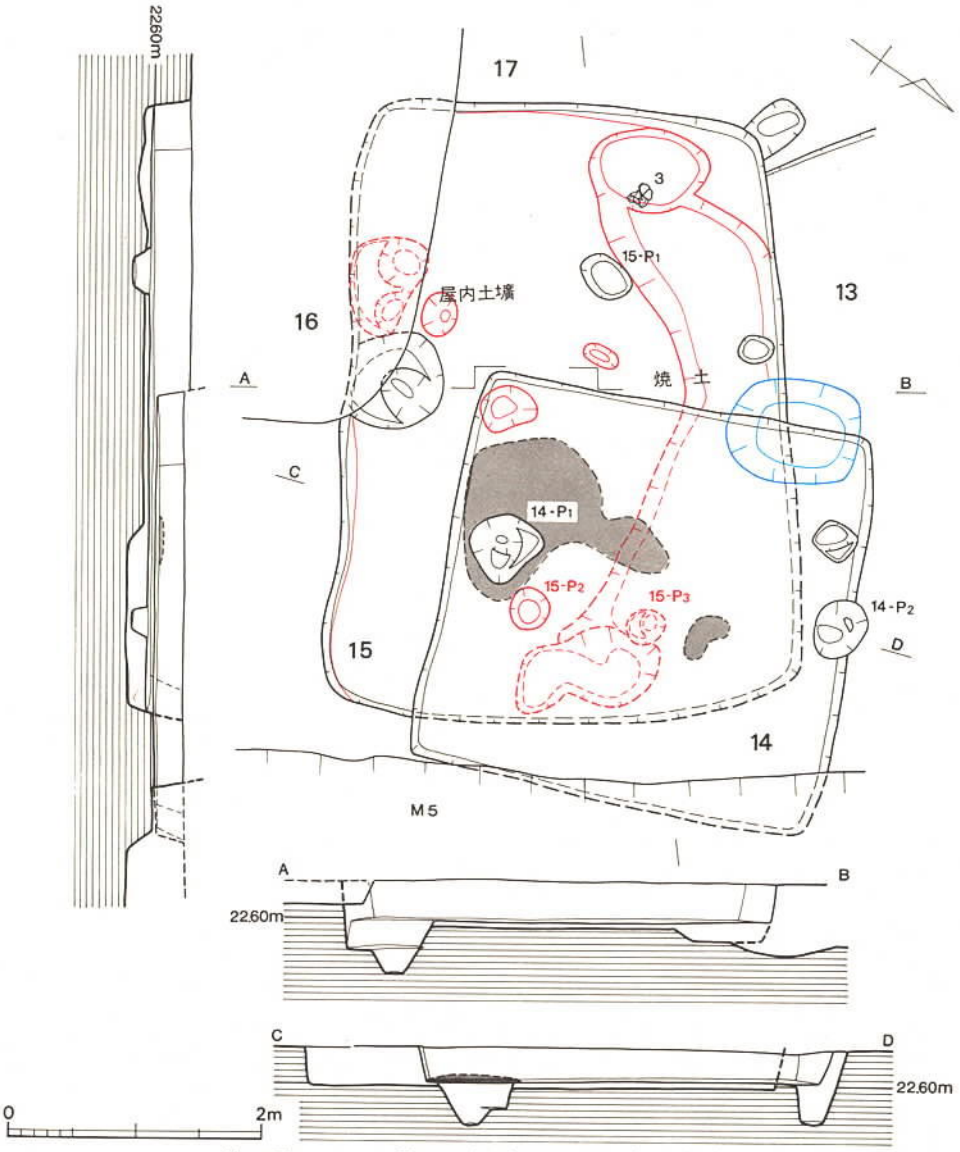
以上の案は各々にピットを欠くため積極的な根拠に乏しいが、②の場合はP_5・P_6のピットが小さく、深さが15～20cmと浅いので、①のほうが可能性が高いのではなかろうか。もし、そのように考えることが許されるならば、②で想定したピットは補助柱穴と推測する。この場合、P_3を想定する位置は15号住居によって、P_1の底面（標高23.516m）よりも深く掘り下げられており（標高22.486m）、P_1と同様な深さであるならば削平されていたことになる。そうであるならば、北東短壁側の主柱穴が深く、南西側短壁の主柱穴は浅いという規則性を考えることができる。床面は12号住居のようにあまり明確ではなかったが、僅かな貼床をし、地山面までの深さは3～4cmであった。ベッド状遺構は付設されていなかったようである。

出土遺物　土器のほかに石製品が出土している。覆土の堆積状況等より判断して、出土遺物はすべて投棄されたか、流入したものであり、本住居に直接的に伴なうものは出土していない。

土　器（第134図）　1は脚台付鉢で脚裾部を欠く。口径・現存高とも10.8cmである。内外面

は細・粗２種のハケ目調整を行う。胎土に砂粒を含み、焼成良好で淡黄褐色を呈する。２は高坏の脚柱部である。短脚で円形の透し孔を３ケ所に配する。ハケ目調整を行い、外面はヘラ磨きされている。胎土に砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。

石製品（図版60、第122図－６・７）　６・７とも偏平磨製鉄鏃である。６は長さ4.4cm、基部の幅３cm、厚さ2.5mmである。７に比して刃部を幅広く研ぎ出している。基部の内湾は極く僅かで目立たない。７は長さ5.5cm、基部の幅３cm、厚さ2.5mmである。６に比して基部の内湾度は



第18図　14・15号竪穴住居跡実測図（１／60）

明瞭である。石材は粘板岩であろう。

14号竪穴住居跡（図版13・14・17、第18図）

13・15号住居を切り、東北壁を溝5に切られる。平面プランは隅円の正方形を呈する。主柱穴はP_1・P_2のふたつで、2本柱の住居であろう。その場合、住居の範囲は確実に竪穴部の外に拡がり、竪穴部の外はベッド状になる。貼床は顕著ではないが、13・15号住居の掘り込みが深いので、床面を水平にするためにこの部分に土砂を入れ、その上に砂を混えた粘土で僅かに貼床をする。貼床上に焼土があるが、投棄されもので、この住居が焼失したわけではない。

出土遺物　土器・鉄製品が出土している。覆土の状況と出土状態から判断して、本住居に伴なう出土品は皆無である。

土　器（第135図）　弥生時代中期と終末期頃のものが出土している。1・8は甕小片で反転復原図である。1は口径34cm、8は18cmに復原される。ともに胎土に多量の細砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。8は丹塗研磨されている。2は口縁部下の部分に丸味がなく、直線的に延びるようなので、高坏ではなく開口壷になるだろう。胎土に多量の細砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。外面は器面が剝離しているが、内外面とも丹塗りされていた思われる。なお、口辺部の平坦面にヘラによる6本の線刻状のものがある。3は甕の底部を焼成後に穿孔して甑としたもので底部に煤が付着している。4は高坏の脚裾部であろう。反転復原図で裾部径12cmを測る。胎土に多量の細砂粒を含み、焼成良好で明茶色を呈する。5は口径13cm、器高5.2cmの鉢である。外面の上半はハケ目調整、下半をヘラ削りしている。内面はナデ・ヨコナデ調整である。胎土に多量の細砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、体部下半に黒斑がある。6はほぼ直行する口縁の壷で、口径16cmに復原され、現存高11.6cmを測る。薄手の土器である。内外面を入念にハケ目調整し、一部はヨコナデにより消えている。胎土に多量の細砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、体部には煤が付着している。7は長胴の甕小片で反転復原図である。口径29cm、現存高9.7cmである。ハケ目を多用する。胎土に細砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、内外面には煤が付着している。

鉄製品（図版54、第117図－12）　銹のため不明瞭だが未製品か鉄鏃の茎だと思われる。

15号竪穴住居跡（図版13・14、第18図）

13・17号住居を切り、14・16号住居に切られる。平面プランは隅円の不整長方形を呈し、主柱穴はP_1・P_2と推定するが、P_3も関係あるかもしれない。P_1～P_3は深さ10cmに満たず、浅い。基本的には2本柱の住居である。貼床面から地山までは浅く、黄褐色土を詰めている。貼床を行った後、南東長壁際の中央部に屋内土壙を設置している。

出土遺物　土器・土製品・鉄製品が覆土中から出土している。土器はすべて小片の反転復原図

である。

土　器（第135・136図）　1は口径9.2cm、現存高7cm強を測る鉢である。外面は丹塗磨研され、内面は口縁部付近に丹塗りし、丹が垂れている。2・3は無頸壺である。2は表面が摩滅しているが、丹塗りされていた可能性がある。3は内面の頸部以下を除いて、きれいに丹塗りしている。3は復原口径20cmである。ともに、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好である。4・5は開口壺で4は丹塗磨研されている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好である。6～8の甕は外面をハケ目調整し、内面はナデ調整を行う。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、黄褐色～茶褐色を呈する。

土製品（図版52）　投弾が1点出土した。

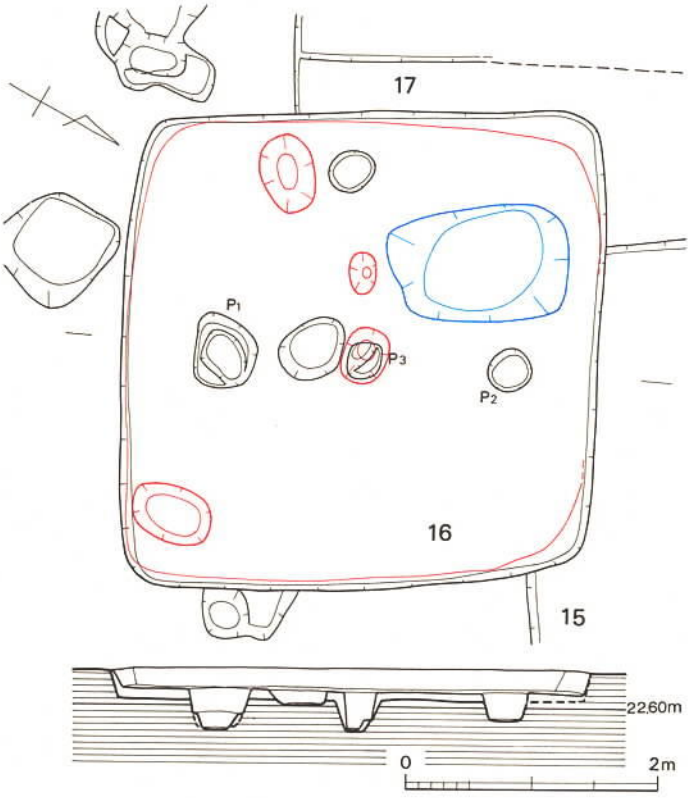
鉄製品（図版54、第117図－16）　破片資料である。現存長4cm、幅1.7cmで図の下方は茎状を呈し幅1cmを測る。幅広の部分は厚さ7mmの台形の断面を呈する。銹で不明瞭であるが製品とは考え難く、未製品であろう。

16号竪穴住居跡（図版13・14、第19図）

15・17号住居を切る。隅円方形を呈し、各辺はゆるい孤を描く。主柱穴はP_1・P_2のふたつである。その中央、すなわち竪穴部の中央にピットP_3がある。これも屋根を支える補助的な役目を果たしたものであろう。貼床面から地山までは浅く10cmに満たない。炉はない。

出土遺物　土器・土製品・鉄製品・石製品が出土している。本住居に伴なう状況で出土したものはない。また土器は極小片で本住居に直接関係ないので図示しなかった。

土製品（図版52）　投弾が

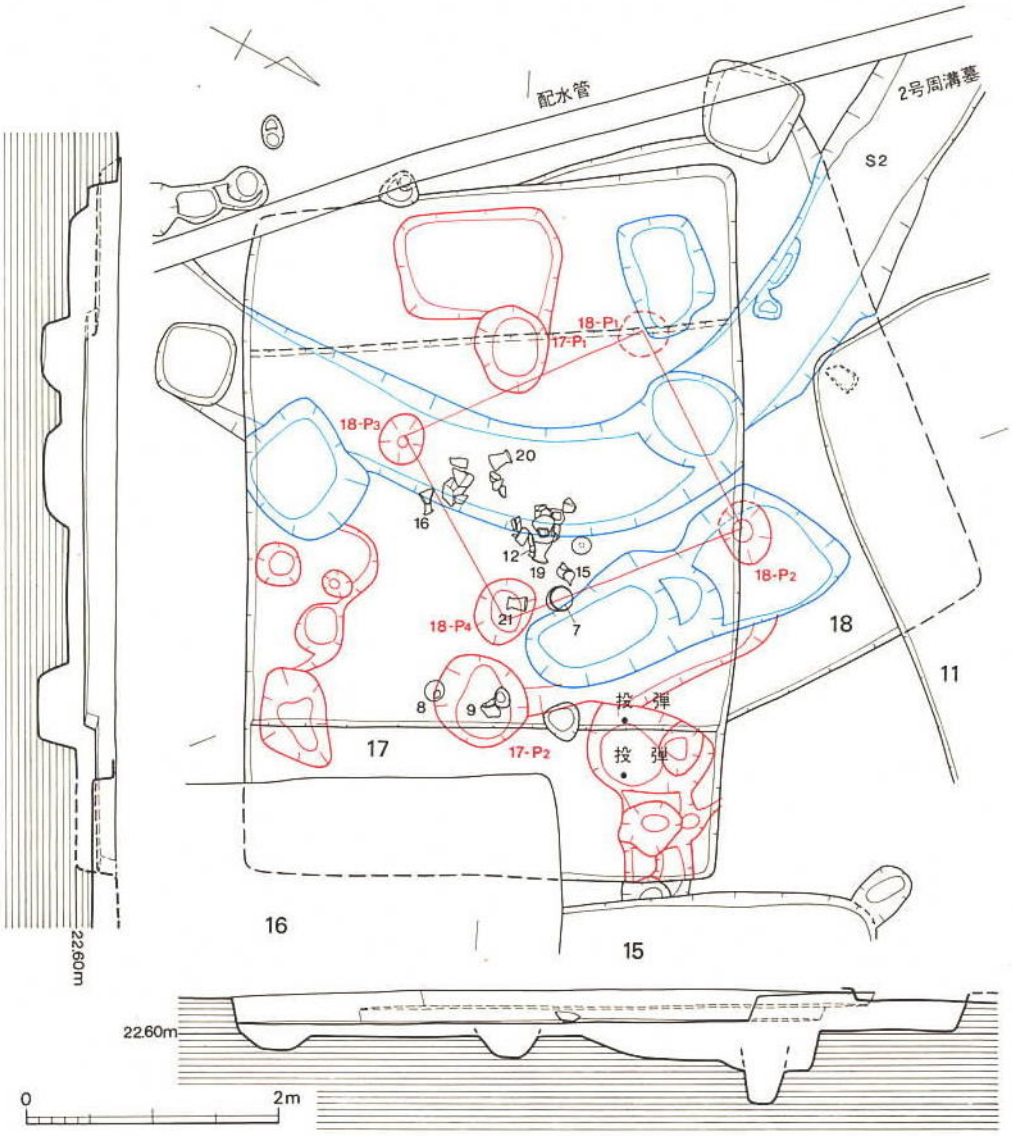


第19図　16号竪穴住居跡実測図（1／60）

3点出土した。

鉄製品（図版54、第117図－15）　破片資料である。鉄鏃の茎のようでもあるが、錆のため不明である。現存長4.3cmである。

石製品（図版64、第124図－38）　破片資料で、幅3.7cm程の小型の仕上砥である。粘板岩製と思う。



第20図　17・18号竪穴住居跡実測図（1／60）

17号竪穴住居跡（図版13・14・18、第20図）　15・16号住居に切られ、18号住居・2号周溝墓を切っている。また西短壁の一部を現代の配水管付設溝によって破壊されている。平面プランは隅円長方形に近い形を呈し、長側壁は南壁の寸法がすこし短いようである。竪穴部内では両短壁に客土してベッド状遺構を付設している。主柱穴はP_1・P_2であるが補助柱は明瞭ではない。貼床は白色砂粒を多く含んだ粘土で行い、その下層は地山との間に地山の黄褐色土ブロックを含む黒褐色土を充填していた。炉・屋内土壙はなかった。

出土遺物　多量の土器と土製品が出土している。第20図に遺物の平面的な出土状態を示したが、調査的の土層断面によれば覆土中からの出土である。土器は竪穴部の中央付近に群をなして集中的に出土し、各々が間に土を噛んでおり、本住居の中央部の床面が完全には埋没しない時点で意識的にまとめて投棄したようである。その他のものでは、もちろん、自然的な流入もあったであろう。完形品が床面中央にごろごろと転がっており(図版18)、本住居に直接伴なうもののように見受けられるが、他の住居（付近の例では7・9・19号）では直接伴なう土器は、床面に潰れた状況で出土し、その上層に土を噛んで（1～2cmしか土を噛まない場合もある）完形品が検出されるので、潰れずに完形品に近い状態で床面からやや浮いて出土した土器は多くの場合伴わない。以下に説明する土器はそのような土器である。

土　器（図版81・82、第136・137図）　1～7・9は鉢である。1は弥生時代中期の祭祀土器で、丹塗磨研される。2は口径11.1cm、器高7.3cmの深めの鉢で外面はハケ目調整後ヘラ削を行う。3は口径12cm弱、器高5.5cmで外面はタタキの後、底部をヘラ削りする。4は口径14.5cm、器高6.1cmに復原される。底部はハケ目調整後にヘラ削りを行う。5は口径15.5cm、器高7.7cmで内面はハケ目調整、外面はヘラナデ、ヘラ削りを行う。6は外反する口縁を持つ鉢で口径19.2cm、器高8.8cmに復原される。内外面ともハケ目調整を行い、部分的なヨコナデでハケ目が消える。7は口径19cm、器高11.7cmを測る。外面の下半はヘラ削り、上半はナデ調整である。内面はハケ目調整の後、部分的にナデている。9は明確な口縁を持つ鉢で口径22.9cm、器高16.9cmを測る。調整は7とほとんど同じだが、内面のハケ目はよく残る。これらは、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色～淡茶灰色を呈し、黒斑がある。なお、7は外面の大半に煤が付着している。8は坩で、口径11.8cm、器高11.9cmを測る。薄手の優品である。外面はハケ目調整の後、下半をヘラナデしている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色～褐色を呈し、黒斑がある。10は口径13.6cm、胴部最大径25.6cm、器高30.3cmの直口壺である。胴部最大径はほぼ中位にあり、底部は僅かに凸レンズ状を呈する。ハケ目を多用し、胴部中位以下はハケ目調整に先立ちヘラ削りを行う。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈し、黒斑がある。11・12は匙状のもので柄の部分だけ完存する。手ずくね風の作りで、ナデで整形している。11は口径9cm、柄の長さ6.4cm、全長13程である。12は同じく10cm、16cm、22.7cm程である。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で灰褐色～明茶褐色を呈し、12は黒斑がある。13～15

はほぼ同大の小型の甕で完形に復原される15は、口径15cm、器高18.5cmである。13は内外面ともハケ目調整し、胴部内面はナデている。14は内面の調整は13と同様だが、外面は粗いタタキ目が残り、下半はヘラによる擦過痕がある。15は内面はナデ、外面は上半にハケ目が残り、下半はタタキ目・ヘラによる擦過痕がある。また、外面の口縁部と胴部中位に粘土の継ぎ目が残る。胎土の砂粒の含有量は13は多く、15は若干量であり、ともに焼成良好で褐色を呈し、13・15は黒斑があり、14は煤が付着している。16・17は高坏で坏部はない。坏部ははずして投棄したものであろう、内面はハケ目が残り、外面はハケ目の上からヘラ磨きを行う。胎土に砂粒を若干量含み、焼成良好で褐色～黒色を呈する。煤が一部に付着している。18～21は器台で18は裾の一部を欠くが他は完形品である。17は全面をナデ調整し、18～21はハケ目とナデ調整を併用しタタキ目が残る。18は上部径11.1cm器高12.2cmを測る。19・21は形・大きさとも酷似し、19は口径11.8cm、器高15.2cmで、21は同じく12cm、14.8cmである。ともに胎土に砂粒を若干量含み、焼成良好で褐色～黒色を呈する。

土製品（図版52）　投弾が3点出土した。

鉄製品（図版54、第117図－15）　破片資料である。鉄鏃の茎のようでもあるが、鏃のため不明である。現存長4.3cmである。

石製品（図版66、第125図－48）　破片資料で、長さ10cm、幅4.9cm程の仕上砥である。粘板岩製と思う。

18号竪穴住居跡（図版13・14、第20図）

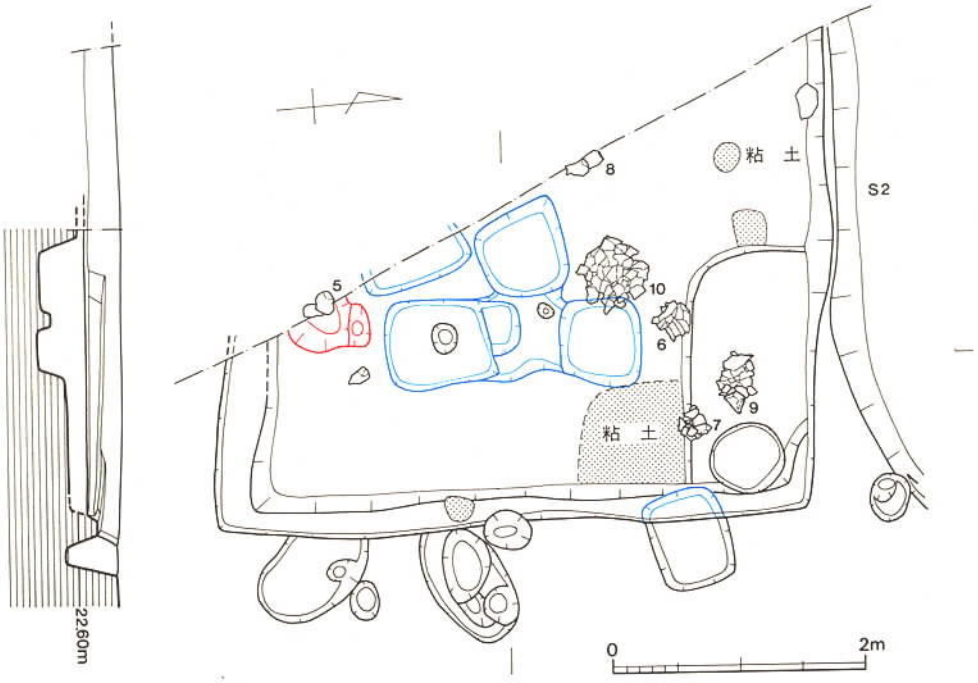
11・17号住居に切られ、1・2号周溝墓を切っている。複雑に遺構が切り合っており、不明な部分があるが、平面プランは方形を呈するようである。主柱穴はP_1(検出していない)・P_2・P_3・P_4で4本柱の住居だと思われる。貼床は僅かに行っている。

出土遺物　土器が出土している。が、本住居に直接伴なう状態で出土したわけではない。

土　器（第138図）　図示できるのは2個体で他は小片である。1・2とも壺で同一個体かと見まごうばかりの土器で、ともに胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好で茶褐色～黒褐色を呈する。1・2ともヘラ状器具による擦過痕が底近くに認められる。2の底部は凸レンズ状を呈する。

19号竪穴住居跡（図版19・20、第21図）

2号周溝墓に南接して調査区の西壁に存在し、過半が調査区外に延びる。北東隅にベッド状遺構があり、その南・西で床面と1cm程の間層を噛んでネズミ色の粘土を検出した。また、東・南壁沿いに幅20cm程、高さ10cm強の帯状の高まりがある。これは図のように、貼床下から地山が直接続いたものであり、竪穴部掘削時に掘り残したものであろう。主柱穴については、はっ



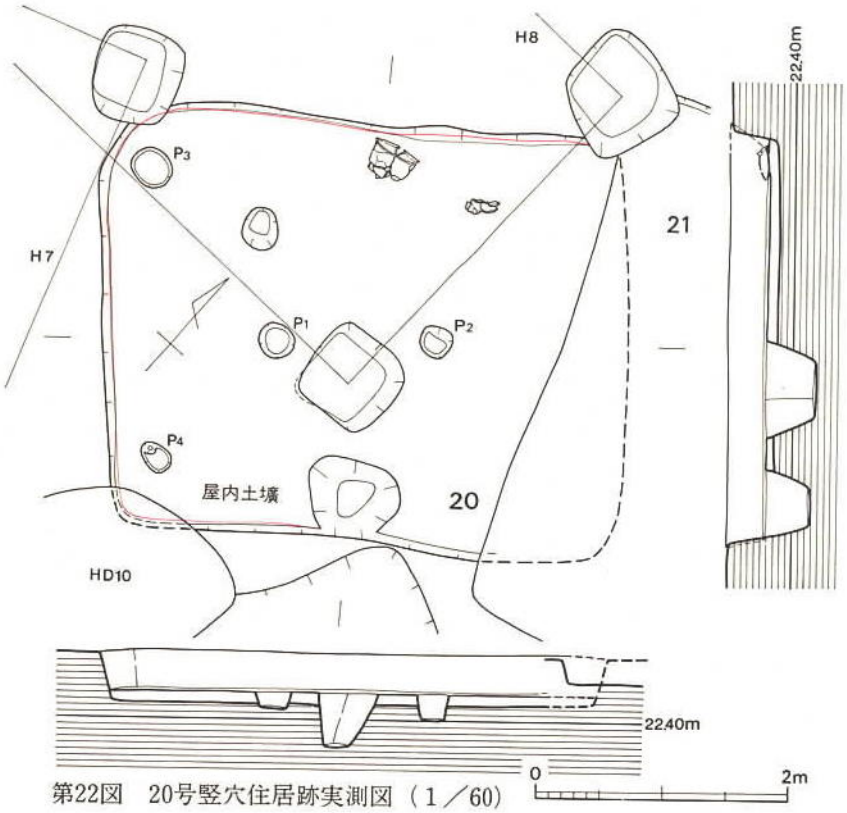
第21図　19号竪穴住居跡実測図（1／60）

きりしない。

出土遺物　土器が出土している。5～10が床面にほぼ密着して潰れた状況で出土した。図示した土器のうち、上記6個体が確実に本住居に伴なうと判断できる。

土　器（図版83、第138・139図）　1は口径13.8cm、器高9.2cmの坩で焼成後に底部を穿孔する。ハケ目調整された後、内面はナデ、外面下半はヘラ削りする。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。2は底部付近を欠失する口径12cmの甕である。ハケ目を多用するが、内面の頸部以下はナデ調整である。胎土に砂粒を多く含み、焼成普通で明茶褐色を呈する。3は全体の½程残存し、口径11.4cm、器高19.4cmを測る直口壺で僅かな底部を有する。ハケ目を多用し、内底面に指圧痕が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色～黒色を呈し、黒斑がある。7も底部を欠失するが、3とほぼ同様の壺である。4・5は鉢で、4は口径17.6cm、器高8.2cm、5は深目で同19.4cm、12.7cmを測る。内面はハケ目が残るが、外面はナデ、ヘラ削り等を行う。ともに胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で4は茶褐色、5は淡茶色～黒褐色を呈し、黒斑がある。6・8～10は甕で8は調査区外に体部が存在するため、上述のように本住居に伴なう状況で出土したが、完形品として図示できなかった。8～10は大型の甕である。6は底部を若干欠くが口径18.1cm、復原高28cm程のハケ目を多用する甕である。僅かな底部を有すると思われる。8は口径23.2cmに復原される。9は口径19.6cm、復原高29.7cmで僅かな底部を有すると思われる。10は口径29.2cm、器高44.9cmで僅かな底部を有する。これらの甕はともに

胎土に多量の砂粒を含み、煤が付着するため黒っぽい色である。



第22図　20号竪穴住居跡実測図（1／60）

20号竪穴住居跡（図版19、第22図）

竪穴部が隅円の略長方形を呈する住居である。東壁を21号住居に、南隅壁を10号廃棄土壙に切られる。西隅壁は7号掘立柱建物、北隅壁と屋内土壙の北には8号掘立柱建物の柱穴が掘り込まれている。主柱穴はP_1・P_2と推定する。竪穴部の西・南隅のP_3・P_4は床面から10cm未満であるが柱配置に規則性があり、21号住居に切られた部分にP_3・P_4に対応するピットがあった可能性がある。4つのピットの存在を考えることができれば、これらを補助柱穴とすることもできよう。屋内土壙は南長側壁中央に設置されるが、出土遺物はない。これらの遺構は貼床面から　切り込む切り込んでおり、貼床下層面は平坦で、地山の土に近い土を入れていた。

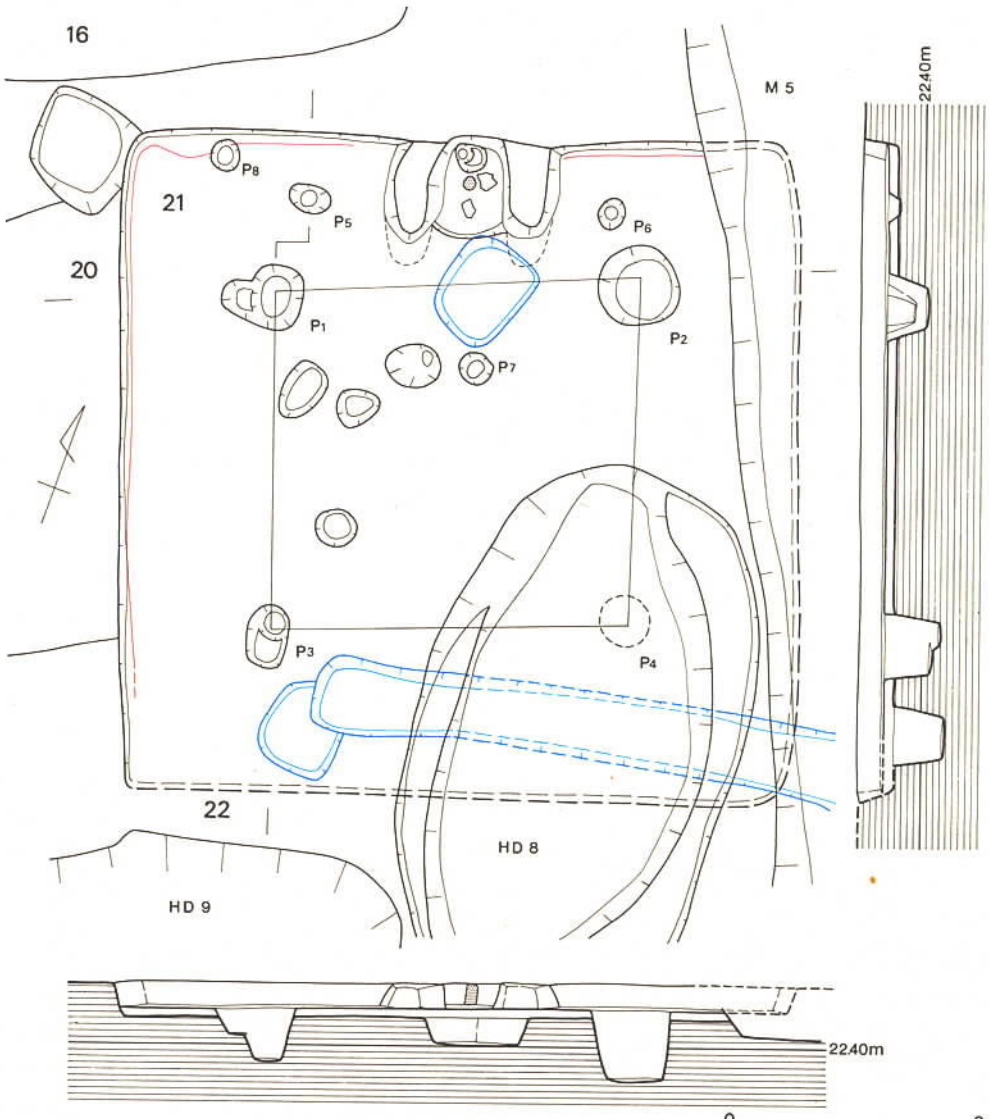
出土遺物　土器・鉄製品・石製品が出土している。土器は床面真上にて潰れた状況で本住居に伴なう状態で検出したが、実測が間にあわなかったので図示していない。弥生時代中期後半の甕である。鉄製品・石製品は覆土中からの出土である。

鉄製品（図版56、第119図－39）　鉇の茎尻の破片である。幅15mm、現存長44mmである。断面は浅い蒲鉾型（逆U字型）を呈する。北部九州タイプの弥生時代の古式の鉇である。

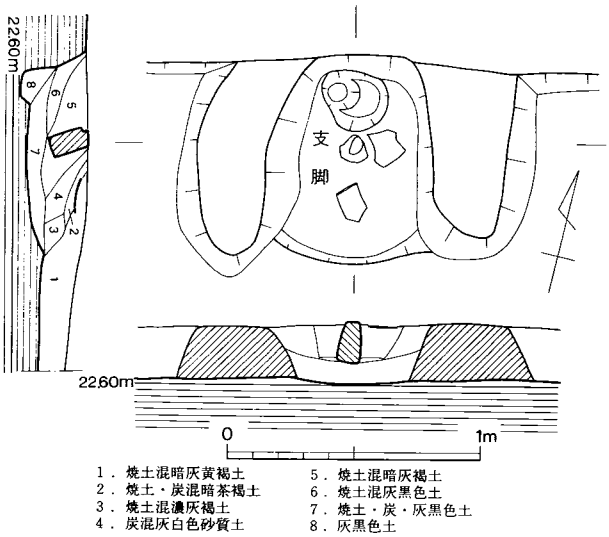
石製品（第124図－39）　仕上砥の破片である。頁岩か硬質砂岩製である。

21号竪穴住居跡（図版18、第23・24図）

20・22号住居、８・９号掘立柱建物を切り、溝５・８・９号廃棄土壙に切られる。遺構の重複が複雑であったためプランを間違え、南壁を実際より１m程北側だと思って掘ったので写真が図と異る。竪穴部が隅円方形を呈する４本柱（P_1～P_4、P_4は遺存しない）の住居で北壁中



第23図　21号竪穴住居跡実測図（１／60）



第24図　21号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）

央にカマドを設置する。主柱穴は貼床面で検出され、柱は抜かれていた。P_5（深さ11.6cm）・P_6（同10.1cm）は北壁からほぼ等距離にあって、カマドをはさんで対の位置に存在し、カマドの部分の上屋に関する補助柱穴であろうと推測する。P_7もカマドの中軸線上にあり、あるいはP_5・P_6と同じ機能を有した可能性を考えておきた。P_8は東・南壁付近が遺存しないので対となるべきピットが検出できず、補助柱穴と考えるには多少無理があろう。カマドは作り替えたようで、床面が住居床面より高くなっている。支脚は円柱状の土製品で、壁から38cm離れて設置されていたが、カマドの奥に向かって倒れている。覆土中から甕の破片が2点出土したが、流入品である。また、支脚の奥の壁際に径25cm、深さ5cm程のピットがある。後から掘り込まれたものではないが、カマドとの関係は不明である。ただし、P_5～P_8との配置状態から、カマド設置以前に住居の上屋を作る時に何らかの役割を担った可能性も考えておく必要があろう。

出土遺物　出土品は少ない。

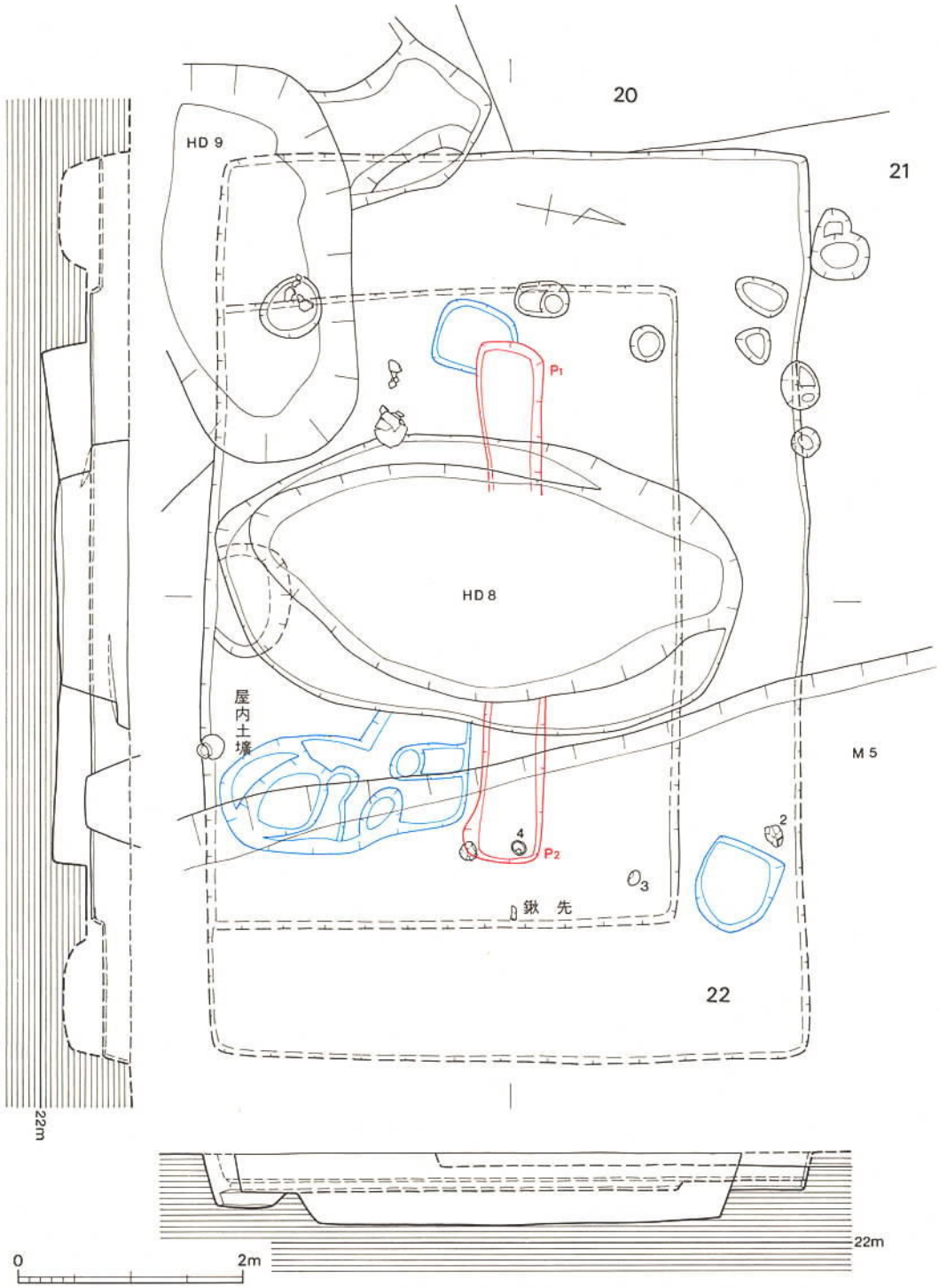
土　器（第139図）　かなり火を受けた支脚でもろく、取り上げる時にうまくいかず、破片としてしか図示できない。径7.9cmほどで、検出時の器高は16cmであった。

石製品（図版64、第124図－30）　貼床下層から出土した仕上砥の破片である。緻密な砂岩製である。

22号竪穴住居跡（図版14、第25図）

21～24号切居と重複し、21号住居、5～10号廃棄土、溝5に切られ、23・24号住居、8・9号掘立柱建物を切っている。よって、遺存状態は極めて悪い。僅かに残る部分から復原して図示した。本遺跡では大型の部類に属する。〝コ〟字型のベッド状遺構を付設し、南壁際中央に屋内土壙を設ける。屋内土壙からは何も出土していない。主柱穴は通常のピットではなく、布掘りだが中央部を8号廃棄土壙によって破壊されている。貼床は僅かに遺存していた。

出土遺物　土器・土製品・石製品が出土している。が、本住居に伴なうものは少なく、土器のうち、2だけである。1は完形品で壁際で出土したが、土器底部と住居床面のと間に明らかに



第25図　22号竪穴住居跡実測図（1／60）

土を噛んでおり、他の土器も同様であった。投棄されたものであろう。

土　器（図版83、、第139、140図）　1は口径10.9cm、器高25.3cmを測る完形の壷である。ほぼ球胴で底部は凸レンズ状の平底である。ハケ目を多用し、底部付近はヘラ削りを行う。器面にあまり砂粒は目立たず、焼成は普通程度で明茶褐色を呈し、黒斑がある。2は口径15.6cm、現存高23.5cmの底部を欠失した甕である。ハケ目を多用し、外面の口縁部・肩部にはハケ目調整後、ヘラ状器具で格子状や波型に施文している。胎土に小砂粒を若干含み、焼成良好で褐色を呈し、外面は煤が付着したり、黒斑があって黒ずんでいる。3は口径15.7cm、器高6cmの鉢である。内底面は工具痕が残り、外底面はヘラ削りを行った後、底部中央付近をナデている。器面に著しくヒビ割れが認められる。胎土に小砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。4は上縁部径8.5～9.2cm、器高9.1cmを測る器台である。内面はナデ調整し、外面はタタキ目が目立つ。胎土に小砂粒を多く含み、焼成良好で明褐色を呈し、煤が多量に付着している。

土製品（図版52、第116図－2）　貼床下層から投弾が1点出土している。長径4.3cm、短径2.7cmの完形品である。17号住居出土品（第52図－1）と同様に器面に稜線がある。

第23号竪穴住居跡（付図1）

22・24号住居、8・9号廃棄土壙、1号円形周溝に切られ、ほとんど遺存しない。出土品より、弥生時代中期末～後期初頭頃の住居か、と推定するが詳細は不明である。

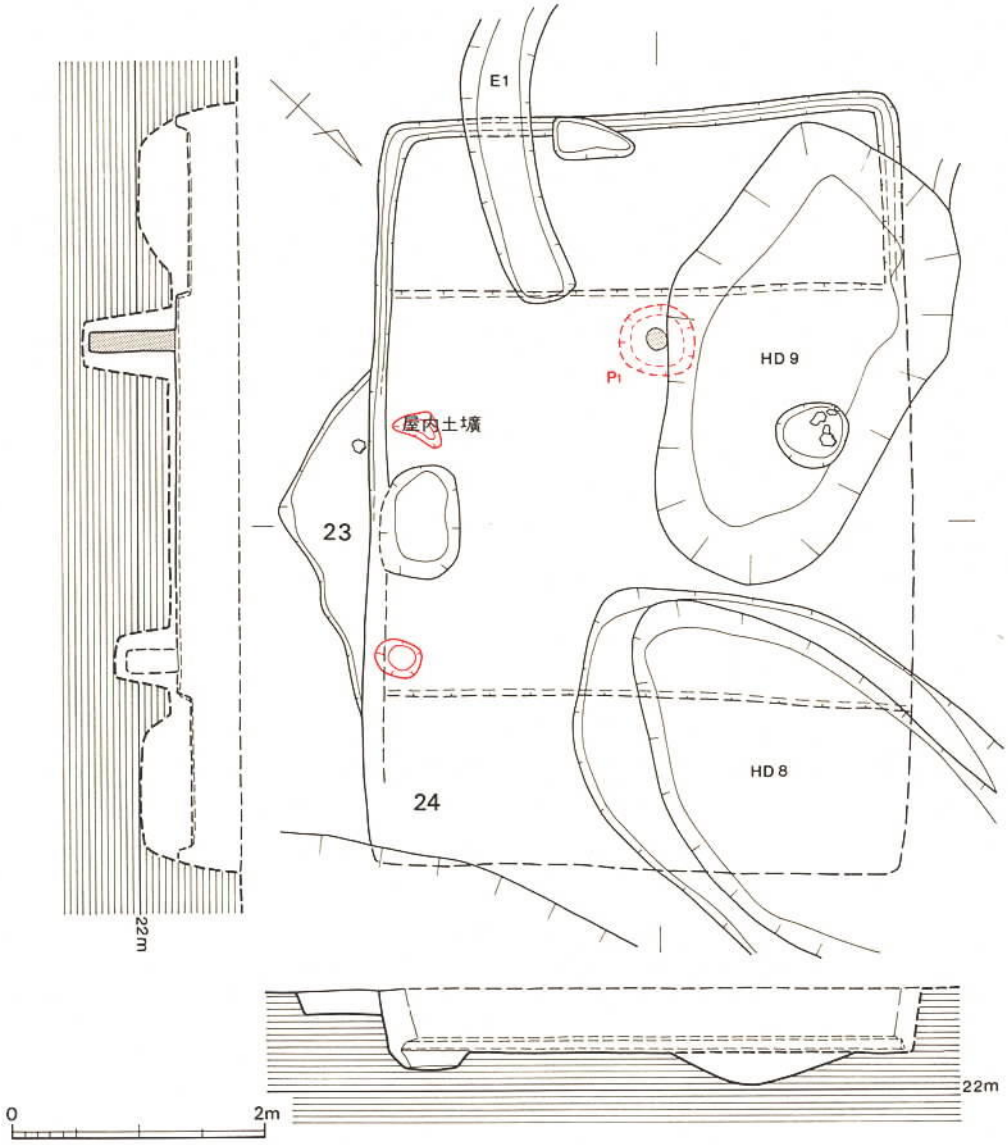
出土遺物　土器が出土しているが、図示できるのは3点である。本住居に伴なうものではない。

土　器（図版84、第140図）　1は小型の壷で、現存高8.7cm、胴部最大径10cmに復原される。器面が荒れているが、本来は丹塗磨研されていたであろう。胎土に小砂粒を若干含み、焼成良好で淡茶色～褐色を呈する。2は鉢の小片で終末期のものである。3は甕の小片の反転図で、復原口径28cmである。外面に煤が付着している。

24号竪穴住居跡（図版19、第26図）

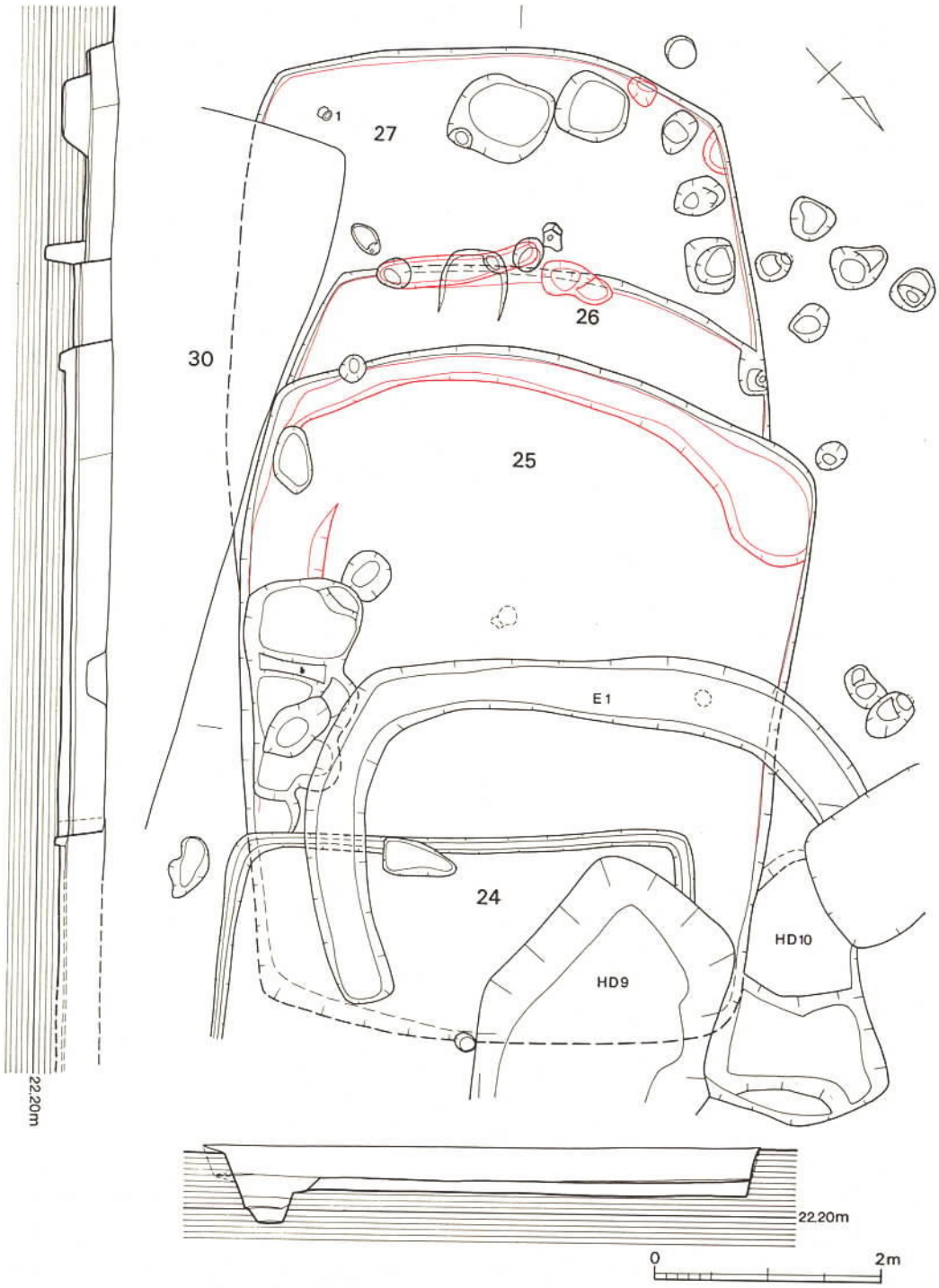
1号円形周溝、8・9号廃棄土壙、に切られ23号住居を切る。24～27号住居は27号住居→24号住居と順次、北東側に平行移動しているが、それが、建て替えを意味しているのかどうかは不明である。遺構の重複が激しいため、竪穴部の遺存状態は極めて悪く、推定復原した部分がかなりある。短側壁にベッド状遺構を付設し、遺存状態の良い部分には壁小溝を検出した。主柱穴は一つ（P_1）しか検出できかったが、それと対にな主柱穴は8号廃棄土壙に破壊されている。P_1で主柱痕を検出したが、それは、床面近くで切られたものか、朽ち果てるまで放置されたのかは不明である。南西の長側壁中央に屋内土壙を検出したが出土遺物は皆無であった。

出土遺物　土器が出土しているが、すべて、投棄・流入品である。



第26図　24号竪穴住居跡実測図（1／60）

土　器（図版84、第140図）　1は弥生時代中期末～後期初頭の甕片である。復原口径31cmを測る。2は長頸壺で口径15.8cmに復原され、現存高22cmである。口辺部内外面はハケ目調整の後ヘラ磨きし胴部は内面をヘラ削り、ナデ調整、外面はヘラ磨きとハケ目がすこし残る。底部は丸底を呈すると思われる。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～黒色を呈する。



第27図　25～27号竪穴住居跡実測図（1／60）

25～27号竪穴住居跡（図版19、第27図）

24号住居の説明で、建て替えの可能性について言及した。それ程整然と住居が北東側に移動している。しかし、調査の過程で掘り方を間違え、十分に図化できなかった。推定復原したものを図示したが、主柱穴等は把握しきれなかった。よって、不十分な図である。説明もしずらい。

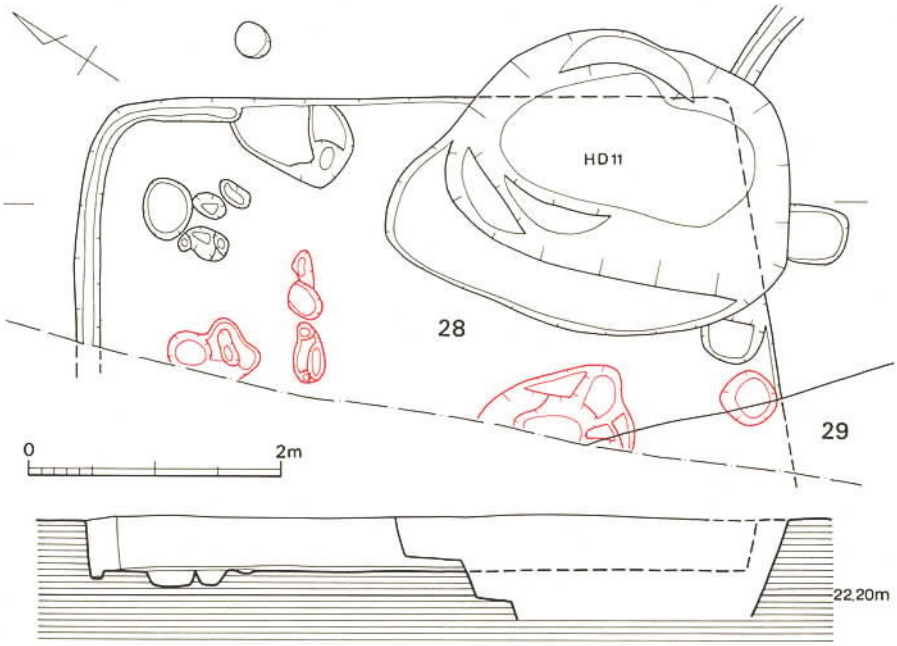
出土遺物　27号住居から出土した土器のみ図示した。しかし、住居に伴なうものではない。

土器（図示84、第140図）　ほぼ完形品で、光景9.6cm、器高8cmを測る丹塗磨研の壷である。口縁部に径4mm程の孔を4ケ所に穿つ。蓋をして紐で留めるためのものであろう。胎土は精選され、焼成良好である。

28号竪穴住居跡（図版19、第28図）

27号住居の1mほど西にあり、過半が調査区外に延びる。南側の部分を、11号廃棄土壙・29号住居によって切られている。北壁と東壁の北側に壁小溝がある。検出した部分が狭いので柱配置は明確にしがたい。

出土遺物　土器が出土しているが、本住居に伴なうものではない。1・2は住居の覆土・貼床下層・11号廃棄土壙から出土した破片が接合したものである。3は覆土中から出土したものである。



第28図　28号竪穴住居跡実測図（1／60）

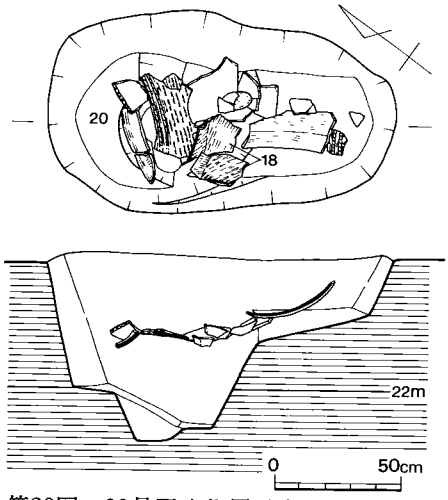
土　器（第141図）　1は鉢の脚台部であろう。脚裾部径17.2cm、現存高5cm程である。内面はハケ目明確、外面はヘラ磨きを行い、暗文状に見える。胎土に小砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。2は光景16cm、器高13cm程に復原される壷で、ハケ目調整後にヘラ磨きを行う。内面の頸部以下はナデ調整を行っている。胎土に砂粒はあまり目立たず、焼成良好で茶・黄褐色を呈し、黒斑がある。3は高杯の脚部を欠失したもので、丹塗磨研されている。胎土は精選され、焼成は良好である。

29号竪穴住居跡（付図1）

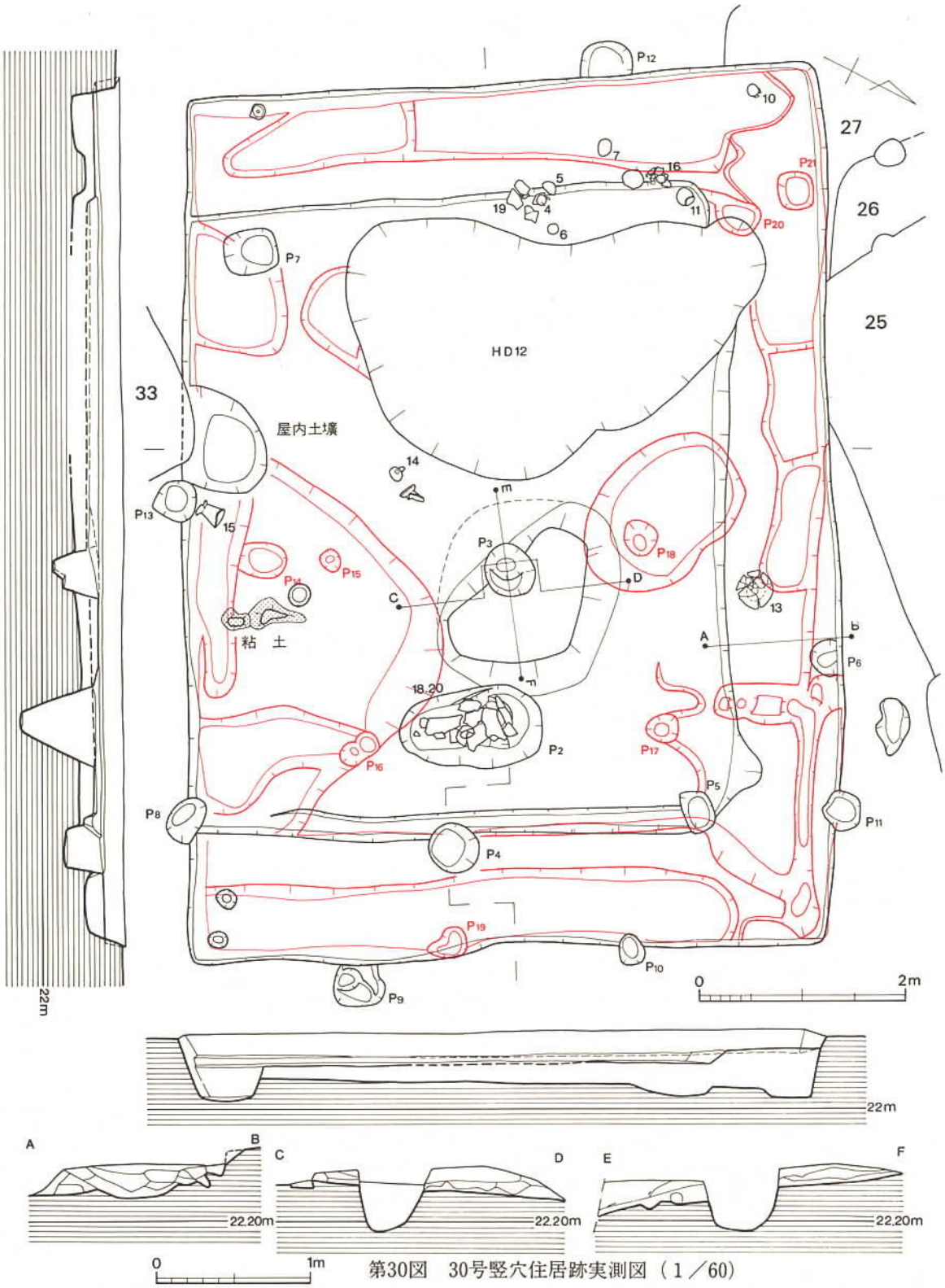
28号住居を切って南側に位置する。2号円形周溝と重複し、大半が調査区外に延びるため、詳細は不明である。土製紡錘車が1点出土している（第116図－10）。

30号竪穴住居跡（図版20・21、第29・30図）

調査区のほぼ中央で検出した、本遺跡最大の竪穴部を有する住居である。25～27号住居を切り、主柱穴P_1が存在すべき部分に奈良時代の12号廃棄土壙が掘り込まれていたが、遺存状態が良さそうだったので重点的に調査した。長方形プランの住居で、竪穴部床面は貼床され、南東壁を除いて幅1～1.2mの〝コ〟字型のベッド状遺構を付設する。ベッドの下層は一段深く溝状に掘り込まれ、黒色土や地山の黄褐色粘質土等で客土してベッドの形を整え、ベッドの表面には黒褐色土を貼っている。南東壁際に、貼床面から掘りんで屋内土壙を設けている。が、内部から人工遺物は出土していない。またP_2の西に東西2m、南北1.7m、高さ10cm程の〝たかまり〟があり、そのほぼ中央に深さ40cm程のピット（P_3）がある。この〝たかまり〟は床を貼る前に暗褐色土や黄灰色砂を使って造られ、ピットはその後に掘られている。この遺構の性格については、類例を待って判断したい。柱配置については、かなりの数の補助柱穴の存在が想定される。まず主柱穴は西側のP_1は上述のように廃棄土壙12に破壊され、現存しない。東側のP_2は柱を掘り抜いて土器を埋置している（左図）。図で、北西側の深い部分（左側）が主柱穴で、浅い部分が主柱を掘り抜く時に掘った掘り方である。柱を引き抜いた後、地ならしをして大小の甕を割って埋めている。甕は復原しても完形品にならず、全体の⅓も残っていない。他の破片は違う所に捨てられたものであろう。住居を廃棄する際のマツリに関わる遺構である。補助柱穴と考えられるピットは竪穴部内外や貼



第29図　30号竪穴住居跡主柱穴（P_2）実測図（1／30）



第30図　30号竪穴住居跡実測図（1／60）

床下層で検出したP_3～P_{21}の19中小のピットである。これらのうち、補助柱穴とするには、対となるピットがない場合があり、やや不安なものも含まれる。性格（機能）については明らかにし難いものが多いが、ほぼ、以下のことが言えるのではなかろうか。

① P_8・P_{11}は東側ベッド内側の壁小溝のラインの延長線上に位置し、このライン上にP_7がベッドの隅角部にあり、P_{11}との距離はベッドの幅に相当する。P_7・P_8の丁度、中間にP_4がある。P_4は径が大きく、深い。

② P_{20}は廃棄土壙との関係で分かりにくく、下層で検出したが、あるいは、床面で検出できた可能性がある。P_7とほぼ同様にベッドの隅角部にあり、両者の性格の共通性を示唆していると推測される。また、P_7とP_5の関係は、P_7とP_8のそれに通じるのではなかろうか。

③ P_{13}は南東壁の中央にあり、それと対になるべきピットを北西壁に検出していない。P_8との関係も無視できない。

④ P_9・P_{12}は各々、竪穴部の東西隅からほぼ当距離にあり、その配置に一定の規則性がある。

⑤ P_{10}・P_{19}は北東壁の、およそ三等分された位置にある。

⑥ P_{16}・P_{17}は主柱穴P_2を挟んで、P_2からほぼ当距離にある。P_2に柱を立て、屋根を葺く時のものであろうか。

⑦ P_{15}・P_{18}もP_3を挟んで、P_3からほぼ当距離にある。

⑧ P_{14}・P_{21}は不明な部分を残すが、前者はP_5と、後者はP_{11}と関連するかもしれない。

調査中、土の見分け方が難しかったので、各ピットの検出層位に多少の混乱があるかもしれないが、上記のピットは各々の配置に一定の規則性を認めることができる。数個でセットになるこれらの補助柱穴の各セットの機能については、ここで詳しく述べることはできない。しかし、住居の建設過程や完成後の住居の中で何らかの役割を果たしたであろう。

出土遺物　土器・土製品・鉄製品・石製品か出土している。石器は縄文時代の凹み石で、別に後述する。土器のうち、18・20の大小の甕は先述したように主柱穴P_2に埋置されたもので、本住居の廃棄時を示す資料である。13の高杯は脚部をはずして杯部だけ伏せて置かれており、潰れた状況で検出した。脚部14は床面に転がっていた。16の甕もベッド床面に潰れた状態で検出した。他の土器は覆土中や投棄された状況で出土したものである。土製品・鉄製品も同様の出土状態であった。

土　器（図版84・85、第141・142図）　1～8は鉢で、1はテズクネ風である。1～3は小型の浅いもので、口径と器高は、1が5.6cm・2.6cm、2が6.6cm・2.4cm、3が7.4cm、2.2cmである。2・3は若干ハケ目が残るが、ナデ調整によって消えている。3点とも胎土に多量の砂粒

を含み焼成良好で黄褐色～暗褐色を呈し、２・３は内外面に１は口縁の一部に煤が付着している。４～７は通有の大きさの鉢で、口径と器高は、４が10.3cm・4.1cm、５が14.8cm・5.4cm、６が11cm・５cm、７が16.4cm・5.5cmである。調整は６・７が全面にハケ目を残さずにヨコナデ・ナデ調整がされているのに対し、４は内外面にハケ目が残り、５は口縁内面にハケ目を残し、下半部の内外面に粗いヘラ磨きを行う。ともに胎土に砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～暗褐色を呈し、４は内外面に煤が付着し、５～７は黒斑がある。８は大き目の深鉢で口径20.9cm、器高10.5cmに復原される。内外面にハケ目が残り、内底面はナデている。胎土に砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。９は長頸壷の破片で精製土器である。外面はヘラ磨きされ、内面はハケ目調整を行う。焼成良好で黄褐色を呈する。10は坩で口径4.3cm、器高8.1cmである。外面はハケ目調整の後、口縁部と体部上半をヘラ磨きし、下半はヘラ削りを行っているように見受けられる。内面はヨコナデ、ナデ調整である。胎土に砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、黒斑がある。11は壷で、口径12.7cm、器高16.5cmを測る。ハケ目調整後、外面は幅広のヘラ磨きにより、内面はヨコナデ・ナデ調整により、ハケ目を消している。胎土は雲母を中心に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、２ケ所に黒斑がある。12・13・14は高坏で13・14は同一個体の可能性が強い。12は坏部内面と外面をヘラ磨きし、脚裾部内面はハケ目調整を行う。13・14はハケ目調整後、坏部内面に暗文を入れ、脚柱外面はヘラ磨きを行っている。13は径32cm、14は脚裾部径17cmである。12～13とも胎土にあまり砂粒を含まず、焼成良好で黄褐色～暗褐色を呈し、13の口縁部には煤が付着している。15は器台で、口縁部を内側に強く折り曲げている。口径15.6cm、器高21.8cmを測る。ハケ目調整が目立ち、頸部内面はナデており、指圧痕が残り、口縁部はヨコナデ・ナデ調整である。胎土に砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。外面は煤が付着し、底部は二次加熱のため赤変する。16～20は甕で18・20を除いてほぼ完形である。先述のように18・20は住居を廃棄した後、主柱穴P_2に埋置されていた。16は口径13.5cm、器高17.8cmである。底部は凸レンズ状を呈する。ハケ目調整の後、口縁部はヨコナデし、胴部中位以下の内面はナデ、外面はヘラ削りを行う。胎土に雲母等の砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色～黒色を呈する。17は頸部の締りがゆるく深鉢状の甕で、口径17cm、器高17.4cmを測る。内面はハケ目がよく残るが、外面は口縁部から頸部にかけてタタキ目が目立ち、以下はヘラ削りを行い、僅かにハケ目が残る。胎土に雲母等の砂粒を多く含み、焼成は普通で、茶褐色を呈し、黒斑がある。18は口径22.8cm、器高33.2cmに復原される。ハケ目がよく残り、胴部中位以下の外面はナデ調整により、ハケ目が消えている。胎土に雲母等の砂粒を多く含み、焼成は普通程度で明茶褐色を呈するが、煤が多量に付着し、黒ずんでいる。19の底部は凸レンズ状を呈し、全体に粗い作りの土器である。ほぼ完形に復原できるが、破片は広い範囲に散乱していた。内外面はハケ目調整するが、外面の胴部下半はまばらなハケ目の下にタタキ目が見える。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶褐色～茶褐色を呈し、黒斑がある。20は破片の

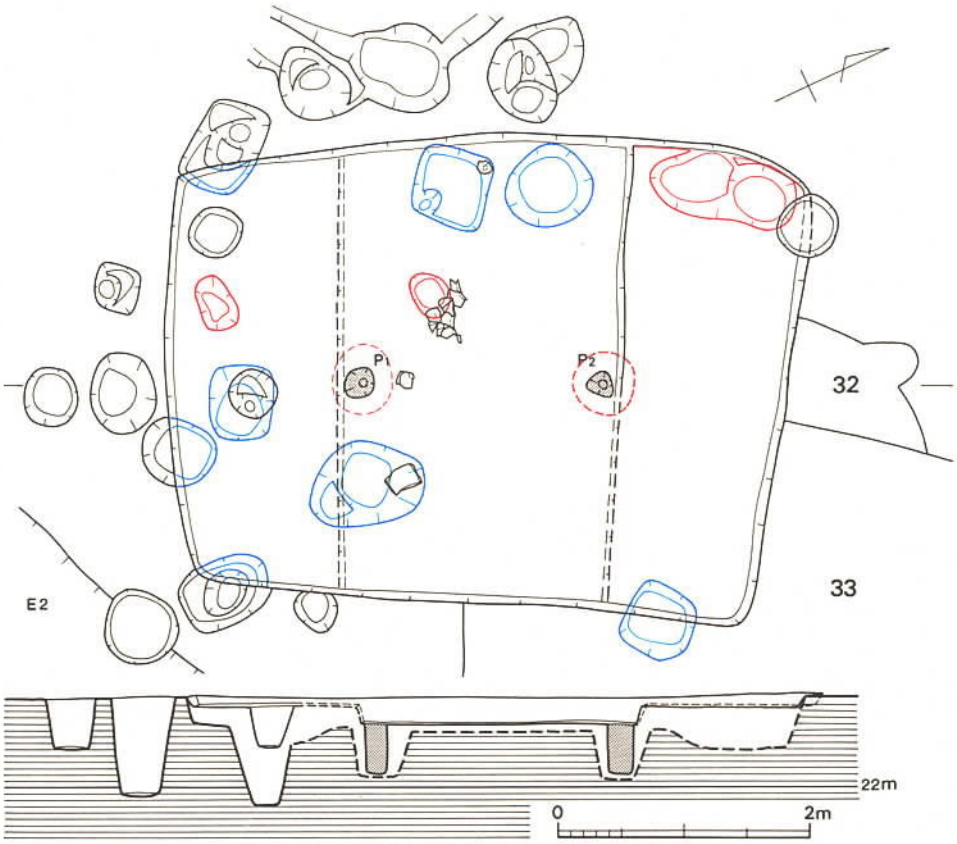
反転復原図で、口径50cmを測る。口縁端部に〝×〟字状の刻み目を巡らす。頸部は刻み目を付した２条の突帯を巡らす。頸部以下の外面はタタキ目が目立つが、ヨコナデされた口縁部を除き、全面をハケ目調整している。胎土は雲母等の砂粒を多く含み、焼成は普通程度で、暗茶褐色を呈する。

土製品（図版52）　覆土中から出土した小型の投弾で、長さ3.76cm、径1.81cmの完形品である。黒褐色を呈する。

鉄製品（図版55、第119図－34）　床面から10cm程浮いて、覆土中から出土した。袋部と刃部の一部を欠くが全形を伺うことができる。小型の鉄斧で全長5.3cm、幅2.7cmを測る。肩は明確な段をなさず、なで肩である。

31号竪穴住居跡（図版22、第31図）

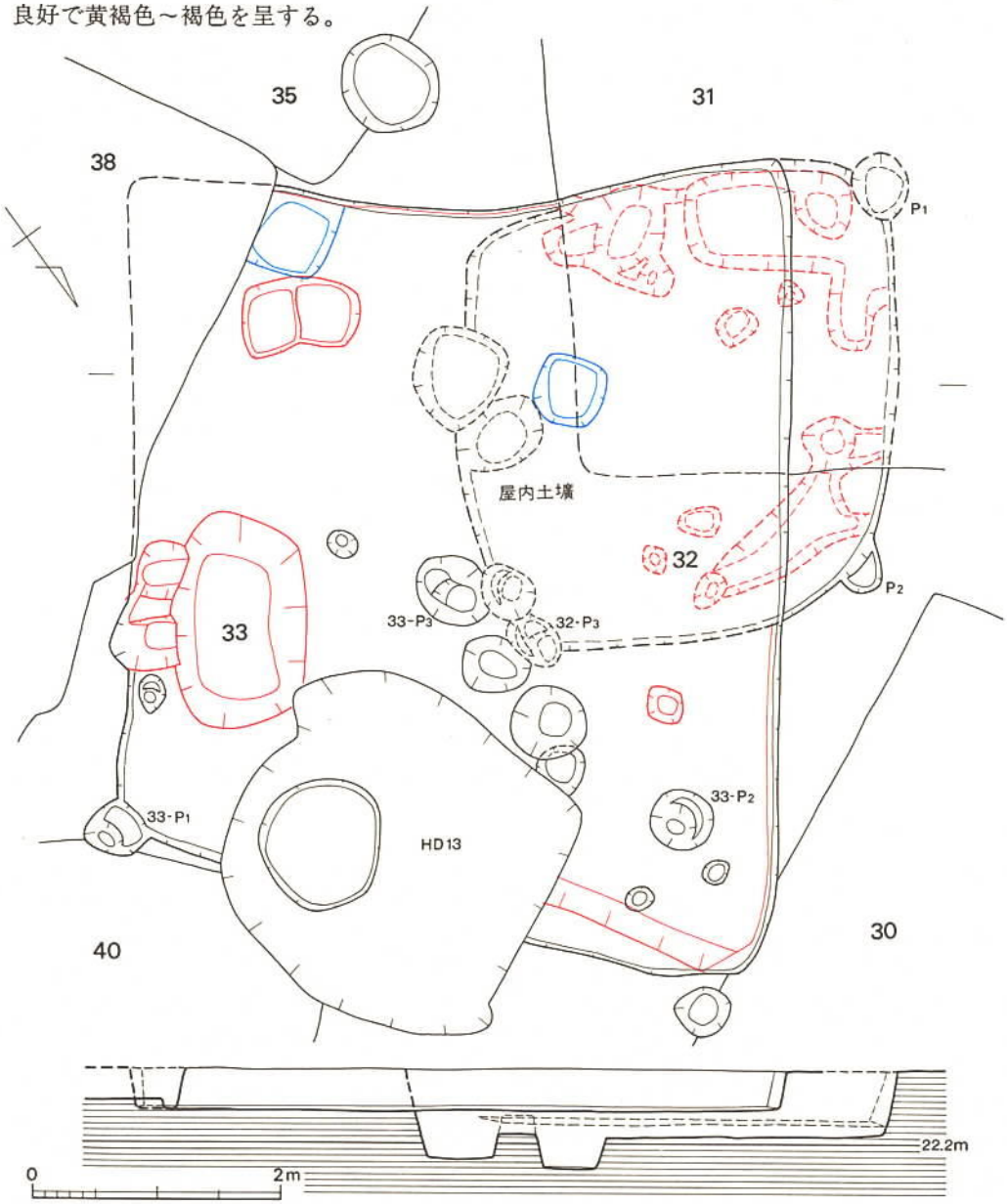
30号住居の１m西に位置し、32・33号住居と重複している。両短壁にベッド状遺構を付設する。竪穴部に占めるベッド状遺構の面積の割合は、他の〝二〟字型ベッド状遺構を持つ住居と比べて高い。床面は貼床をし、ベッド際に主柱痕が残る。



第31図　31号竪穴住居跡実測図（１／60）

出土遺物　覆土中から土器が出土している。

土　器（図版86、第143図）　1・2・7・8は本住居とかけ離れた時期の土器である。3は口径3.2cm、器高2.7cmのデズクネ土器で外面は指圧痕が残り、内面はナデている。4は一部を欠くが口径12.5cm、器高4.9cmの鉢で底部は高台状に作る。内面はハケ目が残る。5は鉢か甕の脚台で内外面にハケ目が残る。6は壺片で頸部に丹塗りする。ともに、砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～褐色を呈する。



第32図　32・33号竪穴住居跡実測図（1／60）

32号竪穴住居跡（図版24、第32図）

31・33号住居に切られ、僅かに残る。平面プランは13号住居に似て隅円の方形を呈し、各辺は孤を描く。主柱穴は四隅に配置されたと考えるが、南隅壁を除いてP_1～P_3を検出したにとどまった。南東壁中央に屋内土壙を検出したが、それに伴なう出土品はない。

33号竪穴住居跡（図版22・24、第32図）

31・32号住居、16号祭祀土壙を切り、38号住居、13号廃棄土壙に切られる。竪穴部の過半が他遺構と重複しているわけである。平面プランは異形の台形を呈し、南西壁は内側に張り出した孤を描き、北東壁は掘り込み面はほぼ直線的だが貼床下のライン（赤線で図示）は南西壁と同様に内側に張り出した孤を描く。主柱穴を中心とした柱配置は不明瞭だが、P_1～P_3が候補に入るだろう。他遺構との重複が激しく、個別遺構の確認に失敗した部分があり、柱配置等は明確にし難い。

出土遺物　若干の土器片と土製品が出土した。土器は図示していない。

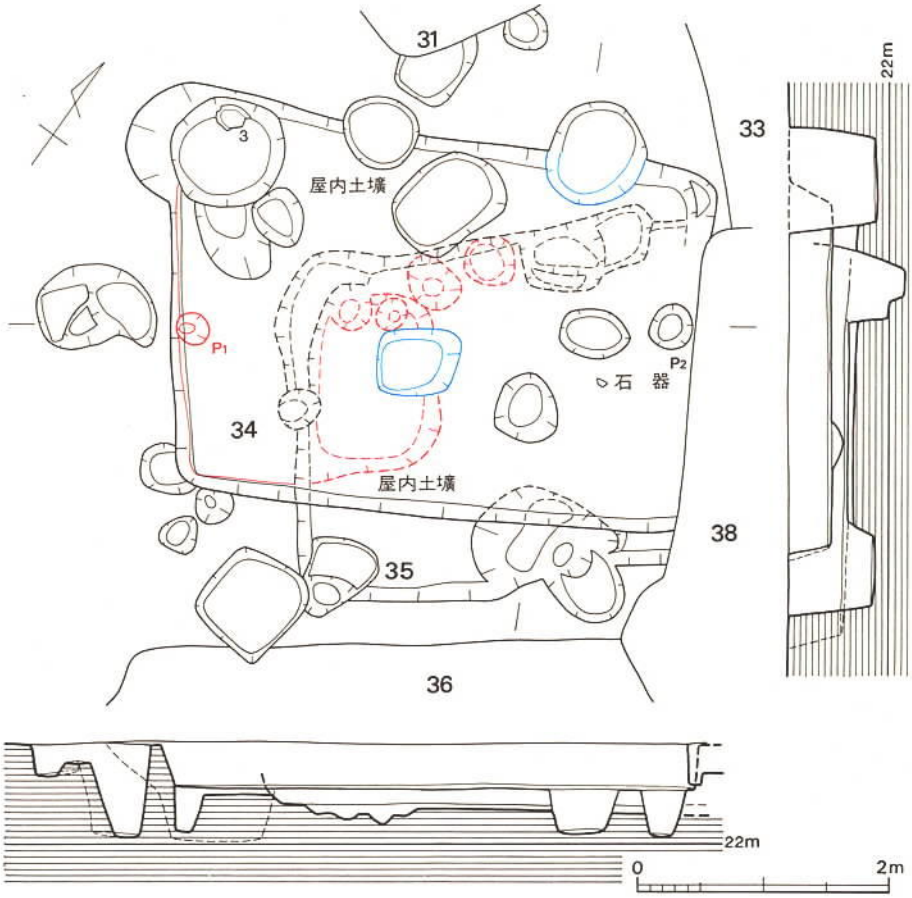
土製品（図版52、第116図－７）　貼床下層から出土した土玉で、31・32号住居のいずれかに伴なう可能性が高い。完形品ではないが、長径3.5cm、短径3.4cm、孔は径６㎜程である。

34号竪穴住居跡（図版23・24、第33図）

35号住居を切り、38号住居に東壁を切られる。竪穴部は長方形を呈し、小型である。貼床面は不明瞭な部分もあったが、35号住居と重複した部分は厚く、かなりしっかりしたものであった。西隅に貼床面から掘り込んだ、略円形の屋内土壙があり、壁の一部は竪穴部の壁と一致する。土壙の床面から22cm浮いて高坏の破片が出土した。主柱穴は短壁際のP_1・P_2と考える。P_1は貼床面の下でしか検出できなかったが、柱痕は残っておらず、注意しておれば床面で検出できたかもしれない。この柱配置と屋内土壙の位置から、住居の範囲はさらに外側に拡がることは明らかであろう。

出土遺物　屋内土壙を含めて、土器・石製品が覆土中から出土している。本住居に直接伴なう状況で出土したものはない。

土　器（図版87、第144図）　１はデズクネ風の無頸の壺で、½程残っている。器肉は厚く、全面をナデ調整するが粗い作りである。底部は凸レンズ状を呈する。口径4.3cm、器高６cmを測る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈し、黒斑がある。２は口縁部の¼を欠失するが、口径16.2cm、器高9.1cmを測る鉢である。外面はハケ目が残り、内面はナデ調整し指圧痕が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、黒斑がある。３は脚部を欠失した高坏で、復原口径27.2cmを測る。器面の風化が進んでいるが、丹塗磨研されていたようで、内面は丹の残りがかなり良いが、外面も僅かに丹が残っている。胎土は精製されており、



第33図　34・35号竪穴住居跡実測図（1／60）

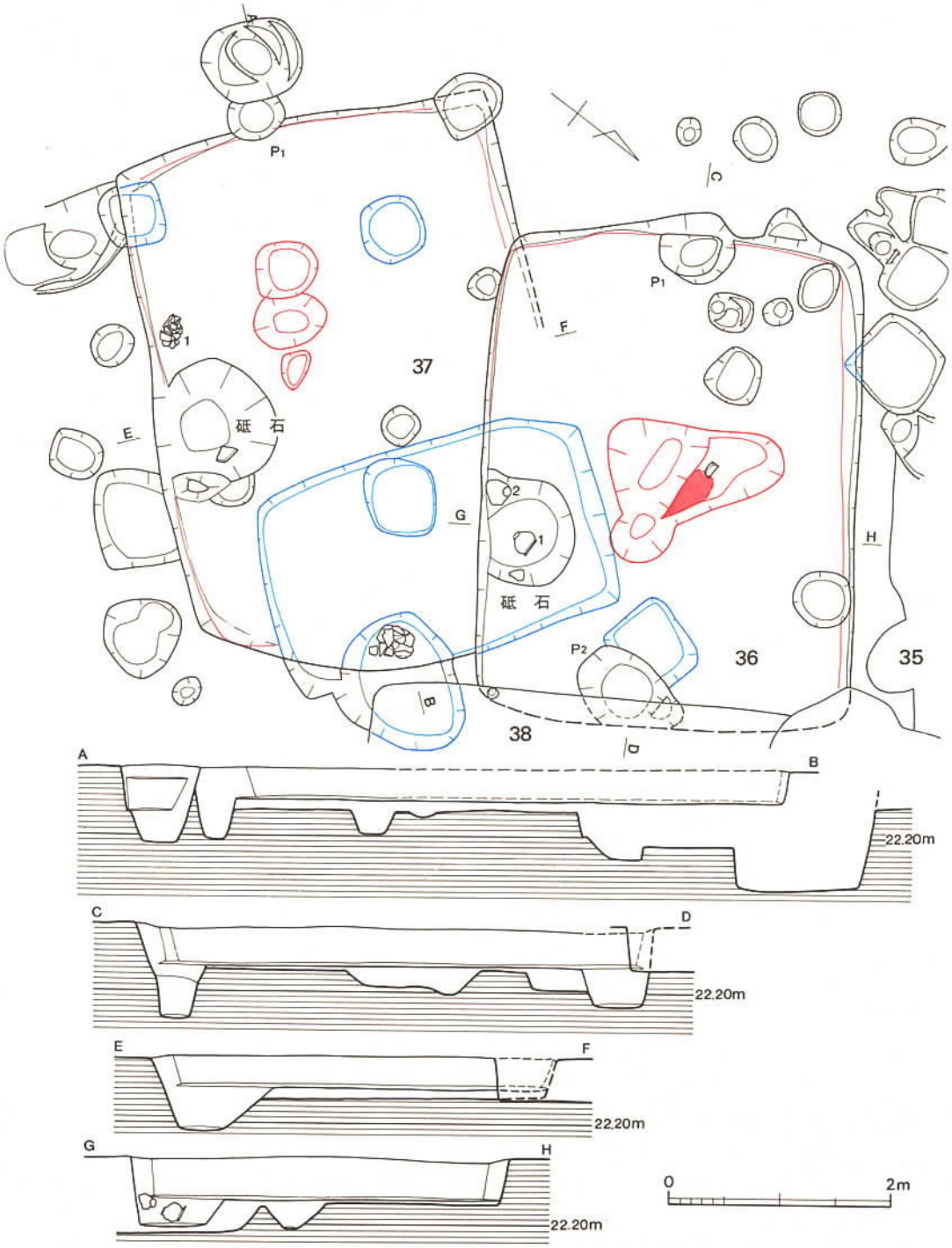
焼成良好で生地は明るい黄褐色を呈する。4は⅓程残った破片からの反転復原図で、口径22cm、器高6.7cm程の鉢である。ハケ目調整の後、外底面はヘラ削りを行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で淡黄褐色を呈し、口縁部付近に黒斑がある。

石製品（図版62・63、第123図－26）　石庖丁の破片が2点出土した。26は灰色で粘板岩質の石材で作られている。図示していない他に1点は貼床下層から出土したものである。小豆色をしている。

35号竪穴住居跡（図版23・24、第33図）

34・38号住居に竪穴部のほとんどが切られる。極めて小型で、隅円の長方形プランを呈する。柱配置は不明である。南東壁の土壙状の遺構を屋内土壙としたが、確信はない。竪穴部の規模から、方形竪穴の可能性を留保しておきたい。

出土遺物　特に図示して説明できるものはない。



第34図　36・37号竪穴住居跡実測図（1／60）

36号竪穴住居跡（図版22～25、第34図）

南の37号住居、１号方形竪穴を切り、東壁を38号住居に切られる。隅円の長方形プランを呈し、竪穴部の短壁は僅かな孤を描く。床面は貼床をしており、南東壁のやや東寄りに、貼床面から屋内土壙を掘り込んでいる。屋内土壙の西辺は南東壁のほぼ中央に位置する。主柱穴は南東・北西の各短壁際に貼床面で検出した。主柱痕は残っておらず、柱は引き抜かれたようである。主柱穴の柱配置から、34号住居と同様に住居の範囲はさらに竪穴部の外に拡がることが考えられる。補助柱については、規則的な配置を示すピットを認定することができず、不明である。

出土遺物　土器と砥石が出土している。ともに屋内土壙への流入・転落品であり、伴なうものではない。

土　器（図版87、第144図）　１はほぼ完形の壺で、口縁部に蓋を留めるため、４孔を穿つ。口径15cm、器高16.9cmを測る。器面は剥離がはげしく、調整痕は内部下半のナデ、外部下半のハケ目調整が残る程度である。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。２は甕の底部で外面にハケ目がよく残る。内面はナデ調整である。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～暗褐色を呈する。

石製品（図版67、第　図－58）　仕上砥に近い砥石で、硬質砂岩製であろう。

37号竪穴住居跡（図版23・24、第34図）

北側36号住居に切られ、北東短壁が１号方形竪穴、20号祭祀土壙を切っており、13号掘立柱建物とも重複している。竪穴部の平面プランは36号住居と酷似し、主柱穴配置も同様のことが考えられる。P_1と対になる主柱穴は遺構の重複が激しい部分であったため検出できなかったが、おそらく、東北短壁にP_1と対になるP_2があったのではなかろうか。P_1は南西短壁の中央ではなく、やや南に寄った位置にあり、それは上屋との関係であろう、また、P_1は竪穴部に接するが外に位置することは重要である。屋内土壙は南東壁際のほぼ中央に設置している。

出土遺物　土器と砥石が出土している。砥石は屋内土壙への流入品であり、土器は１は屋内土壙の西際の床面に潰れた状況で出土し、完形品に接合されるので、本住居に伴なう資料と考えてよかろう。２は流れ込んだ状況で出土しており、本住居に伴なうものではない。

土　器（第144図）　１は口縁を一部欠失するが、口径26cm、器高26cmを測る甕で、底部が異常に大きい。口縁部はヨコナデされ、内面はナデ、外面はハケ目調整し、外底面は擦過痕がある。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。２は通常に見られる甕で、復原口径31.8cm、器高33.8cmを測る。口縁部はヨコナデされ、内外面はハケ目調整される。外底面はナデている。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

石製品（図版67、第126図－51）　砂岩製の完形品で、仕上砥よりもやや粗い。表面に鉄製品の先端部でつけたか、とおもわれるような、刺突痕状のものがある。

38号竪穴住居跡（図版23～24、第35図）

本遺跡最大の30号住居の南東６mの位置にあり、30号住居の主軸に対して90°東に振れている。本住居は30号住居に継ぐ規模であり、竪穴部内外の個別遺構に見るべきものがある。この住居は周囲の遺構（33～36・41号住居、12～15号掘立柱建物、20号祭祀土壙）をすべて切っている。竪穴部の平面プランは隅円長方形を呈し、各壁は僅かに外側に膨らんだ孤を描く。両短壁側に〝L〟字型のベッド状遺構を付設し、北東壁の中央は3.2mの幅でベッドが途切れる。ベッドは土層断面（A－B）によれば、他の住居の覆土・地山・表土等で客土し、その表面を地山の黄灰色砂質土・黄褐色粘質土で貼っている。南西壁のほぼ中央に貼床面から屋内土壙を掘り込んでいる。土壙一部が竪穴部の外に張り出している。規模は上端で長径1.2m、短径1.14m、深さは貼床面から22cmである。床のほぼ中央に炉がある。主柱穴はP_1・P_2の二つで、柱はすでに掘り抜かれていた。検出した主柱穴は当初の規模を保っているのか、掘り抜く時に掘り広げたかは不明だが、ともに径1.5mに及ぶ大きなものである。主柱穴の他に補助柱穴かと思われるピットが竪穴部外、床面、貼床下層に30個（P_3～P_{32}）存在する。これらの全てが本住居の建築時、使用時に関係していたとは言えないが、以下のように考える。

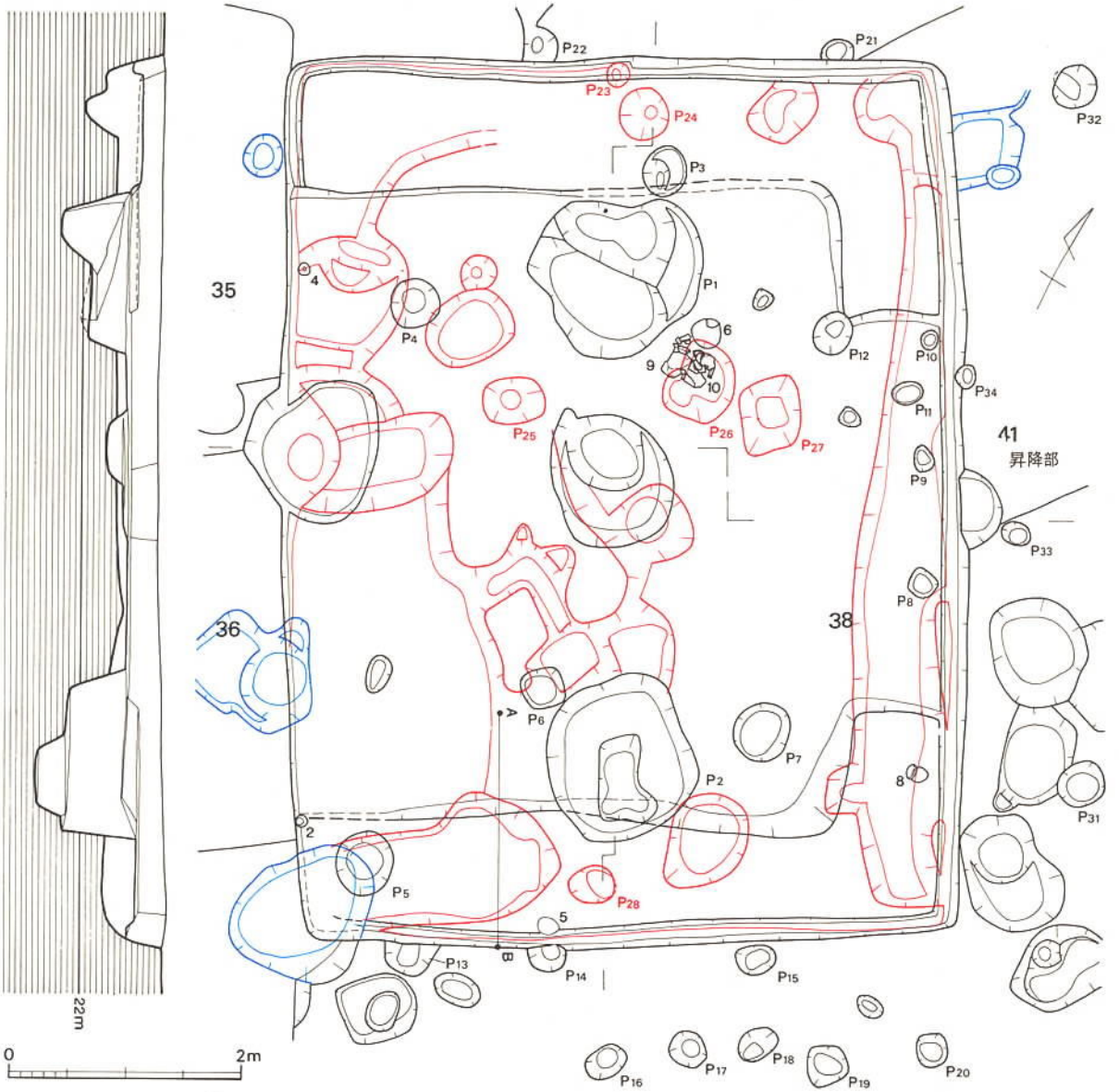
① 北東壁のベッドが途切れた中央部分にある径65cm程のピット状の遺構を竪穴部への昇降施設ではないか、と想定するが、ここに小ピット（P_8～P_{11}・P_{33}・P_{34}）が規則的に並ぶ。なかでもP_8～P_{10}は壁小溝に沿って一直線に並び、深さも15cm前後で一定している。P_{33}とP_8・P_9は二等辺三角形の頂点に位置するような配置状況で、この二等辺三角形の中に昇降施設ではないかと想定する遺構が存在する。これを昇降施設と考えることが許されるならば、これらの小ピットのうちのいくつかは、昇降施設に伴なうものと考えられる。

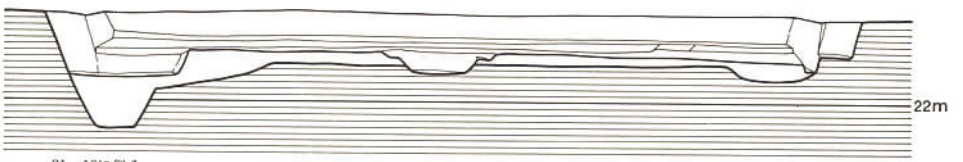
② P_{24}・P_{28}はベッド下層で検出したが、僅かにずれるものの住居中軸線にほぼのっており、主柱を立てて上屋を造る時の補助柱を立てたピットではなかろうか。

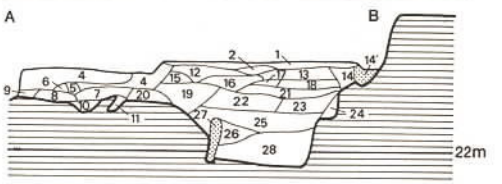
③ P_{25}・P_{26}も貼床下層で検出したが、上屋を造る時の補助柱を立てたピットではないかと考える。

④ P_{14}とP_{22}、P_{15}とP_{21}がほぼ対応する位置にあり、竪穴部壁際になんらかの施設があったのではないかと想定する。

⑤ P_{16}～P_{20}は南東壁にほぼ沿って並び、壁との距離は約１mである。またP_{16}は住居の中軸線にほぼ乗り、P_{20}は北東壁の延長線上にほぼ乗るように位置し、意識的にこのように配置されたと思われる。よって、この柱列は本住居に伴なうと考える。このような柱列は本住居ではこの部分だけに存在し、竪







1．黄灰砂質、黄灰粘質、褐色粘質土混合
2．褐色粘土層
3．暗黄灰褐色土、褐色粘土粒混入
4．暗灰褐色土に褐色粘土、黒色土ブロック混入
5．褐色粘土ブロック
6．暗茶褐色土
7．黄灰砂、褐色粘土、黒色土ブロック混合
8．暗灰黒色土に褐色粘土、黄灰砂混入
9．褐色砂質土
10．暗黄灰砂質土（黒色土粒混入）
11．9に似る
12．4に近いが砂粒多い
13．4、12に近い遺物を含む
14．暗褐色土に褐色粘土粒を混入
15．暗黄灰色砂
16．15に似る
17．灰褐色土に褐色粘土粒、黄灰砂を混入
18．16に似る
19．黒色、褐色黄褐色、黄灰色土ブロック混合
20．褐色、黄褐色、黄灰色砂質土混合
21．16に似る
22．19に似る
23．黄褐色粘土ブロック層
24．暗灰褐土、暗灰黄色粘土ブロック混入
25．19に似るがブロックが少さい
26．25より若干暗い
27．灰褐色土
28．地山の砂質土に黒色土粒、褐色粘土粒をわずかに含む

0　1m

第35図　38号竪穴住居跡実測図（1／60、1／40）

穴部の壁との関係から、長方形の区画を想定でき、78号住居のような〝張り出し部〟の存在を推測する。

⑥ 北東壁から1m程離れた位置にあるP_{29}・P_{30}は、壁との距離がベッドの幅とほぼ一致し、径・深さも差がないので本住居に関係するピットであろうと推測する。他の壁の外にはこのようなピットは検出していない。

以上、推測の域を出ないが、竪穴住居の竪穴部と竪穴部外のピットから、一定程度の規則性を持ちそうなピットを抽出して、補助柱穴の存在と機能について考えたが、遺構の激しい切り合いや調査のまずさから、補助柱穴の存在と認識できなかったり、検出面の認識に間違いがあることも考えられるが、調査結果から、考えられることは上述のようなことである。

また、南西壁とベッド状遺構の床面側を除いた壁際に沿って壁小溝を検出した。壁小溝は本遺跡では、貼床面では明瞭に確認できるわけではないが、貼床面をすこし削って下げた面ではっきりと検出される。壁小溝を検出できなかった部分に、この種遺構がなかったとは言い切れず、掘り間違えた可能性もある。土層断面図（A－B）では、杭・板等を打ち込んだ痕跡をみとめることはできないが、上述の遺構の検出状況から、さらに他遺跡の例から排水溝の機能は排除してよかろう。

出土遺物 土器・土製品・石製品が出土している。土器のうち、3は南東側ベッド上で覆土を5㎝程噛んで浮いた状況で検出し、同じベッドの壁際で検出した2は住居を廃棄した直後に投棄したか落ち込んだようで同じく覆土を1㎝程噛み、壁に持たれかかった状況であった。4も2と同じ状況で検出した。これらの3個体は本住居に伴なわない。6・9・10はP_1は横の床面上で潰れた状況で検出した。本住居に直接伴なう土器は6・9・10の3個体で、他に図示した土器も流入・投棄品である。土製品として、紡錘車が覆土中から出土している。石器は縄文時代の凹石であり、一括して後述する。

土　器（図版87・88、第145図）　1～7は鉢で、4は蓋の可能性がある。1はデズクネ風の作りで口縁の一部を欠くが、口径7.5㎝、器高3㎝を測る。2は口径10.1㎝、器高3.3㎝の小型の浅鉢である。外面はヘラ削り、内面はヨコナデ調整を行う。3は口径10.2㎝、器高4.7㎝で内外面ともヘラ磨きを行う。5は口径16.3㎝、器高7.1㎝を測る。口縁部の外面にハケ目が残るが、内面はナデ、外面はナデ・ヘラ削りにより消えている。口縁部は強いヨコナデのためくぼんでいる。6は口径20.9㎝、器高8.7㎝の完形品である。内面はハケ目をナデ消すが、外面は体部中位にハケ目が残るが、口縁部はヨコナデにより底部付近はヘラ削りとその後のナデにより、ハケ目を消している。7は口縁部を一部欠くが、口径13.3㎝、器高10㎝を測る。外面の一部にハケ目が残るが、他の部分はヨコナデ・ナデ調整により消している。これらの鉢は胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、6は外底面に黒斑があり、7は内外面に煤が付着している。4は鉢として図示したが、蓋かもしれない。口径10.5㎝、器高5.8㎝である。外

面にヘラ磨き・ハケ目が残り、内面は口縁部・底部にハケ目が残るが他の部分はナデ消している。胎土に砂粒をすこし含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、黒斑がある。8は脚台付きの鉢で、口縁部を欠失する。推定口径17cm、器高14cm程であろう。ハケ目が目立ち、脚裾端部にまでハケ目調整を行う。鉢部内面は底部を残してハケ目をナデ消している。胎土に砂粒はやや多めで、焼成良好で黄褐色を呈し、黒ずんでいる。9は底部を欠くが口径11cm、器高20cm、ほどに復原される。口縁部の内外面と外面の体部中位までハケ目が残り、それ以外の内面はナデ、外面は藁かヘラ状器具による擦過で消している。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～暗灰黄色を呈し、煤が付着して黒光りする。10は口径21.3cm、器高26.5cmのほぼ完形の甕である。内外面にハケ目が目立ち、底部付近はナデ消している。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶褐色を呈するが、外面は全面に煤が付着し、黒い。

土製品（図版51、第116図－15）　径3.7cm、厚さ1.2cm程の紡錘車である。中央の孔は径6㎜である。胎土に石英粒が目立ち、焼成良好で淡茶灰色を呈する。

39号竪穴住居跡（図版22、第36図）

竪穴部の壁が完全に削平されており、主柱穴（P_1～P_4）とカマドの痕跡が30号住居の壁近くに残っていた。柱配置は整然とし、正方形の各隅に主柱穴が位置するように配置している。詳細は不明である。

40号竪穴住居跡（図版22・24、第36図）

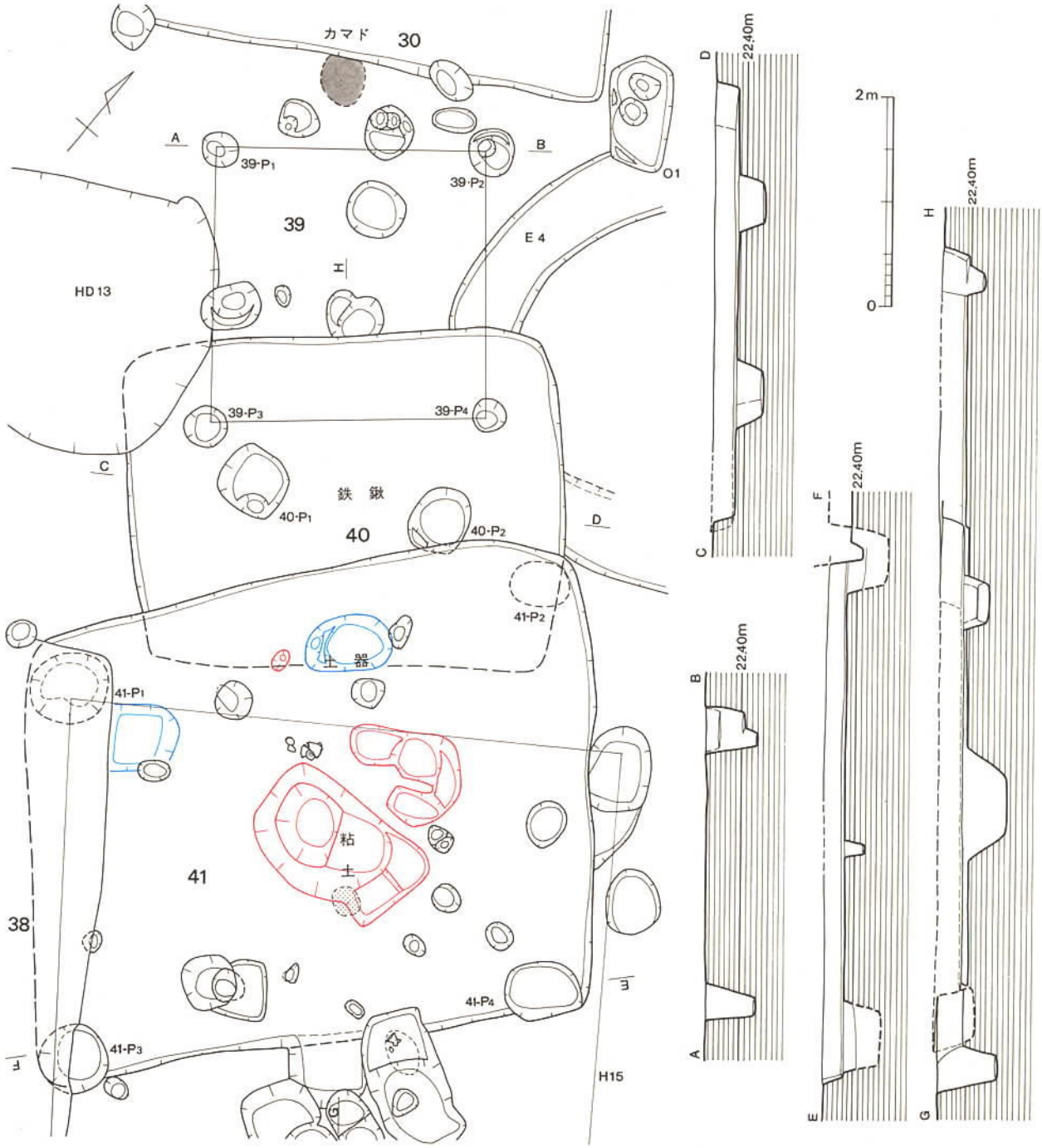
西隅を13号廃棄土壙に、南東壁41号住居に切られる。土の見分け方がむつかしく、不明瞭な部分を多く残した。主柱穴は、竪穴部長壁と平行しないが、P_1・P_2であろう。このズレは住居の拡がりを竪穴部の外まで考慮すれば、さして問題ではなかろう。南東壁中央際に屋内土壙を設置する。

41号竪穴住居跡（図版22・24、第36図）

南西壁を38号住居に切られ、南東壁中央付近はピットに撹乱される。平面プランは不整平行四辺形を呈する。床はあまり明確ではないが貼床をしている。主柱穴は明瞭でないが、ひとつの可能性として、竪穴部四隅のP_1～P_4（P_3は検出していない）を想定するが、P_3は15号掘立柱建物の柱穴にも使われるので、今ひとつ確信がもてない。この住居についても不明な部分を多く残した。

出土遺物　僅かな土器、鉄製品、石製品が出土した。土器は図示していない。すべて、本住居に伴なう状況では検出していない。

鉄製品（図版54・55、第117図－6、第119図－43）



第36図　39～41号竪穴住居跡実測図（1／60）

6は茎尻を欠くが大型の鉄鏃である。現存長10.4cm、身部最大幅3.2cmを測る。鉄銹のため不明な部分も多いが、敢えて大胆に推定図示した。43は鉄製穂摘具の破片で、木質は残らない。現存する寸法は、図の横幅3.5cm、縦幅2.3cmで素材は薄い鉄板である。鉄製品すら捨てたようである。

石製品（図版60、第122図－1）　細身の石鏃で長さ4.1cm、幅1.6cmの完形品である。石材は緑泥片岩である。

42号竪穴住居跡（第37図）

38号住居の東に位置する。43・44号住居に大きく切られ、多数のピットと重複するため、遺構検出が困難であった。調査時点で時点相互の切り合い関係を明確に把握できず、不明な部分を多く残した。図示した43・44号住居との切り合い関係は遺構検出後に検討したものだが、自信はない。南壁にベッド状遺構を検出したが、北壁側には残っていなかった。主柱穴は不明瞭である。

43号竪穴住居跡（第37図）

42・44号住居や多数のピットと重複するため、遺構検出が困難であった。調査時点で住居相互の切り合い関係を明確に把握できず、不明な部分を多く残した。図示した切り合い関係は上述のとうりである。多数のピットがあるが、主柱穴は床面下で検出したP_1・P_2であろうと考える。また、ベッド状遺構の痕跡を北東壁で検出したが南西壁側では検出しきれなかった。

出土遺物　土器・石製品が出土している。石製品は縄文時代のもので後述する。土器は、伴なう状況で出土したものはなく、第37図の出土状態図のものも、すべて、床面から浮いている。

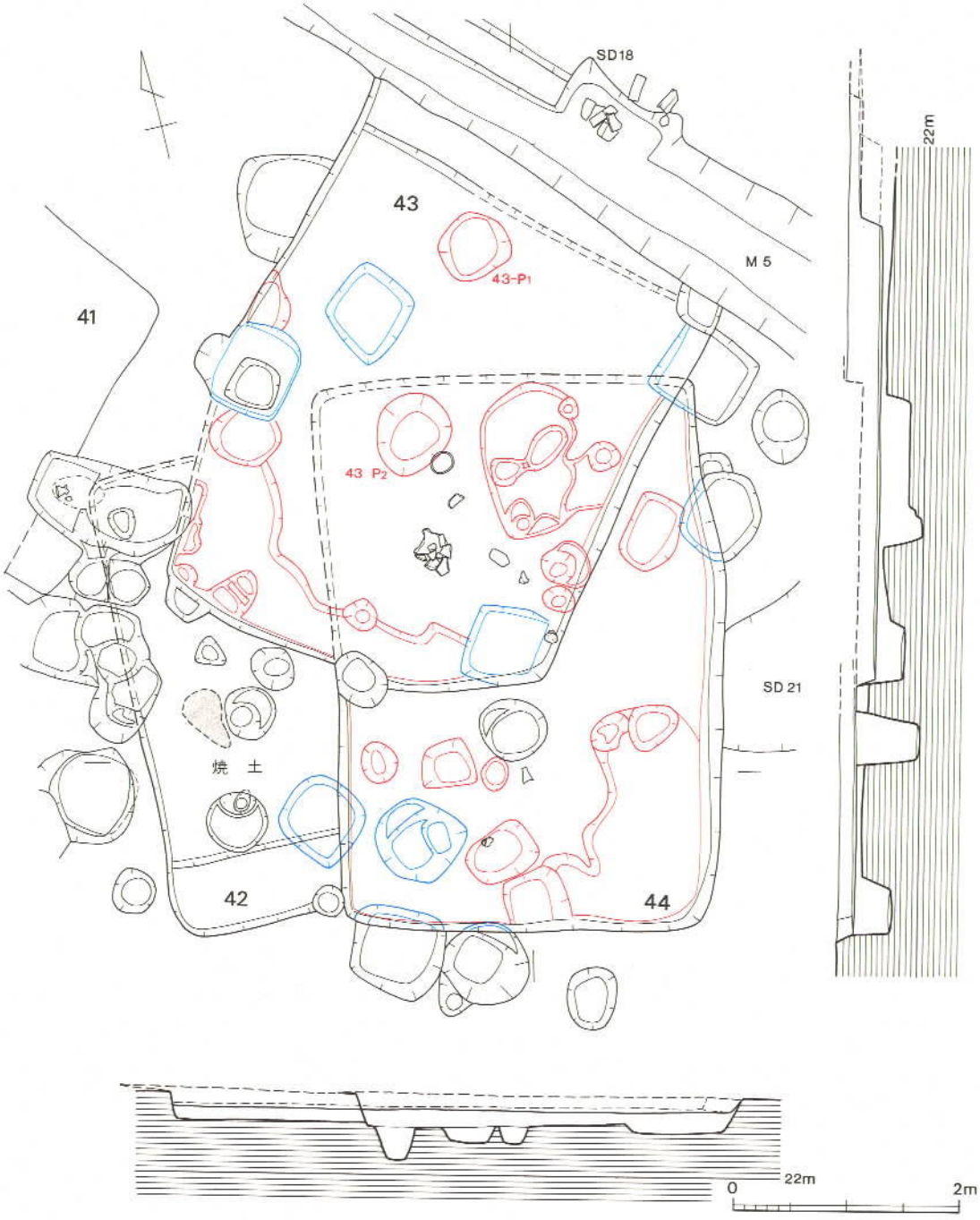
土　器（第145図）　口辺部のほとんどを欠く鉢で、テズクネ風である。口径8cm、器高2.6cmである。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黒色を呈する。

44号竪穴住居跡（第37図）

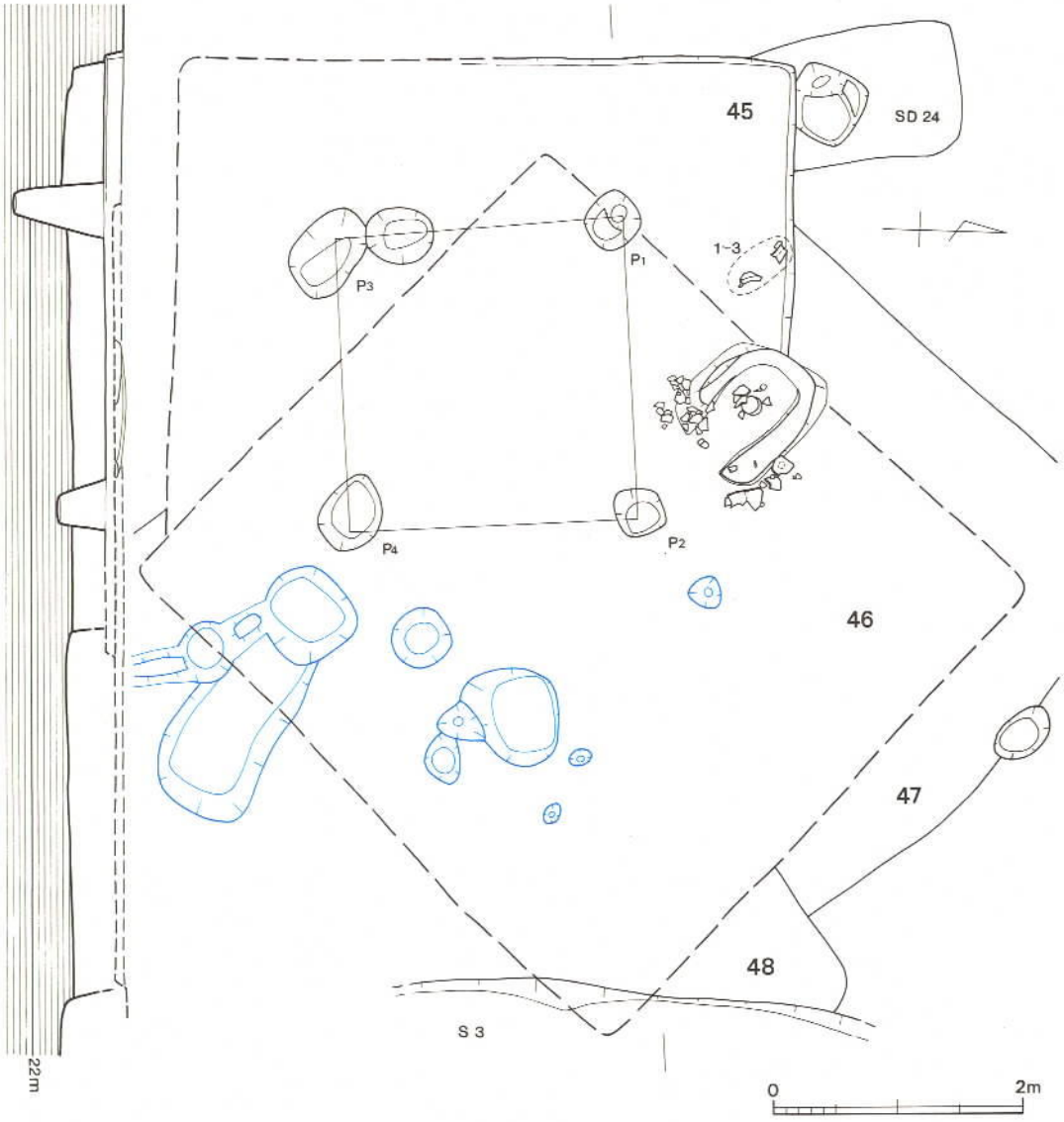
42・43号住居や多数のピットと重複するため、遺構検出が困難であった。調査時点で住居相互の切り合い関係を明確に把握できず、不明な部分を多く残した。図示した切り合い関係は上述のとうりである。多数のピットがあるが、主柱穴配置は不明である。

出土遺物　石製品が2点、土器が若干量出土しているが、43号住居と同様で本住居には伴なわない。なお、整理期間の関係で土器は図示しきれなかった。

石製品（図版51、第116図－17、第125図－45）　17は紡錘車で二つに割れており、半分は本住居から、他の半分は21号祭祀土壙から出土し、接合して完形品になった。径5.4～5.6cm、厚さは穿孔部で5mm、孔径7mmを測る。石材は雲母片岩である。45は砂岩製の仕上砥である。使い込まれており、側面に刃部を研いだ跡がある。



第37図　42～44号竪穴住居跡実測図（1／60）



第38図　45・46号竪穴住居跡実測図（1／60）

45号竪穴住居跡（図版26、第38図）

46号住居、14号廃棄土壙等に大きく切られ、北西隅だけが残る。他の住居の例から判断すれば、カマドは北壁に付設されていたと思われ、46号住居に破壊されたものであろう。主柱穴P_1～P_4である。貼床面で検出し、主柱痕は当然残っていなかった。

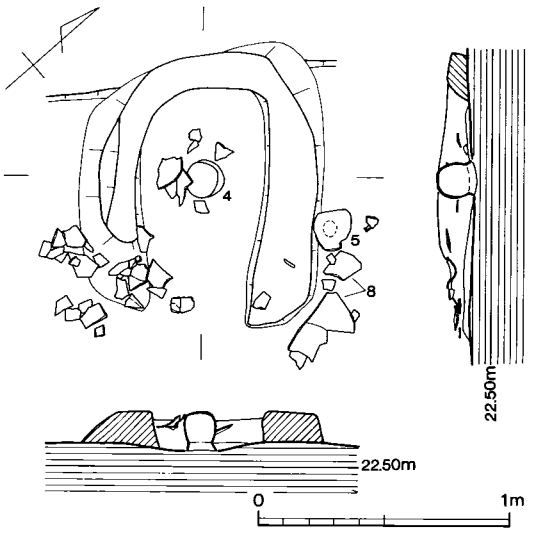
出土遺物　住居がすこし埋った後、北壁から投棄・流入した状態で土器が出土している。また、貼床下層で石庖丁が出土した。

土　器（図版88、第145図）　1は須恵器の坏蓋で、口径12.2cm、器高3.9cmを測る。天井部外面は時計廻りのヘラ削りをし、同内面はナデ、他の部分はヨコナデを行っている胎土に細砂粒を含み、焼成良好で外面は灰黒色、内面は黄灰色を呈する。2は土師器の坏身で、口径11.4cm、器高4.3cmを測る。口辺部の内外面はヨコナデ、内底面はナデ調整を行い、外面は丁寧に静止ヘラ削りをしている。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で明黄茶褐色を呈し、外面は黒漆を塗ったと思われ、黒色を呈する。3は小形の甕である。口辺部の破片があるが、接合しないので推定復原図である。口径12cm、器高9cm強に復原される。カマドの支脚に使用され、二次加熱のため、器面が変色し、煤が付着している。

石製品（図版62、第123図－23）　横幅9cm、縦幅5.1cmの破片である。小豆色である。

46号竪穴住居跡（図版26、第38・39図）

掘り方を間違えたため、竪穴部の壁を飛ばしてしまった。貼床面も完全に検出していない。主柱穴は地山面まで掘り下げたが、はっきりとせず、深さは地山に及んでいないようである。よって、主柱穴の配置は図化できない。北西壁付近にカマドを付設している。支脚に小型の甕を倒立して使い、その中心は壁推定線から40cm未満の部分に位置する。袖部は住居の覆土と見分けるのがむつかしい、暗褐色土系の土を使って造っている。右袖側には甑と支脚に使った小型の甕があり、左袖側とカマド内には甑の小破片が散乱する。



第39図　46号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）

出土遺物　カマド周辺や覆土中から土器が出土している。支脚は確実に本住居に伴ない、カマド周辺の土器も支脚用の甕と甑であり、伴なうだろう。

土　器（図版88・89、第145・146図）　1・2は須恵器を擬した土師器の坏セットである。1は口径13.3cm、器高4.2cmに、2も各々、12.8cm、3.6cmに復原される。口縁部を除いた外面は静止ヘラ削りを行い、口縁部内外面はヨコナデ、他はナデ調整を行っている。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で明黄茶褐色を呈するが、内外面に黒漆を塗っていたようである。3も須恵器を擬した土師器の脚台付鉢である。図上で、口径12.6cm、器高16.3cmに復原される。器面の風化が著しく、調整は不明である。胎土に砂粒をすこし含み、焼成良好で明黄茶褐色を呈する。4は支脚に使用された甕で、使用時の状態で図示した。口径13.1cm、器高14.9cmの完形品である。口辺部付近はナデ消すが、ハケ目がよく残り、内面はヘラ削りを行う。内面には黄褐色粘土が付着しており、支脚として固定し、割れないように中に粘土を詰めていたようである。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好すで明茶褐色を呈するが、煤が多量に付着する。5も支脚として使用された甕である。内面はヘラ削りされるが、外面は風化して調整痕は残らない。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で明茶褐色を呈するが、煤が多量に付着する。6は口径18cmを測る甕で、胴部下半を欠く。口縁部の内外面はヨコナデし、頸部以下の内面はヘラ削り、外面はハケメ調整を行う。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黄褐色を呈する。7は甑である。内面はヘラ削り、外面はハケ目調整を行う。胎土に砂粒を多量に含み、九州で明茶褐色を呈する。8は大型の甑で、口径は40.2cmに復原される。風化し、外面のハケ目が部分的に残る程度である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。

47号竪穴住居跡（図版27、第40図）

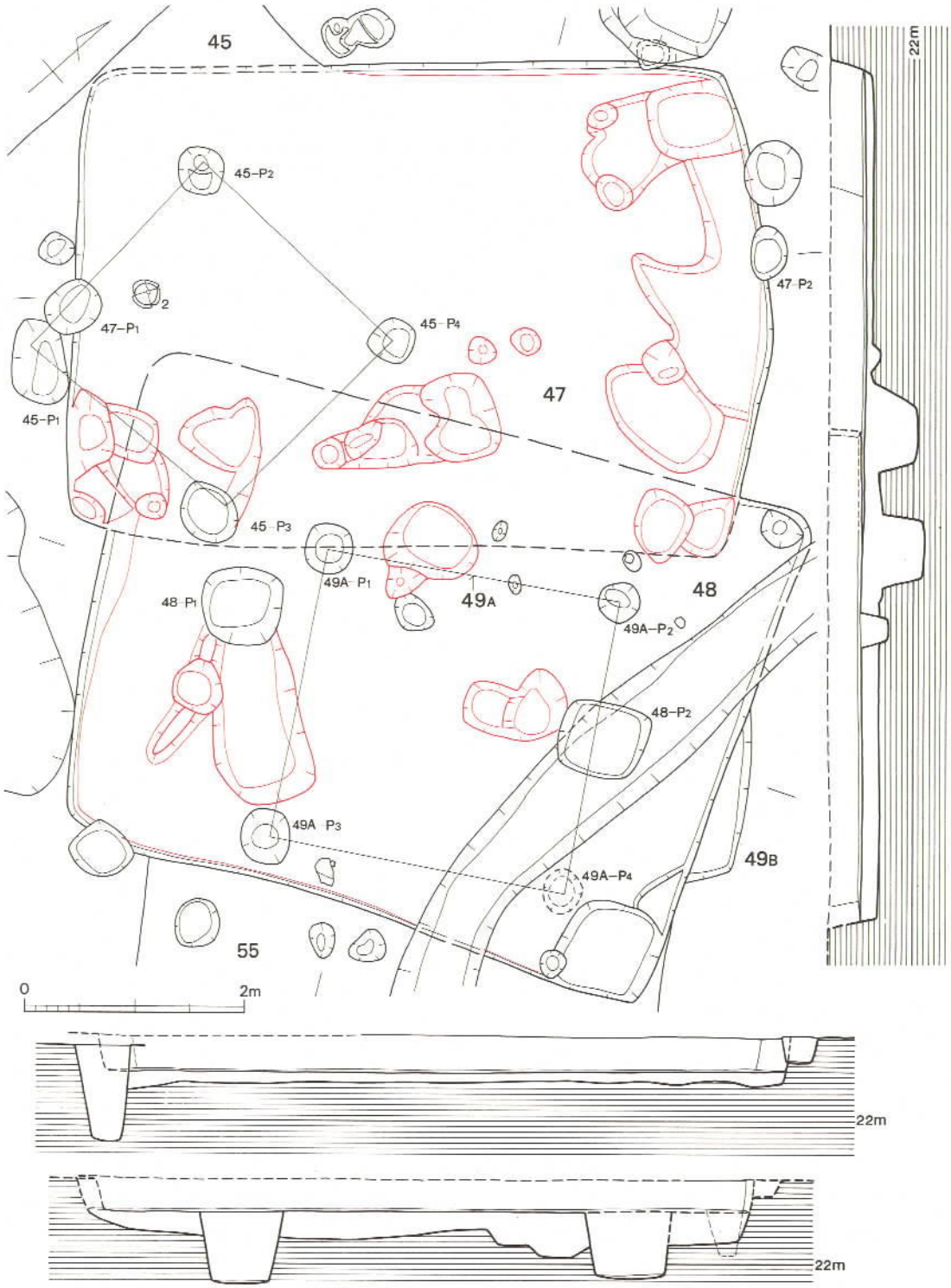
周囲の住居に大きく切られているため、不明な部分が多い。竪穴部の平面プランは隅円の長方形で、北東短壁は外側に膨らんで弧を描く。主柱穴はP_1・P_2であろう、と考える。両短壁のベッド状遺構存否については確認できなかった。屋内土壙についても同様である。

出土遺物　土器、土製品、石製品が出土している。土器のうち、1は覆土下層から、2は床面に潰れた状況で出土した。また、投弾、石庖丁、凹石が出土しているが別に後述する。

土　器（図版89、第146図）　1は半分程遺存する鉢で、口径17.5cm、器高10cm程に復原される。風化が著しいが内面には指圧痕、ヘラ痕が残る。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で灰黄褐色を呈し、外面は二次加熱のため黒変する。2は脚部をとりはずした丹塗磨研の高坏で、口径24.1cm、現存高6.8cmを測る。風化しており、調整痕は外面の下部に僅かに残るだけである。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で生地は黄褐色を呈する。

土製品（図版52）　小型の投弾で、一部を欠く。表面は風化し、黒褐色を呈する。

石製品（図版63）　小破片の石庖丁で、石材は片岩で、灰黄色を呈している。



第40図　47・49A・B号竪穴住居跡実測図（1／60）

48号竪穴住居跡（図版27、第40図）

住居が幾重にも重複し、３号周溝墓にも切られているため、詳細は明瞭ではない。主柱穴はP_1・P_2であろうと考える。床は貼床していたが、ベッド状遺構は検出しきれなかった。

出土遺物　覆土、貼床下層から、土器・鉄製品・石製品が出土している。いずれも、、本住居に伴なうものではない。

土　器（図版89、第147図）　１～３は鉢である。１はテズクネ風の作りで、口径11.2cm、器高5.1cmを測る。口縁部付近はヨコナデ、他の部分はナデている。２は口径11.8cm、器高5.2cmを測る。ハケ目が残り、外底面はヘラ削りするが、器面が剥落して一部にその痕跡をとどめる。３は大型の鉢で、口径46.8cmに復原され、現存高28cmを測る。ハケ目調整後、体部に一条の突帯を巡らし、刻目を入れる。外面はタタキ目の上からハケ目調整し、内面はハケ目調整の後、頸部をヨコナデする。３個体とも胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈し黒斑がある。

鉄製品（図版56、第119図版－38）　鉋の茎部分の破片である。断面は逆U字形を呈し、幅1.4cm、現存長2.4cm、厚さ１mm弱を測る。裏面に柄の木質が僅かに付着している。

石製品（図版64・66、第124図－34・41、第126図－55）　34は仕上砥で四面とも使用している。石材は硬質の砂岩である。41も仕上砥の破片で、表面に刃部を研磨した跡がある。石材は硬質の砂岩である。55は軟質砂岩製の仕上砥で表面に刃部を研磨した跡がある。四面とも使用している。

49－Ａ号竪穴住居跡（図版27、第40図）

４本柱（P_1～P_4、ただしP_4は検出していない）の竪穴住居であるが、48号住居の調査の過程で気ずかず、竪穴部を検出していない。重複する他の住居の外側までは竪穴部が延びることはなく、前代の住居の埋土の範囲内に新たに掘り込んだものである。カマドの痕跡はなかったし、古墳時代後期の土器も出土していないので、他のカマドを有しない４本柱の竪穴住居と同様なものであろう。

49－Ｂ号竪穴住居跡（図版27、第40図）

48号住居の北東壁に僅かに竪穴部を残している。大きく切られており、主柱穴を含めて詳細は不明である。

50号竪穴住居跡（付図１）

51・52号住居、３号土壙、３号周溝墓、溝６に大きく切られ、主柱穴を含めて詳細は不明である。

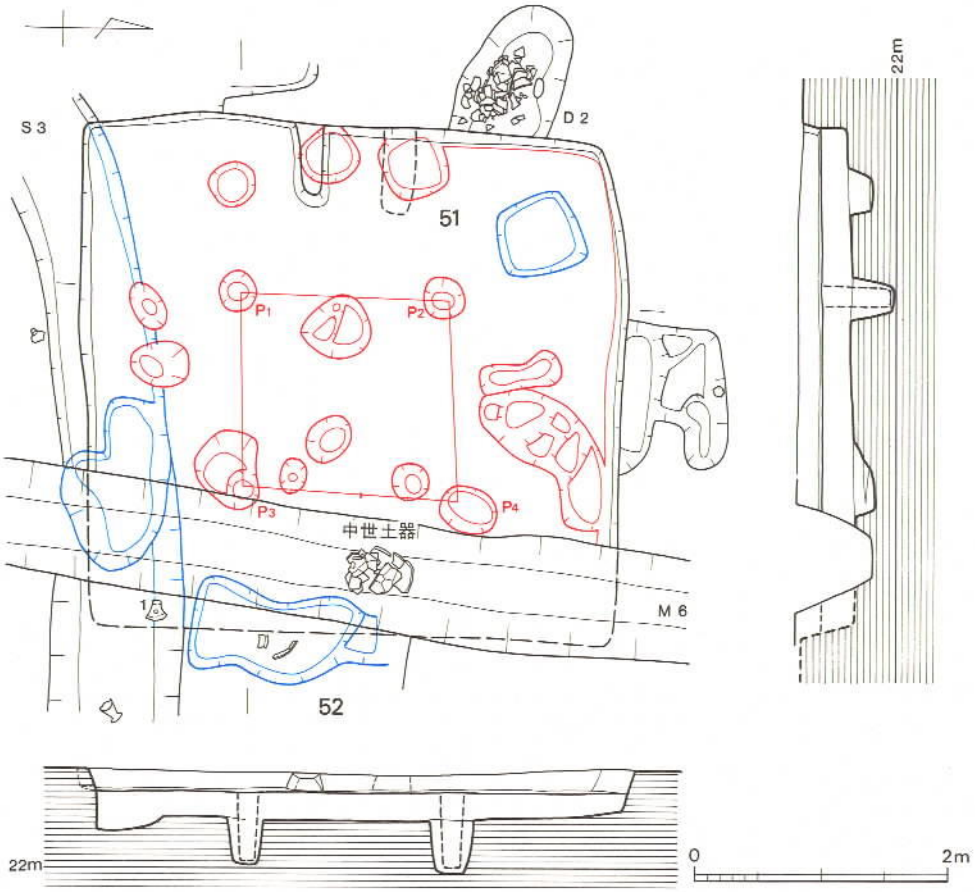
出土遺物　土器・土製品が床面、貼床下層から出土している。土器のうち、3は床面から、1・2は貼床下層から出土した。また、投弾も貼床下層から出土した。

土　器（図版、第図）　1は口辺部の¼を欠く鉢で、口径15.6cm、器高8cmを測る。外面はハケ目調整を行い、口辺部はヨコナデ、内面下半はナデ調整を行う。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黄褐色を呈する。2は¼程残存する丹塗磨研の高坏の坏部で、口径32cmに復原される。3は⅓程欠く丹塗磨研の高坏の脚部で、現存高15.6cmを測る。ともに、胎土は精選され、焼成で生地は黄褐色を呈するが、3は煤が付着して黒光りする。

土製品（図版）　小型の投弾で、両端部が摩擦して丸くなっている。

51号竪穴住居跡（図版26、第41図）

本集落でも最も新しい住居で、中世に完全に埋没した溝6には切られるが、周囲の遺構を切



第41図　51号竪穴住居跡実測図（1／60）

っている。竪穴部は略正方形を呈し、西壁中央にカマドを付設する。カマドは掘り方を間違え、右袖部を飛ばしてしまった。主柱穴はP_1～P_4で4本である。貼床はしっかりしたものではなく、床面下層の埋め土の上に薄く白色の砂質土を敷いた程度であった。よって、主柱痕は平面的に確認しずらく、引き抜かれたものと思って調査を進めたが、実は残っており、主柱痕は復原した図である。竪穴部の各壁は真東・南・北にほぼ合致する。

出土遺物　須恵器・鉄製品が出土し、東壁を切る溝6の最上層から中世の土器が出土している。

土　器(図版89、第147図)　1は坏蓋で、⅓程欠くが口径15.2cm、器高2.3cmを測る。天井部外面は逆時計廻りのヘラ削りを行い、同内面はナデ、他の部分はヨコナデ調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で暗青灰色～黒色を呈する。

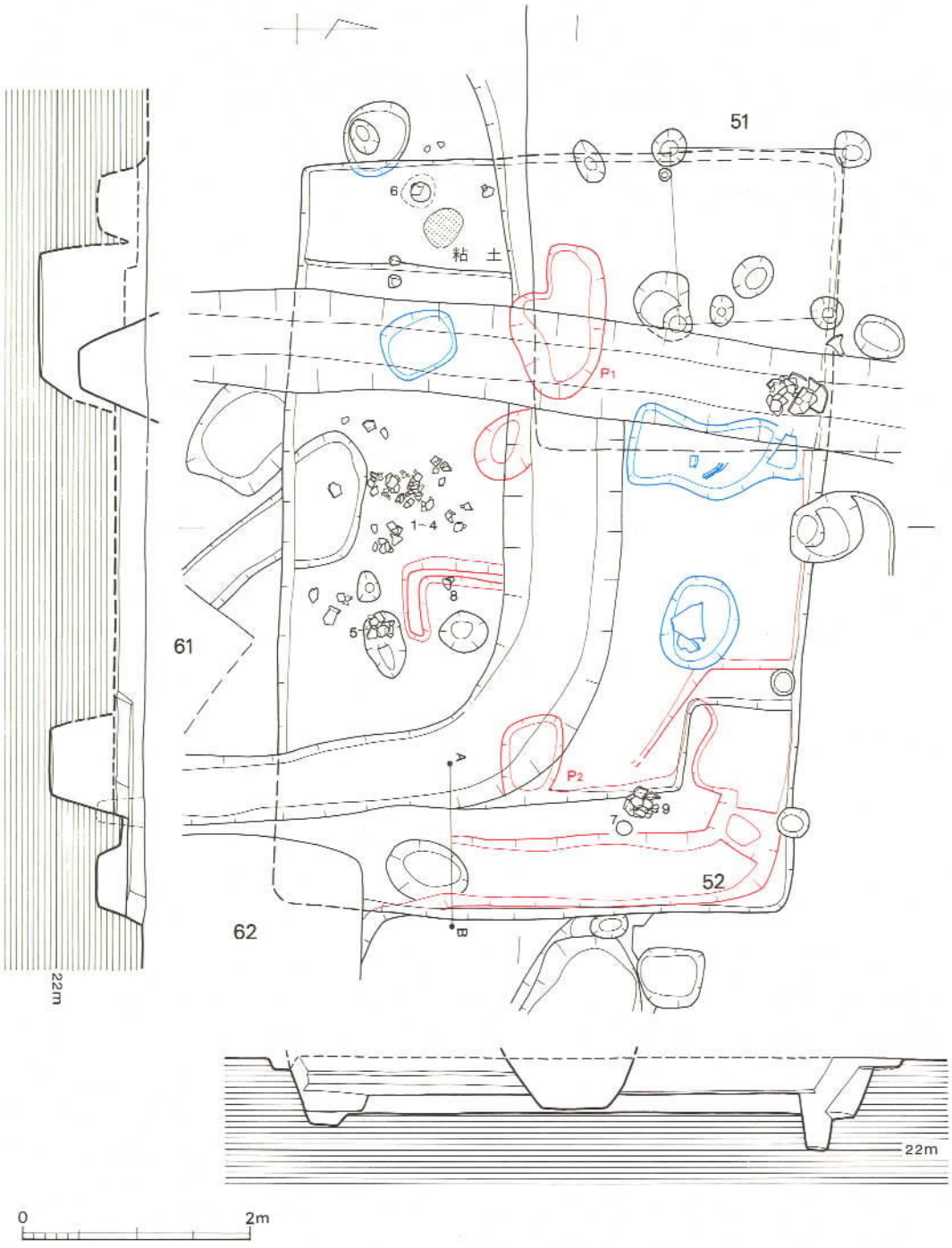
鉄製品(図版54、第117図－11)　全長6cmの細身の鉄鏃である。

52号竪穴住居跡(図版25～27、第42図)

51・62号住居、3号周溝墓、溝6に切られ、50・61号住居、22・23祭　土壙を切っている。竪穴部は隅円の略長方形プランで、周壁は真東・西・南・北の方位とほぼ一致する。東西の両短壁に〝L〟字型のベッド状遺構を付設する。床面は貼床を行い、南壁中央に貼床面から屋内土壙を掘り込む。主柱穴はP_1・P_2であるが、3号周溝墓に切られているため主柱痕については不明である。竪穴部内の付属遺構のあり方は38号住居に酷似する。ベッド状遺構は図示した土層断面A－Bによれば、幅85cmのベッドの壁側の地山を、幅60cm、深さ20～25cm程の溝状に掘って、主柱穴側に幅25cm程の地山を掘り残して土堤状にし、掘った部分に地山や暗褐色土等を客土し、その後、ベッドの表面に地山の粘質土を貼っている。上記の土堤状の部分は客土した土砂が床面に流出しないよう、土留めの機能を果たしている。他の住居のベッド状遺構もおおむね、このような造り方をしているものが多い。

出土遺物　土器・鉄製品・石製品が出土している。図示した土器はベッド上面と屋内土壙周辺の貼床面からの出土である。屋内土壙周辺の土器は5を除いて、置かれていたものが潰れた状況ではなく、破片がもとまりなく散乱しており、住居の廃棄直後に無造作に投げ込んだような状況である。よって、1～4・8は本住居の廃棄時に近い時期の土器と思われる。5～7・9は本住居に伴なう可能性の高い土器である。鉄製品・石製品は覆土中や貼床下層の出土品である。なお、石製品のうち、縄文時代の偏平打製石斧は別に後述する。

土　器(図版89・90、第147・148図)　1～7は鉢で大きさ、形態にバラエティがある。1は1／4程欠くが、口径13.1cm、器高5.5cmを測る。口縁部内面に僅かにハケ目が残るほかは、ナデ消している。2は口縁の一部を欠くが略完形品で、口径14.2cm、器高4.4cmを測る。外底面はヘラ削りされ、内底年は強いナデにより、器肉が極端に薄くなる。3も完形品で、口径12cm、



第42図　52号竪穴住居跡実測図（1／60）

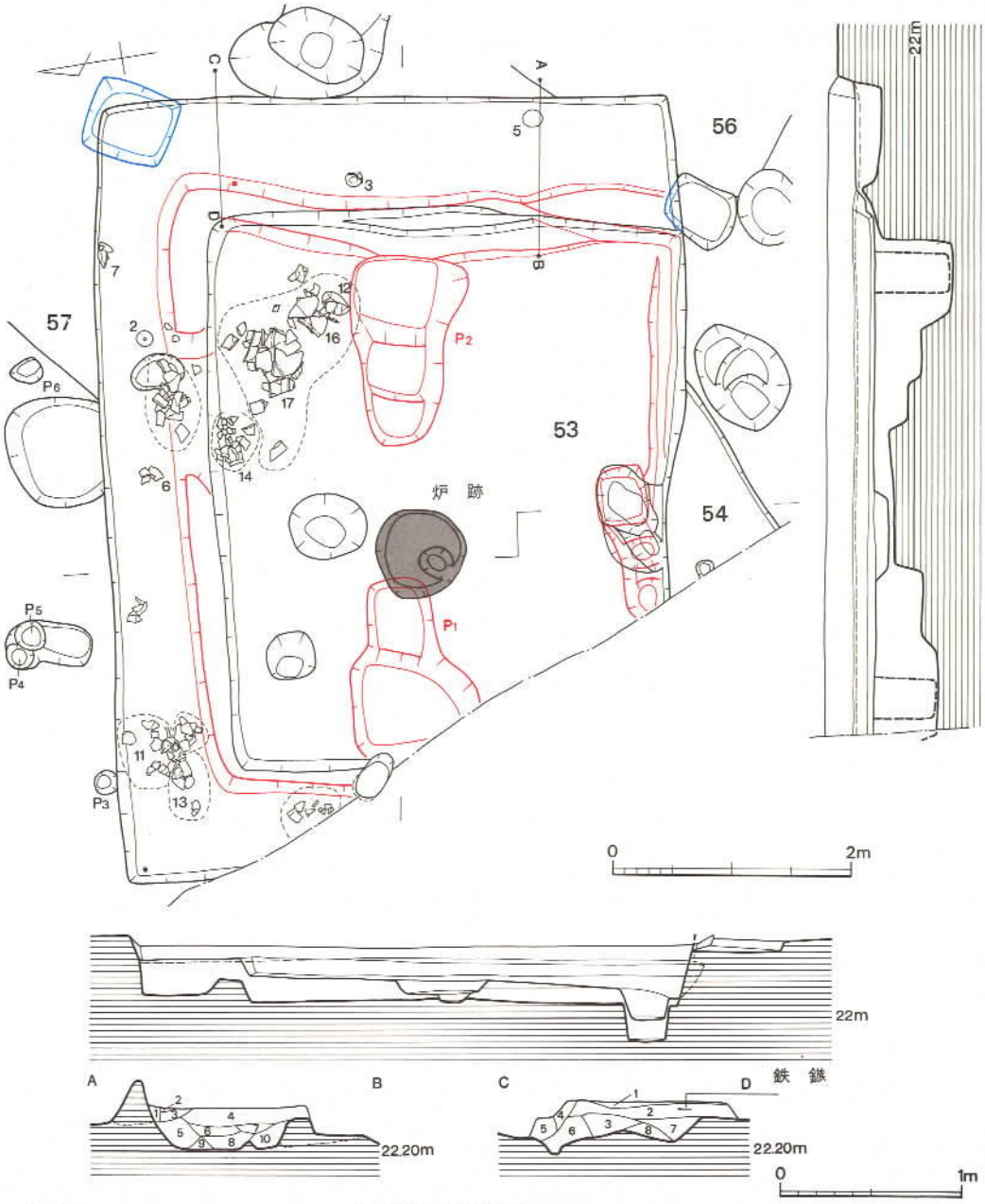
器高4.7cmを測る。外面の下半にハケ目が残るが、他の部分はナデ消している。4は底部をすこし欠くが口径12cm、器高5.5cmを測る。口縁端部は外側に僅かに折り曲げる。口縁部内側にハケ目を残すが、他の部分はナデ消している。5は½ほど欠くが、口径22.5cm、器高11.5cmに復原される。内面に粗いハケ目が残り、上半部にタタキ目が残り、下半部はヘラ削りを行っている。6は極く一部を欠くが、口径17.7cm、器高7.6cmを測る。内外面にハケ目が残り、外面下半は部分的にヘラ削りを行う。7は完形品で、他の鉢より深めである。口縁部の内面にはハケ目が残り、他の部分はナデ消している。これら7個体の鉢は、胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好黄褐色を呈し、2・5を除いて黒斑がある。8は脚台付鉢で、口縁部は僅かしか残らない。復原口径20cm弱、現存高11cmである。口縁部の内面と鉢部の底部付近にハケ目が残っている。外面はタタキの後、ナデている。口縁部付近に黒斑がある。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で、黄褐色を呈する。9は略完形の甕で、口径17.8cm、器高23.5cmを測る。内外面にハケ目がよく残り、外面にはハケ目に下にタタキ目が僅かに残る。底部外面には擦過痕が観察される。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈するが、体部下半に煤が付着し、黒色を呈す。

鉄製品（図版57、第118図－31）　西側ベッド南部の直上から出土した鍬先の破片である。どうしようもなく破損している。住居廃棄直後に捨てられたものである。

石製品（図版62・64、第123図－19・124図－29）　19は石庖丁の破片で、両側に刃がある。現存する横幅は5.7cm、縦幅は3.7cmである。小豆色をした石材である。29は小型の仕上砥である。長さ5.9cmで断面は一辺が1cmの平行四辺形を呈する。石材は硬質の砂岩である。

53号竪穴住居跡（図版25・28・29、第43図）

54・56・57号住居を切る。竪穴部の平面プランはほぼ長方形を呈し、南西隅は調査区外に延びる。〝コ〟字型のベッド状遺構を付設し、貼床面から炉・屋内土壙を掘り込んでいる。主柱穴はP_1・P_2のふたつで、掘り方に段を有する。P_1の上に炉が旧状を保って残っており、貼床もしっかり残っていたので、この段は柱を引き抜く時に掘り込んだものではなく、当初からのものである。主柱穴の掘り方としては、本遺跡では異例のものである。主柱痕は確認できなかった。なお、P_2から甕が出土している。柱を立てる時のマツリに関係するものであろう。ベッドは土層断面（A－B、C－D）によれば、地山の土を主に黒色土を客土し、最後に地山の砂質土を上面に貼っている。竪穴部の北壁外に小ピット（P_3～P_6）があり、補助柱穴だと推測する。P_6と対になるのはP_4かP_5で、北壁をほぼ三等分した位置にあり、壁からの距離も僅かに違う程度である。深さは15cm程度である。機能については、不明だが、張り出し部のようなものがあったのかもしれない。P_3は西側ベッドのほぼ延長線上にあり、他の住居でも見られるように、上屋に関係したものであろうか。



1．灰褐色
2．灰褐色に黄灰色粘土粒
3．黄色粘土ブロック層
4．灰褐色に黄灰色粘土ブロック混入
5．暗灰褐色に砂粒、褐色粘土、黒色土粒混入
6．4より若干暗い
7．4より粘土ブロック多い
8．4より砂粒が多く白味が強い
9．地山の砂層に粘土粒が含まれる
10．8より砂粒が少なく、粘土を多く含む

1．灰褐色土、灰黄砂の混合
2．灰褐色土、灰黄色粘土ブロック混入
3．灰褐色土に黒色土、灰黄色粘土、地山砂ブロック混入
4．灰褐色土
5．灰黄色粘土、褐色粘土ブロック層
6．灰黄色砂、褐色粘土、灰黄色粘土ブロック層（明るい）
7．白色砂若干混黒色土
8．黒色土混荒砂

第43図　53・54号竪穴住居跡実測図（1／60）

出土遺物　土器・土製品・鉄製品が出土している。土器は床面、ベッド上面で潰れた状況で破片も散乱せずにまとまって出土したものがかなりある。すなわち、6・11～14・16・17がそうで、これらは本住居に伴なう。また、15は主柱穴P_1の中から出土し、住居を建てる過程に行った祭祀用の土器である。2・3・5・7は完形品も含まれるが、本住居に伴なうか否か、判断にくるしむ。鉄製品はベッドの客土中から出土し、他の住居のものが混入したものである。土製の紡錘車は覆土下層で検出した。

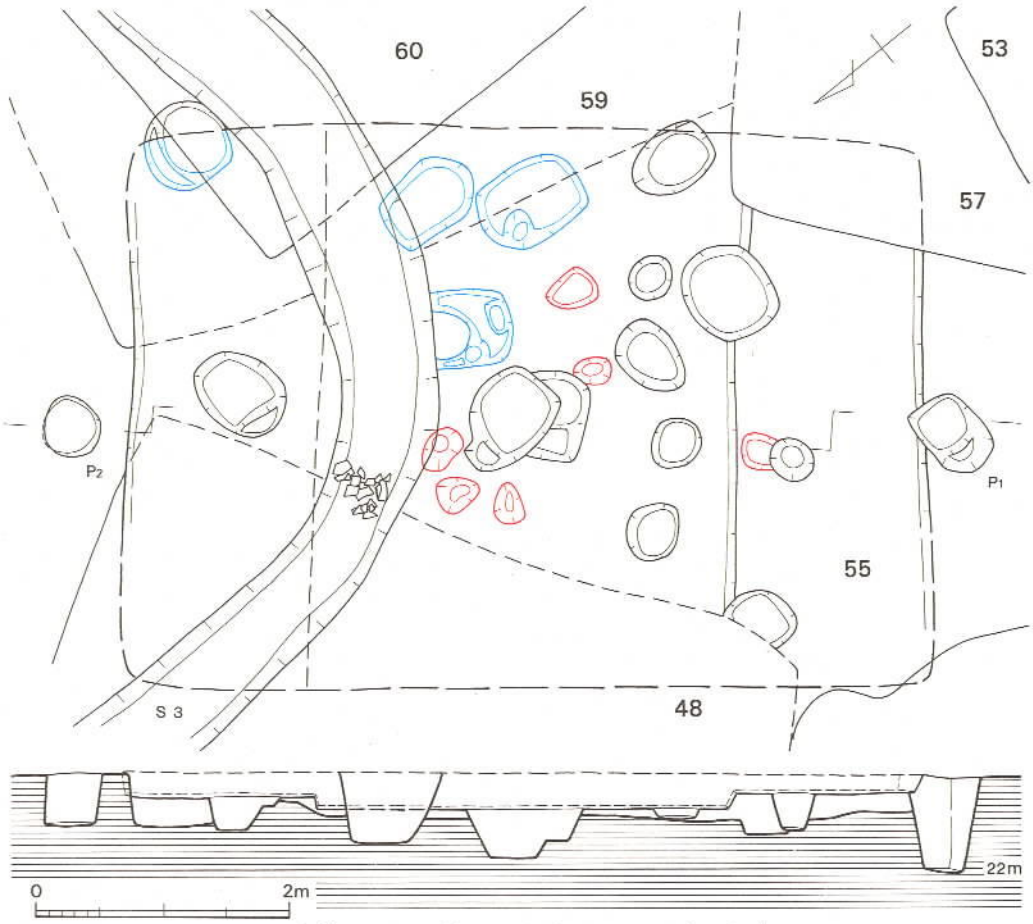
土　器（図版90・91、第148・149図）　1・2は脚台付の鉢で別個体である。1は復原口径17.2cmである。内面は口縁部から頸部付近に暗文を入れ、底部はヘラ磨きを行う。外面はハケ目の上からナデており、下半はヘラ削りを行っている。2は図示した状態で完形であり、脚裾部径13.4cmを測る。ハケ目調整され、外面はナデており、僅かに残る程度である。3～6は鉢である。3は口径12.4cm、器高5cm、4は12.8cm、5.9cmに復原され、5は14.3cm、5.5cm、6は18.5cm、6.6cmである。ハケ目はヘラ削りやヨコナデ・ナデにより、消されているものもある。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、3・5には黒斑がある。7・8は坩で、ともに底部に欠く。7は口径12.5cm、器高13cm程に復原され、8は口径12.9cm、で器高は14cmに復原される。ハケ目調整されるが、7はハケ目の上から暗文を入れ、外面の胴部下半はヘラ削りし、胴部内面はナデている。8も胴部内面はナデており、底部にハケの工具痕が残っている。胎土は精選され、焼成良好で、7は黄褐色を呈し　8は褐色で黒斑がある。9は大型の鉢で、口径26cm、器高19.5cmに復原される。内外面ともハケ目調整され、口縁部はヨコナデにより、外面の胴部下半はヘラ削りする。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈し、黒斑がある。10～17は甕で、11～15の小型品と16・17の大型品がある。11～15は口径14～17cm、器高は20cm程で、14が26cm強に復原される。ハケ目を多用し、15は外面の底部付近をヘラ削りする。12・13はハケ目の下にタタキ目が残り、胴部をヘラ削りしている。底部はほぼ、丸底である。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、11～13には黒斑がある。16は口径26cmに復原され、現存高23cmである。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈するが、外面に煤が付着する。17は底部を欠くが、ほぼ完形に復原され、口径36cmを測り、器高44.5cmに復原される。全面にハケ目調整を行い、その後、頸部と胴部に突帯を貼り付ける。口縁端部と頸部の突帯は刻み目を入れ、加飾する。胎土の砂粒は多くなく、焼成良好で黄褐色を呈し、大きな黒斑がある。

土製品（図版51、第116図－14）　完形の紡錘車で径3.8cm、厚さ1.5cm、孔径6mmである。

鉄製品（図版54・55、第117図－8・23）　8は全長11.5cm、身の最大幅3.6cmの鉄鏃で、身の中央に楕円型の透孔がある。23は未製品の破片である。横幅3.5cm、縦幅3.2cm、厚さ2mmである。

54号竪穴住居跡（第43図）

53号住居に大きく切られ、西側の調査区外に延びる。詳細は不明である。



第44図　55号竪穴住居跡実測図（1／60）

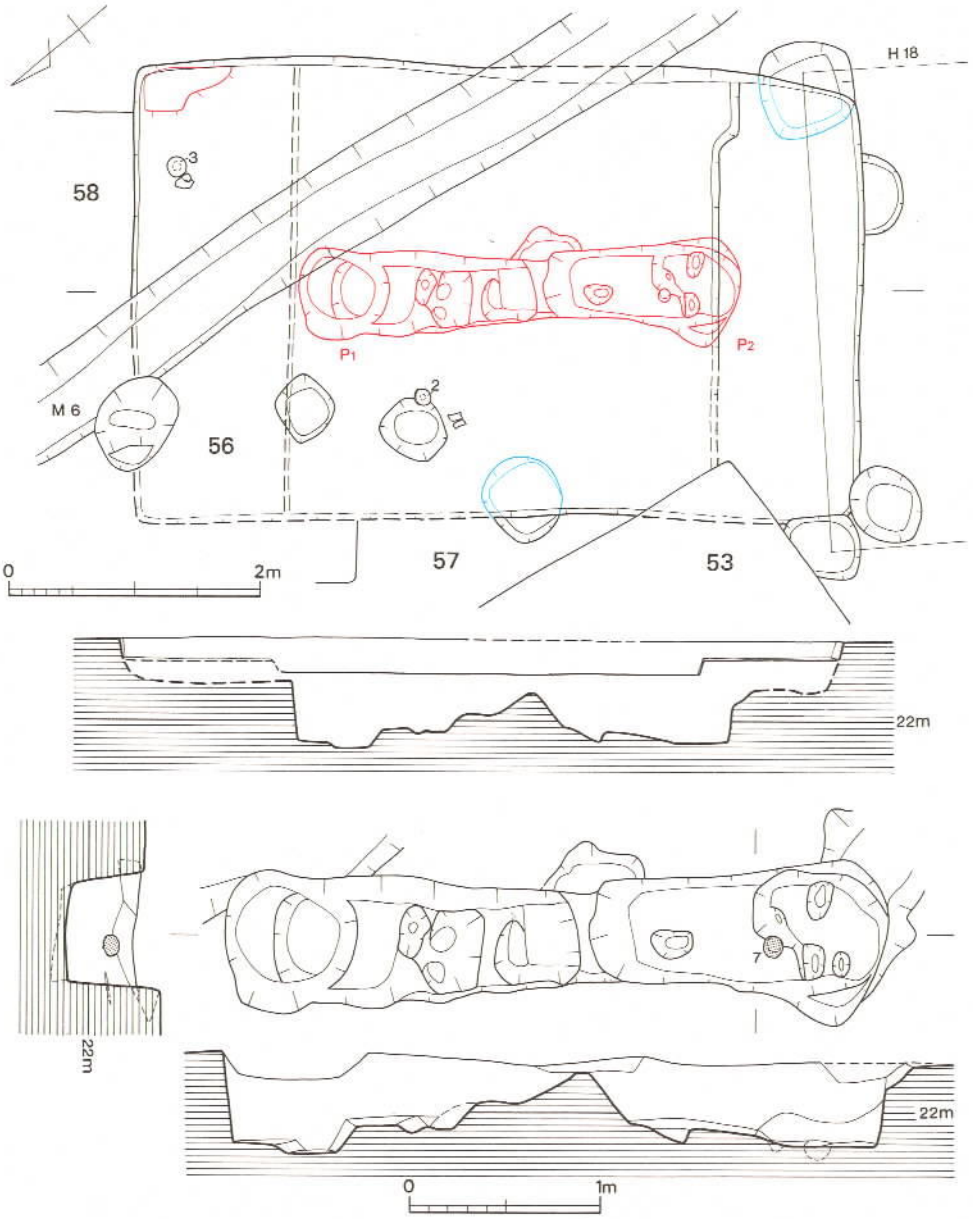
55号竪穴住居跡（図版25、第44図）

多くの遺構と重複し、調査の最終段階まで、住居のプラン・規模等がわからなかった。図は他の住居を参考にして推定復原したものである。主柱穴はP_1・P_2だと推測する。詳細は不明である。48・59・60号住居を切り、57号住居・3号周溝墓に切られる。

出土遺物　図示できるものは出土していない。遺構図の土器は3号周溝墓のものである。

56号竪穴住居跡（図版25、第45図）

57・58号住居、18号掘立柱建物を切り、53号住居に切られる。竪穴部は長方形プランで、両



第45図　56号竪穴住居跡実測図（1／60）

短壁にベッド状遺構を付設する(北東側のベッドは掘りすぎてしまった)。主柱穴は布掘りである。西隣の53号住居の主柱穴が完全な布掘りではないが、それを意識したような掘り方をしている。南側の柱が立つ位置に、土器を埋納している。住居を建てる過程での祭祀に関係するも

のであろう。53号住居の東側主柱穴でも、同様に土器に埋納されており、主柱穴掘り方の類似性とともに、両住居の親近さを伺うことができよう。30号住居例を含めて、竪穴住居の新築・廃棄の際の祭祀行為を考える上で貴重な資料である。

出土遺物　土器・石製品が出土している。土器は完形かそれに近く復原されるものもあるが、本住居に確実に伴なうのは7で、1は主柱穴内に混入した破片で、他は覆土中から出土した。石庖丁も覆土中から出土した。

土　器（図版92、第150図）　1～5は鉢である。1は反転原図で口径12.4cm、器高6cm弱程である。外面はタタキ目が、内面がハケ目がよく残る。2は⅓程欠くが、口径14.5cm、器高7.4cmを測る。内面はハケ目調整され、外面はナデ、ヘラ削りを行う。3は¼程残存し、口径17.2cm、器高5cmに復原される。外面にハケ目が僅かに残るが、ナデ消されている。4は½弱残るが、口径14.6cm、器高6.5cmに復原される。外面はハケ目が残り、底部はヘラ削りする。内面はナデている。5は¾程遺存し、口径27.3cm、器高8.6cmを測る。内面に暗文を施し、外面はハケ目調整後、底部をナデている。これらは、胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、2は黒斑があり、5は煤に濃密に付着しているのか、黒漆を塗ったか判断できないが、黒ずむ。6は口径16.4cm、推定器高14cm程の甕である。粗いハケ目調整後、外面下半はヘラ削りを行う。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈し、大きな黒斑がある。7は壷であろう。粗いタッチの土器である。胴部最大径10.8cm、現存高5.8cmを測る。外面はヘラ削りを行い、ハケ目が僅かに残る。内面は粗いナデである。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で緑灰色を呈し、黒斑がある。

石製品（図版63）　石庖丁の破片である。小豆色の石材で作っている。

57号竪穴住居跡（図版25、第46図）

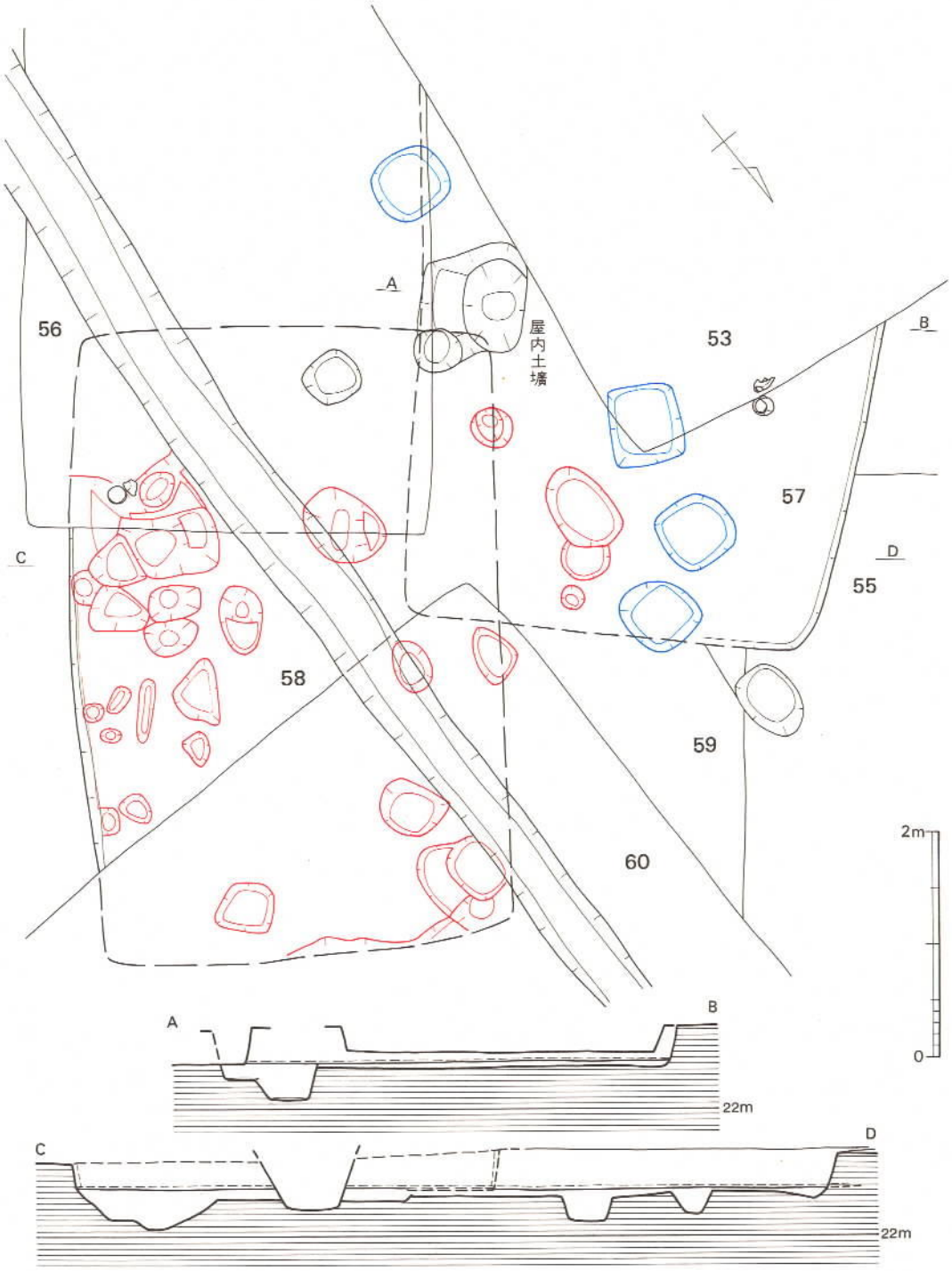
53・56・58・60号住居、溝6に切られ、55号住居を切っている。残りが悪く、不明な部分が多々ある。図も推定復原図である。よって、当然あるべきベッド状遺構は自信がないので図示しなかった。主柱穴についても同様である。

出土遺物　土器が少量、出土している。直接、本住居に伴なうものはない。

土　器（図版92、第150図）　1は器台で裾部を欠く。口縁部付近はヨコナデし、外面はハケ目が残る。口径11cmに復原され、現存高13cmを測る。

58号竪穴住居跡（図版25、第46図）

56・59・60号住居、溝6に切られ、55・57・58号住居を切っている。残りが悪く、不明な部分が多い。図も推定復原図である。よって、当然あるべきベッド状遺構は自信がないので図示しなかった。主柱穴についても同様である。



第46図　57・58号竪穴住居跡実測図（1／60）

出土遺物　若干量の土器片と石製品が出土した。土器は図示できるののがない。

石製品（図版63）　石庖丁と砥石が１点ずつ出土している。石庖丁は貼床下層から出土した½程の破片である。現存部分の寸法は横幅7.1cm、縦幅4.7cmである。石材は小豆色を呈する。砥石は覆土中から出土した破片で、石材は砂岩である。

59号竪穴住居跡（図版26、第47図）

この住居を含め、３号周溝墓の南側は〝暗黒地帯〟であったため、切り合った部分の壁を把握できなかった住居が多く、本住居も推定復原図である。隅円長方形のプランを呈し、両短壁にベッド状遺構を付設したようである。主柱穴はP_1・P_2である。東側壁の中央に屋内土壙を設置する。

出土遺物　覆土中から土器が出土している。本住居に伴なう出土品はない。

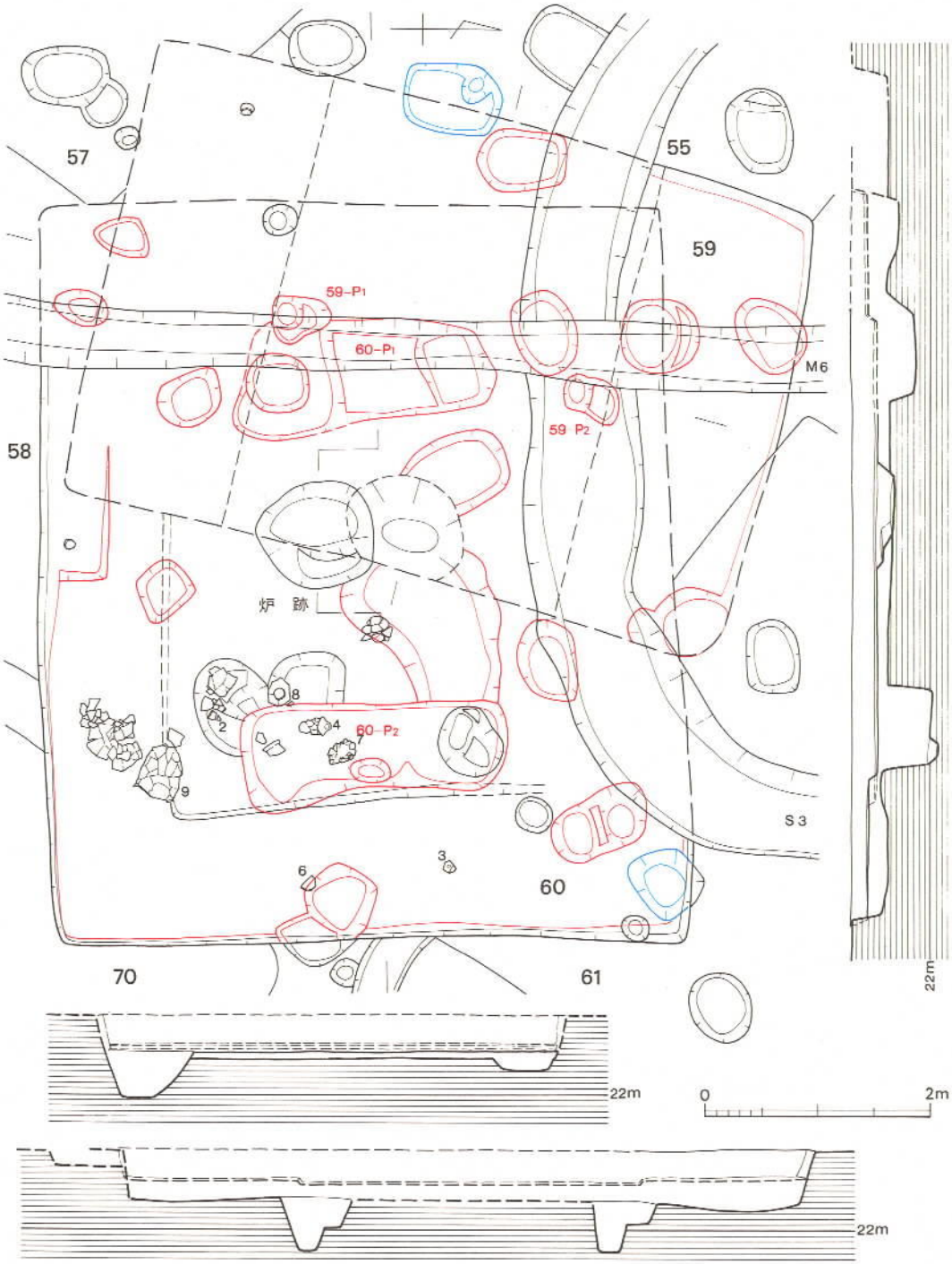
土　器（第150図）　１・２は同じ作りの甕で、完形の２は口径16cm、器高23.3cmを測る。口辺部内面と胴部外面はハケ目調整され、胴部内面はヘラ削りを行う。内底面、口辺部はヨコナデをしている。１は底部を欠くが、２と酷似している。ともに、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で明茶褐色を呈し　煤が付着している。

60号竪穴住居跡（図版26、第47図）

周囲の住居を切り、３号周溝墓・溝６に切られる。遺構が重複しない部分は極く僅かで、掘り間違えたところもある。竪穴部のプランは幅広く、正方形に近い。ベッド状遺構は東側の一部を確認しただけだが、〝コ〟字型のものであろうと推測する。屋内土壙を検出できなかったが、あるとすれば、３号周溝墓に切られた北壁側であろう。主柱穴はP_1・P_2である。通常の主柱穴と異なり、住居の主軸に対して直交する土壙状の掘り方であるるP_1は不整長方形で、床面の南北両側に、貼床面からの深さ70cm程のピットがある。P_2は略長方形の掘り方で床面までの深さは貼床面から50cm程である。掘り方の北側に主柱痕が残る。すべての主柱痕を検出したわけではないが、P_1・P_2の状況から、掘り方の両端に柱を立てたようで、本住居の主柱は４本であろう。このような柱配置の住居は、本遺跡に残らず、極めて異例である。

出土遺物　土器、石製品（鋳型・砥石）が出土している。土器は１・３を除いて、床面から出土しているが、３・６は他の床面出土の土器とは出土状態が異なり、完形品ではないが、細かく割れずにベッド上面に転がっていた。２・４・７～９はきれいに潰れた状況で出土し、この５個体と図示していないが、９の南の甕、８の北の甕が本住居に伴なう。石製品（鋳型・砥石）は貼床の下層から出土した。

土　器（図版93、第150・151図）　１は口径8.2cm、器高２cm程に復原される小型の鉢で、底部にハケ目が残り、口縁部はヨコナデ、他はナデ調整を行う。胎土は精選され、焼成は良好で



第47図　59・60号竪穴住居跡実測図（1／60）

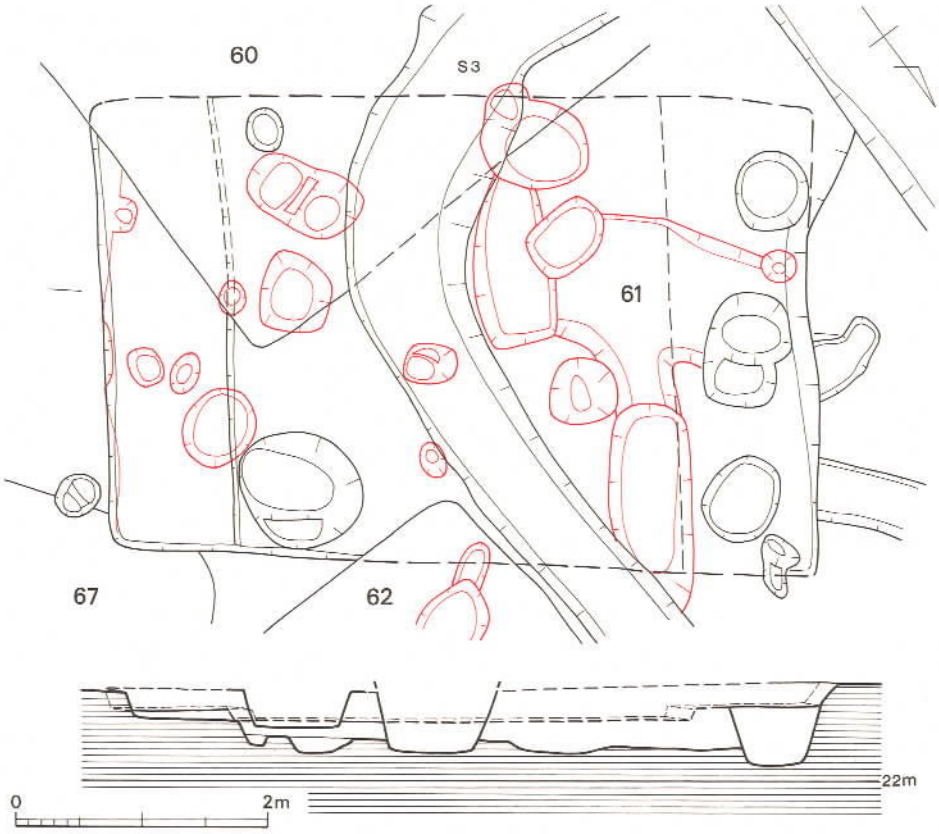
黄褐色を呈し、底部に黒斑がある。2は脚裾部径17cm、現存高16cmの高坏である。ハケ目調整後、脚柱部外面はヘラ削りし、他はヨコナデ、ナデてハケ目を消す。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈する。3・4は脚台付鉢である。3は鉢部を欠き、脚裾部径13cm、現存高4cmを測る。ハケ目調整されるが、外面はヘラ磨きにより、僅かに残る程度である。4は口径23cm、器高17.7cmに復原される。ハケ目調整されるが、鉢部外面はヘラ磨きにより、内面の頸部以下や脚部外面はナデにより、ハケ目は僅かに残る程度である。ともに、胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で、3は褐色～茶褐色、4は明茶褐色を呈する。5・6は図上で完形に復原される鉢で、底部の形状に畿内の影響が認められる。5は口径16.2cm、器高11cmに復原される。しっかりとした略長方形の底部の上に半球状の鉢が乗り、内面は丁寧なハケ目調整を行い、外面は上半部はナデ、下半部はタタキ目が残る。外底面はナデ調整である。また、内底面の中央はナデ調整のため、窪んでいる。6は口径17cm、器高8.8cmに復原される。5と比べて底部は台形状で、口縁部が直線的に外開きである。内外面のハケ目は繊細で方向に統一性がない。外面の底部付近にはタタキ目が観察され、外底面はナデ調整である。ともに胎土に金雲母・角閃石や赤褐色粒を含み（胎土は肉眼で見る限り他の土器と大差はない）、焼成良好で5は褐色～黒色、6は明茶色を呈する。7・8は壷である。7は口径13.6cm、器高15.5cmに復原される。ハケ目調整され、胴部内面はナデ調整である。8は口径12.6cm、現存高19.2cmである。ハケ目調整されるが、口縁部はヨコナデ、胴部下半の外面はナデ調整によりハケ目は消えている。ともに、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で明茶褐色を呈するが、7は黒斑があり、8は煤で黒ずむ。9は長胴の甕で僅かな底部を有する。口縁端部は刻目があり、内外面はハケ目調整され、外面はハケ目の下にタタキ目が残る。外面の胴部下半はヘラによる擦過痕が残る。

石製品（巻頭図版2・図版61・64、第122図－15・第124図－32）　15は砥石に転用された鋳型の破片で、石材は砂岩である。現存する部分の寸法は、最大幅10.6cm、同厚さ3cmを測る。後に砥石として使われたため、型の部分は研磨され、鉄器の刃部を研いだためか、本来なかるべき所に沈線がある。銅剣の鋳型であろう。32は硬質砂岩製の仕上砥である。鉄器を研いだものであろう。

61号竪穴住居跡（第48図）

遺構が複雑に切り合っているため、本住居の全貌は摑み得なかった。図は推定復原図である。多分、竪穴部は長方形プランであろう。また、両短壁に〝ニ〟字型のベッド状遺構を配すると考えらる。主柱穴・屋内土壙・炉跡については、不明である。

出土遺物　土器・石器が出土している。図示した土器は貼床下層の出土品で、他の出土土器は小片で覆土中から出土している。石器は石斧と砥石があるが、石斧は別に後述する。砥石は覆土中、床面から1点ずつ出土しているが、投棄されたか流入品である。



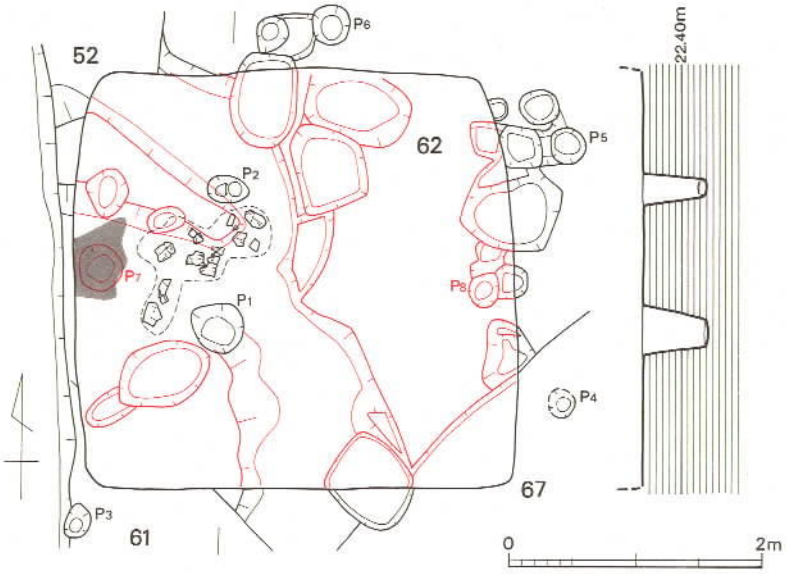
第48図　61号竪穴住居跡実測図（1／60）

土　器（図版94、第15図）　口径11.4cm、器高5.1cmを計る鉢である。口縁部はヨコナデ、他の部分はナデ調整を行っている。胎土は砂粒を含み、焼成良好で黄褐色しを呈する。

石製品（図版68・第125図－46・第126図－57）　砥石が2点出土している。46は砂岩製の仕上砥の破片である。表面に煤が付着している。57も砂岩製の仕上砥で、折損後、本住居に捨てられたものである。

62号竪穴住居跡（図版26、第49図）

3号周溝墓の東溝に接し、52・61・67号住居を切っている。竪穴部は方形プランを呈し、壁は全く残らず、貼床面が僅かに遺存するだけである。カマド痕跡が西壁中央に残っていた。本柱穴の配置は明瞭ではなく、P_1・P_2と検出できなかったが他に二つのピットの存在を考えて4本柱とするが、竪穴部外に主柱穴を求めるしかなかろう。前者の場合、貼り床をはずして地山まで掘り下げたが、P_1・P_2に対応すべきP_3・P_4を検出できなかった。後者の場合、小ピット



第49図　62号竪穴住居跡実測図（1／60）

が竪穴部の周囲にあり、そのうちP_3・P_6は本住居の竪穴部と関係がありそうな配置をしている。ただし、遺構が重複しているため、P_3～P_6に対応するであろうピットは検出していない。P_4・P_5は、両ピットの中点と竪穴部東壁の中点がほぼ一致し、壁から等距離に存在し、本住居に関係する可能性は高いと推測する。これに対応するピットが西壁側に存在すれば都合がいいのだが、3号周溝墓があり、このような柱配置を考えずに調査したので、検出していない。南西隅のP_3それに対応するピットが北西隅に存在したかもしれないが、上記の理由で検出していない。P_6は、これに対応すべきピットが南壁側で検出していないので、あるいは無関係の可能性がある。なお、貼床下層で検出したP_7・P_8は各々東西両壁際の中央に位置し、上屋の建築時に関係するものではなかろうかP_7の上にカマドを付設していので、生活時には埋っている。上述したことは、主柱穴配置が不明確なので、あくまで可能性の問題として考えたわけである。

出土遺物　P_1・P_2とカマドに囲まれた部分の床面上に土器の細片が出土したが、図示できなかった。また、貼床下層から甕棺祭に使用したと思われる丹塗磨研土器が出土した。

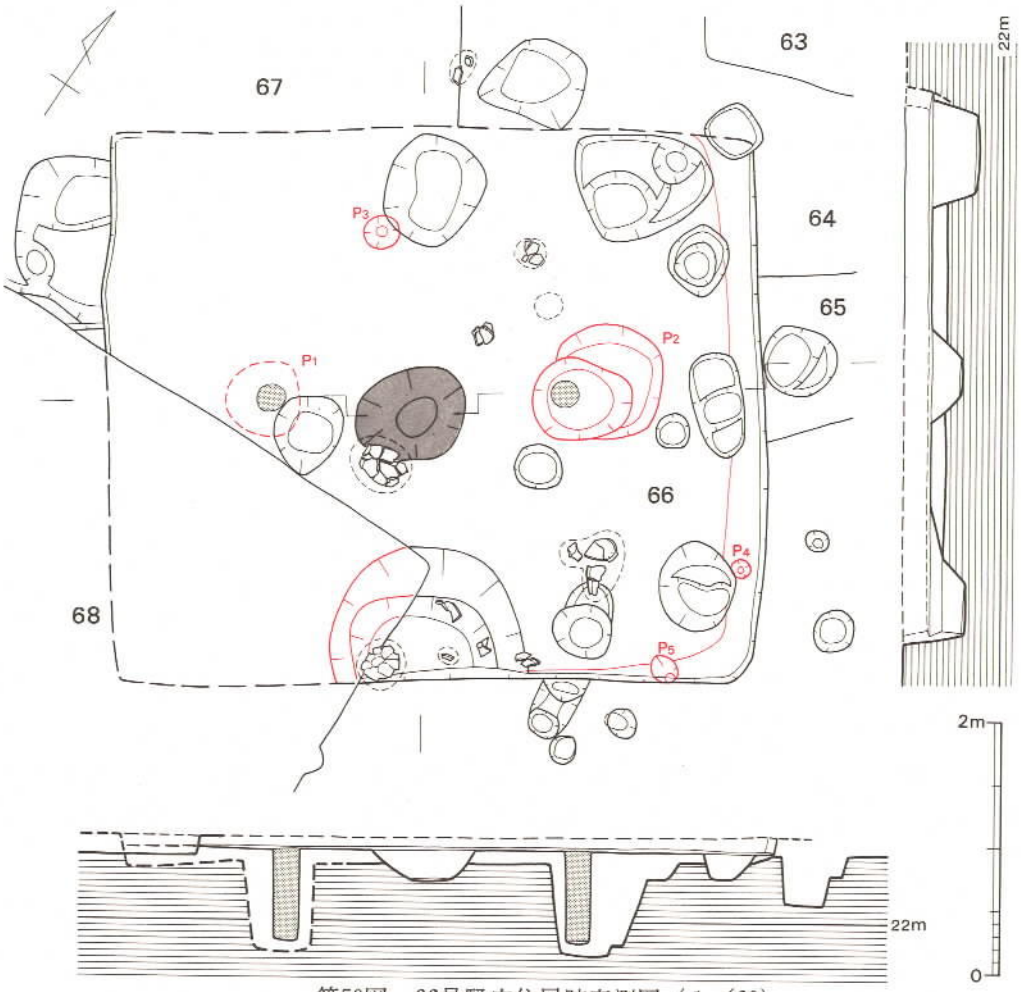
土　器（図版94、第151図）　1は丹塗磨研土器で、口径12.5cm器高2.7cmの蓋で、2孔一対の小対を4個穿つ。胎土は精選されて砂粒をほとんど含まず、焼成良好で生地は黄褐色を呈する。完形品の優品である。

63～65号竪穴住居跡（付図１）

66号住居の東にあり、住居のほとんどが調査区外に延びるので、詳細は不明である。

66号竪穴住居跡（図版30・31、第50図）

南西隅を68号住居に切られている。竪穴部の平面プランは、遺構が重複しているため、しっかりとは摑んではいない。図は整理時の推定復原図であり、写真図版と異なる部分がある。床面は貼床をしているが、あまり、しっかりとしたものではない。東南壁中央に屋内土壙があり、住居廃棄後に土器が流れ込んでいる。直径20cm程の主柱痕が床面に明確に残っていた。主柱穴はP_1・P_2の二つであろうと考える。また、南東側の竪穴部外の小ピットのいくつかかは本柱居



第50図　66号竪穴住居跡実測図（１／60）

に伴なう補助柱穴であろう。なお、貼床の下層の小ピット（P_3～P_5）も、補助柱穴的な可能性が高いと推測する。

出土遺物　土器・土製品・石製品が出土している。土器は、一定の形をなすものは床面でほぼまとまって出土しているが、完形品かそれ近くに復原できるものは１だけで、１すら屋内土壙への流入品である。本住居に伴なう土器はない。その他の出土品も同様である。

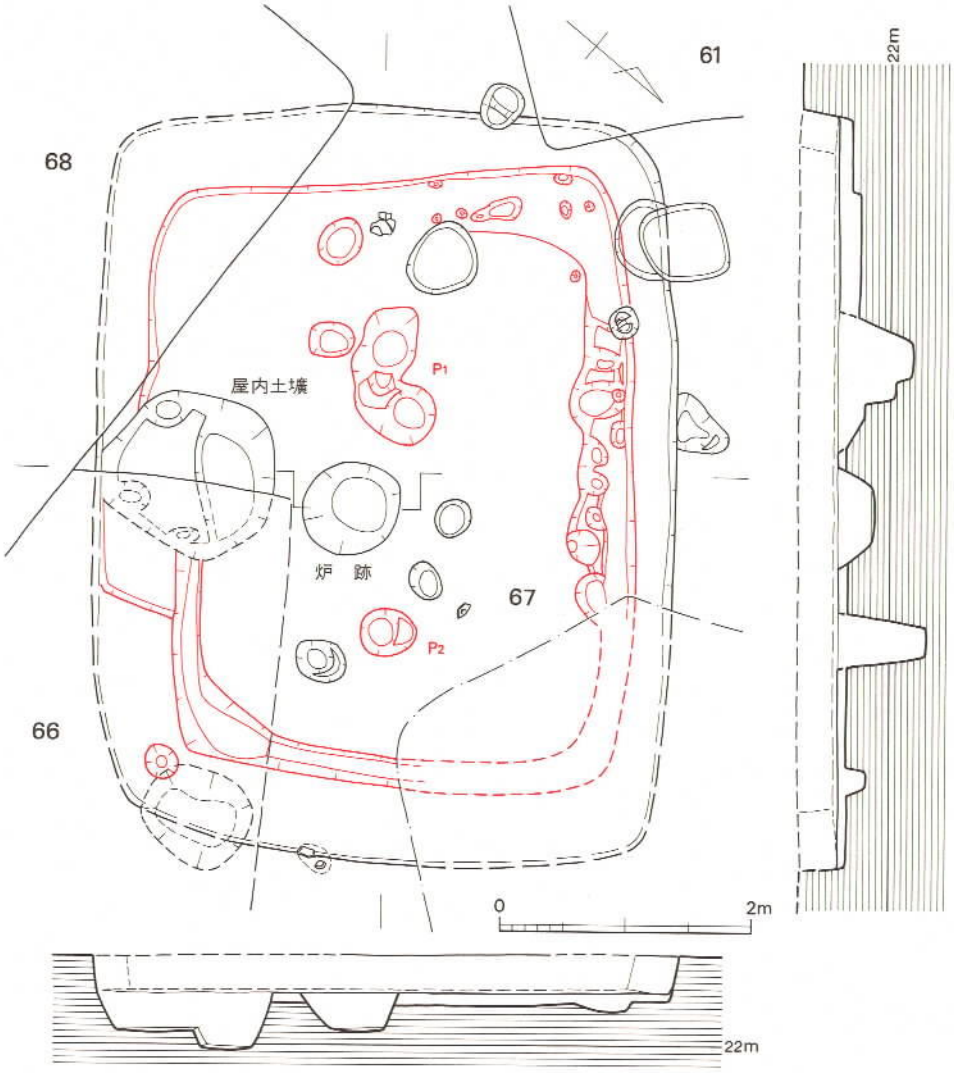
土　器（図版94、第153図）　１は完形の無頸壺のミニチュア品で、口径４～4.5cm、器高5.3cmを測る。分厚い底部がつく。外面の下半は僅かにハケ目が残り、多くはナデ消されている。粗いタッチのデスクネで、指圧痕が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。口縁部の外面に粗く丹塗りし、体部に黒斑がある。２～７は甕で４は口縁部～体部上半の一部を欠く程度で他は反転復原図である。４は口径19.4cm、器高24.7cmを測る。内外面ともナデ調整を行い、器面は平滑である。底部はしっかりした平底である。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で内面は黒褐色、外面は淡茶色である。他の甕は反転復原図で、口径は16.8～24.5cmである。ハケ目調整されるものが多い。底部は皆、平底のようである。

土製品（図版51、第116図）　本遺跡の出土品の中では大型の紡錘車である。全面をナデ調整し、側面は凹線風にくぼむ。直径5.5cm、厚さ1.2cmである。胎土に石英粒を多量に含み、焼成良好で茶褐色を呈する。貼床下層からの出土品である。

石製品（図版60・68、第122図－11・第127図－61）　11は石剣の切先片である。現存長7.9cm、幅3.2cmを測る。刃部は刃こぼれしている。覆土上層からの出土品である。61は砂岩製の仕上砥で、各面を使用している。表面に刃部を研いだと思われる、細い条痕が残る。

67号竪穴住居跡（図版30、第51図）

竪穴部の平面プランは隅円の長方形を呈し、各壁は外膨らみの弧状を呈する。北隅は調査区外に拡がり、各隅角部は他の住居に切られている。この住居は主柱穴の位置をそのままに、拡張して建て替えたと思われ、貼床下層からさらに１軒分の竪穴部を検出した。新旧住居の各壁は各々平行であり、屋内土壙も拡張した分、南東側に寄せている。炉は１軒分しか検出しておらず、下層の住居と同じ位置に炉を掘り込んだためであろうか。ここで注目すべきは、主柱穴の位置を変えていないことと、さらに、柱を一度抜いて同じ位置に再度、柱を立てたと考えられるように主柱穴掘りの乱れがないことである。このことは、主柱をそのままにして、竪穴部だけを拡張し、新たに床を貼ったことを示しているのではなかろうか。その場合、屋根を葺き変えることがあったかもしれないが、住居の枠組は大きくは変わらなかったであろう。図示した屋内土壙は掘り間違えたため、新旧のものを同一平面上に書いている。図では二段掘りになっているが、北側の深い方が下層の屋内土壙で、南側の浅い方が拡張された住居のものである。床面、貼床下層に小ピットがあるが、補助柱穴としては不明部分が多い。

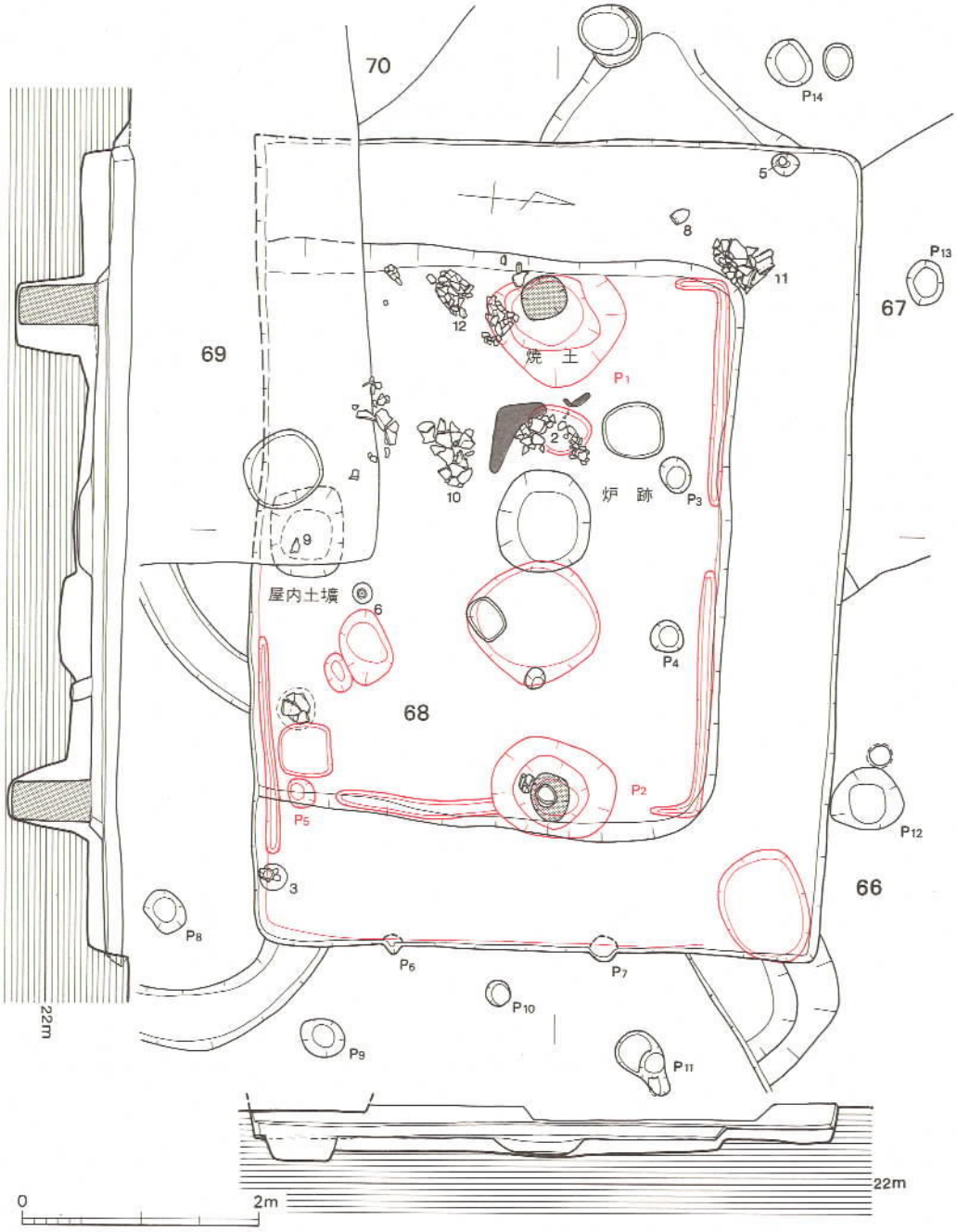


第51図　67号竪穴住居跡実測図（1／60）

出土遺物　弥生時代後期の土器が出土している。破片資料のため、時間の都合で図示していない。だが、本住居に直接伴なうものはない。

68号竪穴住居跡（図版30～32、第52図）

69号住居に切られる他は、周囲の遺構を切っている。竪穴部のプランは隅円長方形を呈し、〝コ〟字型のベッド状遺構を付設する。主柱穴はP_1・P_2で、主柱痕が残っていた。床面は貼床され、その面から炉と屋内土壙を掘り込んでいる。全てを検出したわけではないが、壁小溝は



第52図　68号竪穴住居跡実測図（1／60）

貼床下層のベッド際に間断的に検出され、P_3・P_4の間で切れている。竪穴部内外に一定程度規則的に配置された小ピット（P_3～P_{14}）がある。これらは、ピットの大小・深浅の相違があるものの、およそ、以下のような組み合わせを考えることができよう。

① P_3・P_4は心々距離が1.4mで、両ピット間の中点と北壁の中点がほぼ一致する。また、P_3・P_4は北壁からの距離が1.4mで極めて計画的な柱配置であることがわかる。

② 南西隅は69号住居に切られて不明だが、他の3隅には2個ずつのピットが存在する。すなわち、南東隅にはP_8・P_9、北東隅にはP_{11}・P_{12}、北西隅にはP_{13}・P_{14}が配置される。このように2個のピットが一対となって、壁に対して〝はす〟の方向に規則的に配置されており、住居の竪穴部外への拡がり、住居の本来の平面プラン、屋根構造や支え方を考える際に示唆的な資料となろう。

③ 東壁際のP_6・P_7・P_{10}の配置は、P_{10}にやや疑問が残るが壁際に小ピットが並ぶ例が他の遺跡においても報告例があり、本住居では全部の壁に検出したわけではないが、やはり本住居に伴なうものであろう。

このように、本住居は竪穴住居跡を考える上で重要な要素を含んでいる。

出土遺物　土器・鉄製品・石製品が出土している。土器は北壁側から大量に投棄され、破片となって散乱するものが多く、また、完形品のまま転がっているものもある。これらとは異なり、床面に潰れた状況で出土する土器があり、出土状態に大きな差がある。図示した土器のうち、2・10～12は伴なうが、3・5・6・8については伴なうとは言い難く、9は屋内土壙への流入品である。鉄製品2点は床面、ベッド上から出土し、石器は覆土下層から出土した。なお、縄文時代の石斧は後にまとめて説明する。

土　器（図版95、第151・152図）　1は二重口縁の坩で、口径12cm、器高6cmに復原される小片である。口縁部はヨコナデされるが、頸部以下は摩滅して調整は不明である。小砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。2の壷は底部は接合しないが、口径15.7cmを測り、器高は35cm程と思われる。口縁部は外湾気味で、胴部最大径は中位にある。内外面をハケ目調整し、内底面は強いナデのためくぼむ。外面下半はヘラ削りし、底部は丸底ではなく、凸レンズ状を呈する。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。3も壷で、口径13.2cm、器高27cmを測る。底部は丸底ではない。ハケ目調整されるが、底部付近はナデ消される。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈し、黒斑がある。5・6は鉢で6は脚部を欠失する。ともに外面のハケ目はナデにより僅かに残る程度で、内面は5はヘラ磨き、6はナデている。砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。7は壷か鉢の底部でタタキ目が残り、外底面はナデていると思われるが、風化しており、調整痕は残らない。畿内系の土器である。胎土

は金雲母等の砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。8は小型の甕で口径11.4cm、器高17cmの完形品である。ハケ目調整をるが、胴部上半にタタキ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶色～赤褐色を呈し、外面は煤が付着している。9は壺で口径13.6cm、器高13.6cmに復原される。僅かにハケ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。10～12は長胴の甕で入念なハケ目調整を行う。10は口径22cm、現存高22.3cmに復原される 胴部下半は擦過痕があり、工具痕が残る。11は口径29.4cm、器高40.3cmで、底部には凸レンズ状を呈する。ハケ目の下にタタキ目が残る。12は口径20cmで、器高26.5cmに復原される。底部付近は摩滅し、調整は不明である。ともに胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色～暗褐色を呈し、煤が付着している。

鉄製品（図版54・55、第117図－14・17）　14は現存長3.9cm、幅8mmの鉄片であるが、製品か未製品か判断できない。17は長さ5.3cm、幅8～13mmで、断面は方形である。未製品であろう。

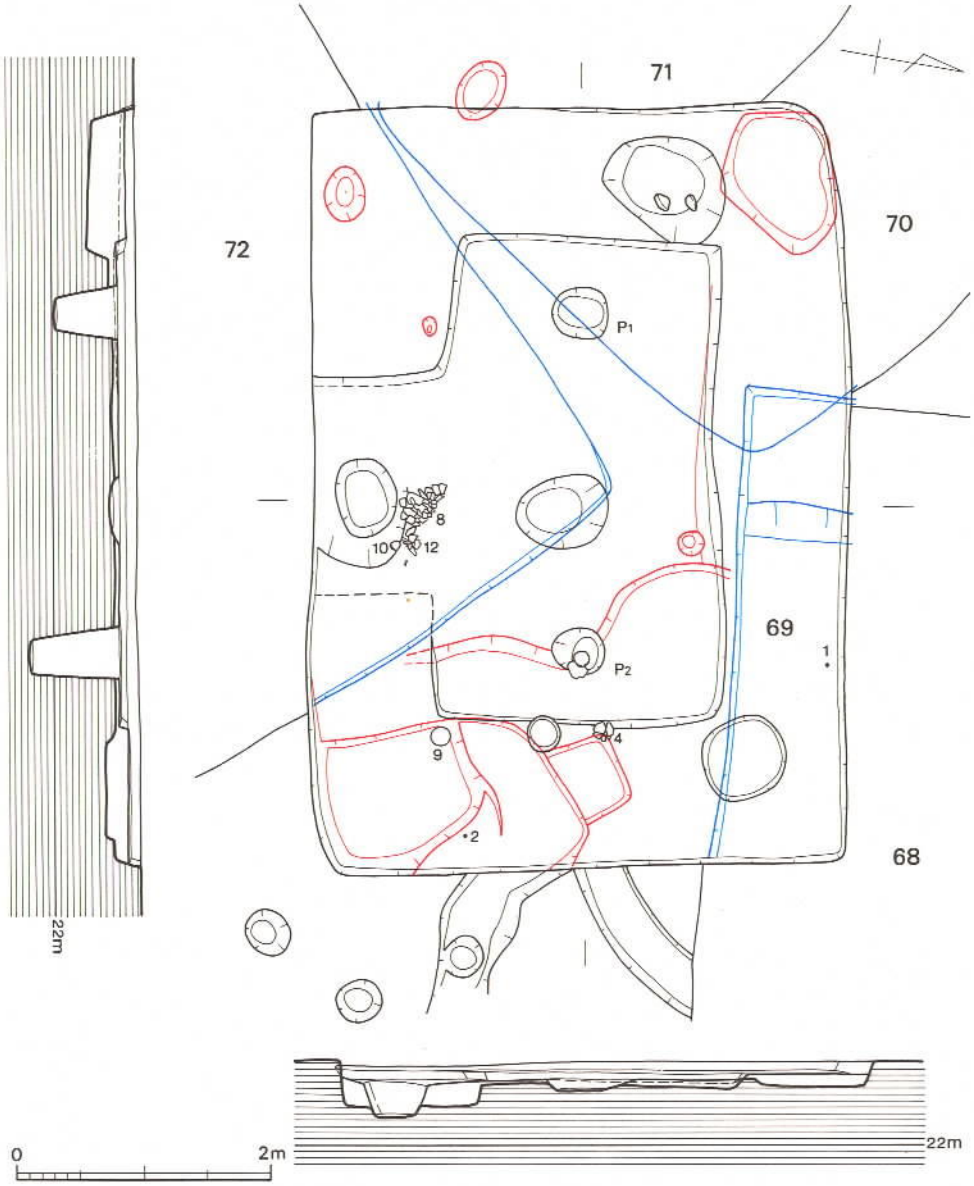
石製品（図版73）　自然石状に見える。砥石であろう。

69号竪穴住居跡（図版30・31・34、第53図）

68・70・71・72号住居を切っている。遺存状態が悪く、竪穴部の壁高は10cmに満たない。竪穴部の平面プランは隅円の長方形を呈する。南壁中央を除いた部分にベッド状遺構を付設し、ベッドが途切れた部分に屋内土壙を設置する。竪穴部のベッドに囲まれた床面は〝凸〟型を呈する。床面の中央に浅い炉を掘り込んでいる。ベッドから40cm程離れた所に主柱穴（P_1・P_2）を配置する。屋内土壙は貼床面から切って設置され、そのすぐ北の床面で、甕が潰れた状況で出土したが、土壙内部から人工遺物は出土していない。

出土遺物　土器と縄文時代の石製品が出土した。土器は屋内土壙の北側で検出した8・10・12は本住居に伴なう。他は覆土中からの出土品である。

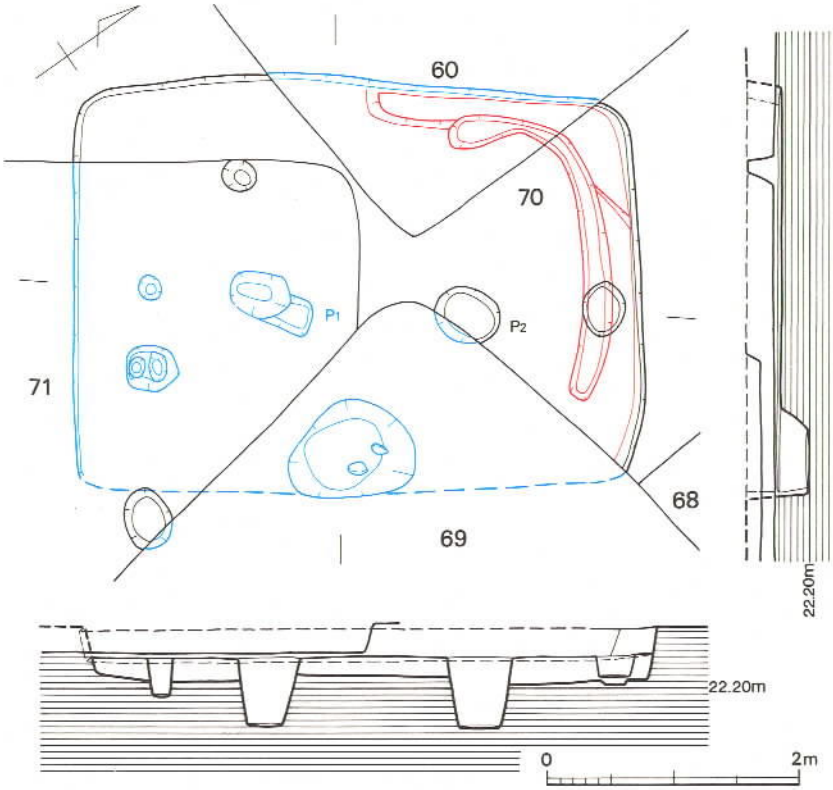
土　器（図版96、第154図）　1～3ははデスクネの土器である。1は口径2.1cm、器高2cmで粗い作りのものである。内外面はナデ調整を行い、工具痕が残る。2は口径3.6cmに復原され、器高2.5cmを測る。内外面はナデ調整を行い、工具痕が残る。3は口径5.2cm、器高3.2cmで、内外面はナデ調整を行い、工具痕が残る。ともに、砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈する。4は口径5.2cm、器高3.2cmの鉢で、内外面はナデ調整を行い、外面に工具痕が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、外面に煤が付着している。5は二重口縁の壷で、口径25.2cmに復原される。胎土は金雲母等の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈するが口縁部内面は黒色顔料を塗装されたのか、一部黒光りする。6～8は庄内型の甕である。完形の8は口径14.9cm、器高19cm、胴部最大径18.1cmである。口唇部は僅かだが上方につまみ上げられている。口縁部の内外面はヨコナデされ、僅かにハケ目が残る。胴部外面は上半部に左下がりのタタキ目が、中程度にハケ目と擦過痕があり、底部はナデ調整を行う。内面は頚部以下をヘラ



第53図　69号竪穴住居跡実測図（1／60）

削りし、器壁は薄い。5・6も基本的に同じ作りだが、外面にタタキ目が残らず、ハケ目調整を行っている。ともに、胎土に多量の砂粒を含み、焼成は良好で6・8は黄褐色、7は白黄褐色を呈し、8は底部に黒斑がある。9も甕で口辺部を欠く。復原高は11.3cmを測る。内外面をハケ目調整ち、内底面はヘラ削りを行う。器面にあまり砂粒が目立たず、焼成良好で茶褐色を

呈す。内面上半部に煤が付着する。9は甑で、口径16.5cm、器高12.6cmである。口縁部はヨコナデし、以下はヘラ削り、ハケ目調整を行う。砂粒を多く含み、焼成良好で内面は黄褐色、外面は褐色を呈し、黒斑がある。11・12は高坏で、ともに坏部を失っている。11は脚柱部から脚裾にかけてラッパ状に開くが、12は透し孔の上で大きく屈折する。ヘラ削り、ハケ目調整を行う。砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、12の外面は丹塗りされる。13・14は器台で、13は器高23cm、器高13.9cmに、14は同じく19.6cm、12.6cmに復原される。口縁部と脚裾部はヨコナデし、内面はハケ目が残り、外面はナデ消している。鉢部底面の穿孔は、13は径3cm、14は0.6cm程である。あまり砂粒を含まず、焼成良好で13は明茶褐色、14は黄褐色を呈し、黒斑がある。



第54図　70号竪穴住居跡実測図（1／60）

70号竪穴住居跡（図版30、第54図）

60・69・70号住居によって大きく切られている。竪穴部の平面プランは隅円長方形を呈する。床面は貼床をして、その面から屋内土壙を掘り込んでいる。主柱穴はP_1・P_2である。北東壁側の貼床面下に、壁から20cm程離れて幅15cm前後の〝L〟字型の溝があり、また、北隅から北西壁際が高く、掘り残されている。その理由・機能については明らかにし難い。屋内土壙から、床面より15cm浮いて自然石が二つ出土している。

出土遺構　土器・土製品（投弾）と縄文時代の石斧が出土している。すべて流入品であり、本住居には伴わない。

土　器（図版97、第154図）　1はP_1から出土した壷の破片で丹塗磨研されている。内面は丹が垂れている。小片のため反転図である。胎土に金雲母等の砂粒を含み、焼成良好で、明茶褐色を呈する。2も壷で、口径31.6cmに復原され、現存高11cm程である。口縁部と突帯はヨコナデ、他の部分はナデ調整である。胎土に金雲母等の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

土製品（図版52）貼床の下層から出土した投弾で、完形品である。

71号竪穴住居跡（図版30、第55図）

69・72・73号住居に大きく切られ、不明な部分を多く残している。主柱穴はP_1・P_2でP_1寄りの貼床面に炉を切っている。東西の両短壁にベッド状遺構を付設していたと思われるが、掘り方を間違えたため、図は推定図である。また、西短壁に小規模な張り出し部を検出した。

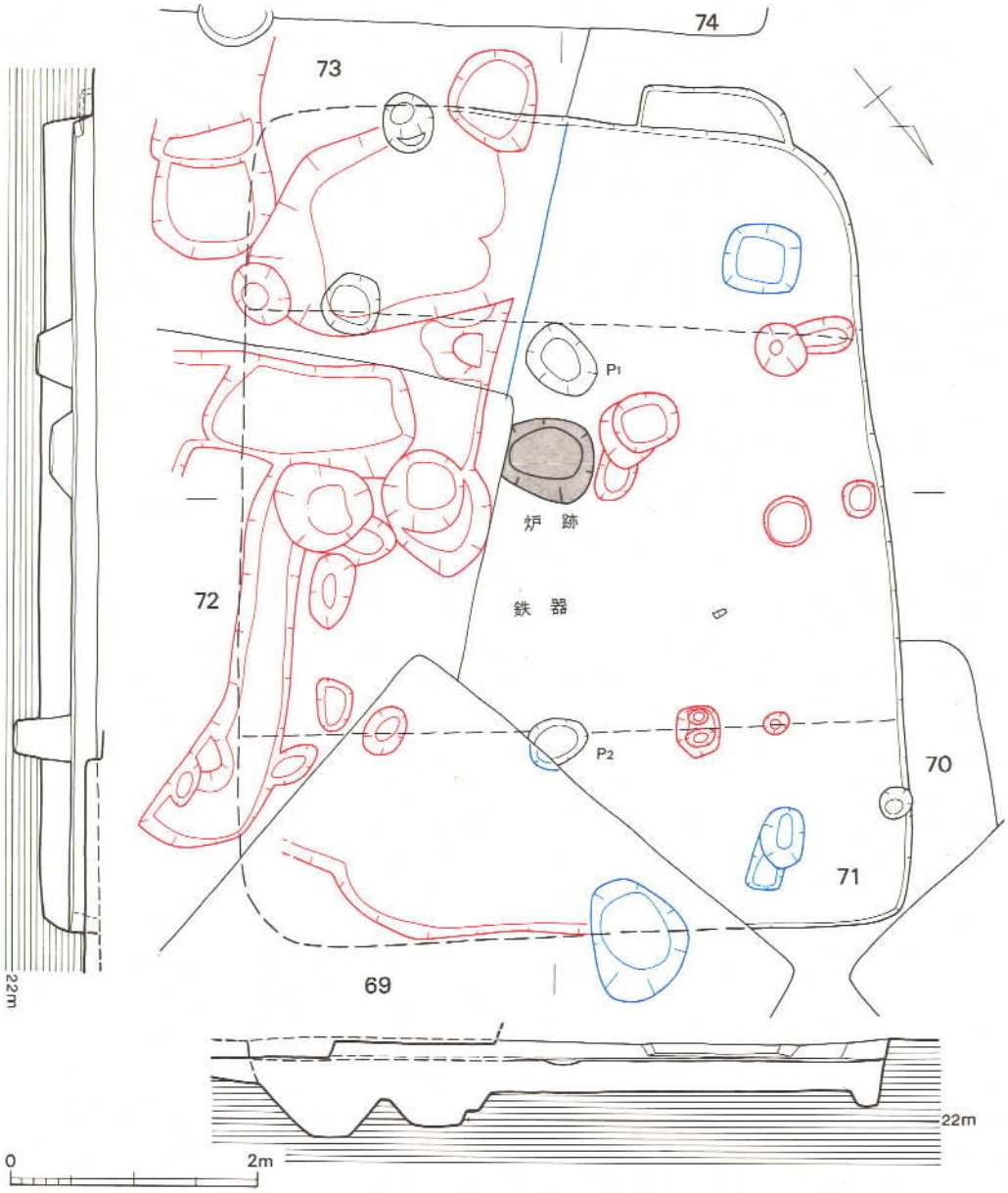
出土遺物　若干量の土器片、不明鉄片・投弾が出土している。土器は小片のため図示していない。弥生時代終末期の土器片である。

土製品（図版52）　貼床の下層から出土した投弾で、完形品である。

72号竪穴住居跡（図版30、第56図）

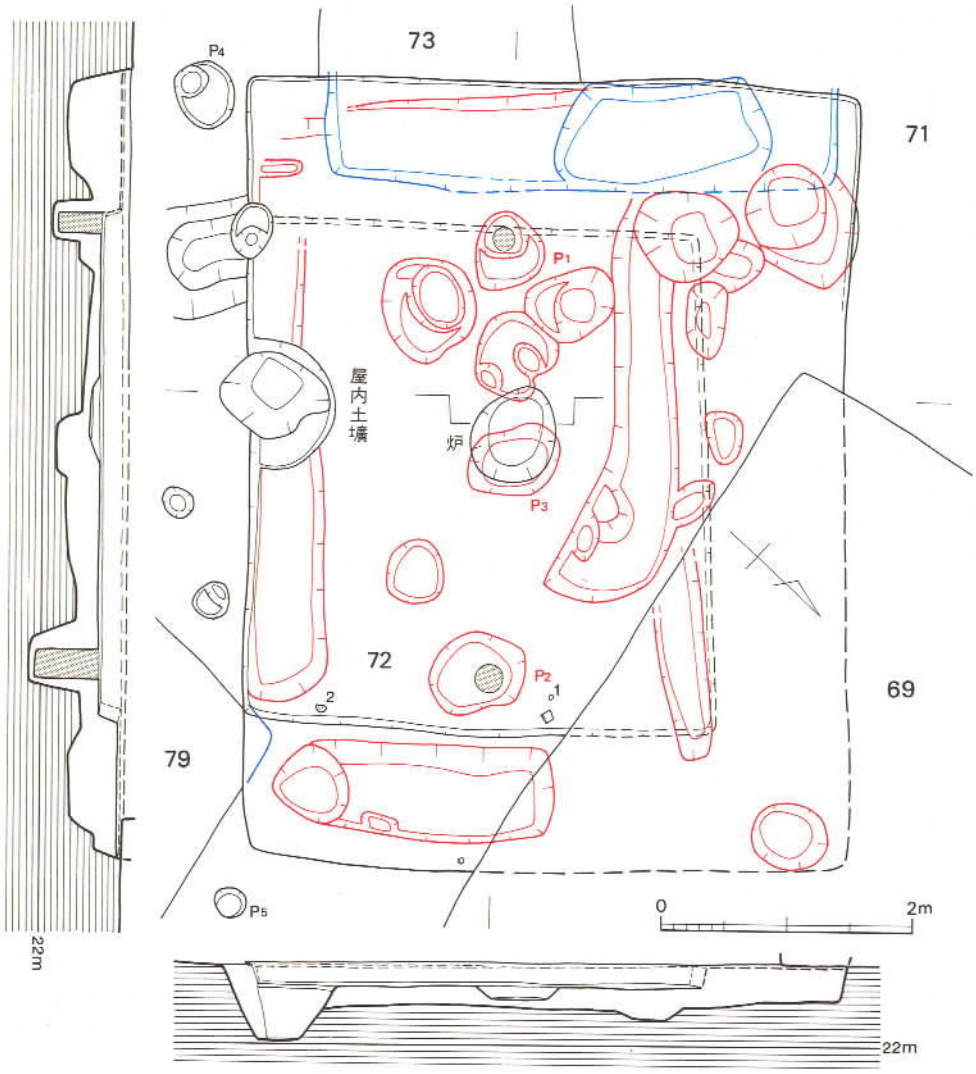
北側を69号住居に切られ、71・73号住居を切る。竪穴部は69号住居より幅が広い。ベッド状遺構は〝コ〟字型であろうと考える。床面は貼床される。屋内土壙・炉は貼床面から切り込んでおり、また、主柱痕も残っていた。主柱痕は径20cmほどであり、柱の下端部は主柱穴底面より浮いている。粘土をガチガチにつき固めで、その上に柱を立てるからである。主柱穴は貼床の下層で検出した。床面下では、壁に平行に溝状の掘り込みが認められる。また、炉の下にピット（P_3）があり、これらは、極めて面白い下層遺構である。竪穴部の東・南隅の外にあるP_4・P_5は補助柱穴の可能性があり、他の二隅は住居が重複しており、検出できなかった。

出土遺物　土器・石製品（石剣・石庖丁）が出土している。土器3・石剣は貼床下層から出土したが、他の遺物は覆土中、床面から出土した。土器は1・2は床面で検出したが、伴なう可能性があるのは1である。



第55図　71号竪穴住居跡実測図（1／60）

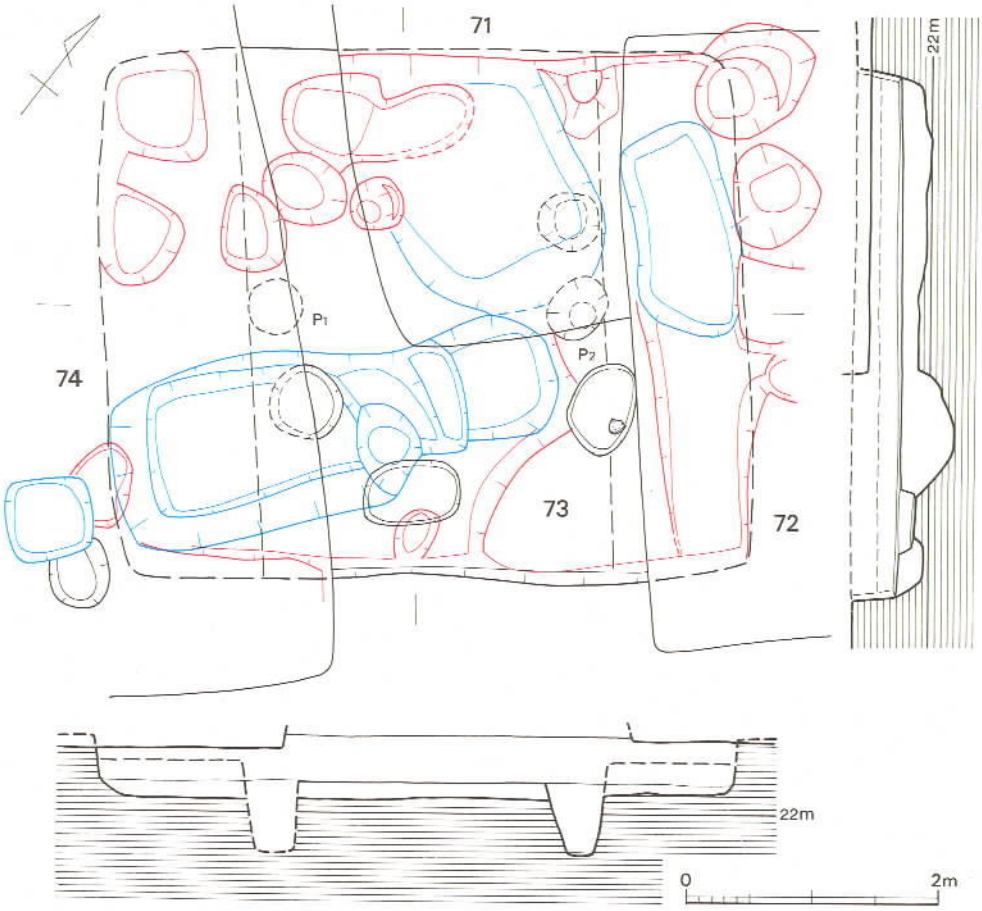
土　器（図版97、第155図）　1は完成品で口径5.4cm、器高5cmを測る尖底の深目の鉢である。デズクネ風の土器で、内外面に指圧痕が残る。胎土は割と精製され、焼成良好で灰褐色を呈し、黒斑がある。2は口径15.2cmに復原され、器高5.2cmを測る鉢である。内面はハケ目調整され、外面はヘラ削りを行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で灰褐色を呈する。3は畿内



第56図　72号竪穴住居跡実測図（1／60）

第５様式的な底部を持つ鉢で、僅かに内湾する口縁部を有する。外面と内底面はナデ調整を行い、内面の体部上半はハケ目調整を行っている。器肉は薄く、口縁部は特に薄く作り、口唇部を欠き、ゆがんでいる。口径は14cm弱、器高は7.5cm程である。胎土は精製され、金雲母・角閃石を若干量含み、焼成良好で淡黄褐色～茶褐色を呈する。４は口縁部の⅔程を欠くが、口径18.5cmに復原され、器高24.1cmを測る甕である。底部は凸レンズ状を呈する。内外面はハケ目調整され、外面はハケ目の下にタタキ目が残る。下半部は、外面に擦過痕があり、内面はネデている。

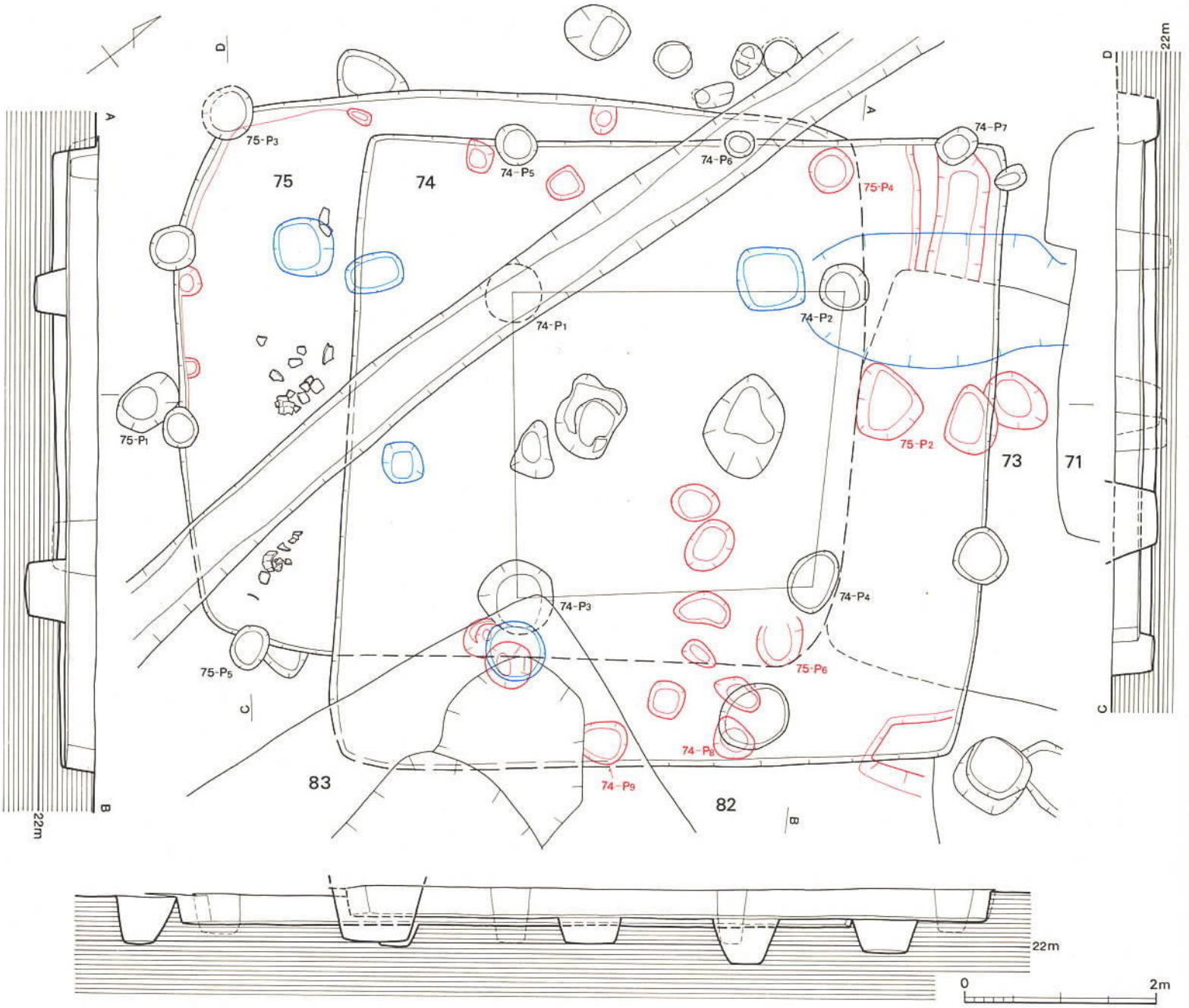
石製品（図版60・63、第122図－14）　石剣（14）は、身と茎の一部が残る破片で、現存長8.5cm、関部幅3.7cmを測る。関部から茎にかけて、左右に二つずつのくり込みがある。茎は茎尻に向かって次第に幅を減ずる。身の断面は中央に鎬を作らず平坦で、刃を研ぎ出している。石包丁は小片で、小豆色を呈する。



第57図　73号竪穴住居跡実測図（1／60）

73号竪穴住居跡（第57図）

竪穴部の両短壁を、72・74号住居に切られ、北西壁は71号住居を切っており、著しく重複するため、掘り方を間違え、不明な部分を多く残す。また、27～29号祭祀土壙を切っており、遺構が何層にも重なっている。竪穴部の平面プランは長方形であろうと考えられ、主柱穴はP_1・P_2であろうと推測するが、P_1は確認していない。ベッド状遺構も推定図である。



第58図　74・75号竪穴住居跡実測図（1／60）

出土遺物　若干量の土器片と縄文時代の石斧が出土した。

74号竪穴住居跡（第58図）

竪穴部は隅円の菱形に近い方形を呈する。そのほとんどが、他の遺構と重複し、83号住居・溝6に切られ、73・75・82号住居、28・29号祭祀土壙を切っている。主柱穴はP_1～P_4で4本柱であるが、P_1の位置するであろう部分は溝6が切っているので、実際には検出していない。主柱穴の中心を結んだラインは、各々、竪穴部の壁とほぼ平行である。また、P_5～P_7は心々距離は各2.1m等間であり、ピット全体が北隅に偏った位置にあるが、一直線に並ぶこととも勘案して、本住居に関係するものだと推測する。貼床下層で検出したP_8・P_9も位置関係から、本住居に関係するものだと推測する。ただし、それらの機能については明らかにし難い。屋内土壙や炉は検出していない。

出土遺物　若干量の土器片と鉄製品、石製品が出土している。すべて流入品で本住居に伴なうものはない。

土　器（図版97、第155図）　1は床面から25cm浮いて覆土中から出土した鉢である。ほぼ完形で、口径7.8cm、器高3.9cmを測る。口縁部はヨコナデ、内面はハケ目の上からナデ、外面は底部付近は擦過痕がある。胎土は、あまり砂粒を含まず、焼成良好で黄褐色を呈し、外底面に煤が付着している。2は蓋で、丹塗磨研される。口径12.7cm、器高2.6cmに復原される。胎土は精選され、焼成良好で生地は黄褐色～褐色を呈する。

鉄製品（図版56、第119図－37・42）　鉈の破片が2点出土している。37は幅1.6cm、現存長4.8cmで、茎を欠失する。断面形は浅い逆U字型である。木質の付着はない。42は茎の破片で、幅1cm、現存長4.9cmである。断面形は浅い逆U字型を呈する。木質の付着はない。

石　器（図版60・62・63、第122図－12・第123図－20）　12は石剣の破片で切尖部を欠失する。断面は菱形である。石包丁20は刃部を一部欠くがほぼ完形品で、横幅11.1cm、縦幅4cmである。小豆色の石材である。他の1点は図示していないが、破片である。石材は20と同質だが、暗灰色である。

75号竪穴住居跡　（第158図）

74号住居に大きく切られ、さらに溝6が中央部を斜断するため、竪穴部の遺存状態はよくない。竪穴部の平面プランは隅円の長方形を呈し、各壁は弧を描いて外に膨らむ。調査中は2軒が重複していると考えて遺物を取りあげたが、柱配置と床面の状況から、1軒の住居と判断した。床は貼床を行い、主柱穴は竪穴部内にはない。両短壁中央の壁に接して外にあるP_1・P_2が主柱穴であろうと推測し、竪穴部四隅の内外にあるP_3～P_6は主柱穴と考えても差支えないほどしっかりとしたピットであるが、一応、補助柱穴と考えておく。P_1・P_2を抜きにしてP_3～P_6

だけでも住居は建ちそうではある。屋内土壙は検出していない。

出土遺物　主に、他の遺構に切られなかった南西壁側で検出した。土器・土製品・石製品が出土しているが、流入・投棄品で、本住居に直接に伴うものではない。

土　器（図版98、第155図）　1・2は壷で、別個体である。1は口径31cm、現存高14.2cmを測る。鋤先状口縁で頸部に断面が三角形の突帯を巡らす。調整はナデ・ヨコナデによる。口縁部に煤が付着し、黒ずむ。胎土は精選されて砂粒をあまり含まず、焼成良好で褐色を呈する。2は胴部最大径28cm、現存高15cm強に復原される丹塗磨研土器である。外面は底面を除いて全面に丹塗りされていたようだが、内面は口縁部～頸部までで、胴部の丹は垂れたものである。胴部最大径の部分に口唇状突帯を巡らす。胎土は精選されて砂粒をあまり含まず、焼成良好で生地は褐色である。3は口径33cm、現存高16.3cmの甕である。胴部外面に粗いハケ目が残り、口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整を行う。4は⅓程欠くが、口径18.5cm、器高5.1cmを測る蓋である。2個一対の穿孔が2ケ所にある。内外面にハケ目が残るが、多くはナデ調整により消えている。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。5は口径10.9cm、底径14cm、器高16.7cmを測る完形の器台である。外面は粗いハケ目調整を行い、口縁部、底部はヨコナデし、内面は指でナデた痕跡が残る。胎土は精選されて砂粒をあまり含まず、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、内外面の一部に丹が付着している。

土製品（図版51、第116図－12）　径4.5cm、厚さ1.6cmを測る完形の紡錘車である。

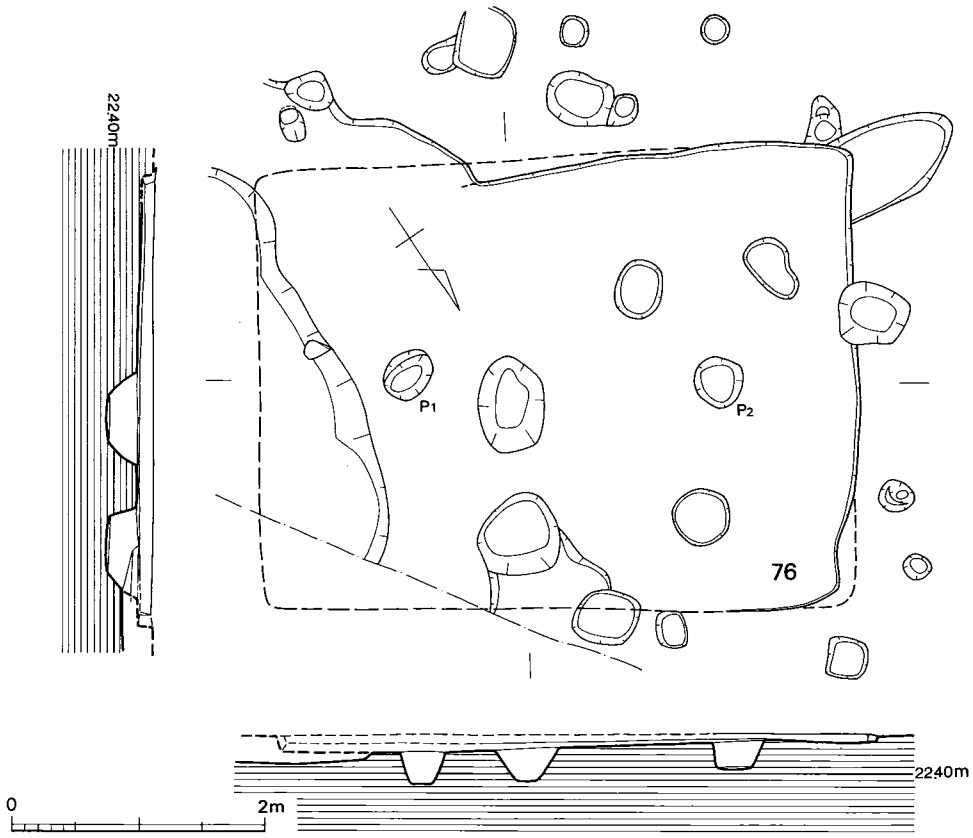
石製品（図版68、第127図－60）　花崗岩製の粗砥で、二次加熱のため赤変し、割れている。割れ面を除いて全面を使用している。

76号竪穴住居跡（図版30、第59図）

太平洋戦争時の太刀洗飛行場からの戦闘機の誘導路建設により、竪穴部は大きく削平されており、遺存状態は悪く床面も残らない。図は推定復原図である。竪穴部の平面プランは長方形を呈するようである。主柱穴はP_1・P_2であろう。両短壁にベッド状遺構が付設されていた可能性はあるが、詳細は不明である。また、炉は床面が削平されているため、当然残っていないが、屋内土壙はその痕跡が残ってもいいくらいの削平の深さでありながら、痕跡すら遺存しない。屋内土壙は当初から存在しなかった可能性が高いと思われる。

出土遺物　削平された時に他の場所に移動しており、出土品は極く僅かである。若干量の土器片が出土したのみである。床が削平されており、貼床下層からの出土品ばかりである。

土　器（第155図）　1は口径17.4cmに復原され、器高9cmを測る鉢である。口縁部はヨコナデされるが、体部・底部はナデ調整で指の跡が残る。胎土は精選されて砂粒をあまり含まず、焼成良好で明茶褐色～暗褐色を呈する。他にも土器片が出土しているが、図示にたえるものはない。



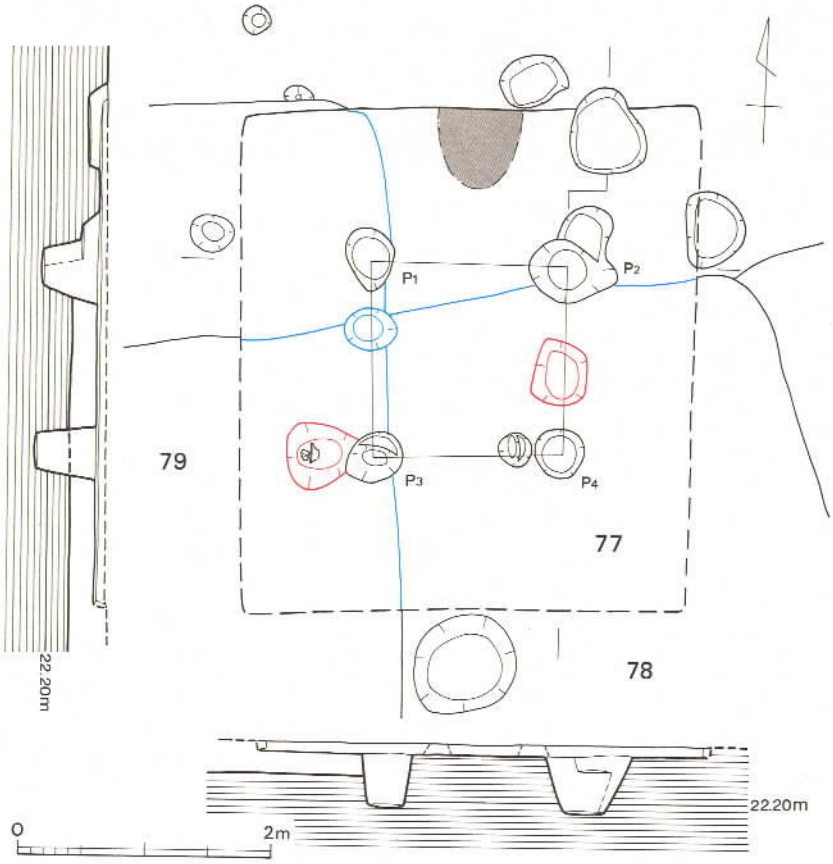
第59図　76号竪穴住居跡実測図（1／60）

77号竪穴住居跡（図版30、第60図）

不幸なことに、偶然にも、77～79号住居3軒の丁度切り合った部分に試掘トレンチを設定した。トレンチ内が真っ黒であったため、包含層と誤認して掘り過ぎてしまい、肝心な部分の切り合い関係は床面を検出するまで層位的にも不明確であった。また、77号住居は竪穴部の壁がほとんど残存せず、貼床面もすでに削平されてカマドの痕跡をとどめる程度であった。よって、主柱穴P_1・P_2を結んだ線と、カマド側の残存する竪穴部掘り込み線との距離から、平面プランを復原したものである。竪穴部は主柱穴P_1～P_4を結んでできる四角形とほぼ相似形の平面プランを想定している。

出土遺物　出土品は少量で図示できるのは、貼床下層から出土した須恵器1点だけである。

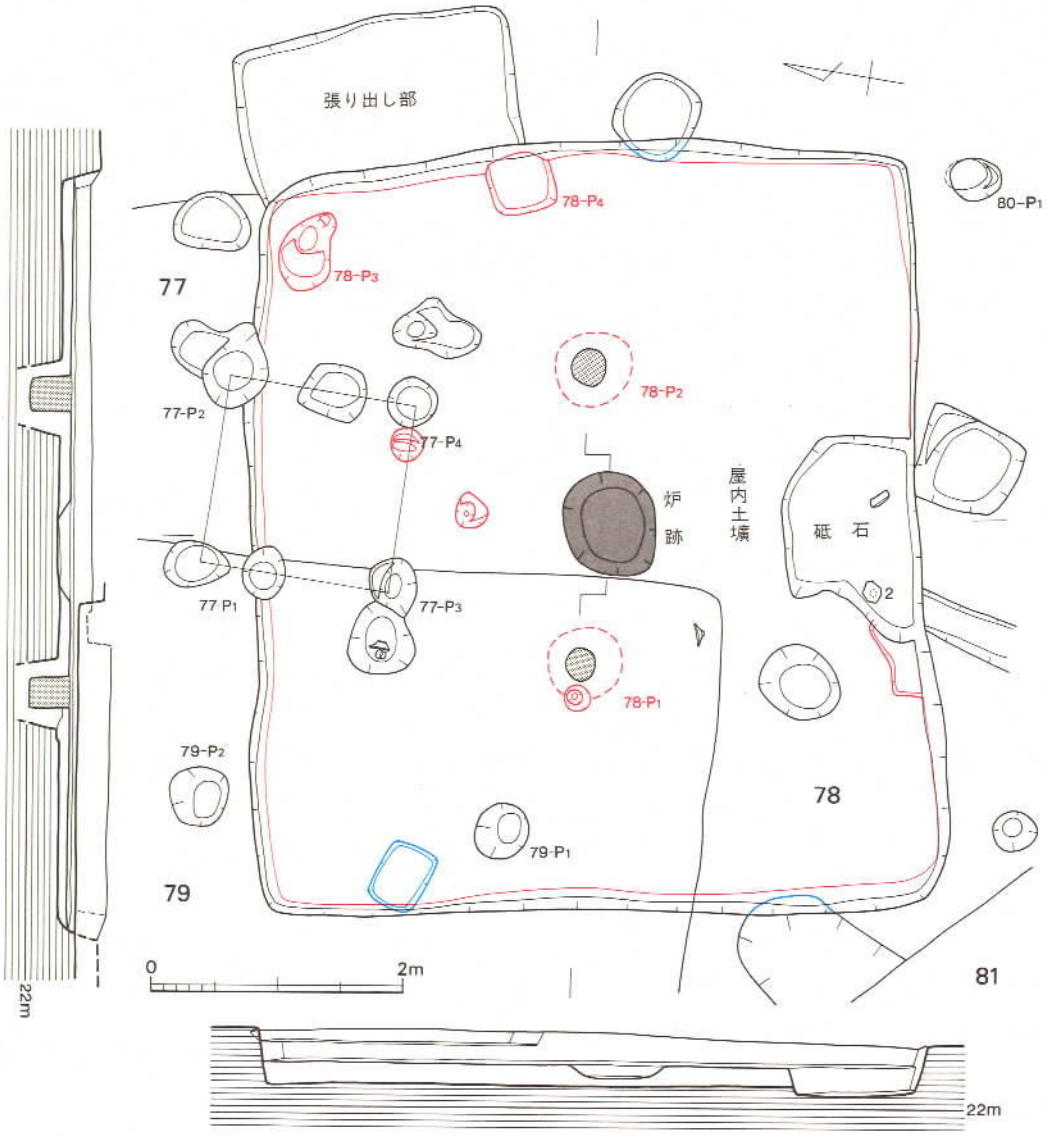
土　器（図版98、第156図）　口縁部の⅓ほどを欠く須恵器の坏蓋で、口径13.1cm、器高3.1cmを測る。つまみの天井部にはヘラ記号らしきものがある。砂粒を含み、焼成はあまく、内面は灰色、外面は黄褐色～黄灰色である。ロクロの回転方向は時計廻りである。



第60図　77号竪穴住居跡実測図（1／60）

78号竪穴住居跡（図版30、第61図）

77・79・80号住居に大きく切られるが、竪穴部の主要な部分は残っていた。平面プランは隅円の長方形で東壁の北側に〝張り出し部〟を持つ。床は貼床され、その面から南壁際中央に屋内土壙を、竪穴部の中央に炉を切り込んでいる。屋内土壙に流入した人工遺物はあるが、それに直接伴なう（関係する）出土品はない。炉の東西に主柱痕を検出した。検出面で想定される主柱の直径は25cm～30cmである。ベッド状遺構には明確ではない。なお、〝張り出し部〟は、本遺跡で検出したこの種の付属遺構としては、最もしっかりとしたものである。幅2.2m、奥行き1.1m、深さ4～7cmで、東側短壁の北側に位置する。幅は竪穴部長壁の幅狭は⅓である。〝張り出し部〟の床面には柱穴はない。しかし、貼床面の下層で検出したP_3・P_4は〝張り出し部〟の両短壁の前面に位置し、両者の関係は強いと思われる。〝張り出し部〟の住居全体の中での機能については、この部分での出土遺物もなく、明確にはし難い。

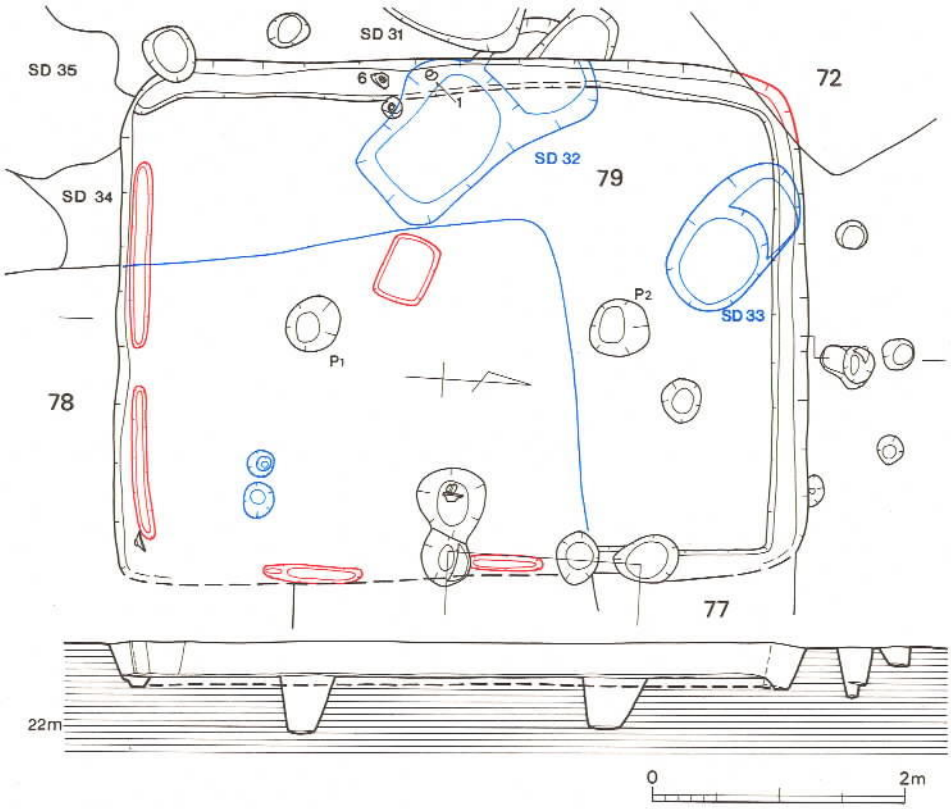


第61図　78号竪穴住居跡実測図（1／60）

出土遺物　屋内土壙に流入して土器2・砥石54が出土した。他の出土品はすべて覆土中から出土した。

土　器（第156図）　1は壺の小片で、口径17cmに復原される。調整はヨコナデである。胎土に金雲母等の砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。2は甕の底部で、粗いハケ目が残る。胎土に金雲母の砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

石製品（図版64・65・66、第124図－31・126図－54）　砥石３点、縄文時代の偏平打製石斧がある。石斧は後述する。31は砂岩製の仕上砥で、４面とも相当に使い込まれている。54も砂岩製の仕上砥で、４面とも使われている。使用面は鏡のようになめらかで光沢がある。図示していない他の砥石は粗い砂岩製のものである。



第62図　79号竪穴住居跡実測図（１／60）

79号竪穴住居跡（図版37、第62図）

竪穴部は隅円の長方形プランを呈する。住居の過半が他の遺構と重複しており、当初、78号住居との切り合い関係が不明であった。床面は貼床され、その面が竪穴部全面に及んだため、78号住居より新しいことがわかった。主柱穴はP_1・P_2であり、主柱痕は残ってなかった。壁に沿って壁小溝が巡る。掘り過ぎたため、一部は床面で幅広く図示している。屋内土壙は検出していないので、存在しないのであろう。

出土遺物　土器が出土している。１・６は西壁際の床面上で検出した。たぶん、本住居に伴なうものだと思われる。２・７は試掘調査のトレンチからの出土品で貼床下層のもので、あるいは78号住居のものかもしれない。他は覆土中から出土した。

土　器（図版98・99、第156図）　1は口径8.4cm、器高2.7cmの坏で、全面をナデ調整している。2はテズクネ土器で外面に指圧痕が残るが、内外面ともナデ調整を行う。ともに、金雲母等の砂粒を多く含み、焼成良好で、1は茶褐色、2は黄褐色を呈する。3は口径11.5cm、器高7.3cmの坩である。丁寧な作りで、細かいハケ目調整を行い、外面下半も丁寧にヘラ削りをしている。胎土に金雲母等の砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。4は二重口縁の壺である。口縁部の下半はヘラによる調整痕がある。頸部内面はハケ目が残るが、外面はナデ調整により僅かに残る程度である。頸部以下の内面はヘラ削りを行う。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。5は口径17.6cmで復原される壺で内外面にハケ目が残る。内面は頸部からすこし下からヘラ削りを行う。胎土に金雲母等の砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈する。6は鼓型、7は高坏状を呈する器台である。6は口径13.8cmに復原され、器高9.2cmを測る。内面はハケ目が残るが、外面はナデ消している。7は口唇部を欠くが、口径は14cm、器高は10.7cm程に復原される。脚柱部外面にハケ目が残るが、他はヨコナデ・ナデ調整を行う。ともに砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。

80号竪穴住居跡（図版30、第63図）

竪穴部の壁は戦闘機の誘導路のため、過半が削平され、貼床も全く残ってなかった。主柱穴はP_1～P_4である。カマドは遺存しないが、ほかの住居の例から、北西側壁に付設したものと考える。

出土遺物　著しく削平されているので出土品は少ないが、土製品・鉄製品が出土している。

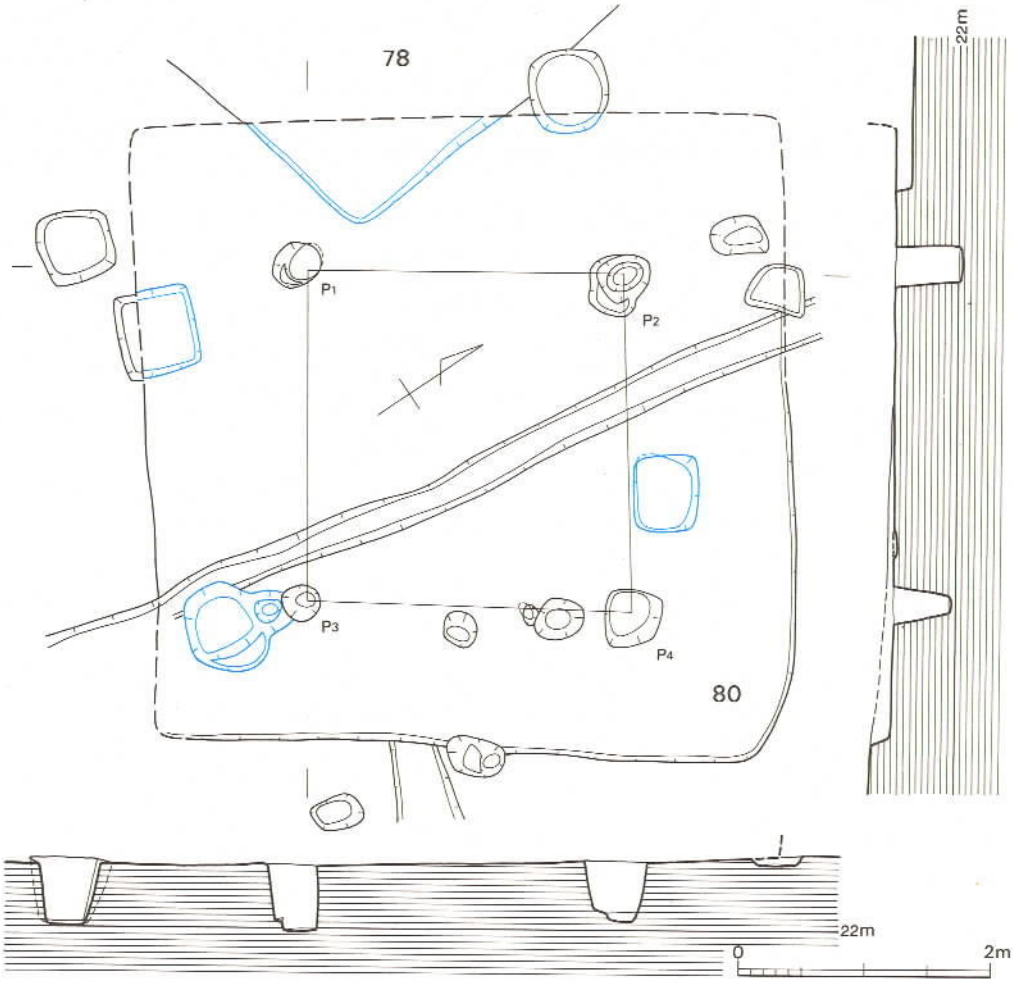
土製品（図版51、第116図－5）　長径2.1cm、短径1.7cmの土玉である。穿孔はされてない。

鉄製品（図版55、第119図－44）　摘み鎌の破片である。現存する横幅は4.2cm、縦幅は1.2cmである。木質は付着していない。よく使い込まれている。

81号竪穴住居跡（図版30・33、第64・65図）

竪穴部は隅円のほぼ正方形の平面プランを呈し、北西壁の中央にカマドを付設する。南東壁は4号周溝墓を切っている。床面は貼床をし、主柱痕が残る。貼床の下層で主柱穴P_1～P_4を検出した。また、各主柱穴を結んだラインと壁の間に深さ10cm～20cmの掘り込みを検出したが、中央土壙はなかった。

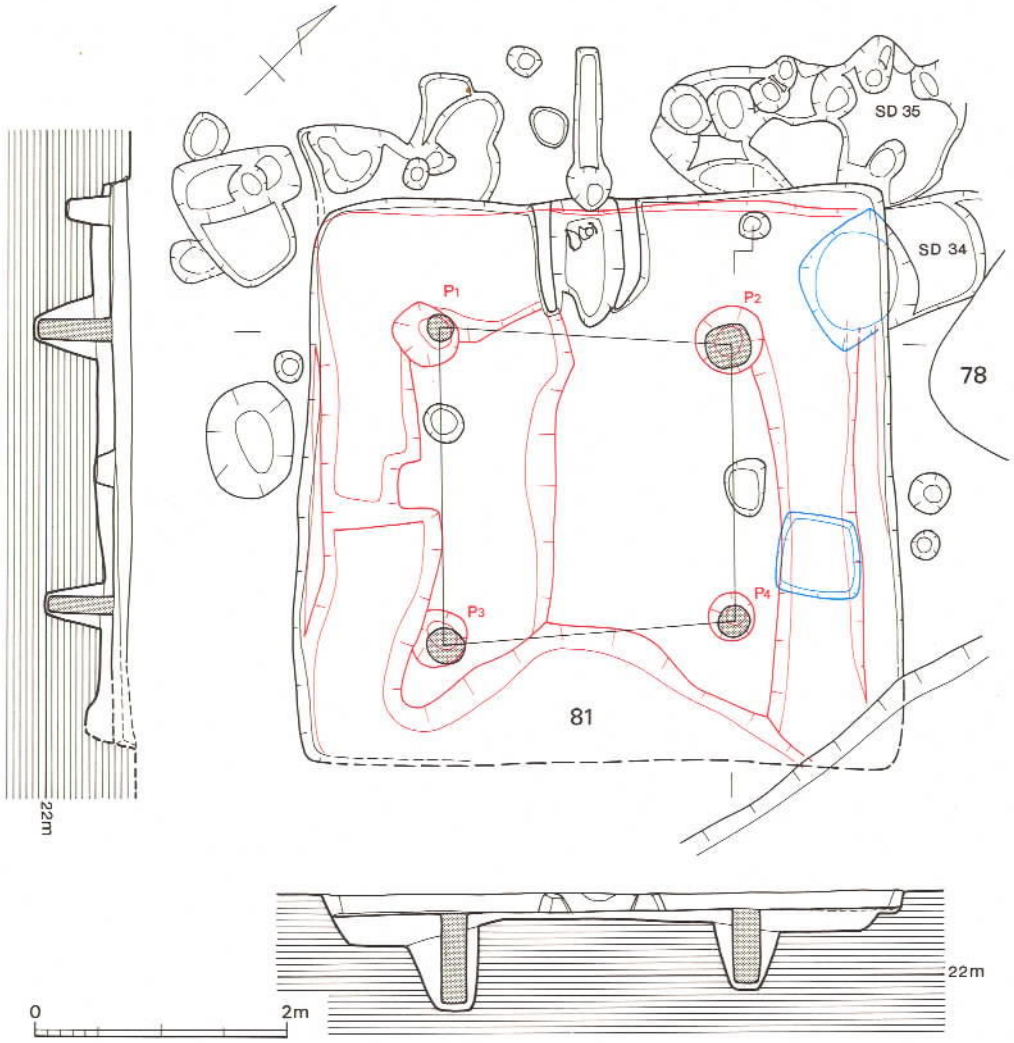
カマドは遺存状態がよく、煙道まで残っていた。作り替えたようで、支脚はカマド底面から12cm浮いており、その部分に作り替える前のカマドの袖部の土等が詰め込まれていた。支脚は傾いているが原位置を保ち、奥壁から30cm弱の部分に据えられている。焚き口付近には多量の焼土を検出した。



第63図　80号竪穴住居跡実測図（1／60）

出土遺物　カマドから甕の破片が、覆土中から土器が出土している。他に土製品・石製品が出土した。これらは投棄・流入品であり、本住居に直接に伴なうものではない。

土　器（図版99、第156図）　1～3は須恵器の坏蓋で口径14～14.6cm、器高は4cm前後である。1・3はほぼ完形品だが、1は口唇部を小刻みに打ち欠く。3個体とも口唇部に古式の様相を留めている。天井部は回転ヘラ削りを行い、内天井はナデ、他はヨコナデを行っている。胎土に小砂粒を含み、焼成良好で、内面は灰色、外面は灰をかぶり黒色を呈する。4は高坏で口径13.2cmを測る。整形・調整は坏蓋と同様である。5はテズクネ土器で、口径6.5cm、器高3.4cmのほぼ完形品である。内面は指圧痕の上から一部ヘラ削りを行う。胎土は小砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。6・7は須恵器を擬した土師器である。7は身として図示したが

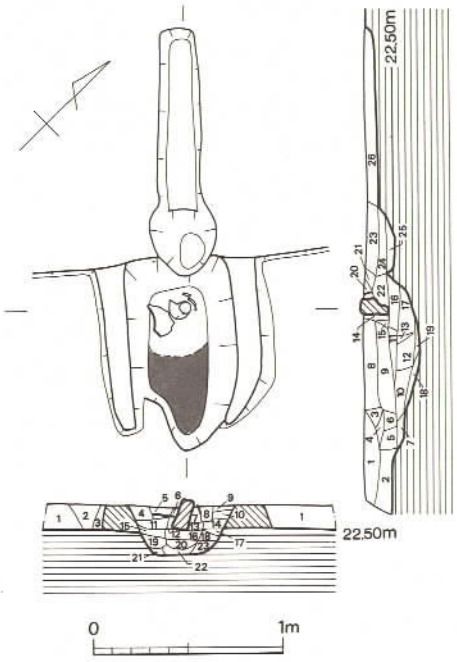


第64図　81号竪穴住居跡実測図（1／60）

蓋かもしれない。風化のため調整は不鮮明だが、7はヘラ削りされている。砂粒を多量に含み、焼成良好で黄褐色～明褐色を呈する。8はカマドの支脚で裾拡がりの円柱形である。一部に指圧痕が残る。

土製品（図版51、第116図－11）　貼床下層から出土した紡錘車である。直径3.8cm、厚さ1.6cmで、中央の孔は径5～6mmである。

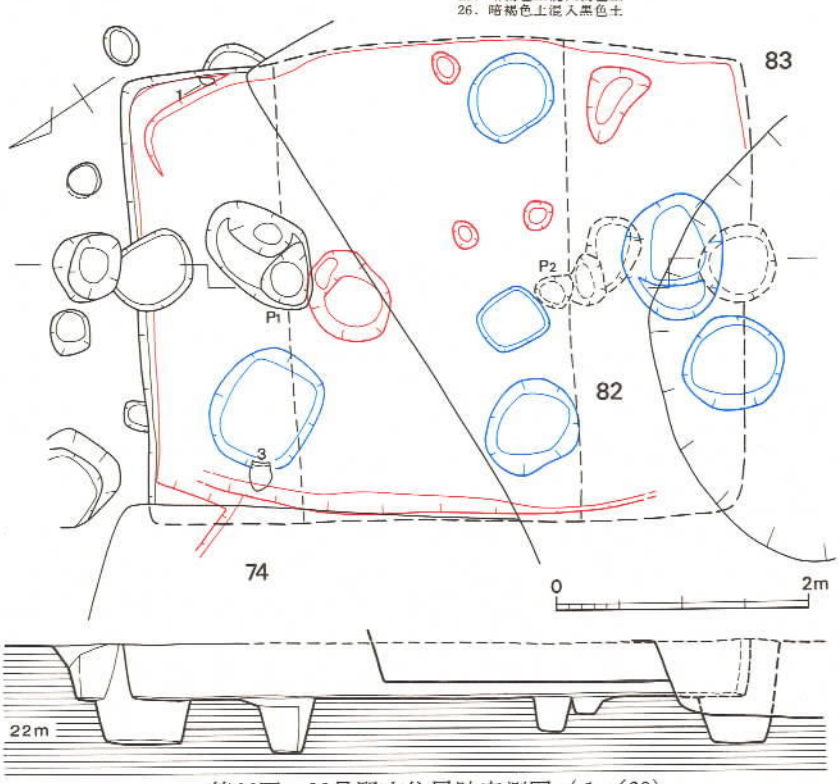
石製品（図版63～66、第124図－33、125図－48）　砥石3点、石庖丁1点が出土しているが図示したのは砥石2点（33・48）である。33は砂岩製の仕上砥で表・裏の2面を使用している。



1．暗灰褐色土混入黄白色砂質土
2．黒灰色土（砂粒混り）
3．明黄白色粘質土混入黒灰色土
4．明赤褐色粘質土混入灰褐色土
5．灰褐色土混入赤色粘質土（ブロック状）
6．明赤色粘質土
7．黒色土
8．明白黄色粘質土
9．明黄色粘質土
10．明黄色粘質土混入赤色粘質土
11．暗茶褐色土混入赤色粘質土（ブロック状）
12．暗褐色土混入白黄色粘質土（ブロック状）
13．暗茶褐色土混入赤色粘質土（ブロック状）ⓐと同じ
14．薄茶褐色土混入赤色粘質土（ブロック状）
15．暗黒褐色土
16．白黄色粘質土混入黒灰色土
17．暗黒褐色土
18．暗黒褐色土混入黄色砂質土
19．明灰褐色土混入黄色粘質土
20．白黄色粘質土混入暗茶、褐色土
21．黒色土
22．黒色土混入黄色粘質土
23．暗褐色土、混入褐色粘質土

1．暗茶褐色土
2．暗茶褐色土、黄色粘質土（ブロック状）
3．暗茶褐色土混入黄白色土
4．黒褐色土混入黄白色土
5．黒褐色土に黄色粘質土がブロック状に混入
6．黄色粘質土
7．黄色粘質土混入黒褐色土
8．黒褐色土
9．暗茶褐色土に赤褐色粘質土（焼土）がブロック状に混入
10．赤褐色土混入茶褐色土
11．薄赤褐色土
12．赤褐色粘質土
13．薄黒褐色土混入薄赤褐色土
14．黒灰色粘質土
15．白黄色粘質土混入黒灰色土
16．茶褐色土混入黒灰色土
17．白黄色粘質土混入暗茶褐色土
18．赤褐色炭混りの土
19．黒色土（炭が主）
20．暗褐色土混入赤褐色土
21．薄黒灰色土混入白色粘質土
22．黒灰色土
23．暗褐色土
24．暗褐色土混入黒褐色土
25．暗褐色土混入褐色土
26．暗褐色土混入黒色土

第65図　81号竪穴住居跡カマド実測図（1／40）



第66図　82号竪穴住居跡実測図（1／60）

刃部を研いだと思われる細い溝が2条認められる。48も砂岩製の仕上砥で割れた面を除いた3面に使用痕が残る。図示しなかった砥石は砂岩製の仕上砥で表面に異物が黒く付着している。石庖丁も図示してないが、貼床下層から出土した小片で、小豆色をしている。

82号竪穴住居跡（第66図）

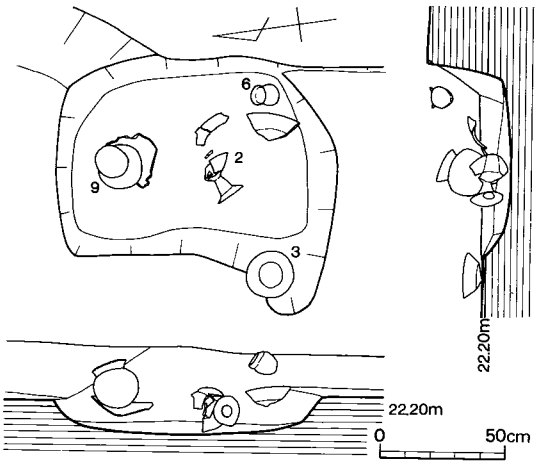
74・83号住居・18号廃棄土壙に大きく切られている。竪穴部は隅円の長方形プランを呈し、長壁が外に膨らんで弧を描く。両短壁にベッド状遺構を付設していたと推測するが、遺構として検出できなかった。主柱穴はP_1・P_2である。炉・屋内土壙は検出していない。

出土遺物　土器だけが出土している。1・3はベッド状遺構と想定する部分の床面で検出した。出土位置がP_1を挟んで対称的な位置にある。土器と床面の間に流入土を噛んでおらず、2点とも伴なう可能性がある。2は明らかに覆土中からの出土品である。

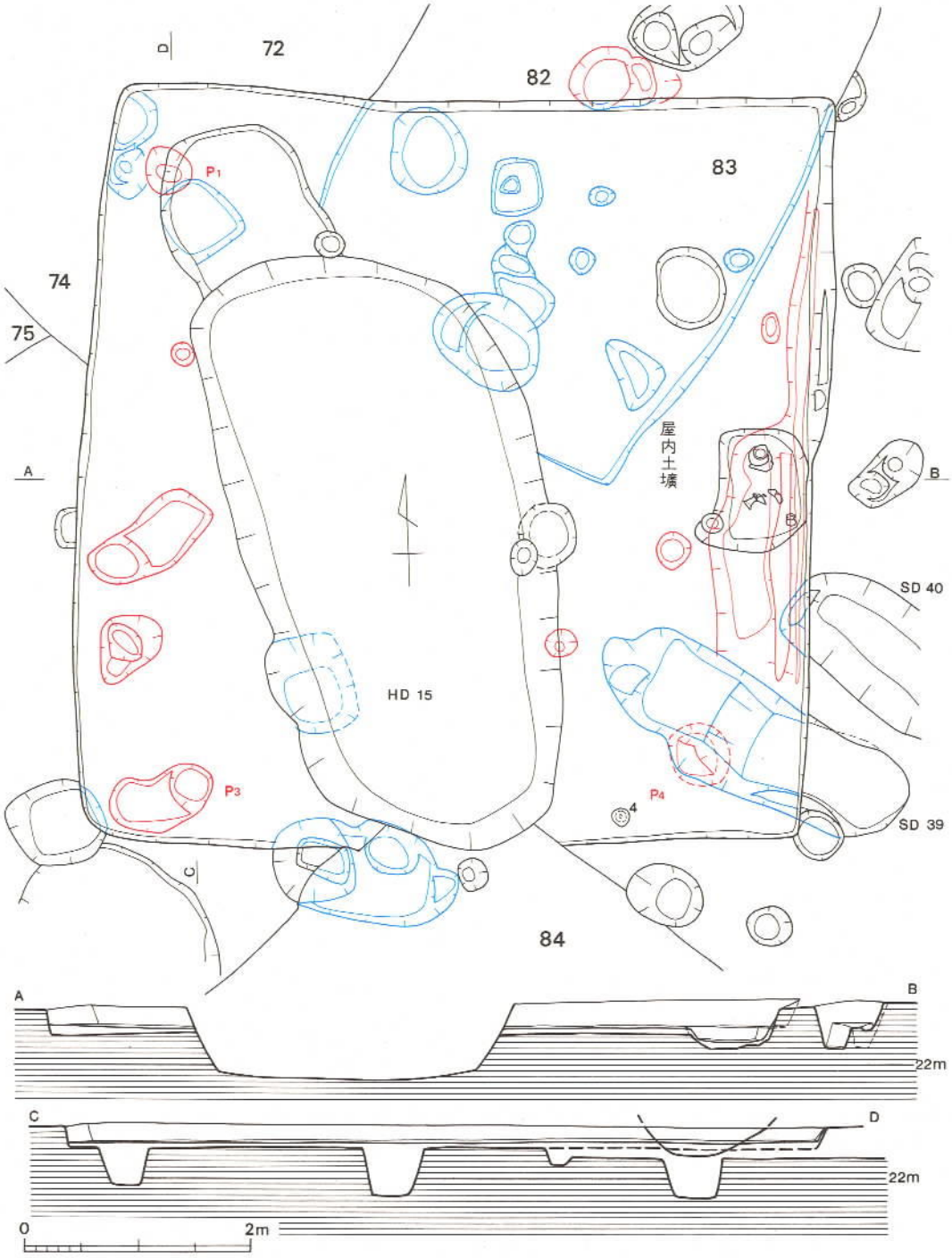
土　器（図版99・100、第157図）　1は異形の土器で、おそらく、アワビを擬したものであろう。テズクネ土器で完形品である。指圧痕が残るが、ナデ調整を行う。横幅14.7cm、縦幅12.4cm、深さ2.7cmである。胎土は金雲母等の砂粒を多く含み、焼成良好で淡明茶色を呈し、黒斑がある。2は½ほど残存するが、口径11.8cm、器高13cmを測る坩である。外面はハケ目が僅かに残るが内面はヨコナデ、ナデ調整で消えている。胴部外面下半はヘラ削りされる。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。3は口径16.4cm、器高21.6cmの甕である。底部は凸レンズ状を呈する。内外面にハケ目が目立ち、外面はハケ目の下にタタキ目が残る。内底面は指圧痕が残る。胎土に砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

83号竪穴住居跡（第67図）

竪穴部は隅円方形のプランを呈する。ほぼ中央を15号廃棄土壙に、南壁の一部を84号住居に切られ、74・82号住居、37～40号祭祀土壙、19号掘立柱建物を切っており、各時代の遺構が重複している。床は貼床を行い、東側壁際の中央に屋内土壙を掘り込んでいる。炉の存否は不明である。屋内土壙は角のとれた長方形で深さ20cm弱の浅いものである。出土した土器はすべて流入・投棄された状態で、浮いており、また、高坏はその時の衝撃で坏部がはずれている。これらの土器は



第67図　83号竪穴住居跡屋内土壙実測図（1／30）



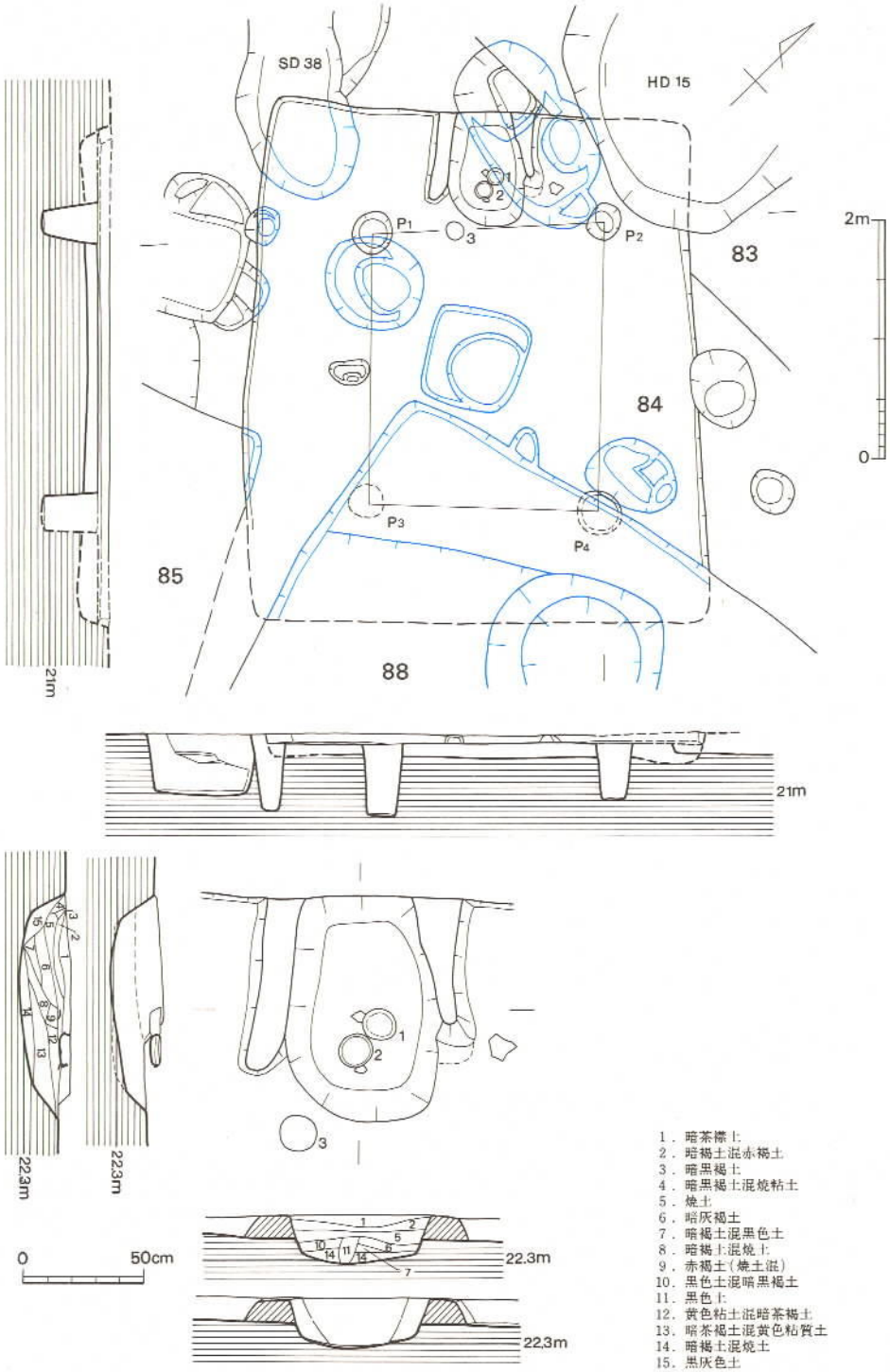
第68図　83号竪穴住居跡実測図（1／60）

この土壙に直接伴なうものではなく、土壙木蓋を被せていたと想定すれば、木蓋が腐った後に落ち込んだ可能性が高い。その場合、当初から木蓋の上に置かれていたのか、木蓋が腐る前にこの住居に捨てられたものか、が問題となる。土器6は浮いて確実に覆土中にあり、これらの土器が一括のものならば、住居廃棄後に捨てられたものであろう。主柱穴は、貼床下層で検出したP_1～P_4と想定するがP_2に相当する柱穴は検出していない。

出土遺物　土器と石製品（石庖丁）が出土した。屋内土壙周辺で検出した土器は上述のとおりである。他に図示した土器は4が床面から出土したが、他は覆土中から出土したものである。

土　器（図版100・101、第157・158図）　1～4の高坏は、ほぼ同様の作りで、4だけが小型で坏部の形態が異なる。ほぼ完形の2は口径17.8cm、器高14.3cmである。小型の4は口径15cmで、器高は14cmであろう。口縁部・脚裾部付近はヨコナデ、他の部分はナデ調整を行っている。胎土は細砂粒を含み、チ密であり、焼成良好で明茶褐色を呈する。5は口唇部を欠くが、口径10cm、器高8cm程に復原される。胴部下半の外面にハケ目が残るが、ヨコナデ、ナデ調整により、ハケ目の多くは消えている。胎土は細砂粒を含み、焼成良好で茶褐色を呈し、頸部に黒斑がある。6は口径9.3cm、器高8.6cmを測る完形の甕で、底部は僅かに認められる。外面はハケ目が残るがヨコナデ、ナデ調整により、ハケ目の多くは消えている。胎土は細砂粒を含み、焼成良好で茶褐色を呈し、黒斑がある。7は口縁部を半分欠くが他は完存する。口径17.8cm、器高10cm程に復原される。風化が著しく調整は不明だが、内面の頸部～底部はヘラ状器具でナデられたようである。砂粒を多量に含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。8は口径14.8cm、器高7.8cmに復原される鉢である。ハケ目が若干残るが、ほとんどナデ消されている。底部外面はヘラ削りを行う。砂粒を多量に含み、焼成良好で黄茶褐色を呈する。9は口径12.8cm、器高18.8cmを測る完形の壺である。胴部外面はハケ目調整し、内面はヘラ削りを行う。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黄茶褐色を呈し、黒斑がある。10は口径17.3cm、現存高22.5cmの壺で整形・調整は9と同様である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黄茶褐色を呈し、胴部下半の内外面は二次加熱のため黒変し、煤が付着している。11は½強を欠くが図上で復原でき、口径27.2cm、器高67.7cmを測る、二重口縁の壺である。胴部外面はハケ目が目立ち、同内面は底部付近はヘラ削りするが、他はナデ調整しハケ目が残る。口縁部～頸部はヨコナデ調整である胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黄茶褐色を呈し、黒斑がある。12は長胴の甕で口径30cm、現存高27cmを測る。内外面全体に洗いハケ目調整を行う。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。

石製品（図版62、第123図－25）　⅓程を欠く。現存横幅9.3cm、縦幅4.5cmである。石材は片岩で、緑灰色を呈す。



第69図　84号竪穴住居跡カマド実測図（1／60、1／30）

84号竪穴住居跡（図版35、第69図）

竪穴部のプランは長方形気味の方形を呈する。北隅を15号廃棄土壙に切られ、南東壁は85～88号住居を、西隅は38号廃棄土壙を切っている。床は貼床をし、北西壁にカマドを付設する。主柱穴はP_1～P_4であるが、P_3は88号住居と重複し検出できなかった。P_4は一部を検出した。カマドは支脚を取り外されており、内部および前面で土器を検出した。1・2はセットになるもので、カマドの埋土上に座った状況で検出した。支脚が取り外されていることから、カマド上部を壊した後に、置かれたものではなかろうか。3は床面に伏せた状況で検出した。この3点は須恵器坏を擬した土師器であり、カマドに関わる何らかのマツリに関するものであろうと推測する。

出土遺物　上述の土師器、須恵器を検出した。須恵器は坏身だけで蓋を伴わない。図示していないが、床面に置かれた状況で検出した。これらの土器は本住居に直接伴なうと考える。他に、縄文時代の石製品が出土している。

土　器（図版101、第159図）　1～3は須恵器坏を擬した土師器で完形品である。1は口径14.2cm、器高4.5cmの坏蓋だある。2は口径12.3cm、器高4.5cmの坏身で両者はセットである。2は内外面をヘラ磨きし、底部の広い範囲をヘラ削りする。1も同様だと思われるが風化るため外面は不明な部分が多い。3はヘラ磨きはなされないが、2と同様である。3点とも胎土は精製されて砂粒をあまり含まず、焼成良好で淡茶色を呈するが、黒漆を塗ったのか、一部が黒光りする膜状の異物が付着している。4・5は須恵器の坏身で、口径11cm、器高3.8cmである。底部のヘラ削りの範囲は狭い。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で暗灰色を呈する。

85号竪穴住居跡（図版35、第70図）

覆土中に多量の土器が投棄されており、86号住居とともに〝土器溜〟であろうと考えて調査をした。とにかく、レンズし状の覆土中、土器だらけであった。住居は切り刻まれており、実態は不明である。

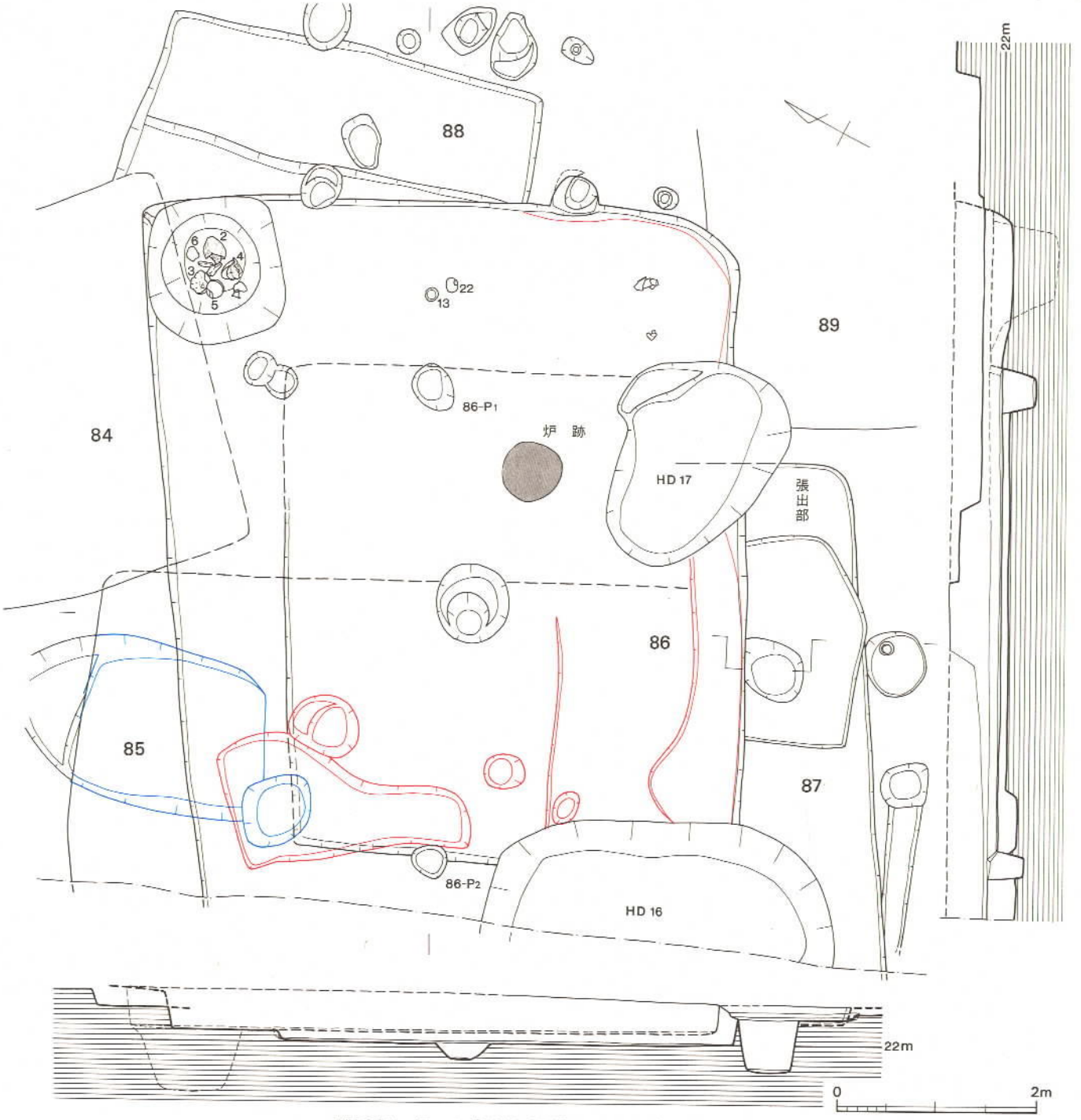
出土遺物　多量の土器と鉄製品、石製品が出土しているが、すべて投棄されたもので、本住居に伴なうものではない。住居を建てる時、下層の42号祭祀土壙を破壊しており、その土器も出土している。

土　器（図版101～102、第159～162図）　図示できたのは51個体で、出土総量の極く僅かである。1～19は鉢で、16は底部を穿孔し、17・19は脚台付である。底部は丸底が多いが、凸レンズ状を呈するもの（8・11・18）、平底のもの（9・16）、畿内第5様式に似た底部のもの（13～15）などバラエテイに富む。ハケ目を残すものが多いが、完全にナデ消したもの（2・6・9）、タタキ目が残るもの（10・12・13・18）、ヘラ削りされたもの（6・9・13・14・18）、テズクネ土器（1・3・5）などもある。最も小型の1は口径5.4cm、器高3.1cmで、大型の18は口径18.

2cm、器高17cmである。畿内第5様式的な13～15は、基本的な作り、整形・調整は同じである。器面の風化が著しいため、調整痕が残りにくい。13は内面はナデ、外面はタタキ目が残る。図上で完形に復原できる15は口径14.4cm、器高8.7cmである。19は脚部と鉢が直接には接合しないが、図上で推定復原した。その結果、口径21.2cm、器高16.4cm程になる。1～19は胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈するものが多い。1・3・4・12・13・18は黒斑がある。20は完形の壺で口径13cm、器高13.7cmである。外面に丹が付着する。胎土は精選され、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。21も壺でハケ目が目立つ。砂粒を多量に含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。22は略完形の深鉢で器高の風化が著しいが、内底面にハケ目が残る。砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。23は坩で口径9.5cm、器高11.8cmに復原される。砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。24は壺で内外面にハケ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通で淡褐色を呈する。25は口径26cmに復原される壺で内外面にハケ目が残る。胎土・焼成等は24と同様である。26～28は小型の甕である。内外面にハケ目が残る。ほぼ完形の28は、口径12.3cm、器高16.3cmである。ともに、胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、26・28には黒斑がある。29～35は長胴の甕で、32・33・35の大型品には口唇部や頸部の突帯に刻み目を入れ、加飾する。33は外面が風化しているが、他はこの種の甕特有のハケ目が目立つ。総じて胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。35～39は、本来は住居下層の42号祭祀土壙ものである。37を除いて丹塗磨研されている。36・37は壺、38は筒型器台、39は高坏の各々小破片である。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で37は暗茶褐色、他の生地は黄褐色である。40～49は器台である。40～42と、43～49の二種がある。前者はハケ目が、後者はナデ・タタキ目が目立つ。中でも44は中実で把手状のものを作り出した器台で異形である。これらは『器台』とされるが、所謂『器台』ではなく、二次加熱を受けたものが多い。総じて、胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で、黄褐色～茶褐色を基調とし、黒斑があるもの、二次加熱で変色するものが多い。50・51は高坏だが坏部を欠く。50は外面をヘラ磨きする。ともに砂粒を多く含み、焼成良好で、明茶褐色を呈する。

鉄製品（図版55、第119図－45）　摘み鎌で、一部を欠くが遺存状態は良好である。図示した平面図の他は復原模式図である。横幅は刃部側で10.7cm、木柄側で10.4cm、縦幅2.2cmである。鉄板の両側を折り曲げて木柄を挟んでおり、木柄は背部から1cm程挿入され、木目は刃部と平行に走る。木柄の厚さは3mmで横幅10.2cmであるが、背部からどの程度の出があるかは不明である。しかし、穂摘み作業を石庖丁から類推すれば、それは数cmであろう。摘み鎌では本遺跡の一級資料である。

石製品（図版60、第122図－10）　石剣の尖先部付近の破片である。断面は菱形を呈し、中央に鎬が通る。幅4cmで現存長9.8cmである。



第70図　85～87号竪穴住居跡実測図（1／60）

86号竪穴住居跡（図版35～37、第70図）

85号住居と同様に〝土器溜〟だと思って調査をした。図版36上の写真は出土土器の8割程を取り上げた後のものである。おそらく、この住居は廃棄後に〝ゴミ捨場〟になっていたと思われる。あとから考えれば、88号住居と16・17号廃棄土壙に切られた部分を除いて、土器の隙間に覆土があるような状況であった。85号住居と同様、凄じい程の土器の量であった。当初は竪穴住住という意識のもとに調査をしてなかったので、不明確な部分を多く残した。よって、屋内土壙の図も個別に図示しえない。

本住居の竪穴部は長方形を呈し、南西側の短壁は調査区外に延びる。床は貼床である。ベッド状遺構は全部を検出してはいないが、〝コ〟字型だと考える。主柱穴はP_1・P_2であろう。炉はP_1寄りの偏った所に検出した。屋内土壙は通常検出される南東長側壁際にはなく、北隅のベッドの上から掘り込んでいた。所謂、B型の屋内土壙である。この埋土上層で土器を検出した。木蓋の上に置かれ、蓋が腐食して落ち込んだ状況であった。この住居に伴なう数少ない資料である。南東壁中央付近に〝張り出し部〟を持つ。

出土遺物　上述のように、屋内土壙や覆土中から莫大な量の土器が出土したが、伴なう可能性のあるのは屋内土壙土上層の土器だけだろう。他に、投棄された土器の中から鉄製品・石製品が出土している。

土　器（図版103～106、第163～169図）　1～6は上述の屋内土壙埋土上層から出土した甕・壷である。底部は完全な平底ではなく、凸レンズ状に近い。基本的にハケ目調整され、3・5は外面の胴部下半をヘラ削りする。ほぼ完形の4は口径18cm、器高26.5cmである。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～淡茶褐色を呈し、2～6は黒斑がある。7～22は鉢型の土器であるが、17は甑で、19～22脚台が付く。7～11・14・15の内、最も小型の7は口径9.6cm、器高3.8cmで大型の14は同じく14.3cm、11.9cmである。10は畿内第5様式的な底部の鉢で口径12.4cm、器高7.6cmである。これらの土器の調整痕は様々で、14はハケ目、ヘラ削り、指圧痕、ナデ、ヨコナデの痕を全て残す。総じて、胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、9・11は黒斑がある。12はやや変わった形態の鉢で、口径10.8cm、器高6.8cmに復原される。内外面にヘラ磨きの痕が残る。胎土は細砂粒を多く含み、焼成良好で淡黄色を呈し、内面は黒色を帯びる。13・16・18は明確な口縁部を持つ鉢である。ともにハケ目が目立つ。19～21は脚台の付く鉢である。20は口径19.4cm、器高16.7cmのほぼ完形品である。器高にハケ目を残すが、多くはナデ消されている。13～16・18～21は総じて、胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。23～33は壷である。23は口径14cmで、外来系の土器である。24は完形品で口径9.2cm、器高10.3cmである。25～30はほぼ同形の壷で完形に復原される28は口径30.6cm、器高44.7cmである。ともにハケ目が目立ち、30の口辺外面は櫛状器具で加飾している。この壷だけ、口縁部の加飾と大きさが他の壷と異なる。これらは、胎土に多量の砂粒を含み、焼

成良好で黄褐色～茶褐色を呈する。26・28は赤色顔料が付着し、丹を塗っていた可能性がある。31～34は、ほぼ同型の壷である。31は外面に僅かにハケ目を残す。32・33は大きさが違うだけで同じ作りであり、頸部に突帯を巡らし、刻み目を施して加飾する。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。34・35は小型の甕でほぼ完形品である。口縁部を除いてほぼ同型で、底部は平底に近い。35は胴部下半の外面をヘラ削りする。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で34は黄褐色、35は暗茶褐色を呈し、双方とも黒斑がある。36～39は中型の甕で、ほぼ完形の38は口径17.6cm、器高23.1cmである。各々形態が異なり、37は口縁部を折り曲げず、直立している。底部は37・38は凸レンズ状である。内外面をハケ目調整するが、37の外面はハケ目が見られず、タタキ目が残り下半をヘラ削りする。36はハケ目の下にタタキ目が残り、胴部下半はヘラ削りを行う。これらは胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色～褐色を呈し、黒斑があり、36・38は煤が付着している。40・41は大型の甕で、内外面をハケ目調整する。ともに、頸部と胴部下半に突帯を巡らし、40の頸部突帯びを除いて刻み目を入れる。完形に復原される40は口径33.8cm、器高45.3cm、41は口径49.7cmである。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で40は黄褐色で丹らしきものが付着し、41は淡茶色を基調とするが、大きな黒斑がある。42～44は長胴の甕で、小片の反転復原図である。ハケ目が目立つが42は外面の頸部以下にタタキ目が、43は頸部以下のハケ目の下にタタキ目が見られる。胎土に多量の砂粒を含み、焼成普通程度で明茶褐色～暗茶褐色を呈する。45は床面下層の42号祭祀土壙のものが現位置から遊離して、流入したものであろう。甕の大型品で丹塗磨研土器である。46は高坏状の器台で、口径19.5cm、器高12.3cmを測る完形品である。内外面とも摩滅してハケ目が僅かに残る。細砂粒を多く含み、焼成はややあまく、黄褐色を呈するが、二次加熱を受け赤変する。47～48は器台でハケ目が目立つ。47は口径18.1cm、器高23cmである。ともに、胎土に多量の砂粒を含み、黄褐色を呈するが47は黒斑がある。50～56は高坏である。ミガキや暗文のはいるものと、ハケ目調整のものとがある。前者は大小があり、坏部は丸味を帯びるが（51は摩滅してミガキや暗文が残らない）、後者（53）の坏部は直線的である。52の脚部は他のものと形態が異なる。56は実際は接合しない同一個体を図上で復原したもので、口径36.6cm、器高25cm強ほどである。ともに、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色～褐色を呈し、黒斑がある。

鉄製品（図版54・57・58、第117図－1・119図－32・120図－49）　1は弥生時代終末期頃に一般的に見られる無茎の鉄鏃で、逆刺を欠くが、全長6cmほどに復原され、幅は2.6cmである。矢柄の緊縛孔は銹のため不明である。基部は矩形をなさずに円弧を描く。32は鍬先であるが他の出土資料と比べて横幅が狭い。図で左側の折り返しを欠き、横幅は5.6cmに復原され、縦幅は5.2cmである。49は本遺跡で唯一の鎌の完形品である。刃部側で長さ17.4cm、幅は3.5cm前後である。右利きの人用のものである。

石製品（図版62、第123図－21）　緑泥片岩製の石庖丁の破片である。

87号竪穴住居跡（図版35、第70図）

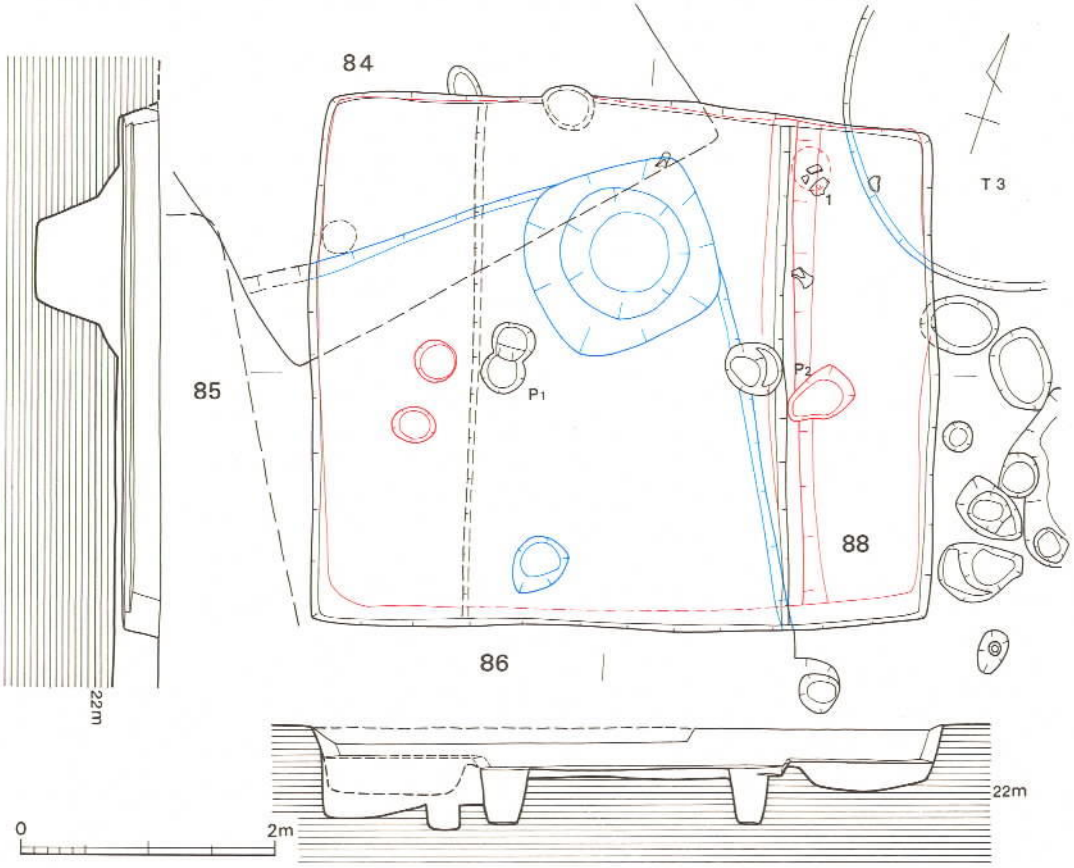
85・86号住居に大きく切られて、詳細は不明である。

88号竪穴住居跡（図版35・37、第71図）

西北隅を84号住居にきられる。86号住居の大量の投棄土器等はこの住居に含まれていない。86号住居との関係で掘り間違え、西側のベッド状遺構は実際には検出していない。竪穴部のプランは西壁が東壁より長い台形状の長方形で、〝ニ〟字型のベッド状遺構を配すると思われる。床は貼床を行う。炉・屋内土壙は検出していない。

出土遺物　土器・土製品・鉄製品・石製品が出土しているが、本住居に伴なうものはない。

土　器（第170図）　1は裾部径24cm、器高9.6cmで、天井部に径4.2cmの孔がある。一応、蓋であろうと考えている。内外面をハケ目調整するが、外面は目が粗い。胎土は砂粒をあまり含



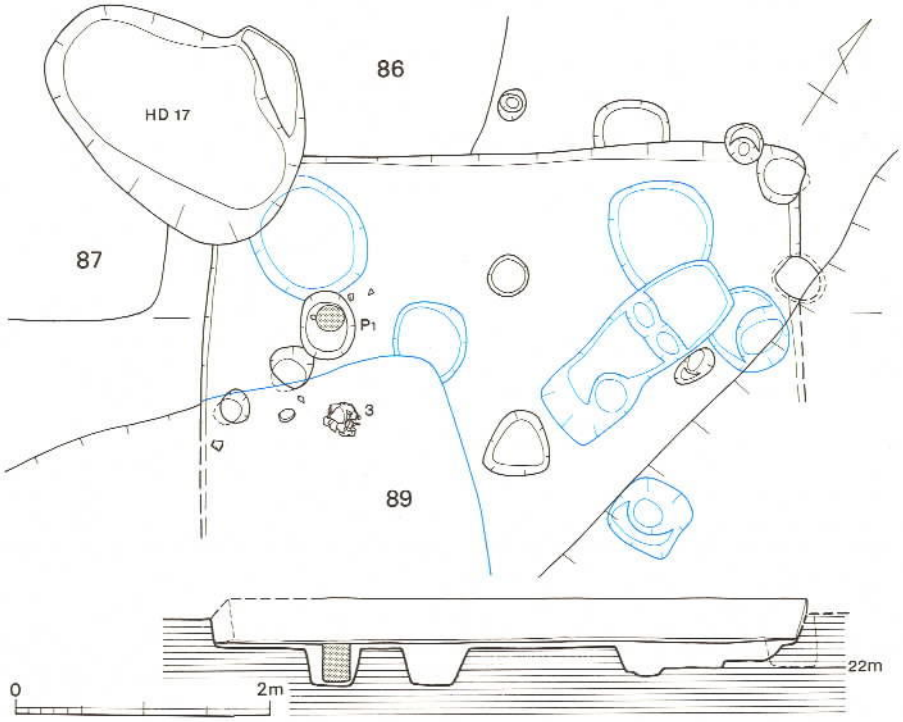
第71図　88号竪穴住居跡実測図（1／60）

まず、焼成良好で茶褐色を呈し、黒斑がある。2は畿内系の甕で、微妙な土器である。小片の反点復原図で、口径14.4cmである。ハケ目調整され、内面の頸部以下はヘラ削りを行う。砂粒をやや多く含み、焼成良好で黄土色を呈し、黒斑がある。3は甕の小破片で口径14.2cmほどに復原される。ハケ目調整され、外面はヘラ削りされる。胎土は細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

土製品（図版52、第116図－6）　直径26mmのほぼ正球の玉で、偏った部分に径5mmほどの穿孔を行う。

鉄製品（図版54、第117図－2・3）　2は茎の大部分を欠く。現存長は4.3cm、幅1.4cmである。3は茎尻を欠くが、長さ7cmに復原され、幅1.7cmを測る。ともに、北部九州の弥生時代の鉄鏃の系譜に乗らないもので、畿内系の鉄鏃であろう。

石製品（図版63）　図示していない。石庖丁の小破片である。小豆色をした石材で作っている。



第72図　89号竪穴住居跡実測図（1／60）

89号竪穴住居跡（図版37、第72図）

106号住居と重複し、南半部を戦闘機の誘導路建設の際に大きく削平されている。プランは方形を呈すが、規模等と主柱穴配置は不明である。が、P_1は主柱穴の一部であろうと推測する。床は僅かだが貼床を行っている。

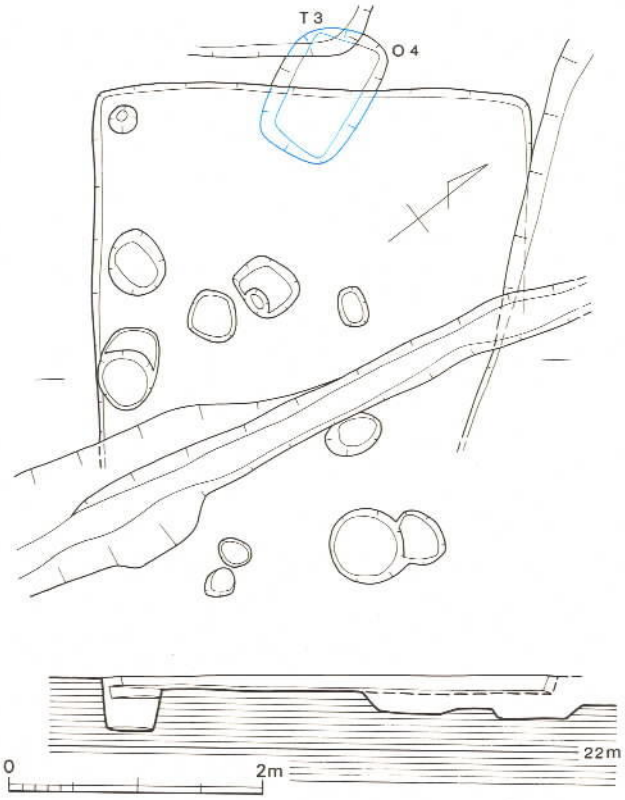
出土遺物　土器と砥石が出土しているが、本住居に伴なうと思われるのは土器3だけであろう。

土　器（図版106、第170図）　1はテズクネ土器で口径8.4cm、器高6.8cmを測る。指圧痕の上からナデている。2は口径16.2cm、器高6.3cmに復原される鉢である。ハケ目が僅かに残るが、ナデ調整等で消えている。ともに、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、1は黒斑がある。

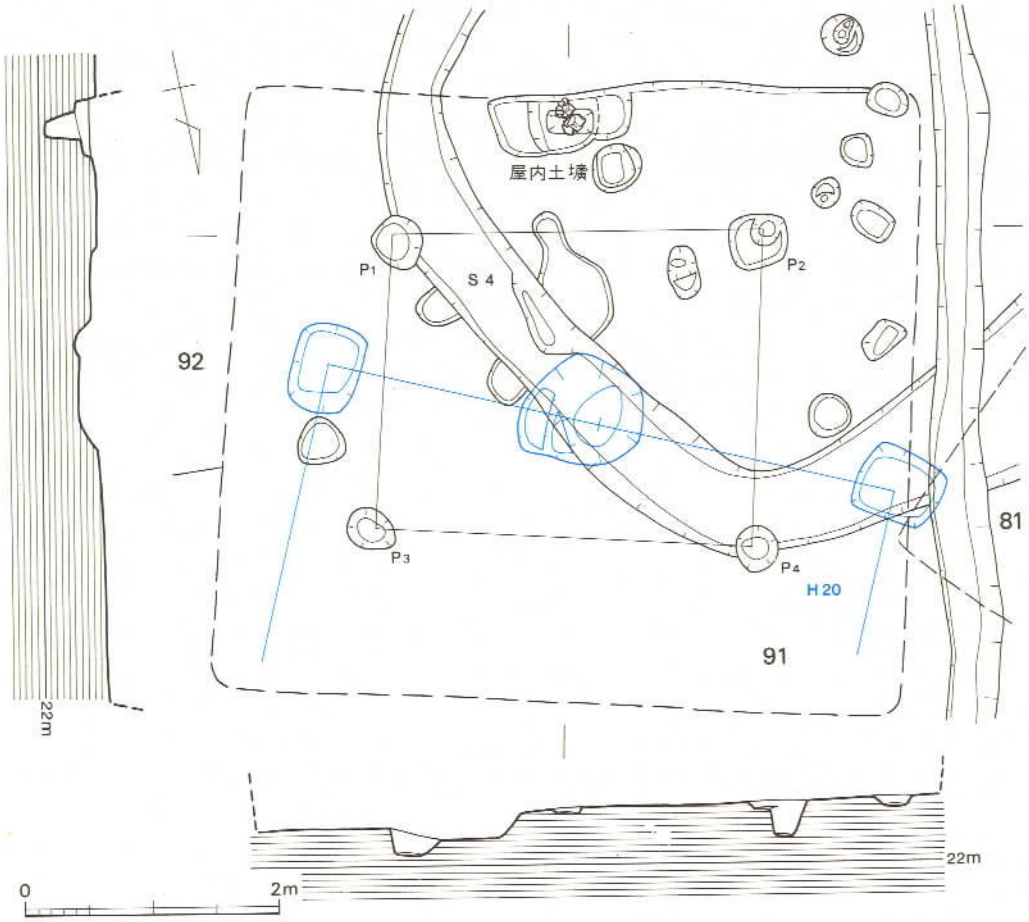
石製品（図版64、第124図－37）　砂岩製の仕上砥の破片資料である。

90号竪穴住居跡（図版37、第73図）

南半部を戦闘機の誘導路建設の際に大きく削平されている。竪穴部のプランは方形を呈するようであるが、規模は不明である。床は貼床を行っている。詳細については不明な部分を多く残している。



第73図　90号竪穴住居跡実測図（1／60）

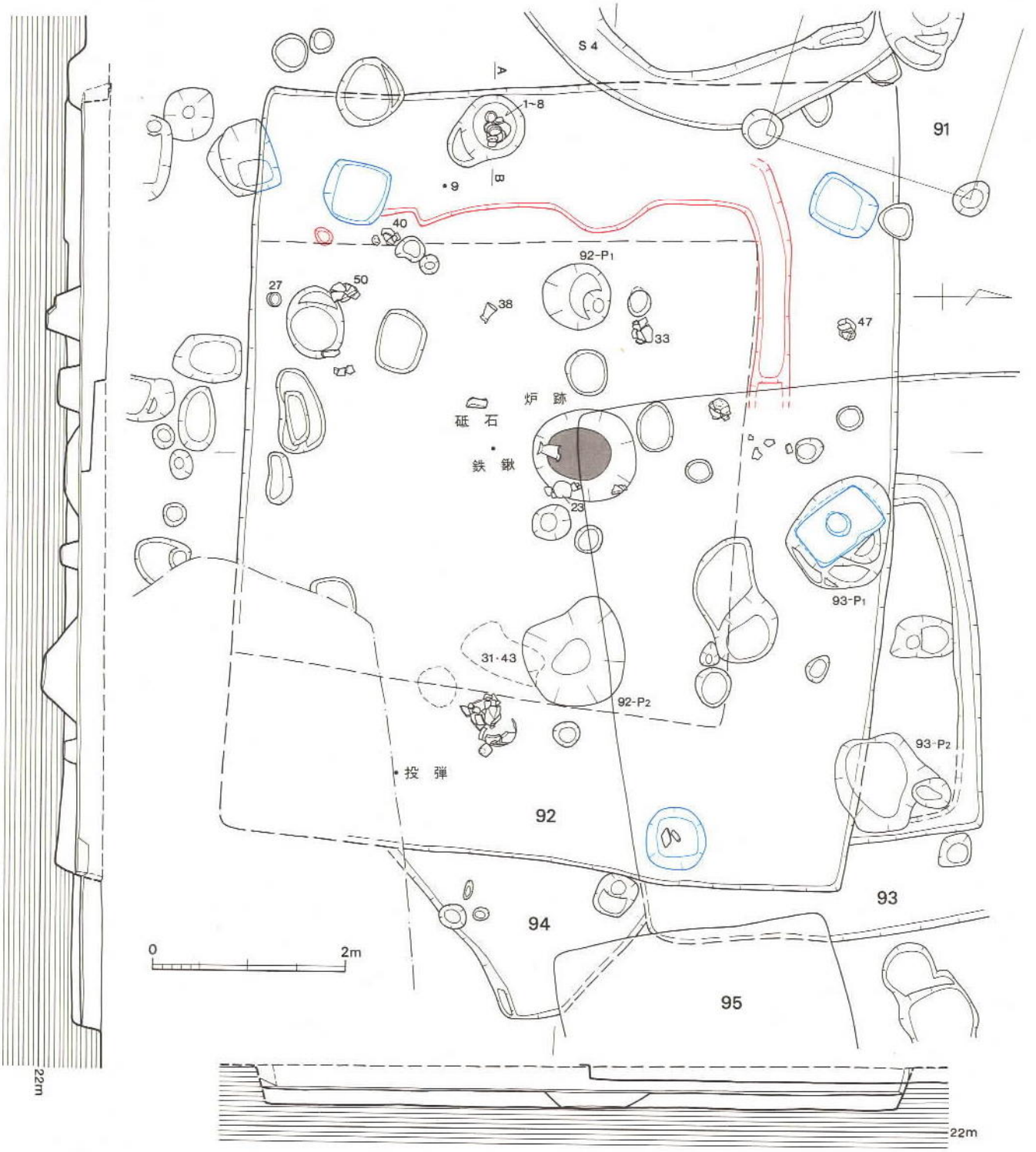


第74図　91号竪穴住居跡実測図（1／60）

91号竪穴住居跡（図版37、第74・75図）

戦闘機の誘導路により、竪穴部の壁はほとんど削平されていた。よって、貼床面も残らない。主柱穴はP_1～P_4であろうと思われ、それらを結んだ線と、南西に僅かに残る竪穴部の壁とから、推定復原したのが掲載図である。プランは隅円の長方形を呈するようで、南壁際の中央付近に屋内土壙を掘り込んでいる。ベッド状遺構はもちろん検出していないが、当初から付設していなかったと考える。本遺跡の4本柱の住居はこの種遺構を併設しないし、ベッド下層の溝状の掘り込みも検出していないからである。また、小ピットが多く認められるが、整然とした配置は示さず、補助柱つにいては不明である。

屋内土壙は一辺が50cm程の隅円方形のプランを呈し、深さは現状で10～15cm程度である。底面の中央に深さ28cmのピットがあるが、屋内土壙より古いものである。屋内土壙で土器を検出したが、土壙の底面から5～10cm浮いており、土器の下は自然堆積土であった。すなわち、土

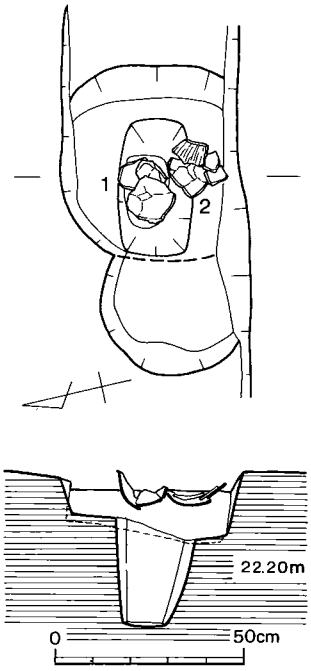


第76図　92号竪穴住居跡実測図（1／60）

器は屋内土壙の木蓋が腐食した後に落下した状態である。よって、土器は屋内土壙に直接伴なうものではない。この土器自体も、生活時に木蓋の上に置かれていたものか、住居を廃棄した後に投棄・流入したものかは判断に苦しむ。土器以外の出土遺物はない。

出土遺物　上述の土器が出土しただけである。

土　器（第170図）　1は口径14.3cmに復原され、器高14.4cmを測る甕である。底部の器肉は厚く、口縁部に向って次第に薄くなる。内面は粗いハケ目調整を行い、底部をナデている。外面はタタキ目が残り、下半はタタキ目をナデ消している。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈するが、二次加熱により変色している。2は胴部下半だけを残す。甕であろうと考える。底部の形状が特異で、底部外面の中央をヘラ状器具で削って上げ底風にしている。外面はタタキ目がよく残り、内面はナデ調整を行い、ヘラ状器具によりナデた跡がある。胎土・焼成色調は1と同様で二次加熱により変色している。

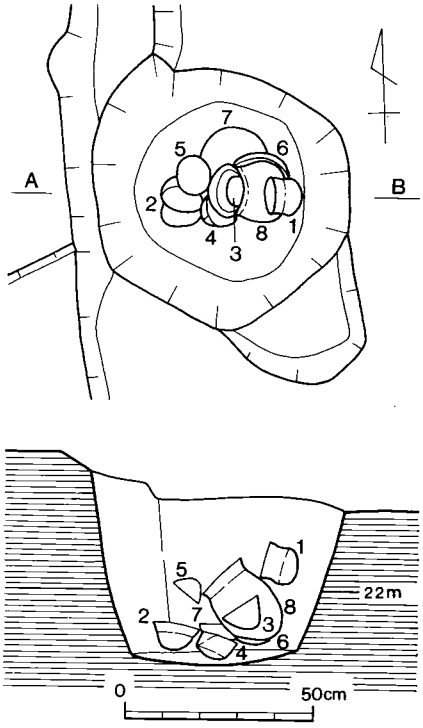


第75図　91号竪穴住居跡屋内土壙測図（1／20）

92号竪穴住居跡（図版37～39、第76・77図）

竪穴部は91・93号住居・4号周溝墓、20号掘立柱建物に切られ、昭和にはいって戦闘機の誘導路建設の際に西壁側を大きく削平されている。竪穴部の遺存する壁から推定復原すれば、プランは台形気味の長方形を呈するようである。この住居も86号住居と同様に、廃棄後に大量の土器が竪穴部内に投棄されていた。床は貼床を行い、中央に炉を切り込んでいる。屋内土壙は通常検出される部分、本住居では南壁中央にはなく、西短壁際の南に偏した所に掘り込んでいる。ベッド状遺構は実際にはすべてを検出したわけではないが、他の例から〝コ〟字型を呈すると推測する。主柱穴はP_1・P_2で柱痕は残っていなかった。

屋内土壙は不整の矩形で、径68cm、深さ50cmである。中には8個体の完形の土器が落ち込んでいた。



第77図　92号竪穴住居跡屋内土壙実測図（1／20）

その内訳は坩(1)、鉢(2～7)、甕(8)である。これらは壙底に土砂が堆積した後に落ち込んだようで、すべて底から浮いて出土した。また、畿内第5様式に近似した底部を持つ鉢3が甕8の中から割れずに検出されている。鉢の口径と甕頸部内径は2cmほどであり、偶然、落ち込んだと考えるよりも、最初から中に納めていたと考える。甕の内部で鉢が浮いた状態だが、中にナニカが入っていたものかも知れない。他の鉢とは作りの違う鉢3だけは特別の扱いを受けたのであろう。これらの土器はその出土状態より、屋内土壙の木蓋の上に置かれていたものであろうと推測する。

出土遺物　土器・土製品・鉄製品・石製品が出土している。屋内土壙の土器（1～8）は本住居に伴なうと考える。24・32・41・42・44の5個体は主柱穴P_2から出土した。この土器群は主柱を引き抜いた後に埋納したものと思われる。また、床面でかなりの量の土器を検出し、本住居に伴なう可能性が高いと現場で判断した土器が遺構図に図示したものである。すなわち、9・27・38・40・43・50（33は不明確）の6個体である。以上、19個体の土器が本住居に伴なうだろうと考える。他に図示した出土品は覆土中で検出し、鉄製品や石製品も同様である。

土　器（図版106～109、第170～174図）　1は口径10cm、器高8cmの坩である。口縁部はヨコナデし、外面はハケ目が残る。細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。2～7は鉢で、2は口縁を外側にかるく折り曲げる。3は畿内第5様式的な底部で、4は平底である。この3個体はハケ目調整されるが、底部付近にタタキ目を残す。砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。5はテズクネ風の土器で、底部は尖る。全面、ナデ調整である。胎土は精選され、焼成良好で明茶褐色を呈する。6・7はよく似た鉢である。ともに外面をヘラ削りするが、7はハケ目が残る。大型の7は口径16.4cm、器高6.7cmを測る。ともに細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。8は口径15.8cm器高17.8cmの完形の甕で外面はハケ目の下に僅かにタタキ目が残り、内面は頸部以下は強いナデ調整を行う。砂粒を多く含み、焼成良好で、黄褐色を呈する。以上の屋内土壙出土の土器のうち、6・7を除いて黒斑がある。9～14はテズクネ風の鉢である。9は口径2.2cm、器高1.9cmの極小品である。11は口唇部をつまみ上げて薄くし、直立気味の口縁部につくっている。口径6.2cm、器高5cmである。14は先述の5と極似している。これらは胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、12～14は黒斑がある。15～23も鉢である。15・23はハケ目がよく残るが、他の土器はナデやヘラ削りにより、ハケ目を消しており、残っていても15・23ほどではない。これらのうち、最小の15は口径11.8cm、器高6.5cm、中型の20は15cm・5.6cm、大型の23は21cm・11.6cmである。17は口縁部直下の内外面に赤色顔料を塗布している。17の胎土は精選されているが、他は　砂粒を多量の砂粒を含み、焼成良好で明黄茶褐色～茶褐色を呈し、黒斑がある。24は口縁部が直立する甕で、口径11.5cm、器高13cmを測る。口縁部はヨコナデを行い、外面は上半部に粗いタタキ目を残して下半部をヘラ削りする。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。

25～30は外反する口縁部を持つ鉢である。形状は各々、変化に富む。29は脚台が付くものであろう。26・27は甕に近い。ハケ目の上からナデており、ハケ目の残らないものもある。小型品の27は口径11.7cm、器高8.8cm、中型品の28は20.3cm・11.2cm、大型品の30は24.6cm・24cmである。26は胎土が精選されるが、他は砂粒を多量に含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、黒斑がある。31は高坏の坏部に酷似した鉢で、口径30.7cm、器高11.9cm、を測る。器面は摩滅気味で、屈折部と底部付近にハケ目が僅かに残る程度である。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、黒斑がある。32は高坏で脚部を欠き、口径25.1cmを測る。内外面をハケ目調整し、内底面はナデ調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。33は脚台付きの甕で脚台を欠く。口径15.8cm、現存高18cmを測る。口縁部はヨコナデを行い、以下の内外面はハケ目調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通で淡茶褐色を呈する。34～36は壺である。34は口縁部と底部を欠くが、弥生時代前期のものであろう。外面は胴部中位以下にハケ目が残る。また、同内面にも工具の跡が残っている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、黒斑がある。35は二重口縁の壺であろう。頸部は突帯を巡らし、刻み目を入れて加飾する。胎土にあまり砂粒を含まず、焼成良好で褐色～黄褐色を呈する。36は胴部の破片で内外面に細いハケ目調整を行う。外面の下半は工具によりナデている。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。37・38は器台で本住居では多量の器台が投棄されていた。37は口径16.9cm、器高20.9cmを測る。内外面を丁寧にハケ目調整する。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で灰褐色を呈し、煤が付着している。38は口径10.2cm、器高16.8cmを測る。下半部にハケ目が残るが、多くはナデ消されている。細砂粒を多く含み、焼成良好で明赤茶褐色を呈する。39～48は球胴の甕である。39は外面に粗いハケ目が残り、内面に工具痕が残る。40は口径12.7cm、器高13cmである。器肉が厚い。全体に器面が摩滅しており、外面にハケ目が僅かに残る程度である。41・42は口唇部を欠くが、ほぼ全形を伺うことができる。41は口径14cm弱、器高12.5cm程に推定復原される。ハケ目が残るが、内面の頸部以下はナデ消している。42は口径11cm、器高13cm程である。ハケ目が残るが、内面はナデ消している。43は底部を欠くが、口径12.5cm、器高15cmを測る。内外面をハケ目調整し、内面は胴部上半を、外面は下半をナデてハケ目を消している。44は底部が凸レンズ状に近い形をし、口縁部～頸部の外面はハケ目の下にタタキ目が見られる。胴部下半の内外面はヘラ削りを行っている。口径15.9cm、器高15.1cmのほぼ完形品である。45は口径15.2cm、器高15.7cmである。口縁部はヨコナデ、頸部以下はナデ調整を行うが、内面にハケ目が残る。46は底部が厚く平底の甕である。口径14cm、器高18.1cmを測る。内外面をハケ目調整するが外面にタタキ目が残る。47は口径15.4cm、器高20.2cmで内外面を丁寧にハケ目調整を行う。48は口径17.3cm、器高18.9cmである。内外面はハケ目調整するが、内面の頸部以下はナデ調整により、外面の底部付近はヘラ削りにより、消えている。39～48の甕は、胎土に多くの砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、

黒斑がある。49～52は長胴の甕である。49は底部が凸レンズ状を呈し、完全な丸底ではない。口径15.7cm、器高17.2cmである。胴部下半の外面はヘラ削り、内面はナデにより、ハケ目を消している。50は口径14cm、器高18.6cmである。外面はハケ目がよく残るが、内面は口縁部を除いてナデ消している。51は底部を欠くが口径19cm、器高24.5cmに復原される。内外面はハケ目調整するが、胴部下半は擦過痕が認められる。52は大型の甕で底部を欠くが、口径39.2cm、器高47cmに推定復原される。頸部と胴部に突帯を巡らし、口唇部とともに刻み目を入れて加飾する。全体にハケ目調整を行うが、外面の底部付近はヘラ削りを行っている。なお、ハケ目の下に僅かにタタキの痕跡が残っている。これらの甕は胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、黒斑がある。

土製品（図版52）　覆土中から検出した投弾で、完形品である。

鉄製品（図版54・57、第117図－4・7・10、第118図－26）　鉄鏃2点、鍬先1点、不明鉄製品が1点出土している。4は身幅2.6cm、現存長5cmの鉄鏃で茎の部分が折れ曲っている。7は大型鉄鏃で身幅3.9cm、現存長10.5cmである。10は不明鉄製品で側面観は湾曲している。断面は矩形を呈し、図の上方は細く作り、折れ曲った部分は板状である。26は鍬先で片方の折り返し部分を欠くが、横幅12.3cmに復原され、縦幅6.3cmである。床面から3cm浮いて出土した。

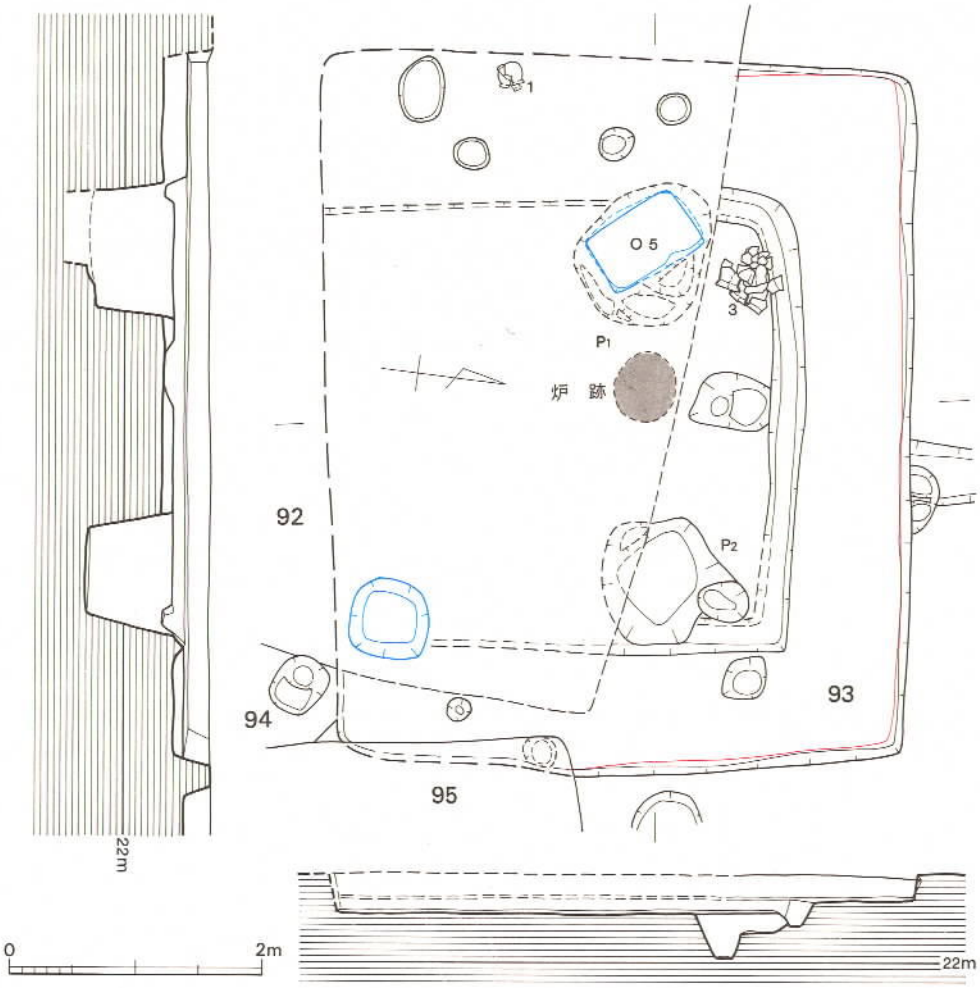
石製品（図版67・69、第126図－52、第127図－63）　52・63は砂岩製の仕上砥である。52は割れており、現存長19cm、同幅10.7cmである。63も割れており、現存長29.7cm、同幅7.2cmの大型品である。

93号竪穴住居跡（図版37～40、第78図）

92号住居と重複しており、調査中は両者の切り合い関係を把握しきれなかった。92号住居への投棄土器が93号住居の範囲にはなく、本住居の掘削時に掘りあげられたようで、掲載図は竪穴部の南東隅を利用して推定復原した。本住居は92・94号住居を切り、95号住居に切られている。竪穴部のプランは正方形を志向した長方形を呈する。床は貼床で〝コ〟字型のベッド状遺構は客土して造ったものである。主柱穴はP_1・P_2で、P_1は前代の落とし穴状遺構（O3）を切っている。床面中央付近に炉を切り込んでいる。屋内土壙は検出していない。また、ベッド際に壁小溝を検出した。

出土遺物　土器の他に、土製品・鉄製品・石製品が出土している。土器は、1が西側ベッド上に密着して、3は壁小溝の北西隅付近の床面に、各々、潰れた状態で出土しており、本住居に伴なうものと考える。その他の出土品は覆土中から出土した。

土　器（図版110、第174図）　1は球胴の甕で、口径13.5cm、器高14.5cmを測り、ほぼ完形品である。器肉が厚く、安定感がある。内外面ともハケ目は見られず、口縁部はヨコナデ、頸部～胴部中位はナデ、それ以下はヘラ削りを行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色



第78図　93号竪穴住居跡実測図（1／60）

を呈する。2は口径13.1cm、器高17.9cmの甕で外面はタタキ目が残り、胴部下半はヘラ削りを行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。3は口径27.2cm、器高34.8cmの甕で外面は頸部付近にハケ目を残すが、以下はヘラ磨き風の調整を行い、胴部下部はナデている。内面は胴部下半の器面が剝落しているが、全面にハケ目調整を行っている。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通低位度で茶褐色を呈するが、外面は煤が全面に付着し、黒ずんでいる。

土製品（図版52）　覆土中から出土した投弾の破片である。

鉄製品（図版57、第118図－28）　床面から20cm程浮いて覆土から出土した鍬先である。片方の折り返し部分を欠くが横幅11.5cm、縦幅5.9cmを測る。

石製品　縄文時代のもので、まとめて後述する。

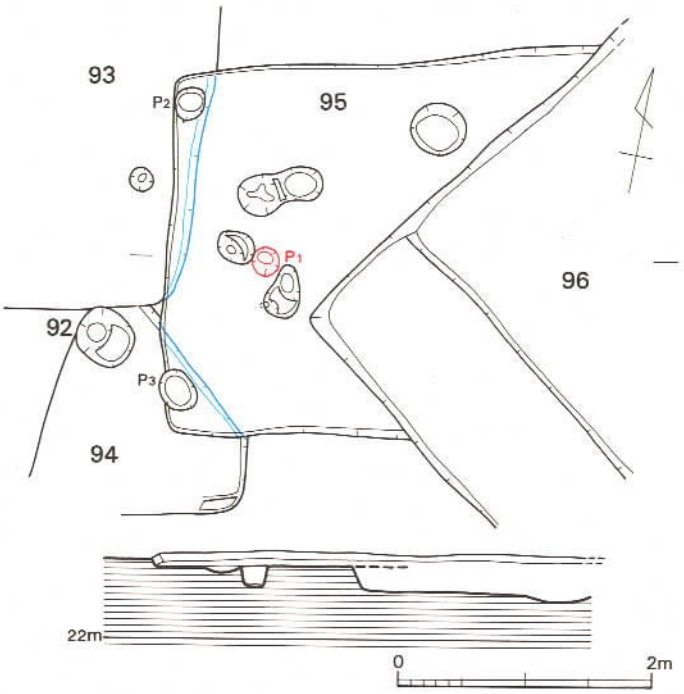
94号竪穴住居跡（付図１）

92・93・95号住居に大きく切られ、南側は調査区外に延びるため詳細は不明である。

95号竪穴住居跡（図版40、第79図）

東側を96号住居に大きく切られ、西壁は92～95号住居を切っている。竪穴部のプランは長方形を呈し、床は貼床である。主柱穴は明瞭ではないが、一応、P_1と96号住居に削平されて遺存しないが、２本柱であろうと推測する。また、竪穴部の隅に主柱穴配置を想定すれば、P_2・P_3も候補に上る。いずれにせよ、東半部が不明なため、主柱穴について不明である。炉や屋内土壙は検出していない。

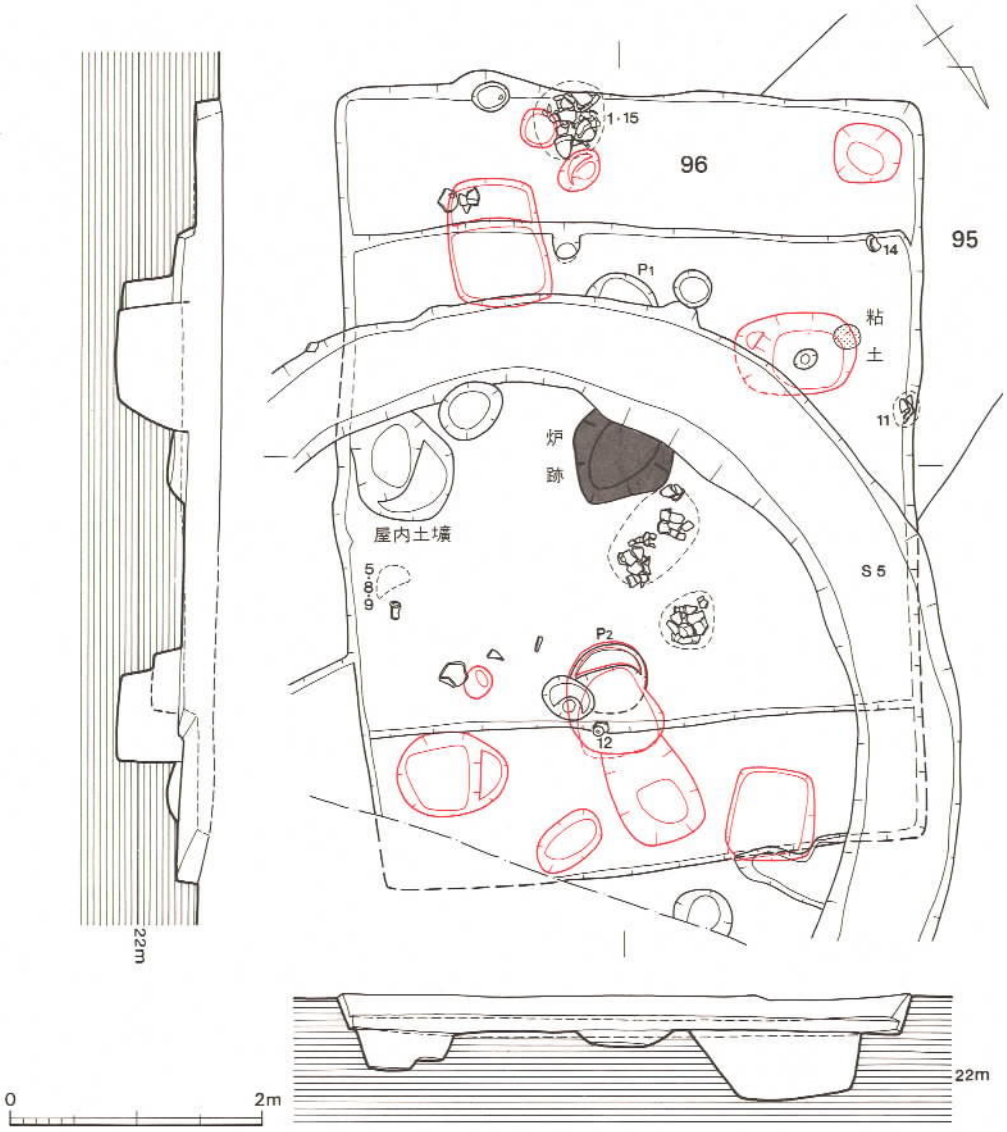
出土遺物（図版51）　図示できるものはない。覆土中から把手であろうと思われる、破片が出土している。長さ14cm、径４cmでヘラ削り後、ナデている。



第79図　95号竪穴住居跡実測図（１／60）

96号竪穴住居跡（図版40、第80図）

竪穴部の中央を５号周溝墓に大きく切られ、97号住居を切る。平面プランは、台形状を呈し、北西壁が南東壁に比べてやや短い。床は貼床で、量短壁にベッド状遺構を付設する。床面の中央に炉を切り込み、南東壁際中央に屋内土壙を掘り込んでいる。屋内土壙からは何も出土していない。主柱穴はP_1・P_2で床面で検出した。また、北西壁寄で灰白色の粘土を検出した。



第80図　96号竪穴住居跡実測図（1／60）

出土遺物　まとまとった量の土器と、鉄製品・石製品が出土した。土器は炉と主柱穴P_2の間で検出したもの（図示していない）、匙状土器8・7、甕15が本住居に伴なうが他は覆土中から出土した。これらの土器以外は鉄製品・石製品も含めて本住居に伴なわない。

土　器（図版111、第175図）　1～6は鉢で2だけほぼ完形品である。大型品の1は口径20cm、器高10cm程度に復原され、内外面にハケ目が残る。完形の2は口径14.8cm、器高7.5cmで内面はハケ目調整されるが、外面は上半部はナデ、下半部はヘラ削りを行っている。図上で完形

に復原される深目の鉢４は口径12.8cm、器高6.6cmを測るが、全体に風化が著しく調整は不明である。１～６の鉢は胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～褐色を呈し、２は黒斑がある。７は全体の¼程を残し、口径12cm、に復原される。ハケ目、ヘラ削りの後にヘラ磨きを行っている。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。８・９は匙状の土器でほぼ完形品である。出土地点を詳しく図示していないが、土器５の横で床面に置かれたと思われる状況で検出した。８は径８cmの皿部に3.4cmの柄がつき、９は同7.7cm・４cmである。柄の形状が少し異なるが、作りはテズクネ風でよく似ている。内面はハケ目調整され、外面と柄はナデにより、ハケ目が僅かに残る程度せある。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈する。10は口径28cmに復原されている二重口縁の壷の、小破片である。内外面のハケ目はヨコナデ、ナデにより、かなり消えている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。11は脚台を欠く無頸壷で、口径8.4cm、胴部最大径18.9cm、現存高17.7cmを測る。内外面をハケ目調整し、外面はハケ目の上からヘラ磨きを行う。なお、内面な下半のハケ目は細いものである。胎土は砂粒を若干含む程度で精選され、焼成良好で褐色を呈し、胴部最大径部分に黒斑がある。12は脚台の破片である。13は高坏の脚部でハケ目調整の後、外面はヘラ磨きを行っている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で赤褐色を呈し、脚裾部に黒斑がある。14は器台の小破片である。15は底部を欠くが、口径22.2cm、現存高29cm強を測る長胴の甕である。内外面はハケ目調整されるが、下半部はナデ消されている。

鉄製品（図版55、第117図－21）　小型の刀子で、茎は鹿角装である。茎尻は銹で不明確だが、完結しているように見える。全長9.2cm、刃部長5.2cm、同幅1.4cmで４mmほどの関があり、柄に続く。

石製品（図版64・66、第124図－35・36、第125図－50）　３個体とも砂岩製の仕上砥である。35はベッドの客土中から出土した。図の表裏・側面を使用する。36は図の左側面に径12mm程の、断面が半球状の刳り込みがある。50は薄い砥石で図の表裏・側面を使用する。刃部を研いだと思われる、幅２mm、深さ１mm、長さ4.3mmの細い溝状のものがある。すべて、流入、投棄品である。

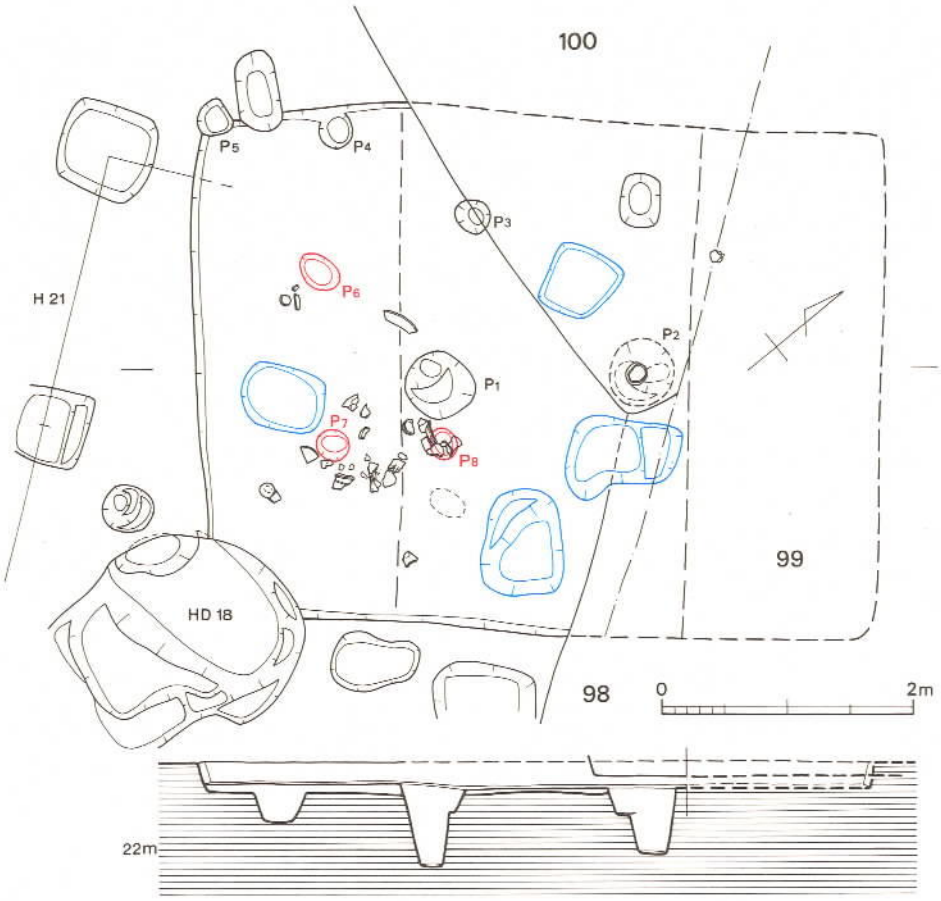
97号竪穴住居跡（付図１）

調査区東南隅に検出した住居で、96号住居の東側の僅かに顔を出すだけである。大半は調査区外に延びるようで、詳細は不明である。

98号竪穴住居跡（付図１）

99号住居、５号周溝墓に切られ、大半は調査区外に延びるようで、詳細は不明である。

出土遺物　土器を若干量検出したが、本住居に伴なうと確信できるものはない。



第81図　99号竪穴住居跡実測図（1／60）

土　器（図版110、第176図）　1は口辺部を欠く甕で、内外面を丁寧にハケ目調整する。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、二次加熱により変色する。

99号竪穴住居跡（第81図）

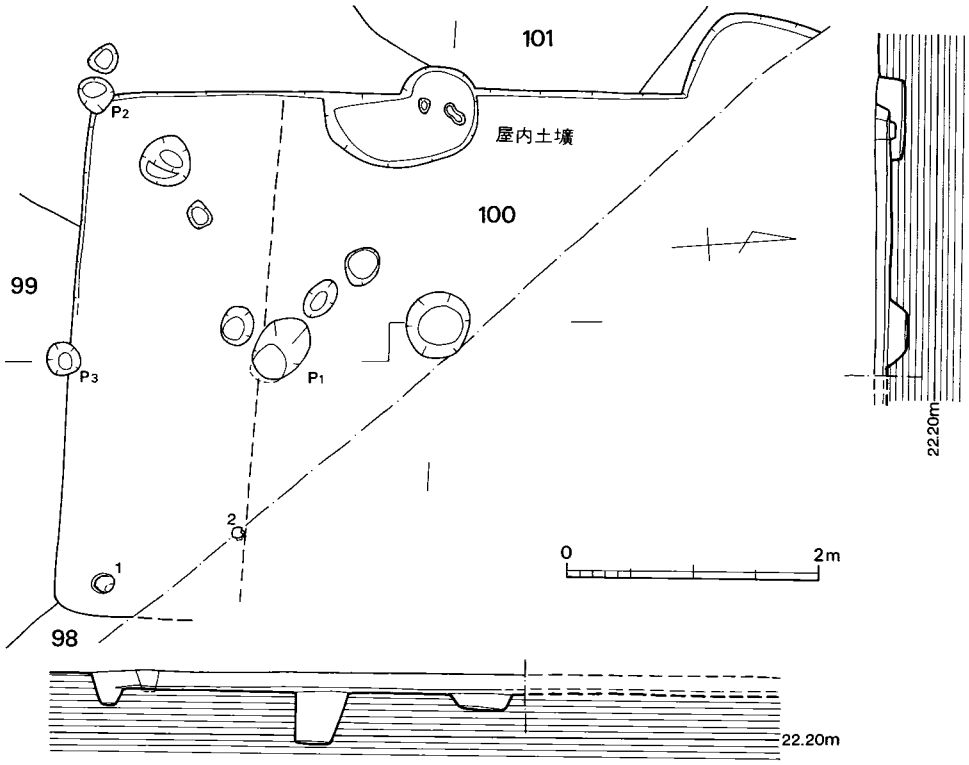
南隅を18号廃棄土壙に、北西壁を100号住居に切られ、北東短壁側は調査区外に延びる。竪穴部は隅円の長方形プランになるようである。主柱穴はP_1・P_2で掘り方は床面で検出した。南西側短壁にベッド状遺構を付設しており、東北壁側でも同様であったろう。竪穴部内、同壁際に小ピットを検出した。P_3は100号住居に伴なうものであろうが、P_6・P_7はベッドを取り除いた下層で検出し、その心々距離は1.4m程でベッドの幅とほぼ同じで、ふたつのピットを結んだ線は短壁に平行する。北西壁のP_4は、それに対応するピットが南東壁際にないので積極性に欠けるが、本住居に伴なうものであろうと推測する。P_5についても同様である。P_8は貼床下層で検

出し、ピットの上に土器を検出しているので、明らかに本住居内で生活している時は床面下に埋っていただろう。本住居は全体像が不明なため、P_8に対応するピットの存否について確言はできないが、本住居に関係するのではなかろうか、と推測する。

なお、屋内土壙・炉については検出していない。

出土遺物　土器・土鈴が出土している。ともに、覆土中からの出土品であり、本住居に直接伴なうものではない。よって、土器は図示していない。

土製品（図版51、第116図－3）　土鈴の½程の破片である。全体に摩滅している。直径3.6㎝、器高4㎝程に復原される。



第82図　100号竪穴住居跡実測図（1／60）

100号竪穴住居跡（第82図）

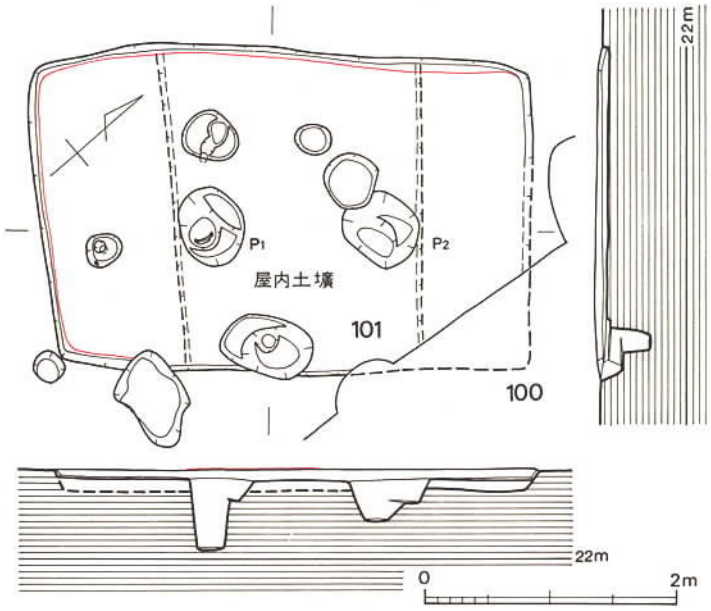
過半が調査区の外に延び、西壁が101号住居を切る。竪穴部のプランは長方形を呈するようで、主柱穴は二つと思われるが、実際はP_1しか検出できなかった（P_2に相当するピットは調査区外にある）。短壁にベッド状遺構が付設されると思われるが、掘りすぎたため、想定図を示している。床は貼床され、炉は検出していないが、西壁際に屋内土壙であろうと思われる掘り込みを検出した。調査区内で小ピットP_2・P_3を検出した。南東隅では遺構が重複するため、隅角

部にピットを検出しきれなかった。可能性の問題として、南短壁にP_3を中心に小ピットが並ぶかもしれない。このような、遺構は出来うれば切り合い関係のほとんどない遺跡で確かめるべきであろう。

出土遺物　土器・鉄製品が出土している。ともに、出土状態は覆土中からであり、本住居に伴なうものではない。

土　器（図版110、第176図）　1は小型丸底壷（坩）で、口径8.6cmに復原され、器高は8.7cmを測る。外面の頸部に僅かにハケ目が残るが、ヨコナデ・ナデにより消えている。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。2は無頸の甕で、口径11.1cm、器高16.2cmを測る。内外面にハケ目調整が目立ち、口辺部と底部にナデ調整を行う。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する

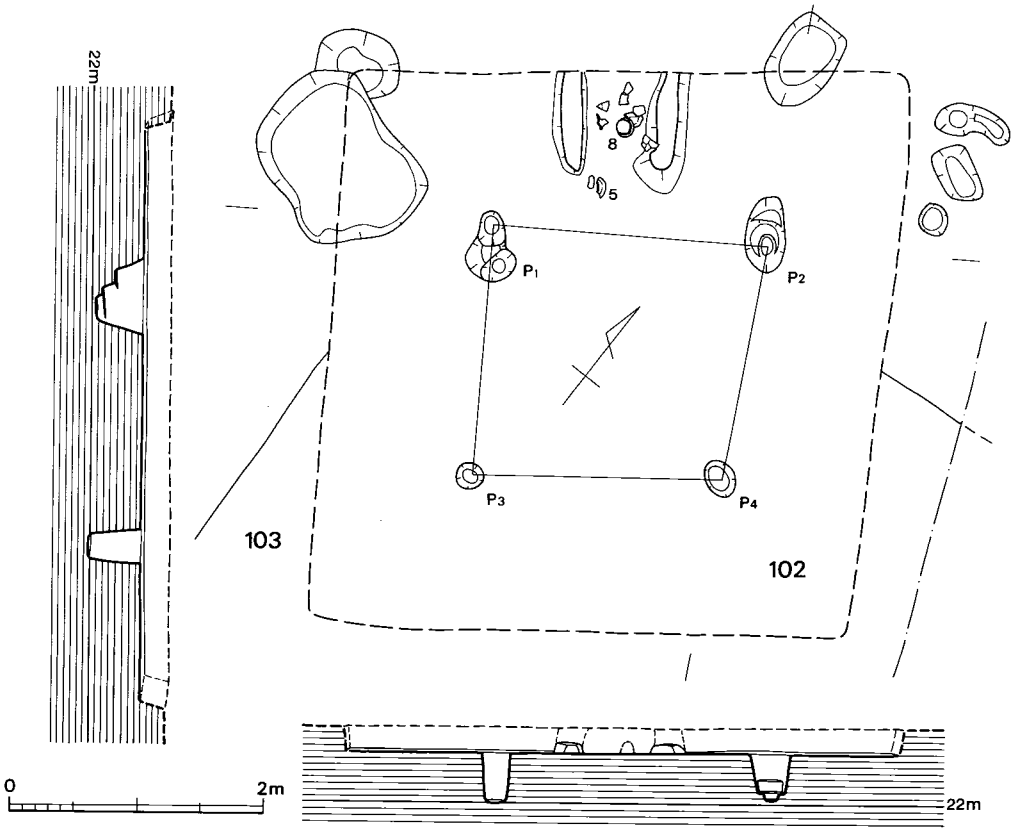
鉄製品（図版56・58、第117図－20、第120図－47）　20は刀の先端部のように見えるが、刃部はない。未製品であろう。長さ3.3cm、幅1.8cmである。47は、やはり未製品であろうと思われ、刃部はない。長さ10cm、幅2.8cmである。



第83図　101号竪穴住居跡実測図（1／60）

101号竪穴住居跡（第83図）

北東隅を100号住居に切られる。竪穴部のプランは隅円長方形である。本遺跡で検出したこの時期の住居の竪穴部としては小型ではある。両短壁にベッド状遺構を配すると想定するが、実際には検出していない。主柱穴はP_1・P_2で、貼床面で検出した。炉は検出していないが、東南壁際に屋内土壙を検出した。出土品もあまりない。



第84図　102号竪穴住居跡実測図（1／60）

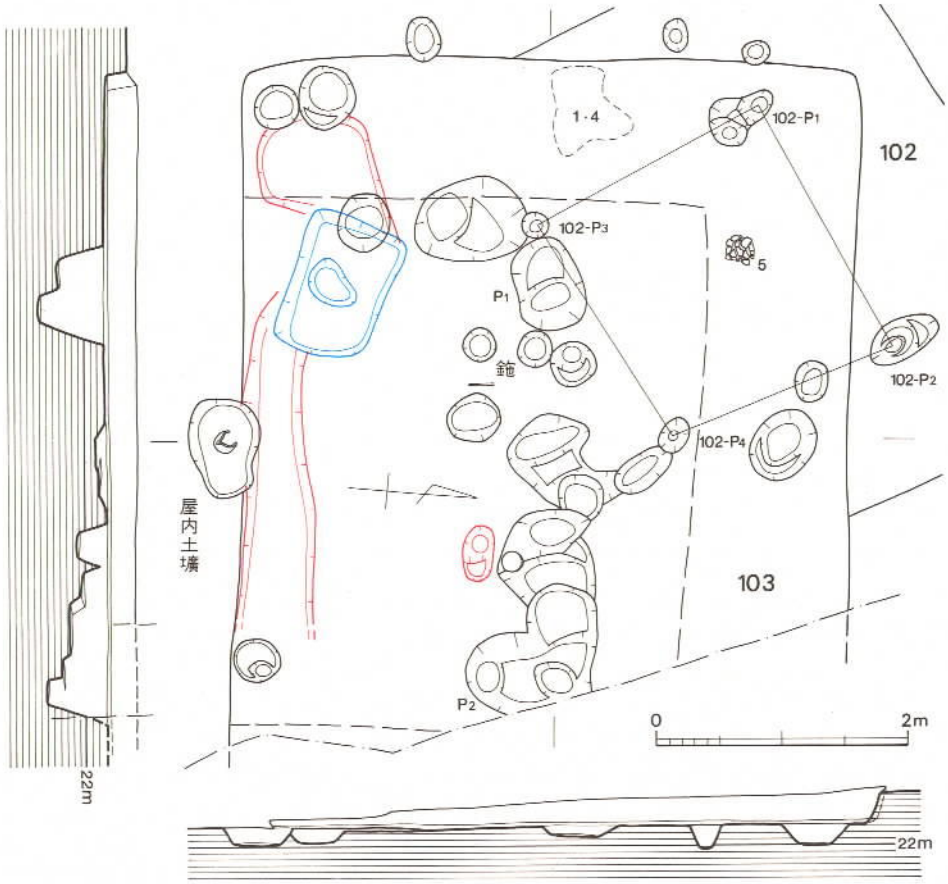
102号竪穴住居跡（第84図）

カマドを持つ住居では最南に位置する。試掘時に竪穴部の東側にトレンチが入り、包合層と誤認したため、下層の103号住居とともにかなり破裂してしまった。本住居はもともと貼床面がほとんど残らず、調査は一気に下層まで掘り下げた。よって、図は81号住居等と違って貼床下層と図示していない。下層は極めて浅かった。竪穴部は残らないので主柱穴P_1～P_4の配置状況とカマドの位置から推定復原したものである。竪穴部のプランは方形で、北西壁中央にカマドを設置する。カマドの奥壁は遺存しないが、両袖部は僅かに残っていた。支脚は小型の甕を倒立して使い、カマドの底より3cmほど浮いた状態で設置していた。この甕の底部（支脚の上端）が割れて、カマド内に散乱していた。

出土遺物　カマド周辺と床面が僅かに残る住居の西半部から出土している。出土品は須恵器と土師器で、3・5・7が伴なう。8はカマドの支脚で当然伴なう。

土　器（図版111、第176図）　1は甕の破片で後継25.6cmに復原される。風化が著しく、器面

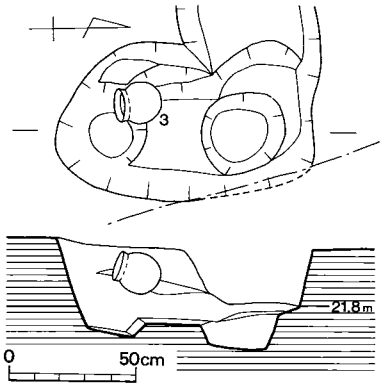
が荒れており、調整は不明である。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。2は須恵器を模した土師器坏身の破片で口径11.2cm、器高4.7cmに復原される。風化が著しく器面が荒れており、調整は不明である。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。3・4は須恵器の坏蓋で、完形の3は口径12.8cm、器高4.9cmである。天井部は時計回りの回転ヘラ削りを行い、内面はナデ、口辺部はヨコナデを行う。胎土に細砂粒を含み焼成良好で灰色である。5～7は坏身で5は口径12.3cm、器高3.5cmである。7は外底面にヘラ記号がある。胎土・焼成とも坏蓋と同様だが、5は灰色、6は灰黒色、7は紫灰色である。8は口径13cm、器高15.8cmの甕である。口辺部はヨコナデされ、外面はハケ目調整。内面はヘラ削りを行う。支脚に使用されていたため、火を受けており、もろい。



第85図　103号竪穴住居跡実測図（1／60）

103号竪穴住居跡（図版37・41・42、第85・86図）

102号、104号住居と重複し、試掘時のトレンチで荒らしたため、調査は困難を極めた。東側は調査区外に延びるが、竪穴部は長方形を呈し、〝コ〟字型のベッド状遺構を付設する。床は貼



第86図　103号竪穴住居跡主柱穴(P_2)土器出土状態実測図(1／30)

床される。主柱穴はP_1・P_2で、P_2内には甕が埋納されていた。主柱痕が残っていたか否か確認していないので断言しかねるが、おそらく、主柱を立てる際（棟上げ？）のマツリに関わるものであろう。炉は検出しておらず、屋内土壙は、あるいは、南壁中央の竪穴部壁にかかるものが、それではなかろうかと推定する。

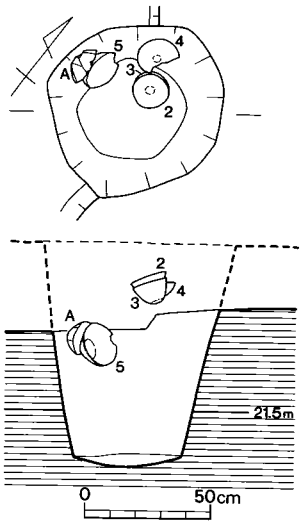
出土遺物　土器・鉄製品・石製品が出土している。図示した土器のうち、2を除いて、本住居に伴なうものである。3はP_2からの出土品で住居を建てる時点のものであるが、1・4・5は生活に供されたもので、出土状態から判断して、住居廃棄直前のものである。本住居に伴ないながらも、出土土器にはそのような差がある。鉄製品は覆土中、石製品は貼床下層からの出土である。

土　器（図版111、第176・177図）　1は高坏で脚部は外されていたようである。口径20.3cm、現存高9.4cmである。ハケ目調整されるが、外面の上半部はナデ消されている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は灰茶褐色、外面は黄褐色を呈する。2は小片で、鉢状のものが乗る高坏であろう。風化が著しく、調整は不明である。胎土に細砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色～黄褐色を呈する。3は主柱穴P_2内で検出した甕で、口径13cm、器高17cmを図る完形品である。底部は僅かに平底状を呈し、丸底ではない。胴部外面はハケ目調整され、同内面はナデ、口縁部はヨコナデされている。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。4は口唇部を欠くが口径・器高とも12.7cmに復原される。底部は完全な丸底ではない。外面はハケ目調整が目立つが、内面はナデ消されている。砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、黒斑がある。5は口径13.8cm、器高19.4cmを測る甕である。底部は凸レンズを呈し、完全な丸底ではない。内外面をハケ目調整するが、ナデにより消えている部分がある。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～赤褐色を呈し、全体に黒ずむ。6～8は鉢で7は口縁部を折り曲げる。6は貼床下層、7・8は覆土中からの出土である。ハケ目調整されるが多くはナデ消される。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。9・10は器台で、10は外面にタタキ目がよく残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄色褐色～明茶褐色を呈する。11は多分甕で、口辺部を欠く。内外面は丁寧にハケ目調整を行う。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

鉄製品（図版55～57、第118図－25、第119－33・36・40）25は鍬先の破片である。現存する横幅8.9cm、縦幅5cmである。木質の付着はない。33は両横に折り返しがなく鍬先ではないかと想像するが確証はない。ただ、手に持った感じが他の鉄製品と比べ重い感じがするようである。

現状で横幅10.2cm、縦幅7cmである。36は鉄斧で刃部を欠く。袋部長径3.3cm、同短径1.4cmである。復原長9cm、同刃部幅5.3cmである。40は床面から7cmほど浮いて出土した鉈である。細身で茎の長いタイプで、断面は逆U字型を呈す。幅1cm、現存長15cm程である。

石製品（図版63）2点出土いる。石庖丁の破片である。石材の産地は不明だが色調は小豆色である。



第87図　106号竪穴住居跡屋内土壙実測図（1／30）

104号竪穴住居跡（図版42、付図1）

戦闘機の誘導路で削平され、実態は不明である。

105号竪穴住居跡（図版42、付図1）

住居であろうと思われるが、戦闘機の誘導路で削平され、実態は不明である。

106号竪穴住居跡（図版42、第87図、付図1）

89・105号住居と重複するが、新旧関係は明らかにし難い。竪穴部は長方形プランを呈すると思われるが、壁が残っておらず、推定の域を出ない。北東壁際に屋内土壙があり、土器が落ち込んだ状況で出土している。出土土器は鉢ばかりである。

出土遺物　上述の鉢が、屋内土壙の木蓋が腐食して落ち込んだ状況で出土している。出土状況から、これらの土器は木蓋の上に置かれていたか、近い所に置かれていたと思われ、本住居に伴なうものと考える。

土　器（図版111、第177図）　1は口径6.1cm、器高2.6cmの小型鉢（皿）である。内外面とも風化が著しく調整は不明である。2は口径14.1cm、器高6.2cmで、一見テズクネ風である。内外面とも風化が著しく調整は不明である。3は口径14.5cm、器高7.6cmで内面にハケ目が残るが、外面はナデ消される。4は口径15.9cm、器高6.3cmでハケ目調整の後、外底面付近をヘラ削りする。5は底部に特徴があり、丸底ではなく、凸レンズ状である。畿内第5様式の底部に通じる部分がある。これらの土器はともに細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、1を除いて黒斑がある。なお、1は外面に丹塗りの可能性がある。

2　掘立柱建物跡（付図１）

Ｂ地区では20棟の掘立柱建物跡（４～23号）を検出した。遺構の切り合いが激しいため、調査時に建物だと確認してから調査をしたものは１棟もない。ただし、22・23号建物は可能性の問題として図示しただけで、建物であるか否かについての確証はない。４号建物はＡ地区の１～３号建物と同様な円形の掘り方であり、５号以下の建物の掘り方が方形を呈するのと比較して、対称的である。もっとも、１～４号建物は確証はないが古墳時代後期以降のものであろうと考えられるのに対して、５号以下の建物は住居との切り合い関係から弥生時代後期後半～古墳時代初期頃のものであろうと考えられ、両者の時期差が柱穴の掘り方の形態差となったのであろう。４号建物は溝２と接近しすぎ、主軸方向も違うので両者の同時併存は考えられないが、５号以下の建物は十分にその可能性がある。５・７・15・19号建物は溝２とほぼ平行か直交している。また、建物相互の棟方向が平行、直交するものがあり、いくつかのグループ分けができそうである。８・13号建物の柱穴では各１点の土器が検出され、建物を建てる時の祭祀行為の存在を示唆している。

以下、説明を行う建物以外にもまとまりはないが、掘立柱建物跡の柱穴ではなかろうか、と思われるしっかりとした方形のピットがあり、さらに建物が建つ可能性がある。しかし、他の遺構に削平されて図上での判断には限界があり、一応、Ｂ地区では４～23号建物について、掘立柱建物として説明を行う。

４号掘立柱建物跡（第89図－４）　**Ｈ４**

４間×２間の建物と想定する。柱間寸法はまちまちで、棟行方向はほぼ真南北である。

５号掘立柱建物跡（図版14、第89図－５）　**Ｈ５**

１間×２間の建物で柱間寸法はまちまちである。棟行方向はほぼ北東－南西である。柱穴の一部は２号周溝墓に切られている。

６号掘立柱建物跡（図版14、第89図－６）　**Ｈ６**

調査区外に延びるが、１間×２間の建物であろうと想定する。棟行方向はほぼ東西である。

７号掘立柱建物跡（図版14・19、第89図－７）　**Ｈ７**

１間×１間の建物である。対応する辺の柱間寸法は、各々3.6m・4.2m等間である。

８号掘立柱建物跡（図版14・112、第88・90図－８、第177図）　**Ｈ８**

１間×１間の長方形プランの建物である。西側の二つの柱穴は17号住居・２号周溝墓に切られる。P_1の埋土中で完形の甕１点を検出した。先述のように建物を建てる時の祭祀行為を示すものであろう。この土器は口径11.6cm、器高12.7cmの完形の甕である。ハケ目調整されるが、口縁部外面はヨコナデされ、外面の胴部下半はヘラ削りにより、ハケ目が消えるか薄く残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色～黄褐色を呈し、黒斑がある。この形態の甕は住居

跡から検出していないが、胎土等は生活用土器と大差ない。

9号掘立柱建物跡（図版14、第90図）　H 9

8号建物の東3.2m離れて建てられた1×1間の建物である。両建物の柱列はほぼ一直線上に乗る。当初、両者を東西に長い1×3間の1棟の建物と考えたが、2間目の柱間寸法が、1・3間目の寸法より1mほど短いため、1×1間の別個の建物と判断した。柱穴は4・21・22号住居の貼床下層で検出し、これらの住居より古い。

10号掘立柱建物跡（第90図）　H10

30号住居の東側にある1×2間の建物で、11号建物と重複し、15号祭祀土壙を切っている。ただ、5号住居との切り会い関係は定かではない。

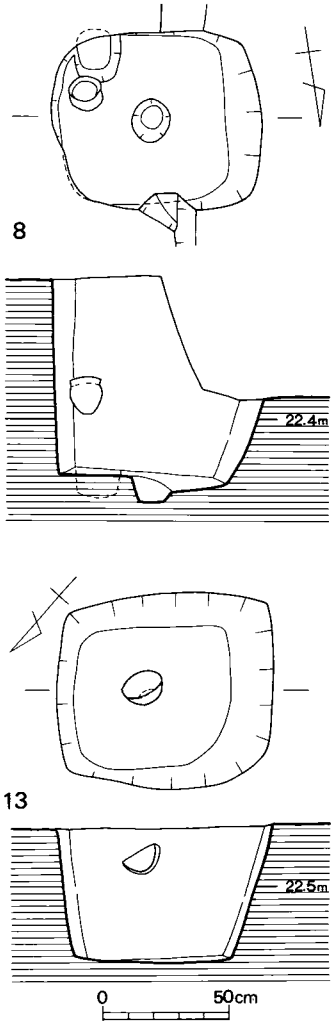
11号掘立柱建物跡（第90図）　H11

30号住居の東側にある建物で、東側は調査区外に延びるが1×2間の建物であろうと推測する。10号建物と重複するが新旧関係は不明である。また南西の柱穴は溝5に切られている。

12号掘立柱建物跡（図版24、第90図）　H12

34～36号住居を切り、38号住居に切られた1×1間の建物である。棟行方向は6・8・9号建物とほぼ平行である。8・9号建物と比べて平面プランは、より正方形に近い。

13号掘立柱建物跡（図版24・112、第88・90・117図）　H13

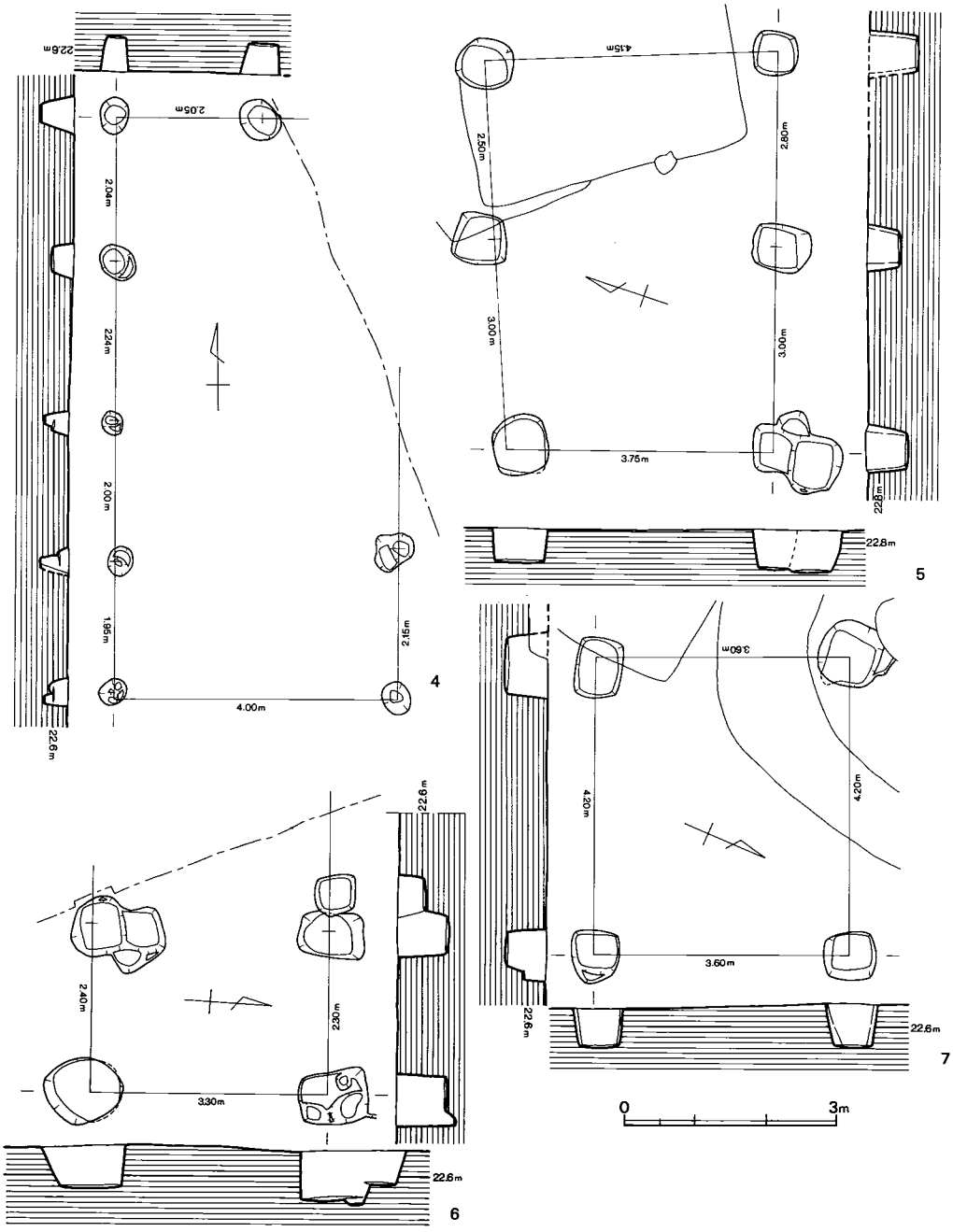


第88図　8・13号掘立柱建物柱穴遺物出土状態（1／30）

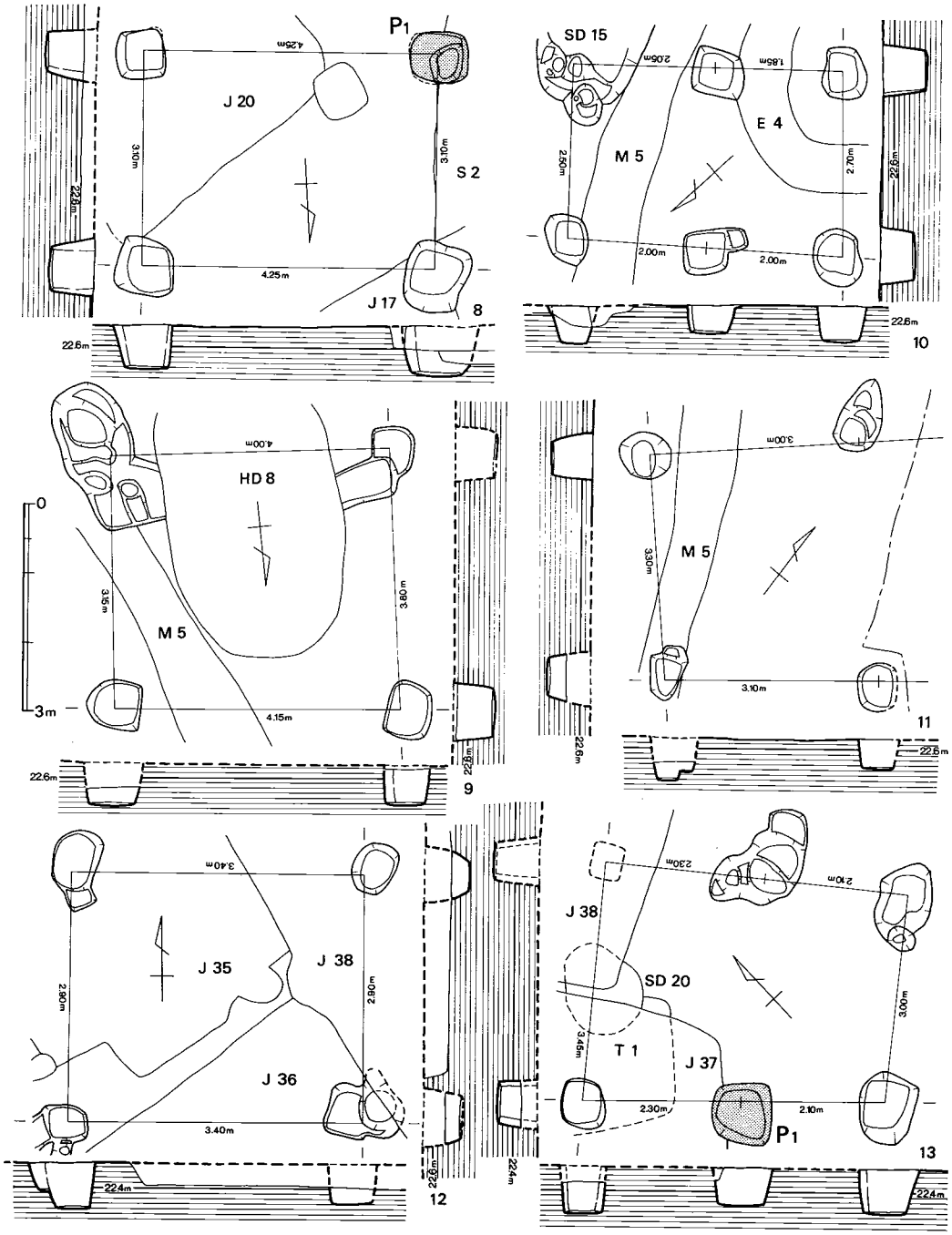
37号住居・1号方形竪穴を切り、38号住居に切られた1×2間の建物である。近くに存在する建物遺構の中では、10・17号建物と棟行方向はほぼ直交している。柱穴P_1から、鉢が出土している。8号建物と同様に、建物を建てる時の祭祀に関係するものであろう。この鉢は畿内第5様式に似た底部を持ち、体部は半球状のものである。口縁部は器肉の薄い部分があり、後に粘土を補強している。口径16.4cm、器高8.2cmを測る。タタキ目の跡は見られず、ナデ調整を行い、外面の底部付近と内面にハケ目が残る。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

14号掘立柱建物跡（図24版、第91図）　H14

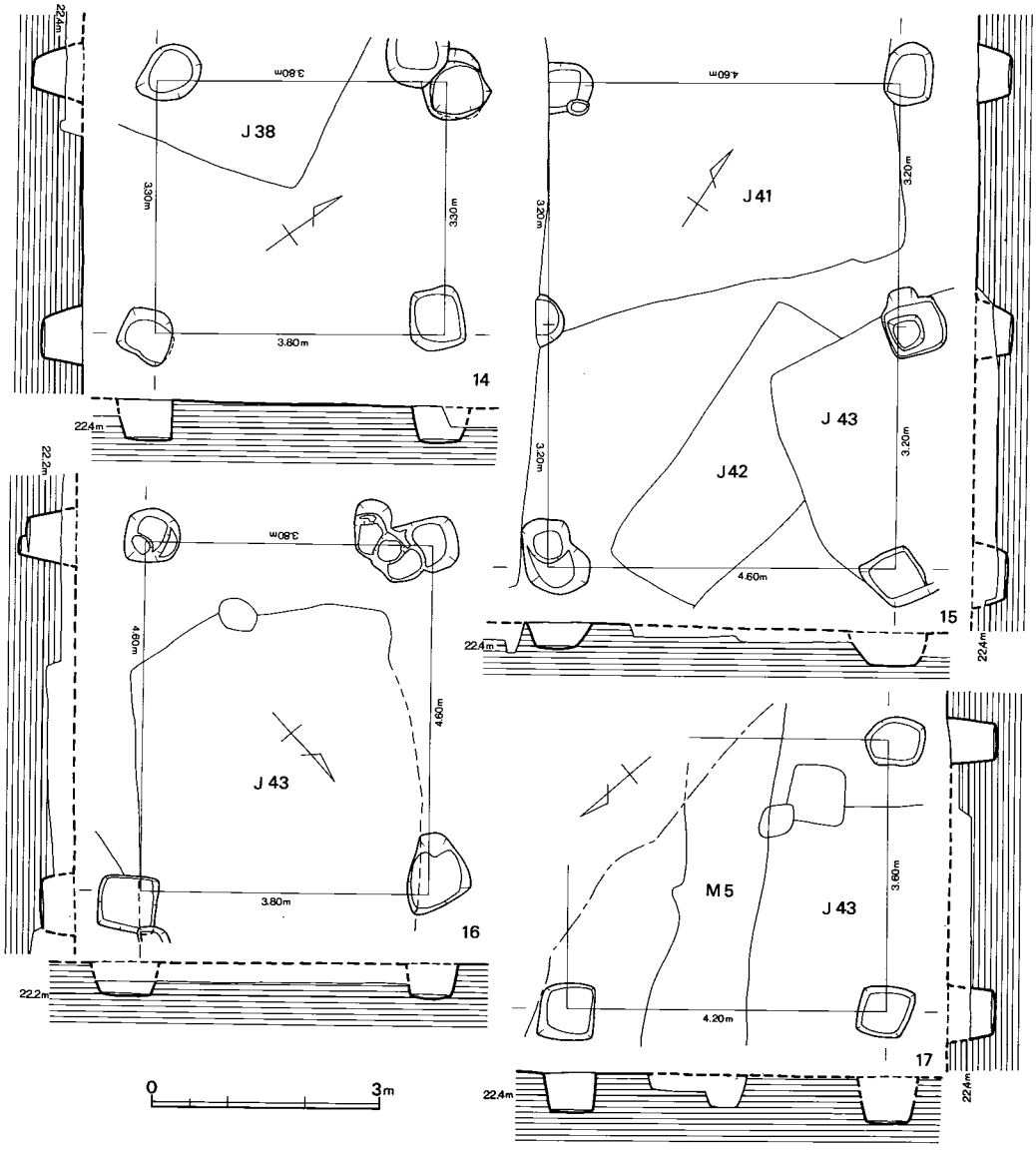
13号建物の東側に存在し、38号住居に切られた1×1間の建物である。12号建物をひと回り小型にした規模の建物である。



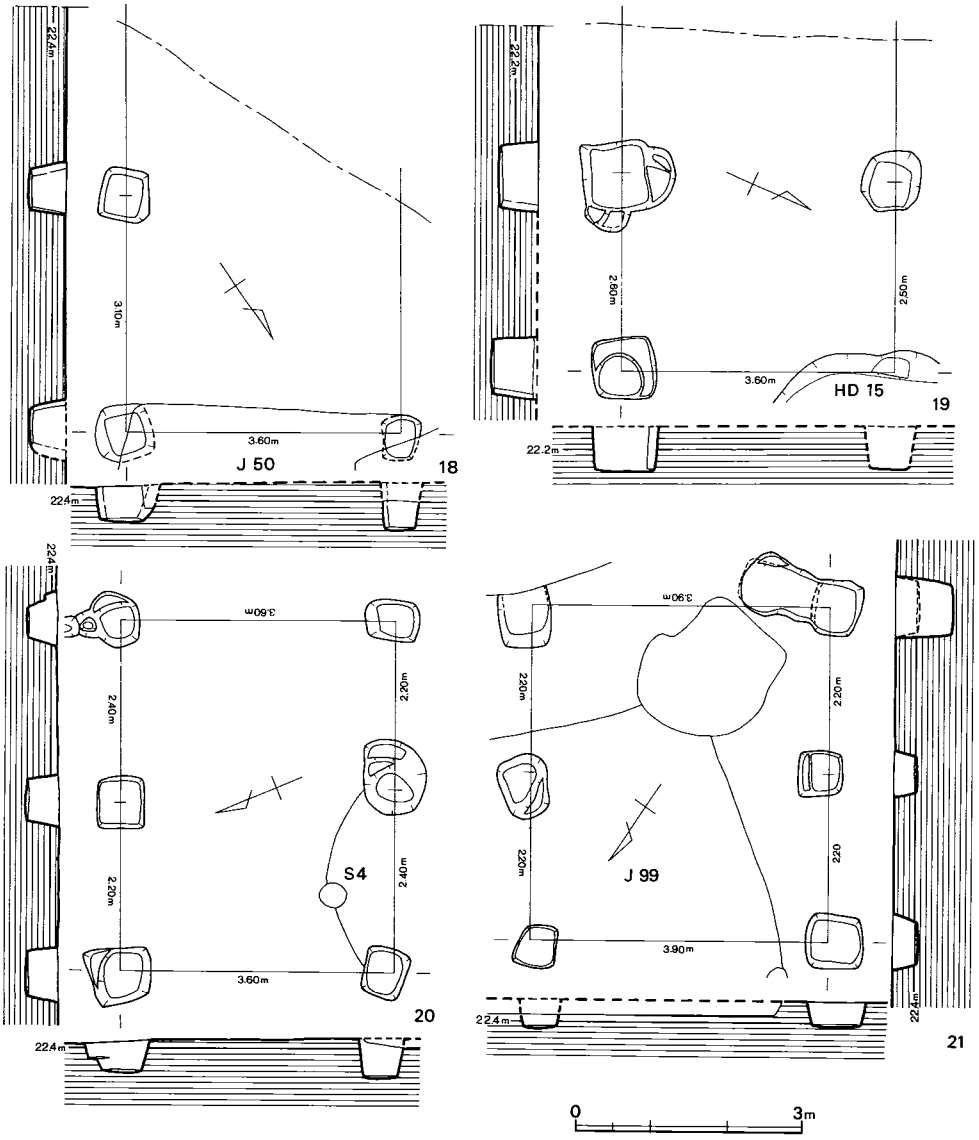
第89図　4～7号掘立柱建物実測図①（1／100）



第90図　8～13号掘立柱建物実測図②（1／100）



第91図　14～17号掘立柱建物実測図③（1／100）



第92図　18～21号掘立柱建物実測図④（1／100）

15号掘立柱建物跡（図24版、第91図）　**H15**

38号住居の北東側にある１×２間の建物である。弥生時代終末期前後の建物の中では、本遺跡最大の建物せある。ただ、西側柱列のうち、真ん中の41号住居の壁にかかる柱穴は住居の主柱穴の可能性も残していることを付記しておく。

16号掘立柱建物跡（第91図）　**H16**

15・17号建物、42～44号住居と重複する１×２間の建物である。住居には切られているようだが、建物どうしの新旧関係は明確にし難い。

17号掘立柱建物跡（第91図）　**H17**

43・44号住居の北東側にある１×１間の建物である。東隅の柱穴は調査区外にある。

18号掘立柱建物跡（第91図）　**H18**

56号住居の南西側に位置し、調査区外に延びるが１×２間の建物であろうと思われる。北東側柱列のうち、北から２番目の柱穴は検出していない。56号住居に切られる。

19号掘立柱建物跡（図版35、第92図）　**H19**

83・84号住居、15号廃棄土壙に切られる。建物の一部は調査区外に延びるが１×２間の建物であろうと考えられる。

20号掘立柱建物跡（図版37、第92図）　**H20**

80・91号住居、４号周溝墓に切られた１×２間の建物である。太平洋戦争の末期に戦闘機の誘導路建設により削平されており、柱穴は浅くなっている。

21号掘立柱建物跡（図版37、第92図）　**H21**

東側柱列が99号住居、５号周溝墓により切られている。１×２間の建物である。建物のプランは正方形に近い。

22号掘立柱建物跡（付図１）　**H22**

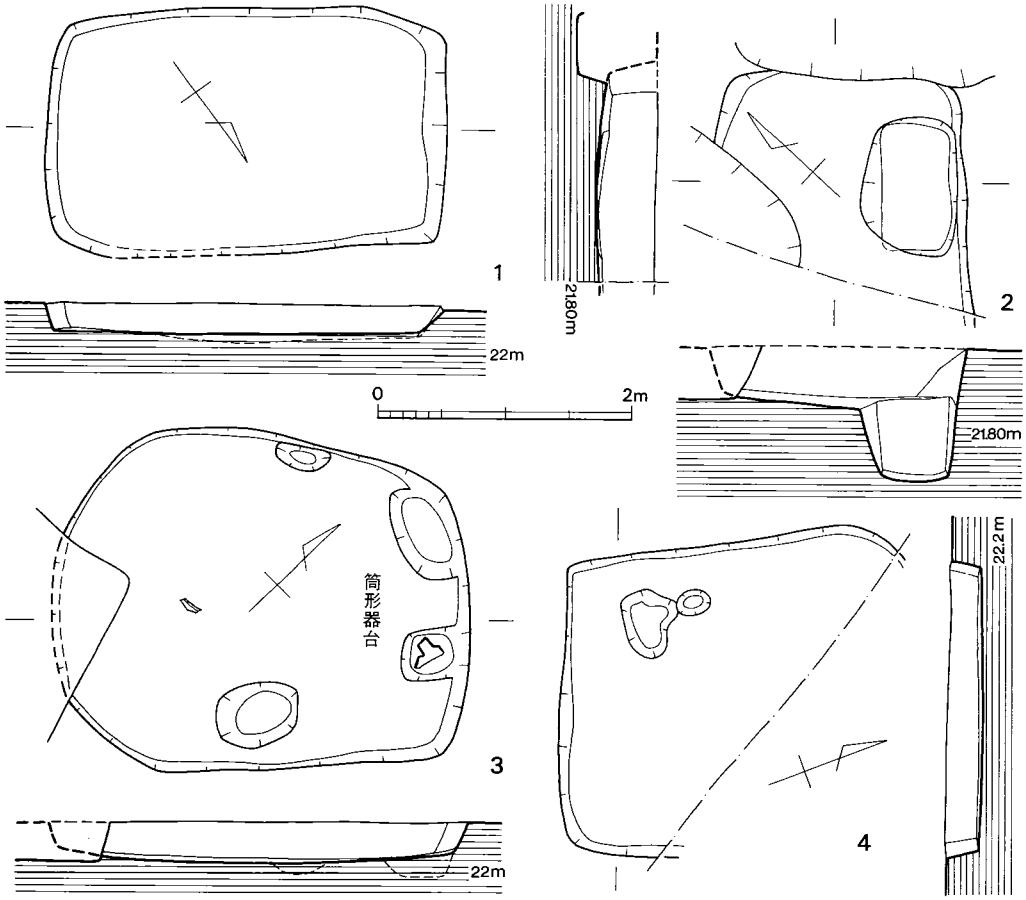
西側の柱列だけ検出した。東側の柱列は調査区外にあると想定し、建物と考えた。

23号掘立柱建物跡（付図１）　**H23**

二つのピットの存在から、大胆に建物であろうと考えたが確証はない。

3　方形竪穴

調査区の中央部以南において、方形に近いプランを呈する竪穴状遺構を４基検出した。４号竪穴を除いて、他の３基は祭祀土壙・竪穴住居に切られている。また、出土遺物がほとんどないことが、この遺構の特性でもある。床面は地山のままである。



第93図　方形竪穴実測図（1／60）

1号方形竪穴（第93図）　**T 1**

36・37号住居、20号祭祀土壙に切られる。長軸3.17m、短軸1.95mである。現状で深さ20cmほどである。

2号方形竪穴（第93図）　**T 2**

西半部が調査区の外に延びる。北壁を溝6に、東壁を39号祭祀土壙に切られる。長軸は不明だが、短軸2mほどである。1号竪穴と同規模であろうか。

3号方形竪穴（第93図）　**T 3**

方形と円形が組み合わさったプランを呈し、長軸3.3mほど、短軸2.65mである。北東短壁際のピットから筒形器台の破片が出土している。

4号方形竪穴（第93・181図）　**T 4**

北東側が調査区の外に延びるが、プランは3号竪穴に似ているようで北側は円形状である。

規模も３号竪穴と同じ程度であろう。覆土中から、土器が出土している。181図に図示した壷は丹塗磨研され、口径35cmほどのものである。

4　周溝墓

溝２以南において、５基（Ｓ１～Ｓ５）検出した。埋葬施設は検出していない。たぶん、盛土中に埋葬施設を構築していたものと思われる。また、土器の出土状態から「周溝墓」と判断してよかろうと考えた。１～４号は方形周溝墓であるが、５号は円形の周溝を巡らす。１号と２号は、連結して造られており、１号の南溝は掘られておらず、２号の北溝を利用しているように見受けられる。よって、両者の関係は、まず１号が造られた後に２号を構築したものであろうと考えられる。１・２号を除いて、周溝墓は散在的な在り方を示している。

１号周溝墓（図版８、第94図）　**Ｓ１**

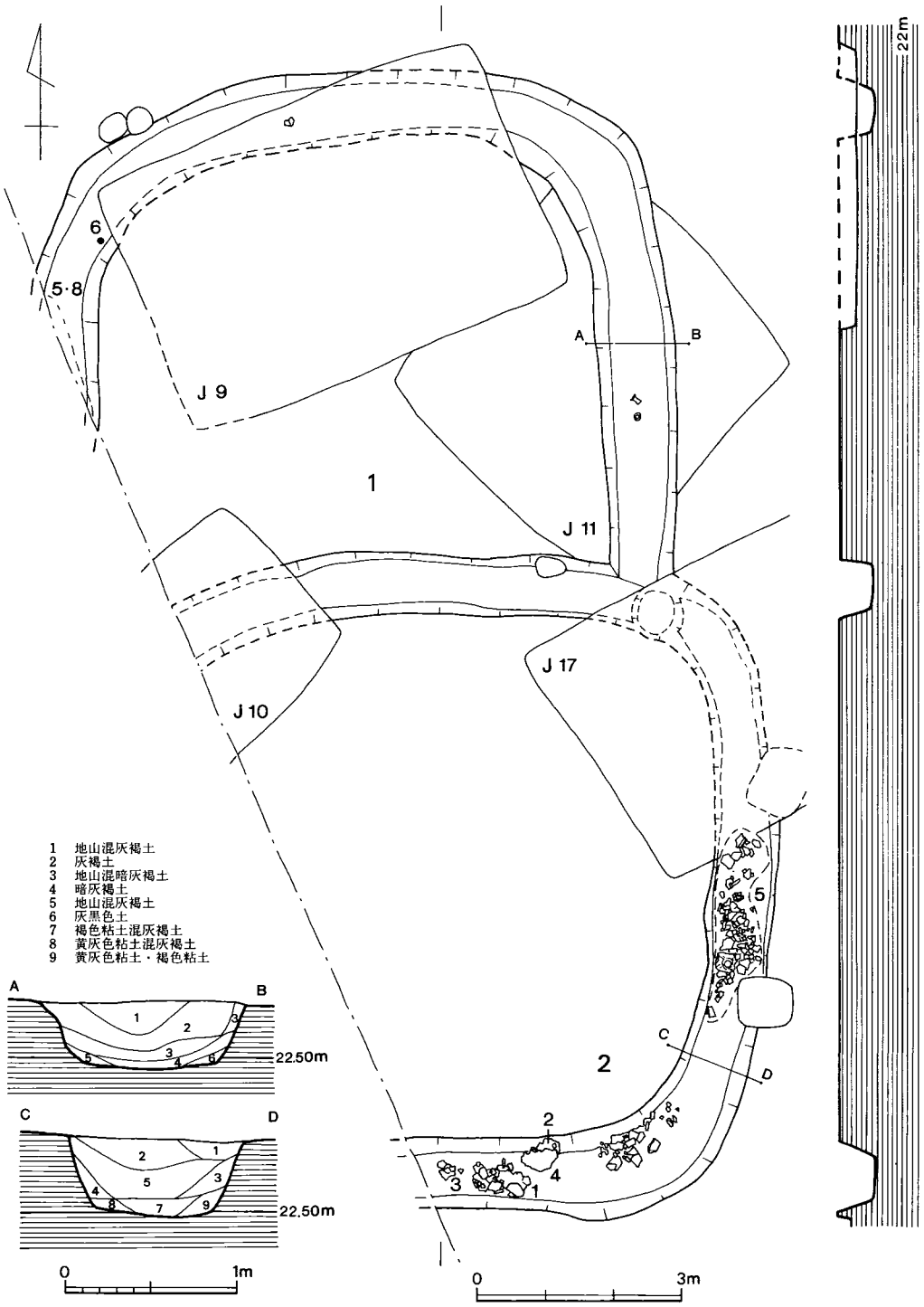
平面プランは方形に近いが、溝のラインは弧を描く。上述のように南溝は掘られておらず、２号周溝墓を意識の内において造られたものであろう。規模は北溝で東西8.3m、東溝で南北7.5mである。埋葬施設は検出していない。11号住居を切り、９号住居に切られている。

出土遺物　土器・石製品（石庖丁）が出土している。土器は弥生時代中期のものが含まれるが、これは石庖丁とともに混入品である。本周溝墓は住居と切り合っており、土師器については出土位置から４・７を除いて伴なうだろうと言える程度である。

土　器（第178図）　１～３は弥生土器で本遺構に直接伴なわない。２・３は丹塗磨研土器である。４は東溝から出土した壷の破片で口径10.6cmに復原される。外面の頸部下にハケ目を残すがハデにより、多くは消されている。細砂粒を多く含み、焼成良好で褐色～灰褐色を呈す。５は坩の⅓程の破片で残りの部分は調査区外に残る。口径11cm、器高9.5cm程に復原される。頸部外面、胴部内面はヘラ磨きを行う。また胴部外面～底部はヘラ削りを行っている。胎土は砂粒を若干含む程度で精選され、焼成良好で淡黄褐色を呈し、黒斑がある。一部に赤色顔料と思われるものが付着している。６は高坏の脚部のようだが、坏部を欠く。脚裾部径17.3cmで、ハケ目調整されるが、ナデられて消えた部分もある。砂粒を少し含み、焼成良好で茶褐色を呈する。７は伴なう可能性もあるがはっきりしない土器で、11号住居覆土中の破片と接合した。口径18.8cmに復原される壷である。内外面にハケ目調整の跡が残り、胴部にはタタキ目が認められる。また、口縁部内面には指圧痕が残っている。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色～茶褐色を呈し、黒斑がある。８は５と同様に西側調査区の壁際で検出し、残りの部分は調査区の外にある。口径28.4cmで、内外面をハケ目調整する。７と比べて頸部は短い。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。

石製品（図版64、第123図）

石庖丁の破片で現存横幅6.6cm、縦幅4.2cmを測る。刃の一部は研磨によりえぐれている。



第94図　1、2号周溝墓実測図（1／100）

2号周溝墓（図版８、第94図）**Ｓ２**

１号周溝墓の南に連接して営まれている。西溝と南溝の西半部が調査区ま外に延びている。先述のように２号が先行して造られたと考えられる。北溝は１号を造る際に掘り広げたり、掘り込んだりした形跡はない。規模は１号よりも一回り大きく、南北9.5mを測り、東西もほぼ同程度であろう。東溝何部の土層（Ｃ－Ｄ）によれば、７・８・９が埋った後に、周溝の両側から土砂（３・４）が流入し、さらに、盛土が流れ込んでいる。土器は土層の５（地山混灰褐土）とともに周溝内に落ち込んでいる。

出土遺物　東・南溝から土器が出土している。土器の出土する部分は東溝中央部と南溝に限られている。これらの土器を転落品と考えると、土器を供献した場所をおおむね特定することができる。すなわち、東・南溝に面した部分に土器を供献したと考えられる。

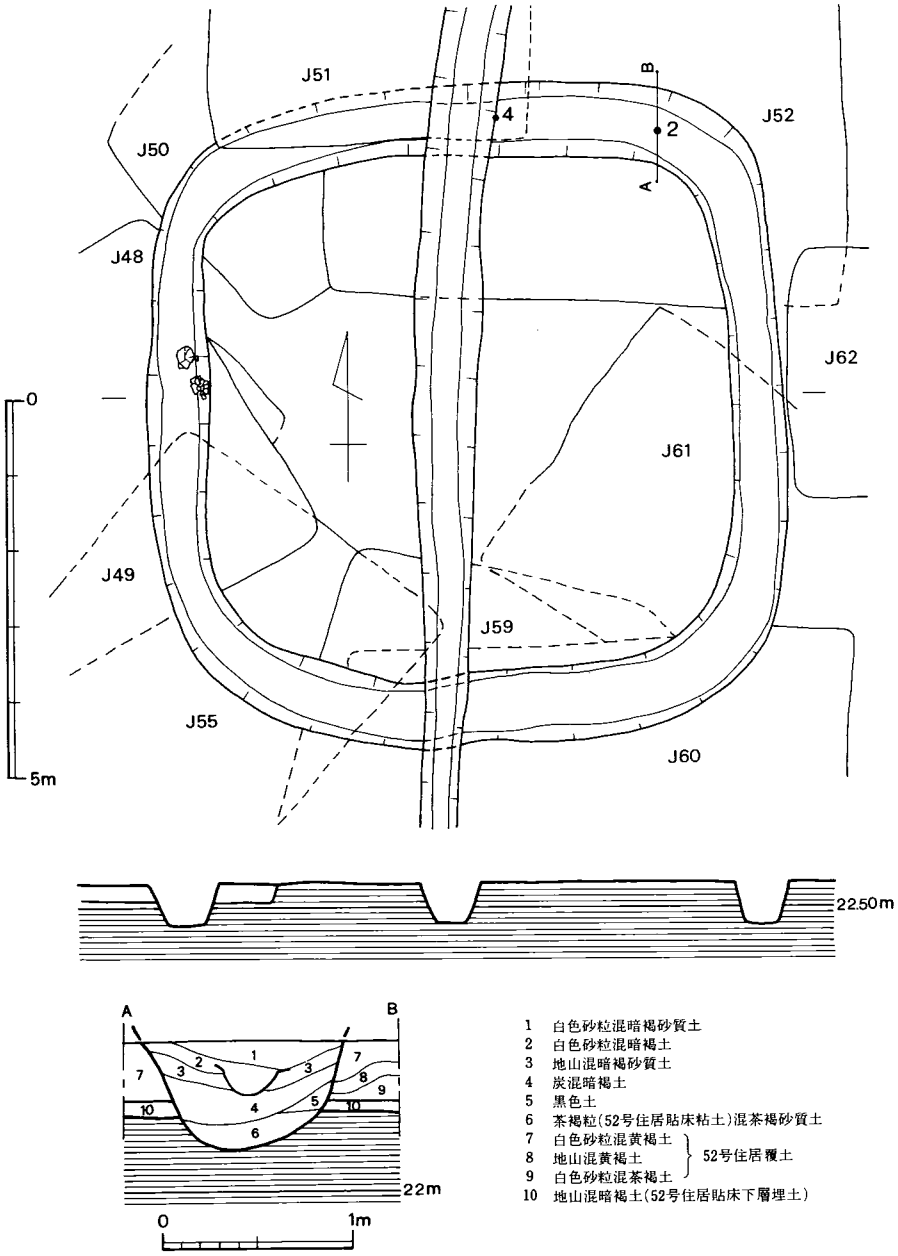
土　器（図版112、第178・179図）　１は長胴の甕で、口径25.2cm、現存高34cmを測る。口縁部はヨコナデされ、胴部はハケ目調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～灰黄褐色を呈し、部分的に煤が付着している。２は底部を欠き、胴部も½程を失う。口径14.6cm、現存高30cmほどの壺である。口縁部はヨコナデされ、胴部はハケ目調整を行う。胎土の砂粒を多く含み、焼成良好で黄灰色を呈する。３は長胴の甕で、頸部直下に突帯を巡らす。口縁部はヨコナデにより、ハケ目がほとんどナデ消されるが、頸部以下はハケ目が残る。胎土に砂粒を含み、焼成良好で白黄色～淡明茶褐色を呈し、部分的に煤が付着している。４は口径51cm、現存高48cmを測る肩の張った長胴の甕である。口縁端部は面をなし、刻み目を入れる。頸部にも刻み目を入れた突帯を巡らしている。肩部以下はハケ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈し、黒斑がある。５は口径47.5cm、器高65.8cmに復原される長胴の甕である。口縁端部は面をなし、刻み目を入れる。頸部・胴部にも刻み目を入れた突帯を巡らしている。底部は平底に近い凸レンズ状をなす。内外面をハケ目調整し、胴部上半と底部にはタタキ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～赤褐色を呈し、器面が黒ずんでいる。

３号周溝墓（図版11・12・25・26・27・112・113、第95・180図）**Ｓ３**

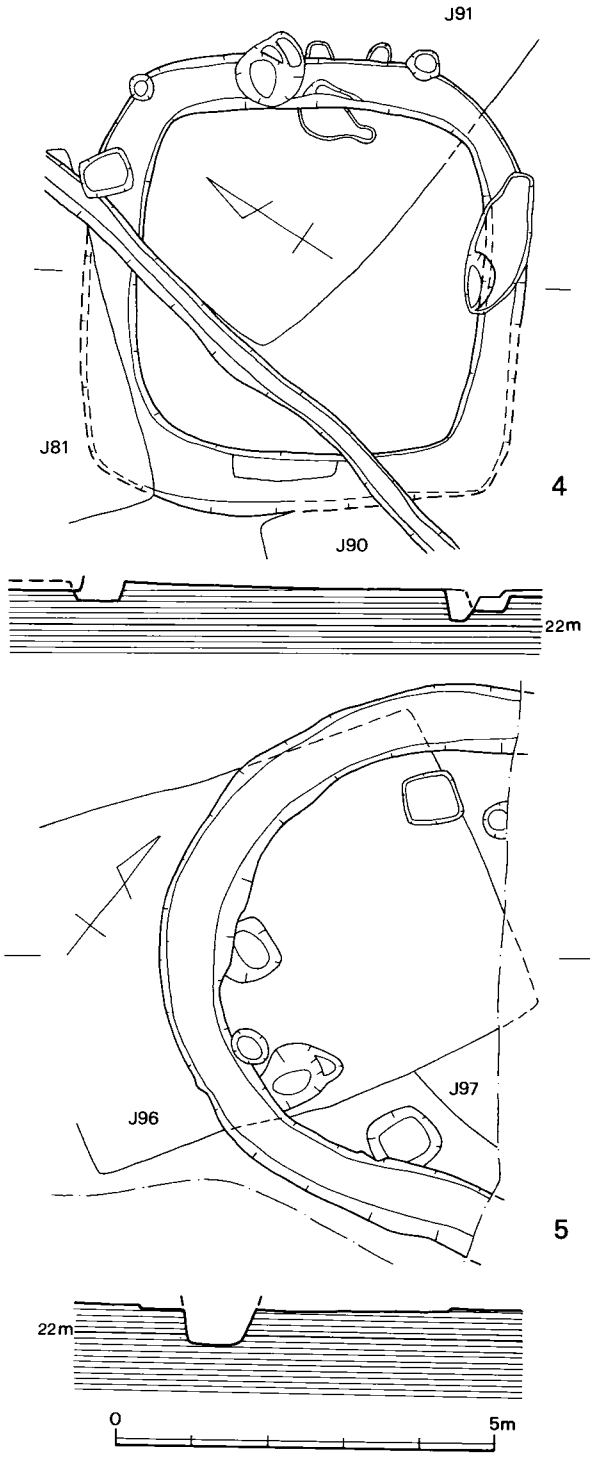
Ｂ地区のほぼ中央部に検出した周溝墓で、周溝の方位はほぼ磁北にのる。中央部を南北に溝６が縦断し、北溝西半部は51号住居が切っている。周溝のその他の部分は、周囲の住居をすべて切っている。規模は東西8.4m、南北8.7mほどである。全面を検出したが陸橋部はない。先述のように、周囲の住居を切って周溝墓を造っているため、盛土には住居覆土や貼床の粘質土も使われていたようで、周溝埋土の土層図（Ａ－Ｂ）では、そのような土が流入していた。土器は周溝が一定程度埋った後に流れ込んだ（落ち込んだ）ようである。

出土遺物　土器・鉄製品（鉄斧１・鉄鎌２）が出土している。図示し土器は全て伴うが、鉄製品は住居に周溝を切り込んだ時に掘り上げ、その後流れ込んだ可能性を残している。

土　器（図版113、第180図）　整理期間の都合上、土器は一部しか図示していない。１は口径



第95図　3号周溝墓実測図（1／100）



第96図　4、5号周溝墓実測図（1／100）

14.4cm、器高6.8cmを測る鉢で、底部は平底気味である。全面、ナデ調整される。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。2・3は口縁部が外反する大型の鉢である。2は口径35.2cm、器高15.6cmを測る。内面は口縁部～頸部直下までハケ目が残るがそれ以下はナデ消されている。外面は口縁部～頸部はヘラ状工具による擦過痕があり、頸部～体部中位はナデ、そり以下はヘラ削りを行う。2は口径42cm、器高18.8cmである。口縁端部は刻み目を施し、内外面はハケ目調整を行う。2個体とも砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈するが、黒斑がある。4・5は高杯で完形の4は口径34.3cm、器高22.7cmである。器面が摩滅するため調整が不明な部分が多いが、脚柱部はヘラ磨きしているようである。5はハケ目の上からヘラ磨きしている。ともに砂粒を含み、焼成良好で4は赤明茶褐色を呈し、黒斑があり、丹塗りされた可能性がある。5は明茶褐色を呈し、黒斑がある。6は口径13.8cm、器高28.8cmを測る壺である。口縁部を除いてハケ目調整が目立つ。ハケ目の下に一部タタキ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で赤褐色～明茶褐色を呈し、二次加熱のため器面の

剝落が著しい。７・８は長胴の甕である。７は口径26.6cm、器高29cmである。内外面はハケ目調整されるが、後にナデによりハケ目が消えた部分がある。８は底部を欠くが口径26.1cmで現存高27cmほどである。内外面はハケ目調整されるが胴部中位以下は工具により、ナデ消されている。ともに胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、煤が付着して黒ずむ。７は黒斑がある。

鉄製品（図版55・58、第119－35、120図－50・51）　35は完形の鉄斧で側面に僅かな肩を有する。全長7.4cm、刃部幅3.9cm、袋部長径2.7cmである。50・51は鎌でともに先端部を欠く。50は現存長11.8cm、幅3.5～4.5cmで、50は同12.7cm、3.5～5.5cmである。

４号周溝墓（図版37、第96図）**Ｓ４**

Ｂ地区の南で検出した。太平洋戦争時の戦闘機の誘導路建設により削平され、それ以前は81号住居に北西溝の立ち上がりを削られている。90・91号住居との新旧関係は不明である。規模は、ほぼ６ｍ四方である。出土品はない。

５号周溝墓（図版40、第96図）**Ｓ５**

Ｂ地区の南端で検出した唯一の円形を呈するものである。東側の半分は調査区外に延びる。また、96～98号住居を切っている。現状で、周溝の立ち上がりでの直径は7.5mほどである。この遺構に伴う出土品はない。

５　円形周溝

25号住居から69号住居までの間で検出した。円形～楕円型を呈し、直径は５ｍを超えることはない。また、これに伴う出土遺物は皆無である。

１号円形周溝（第97図）**Ｅ１**

この部分は遺構の切り合い関係が複雑であったので、切り合いとプランは正確ではない。

２号円形周溝（第97図）**Ｅ２**

３号円形周溝、29号住居を切る。大半は調査区外に延びるため詳細は不明である。

３号円形周溝（第97図）**Ｅ３**

11号廃棄土壙、２号円形周溝、28・29号住居に切られる。本遺跡で検出した円形周溝の中では溝の幅が狭く、唯一プランは正円を呈するようである。

４号円形周溝（第97図）**Ｅ４**

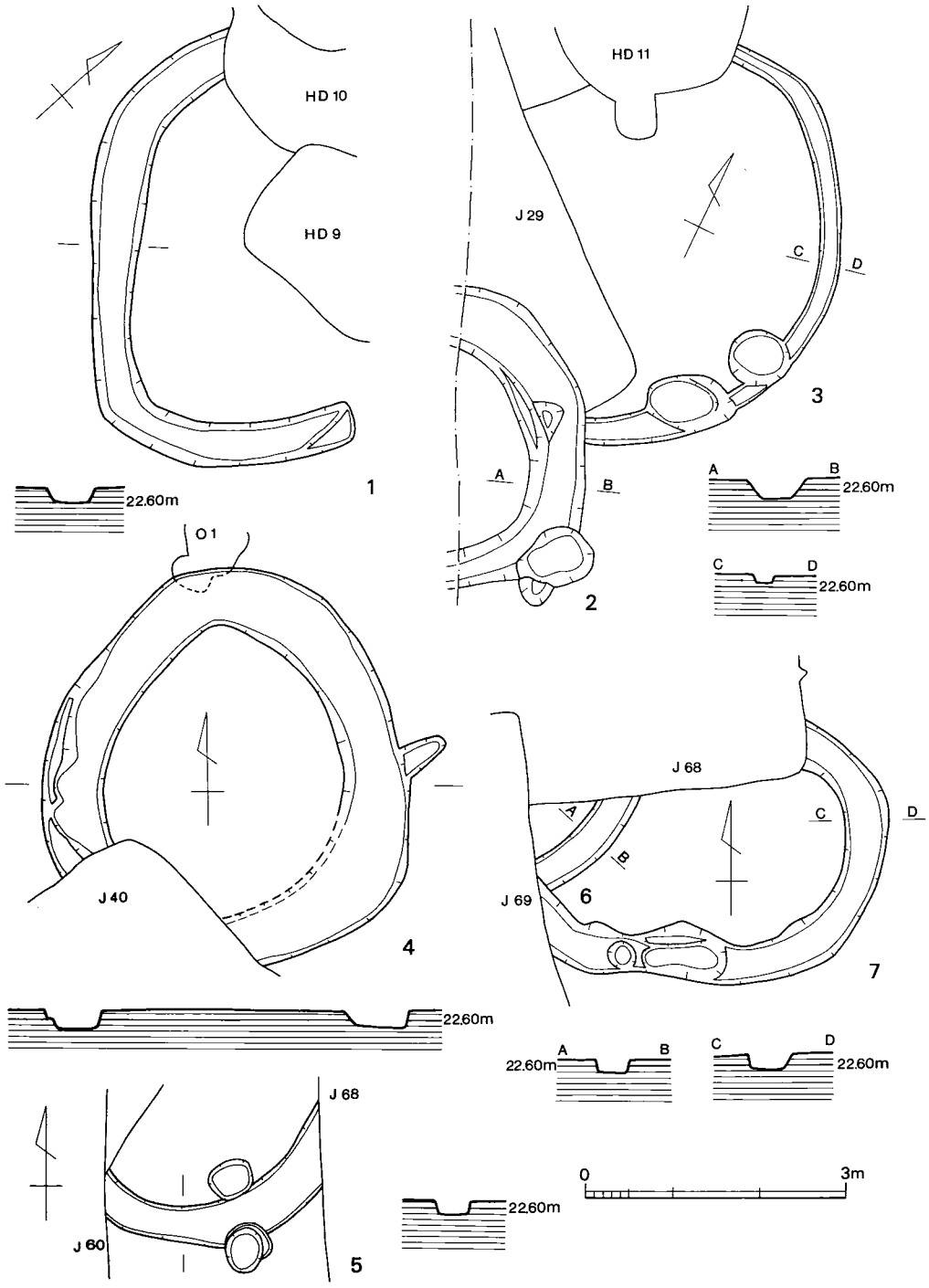
39・40号住居に切られ、１号落とし穴状遺構を切る。溝は幅広く、プランは不整円形である。

５号円形周溝（第97図）**Ｅ５**

60・68号住居に切られる。極く一部しか残存しないので詳細は不明である。

６号円形周溝（第97図）**Ｅ６**

68・69号住居、７号円形周溝に切られる。僅かに遺存するのみで詳細は不明である。



第97図　1～7号円形周溝実測図（1／80）

7号円形周溝（第97図）Ｅ７

68・69号住居に切られる。プランは楕円形を呈するようである。

6　祭祀土壙

Ｂ地区全面にわたって検出した。溝２の北側にある１号は祭祀土壙としたが疑わしい。２号以下は溝２の南側に限って存在する。その多くが竪穴住居の床面下で検出される。土壙の形態は、細長い溝状のもの（９～11・38～40号）、竪穴状のもの（６・８・15）などバラエティに富んでいる。これらは散漫なあり方を示すが数基ずつまとまっており、互いに平行・直交に近い分布状況を示している。これらの遺溝からの出土品は甕棺祭祀に関係するものと考えられるが、調査区内では甕棺墓は検出していない。甕棺墓はさらに西側に存在すると考える。

1号祭祀土壙（図版113、第98図）ＳＤ１

溝２の北側に１基だけ存在する。弥生土器が出土したが祭祀土壙と考えるのに疑問がある。

2号祭祀土壙（第98図）ＳＤ２

調査区西側の溝５の北に検出した。長径1.56m、短径1.1mの楕円形を呈し、二段掘りで深さは0.8mである。丹塗磨研土器を含めて、少量の土器が出土した。

3号祭祀土壙（図版113、第98図）ＳＤ３

７号住居の北側に４・５号祭祀土壙と並んで存在する。長径1.72m、短径0.67mの長楕円形を呈し、深さは0.4mほどであるが、後にピットが２つ掘り込まれている。出土遺物は丹塗磨研土器等がある。

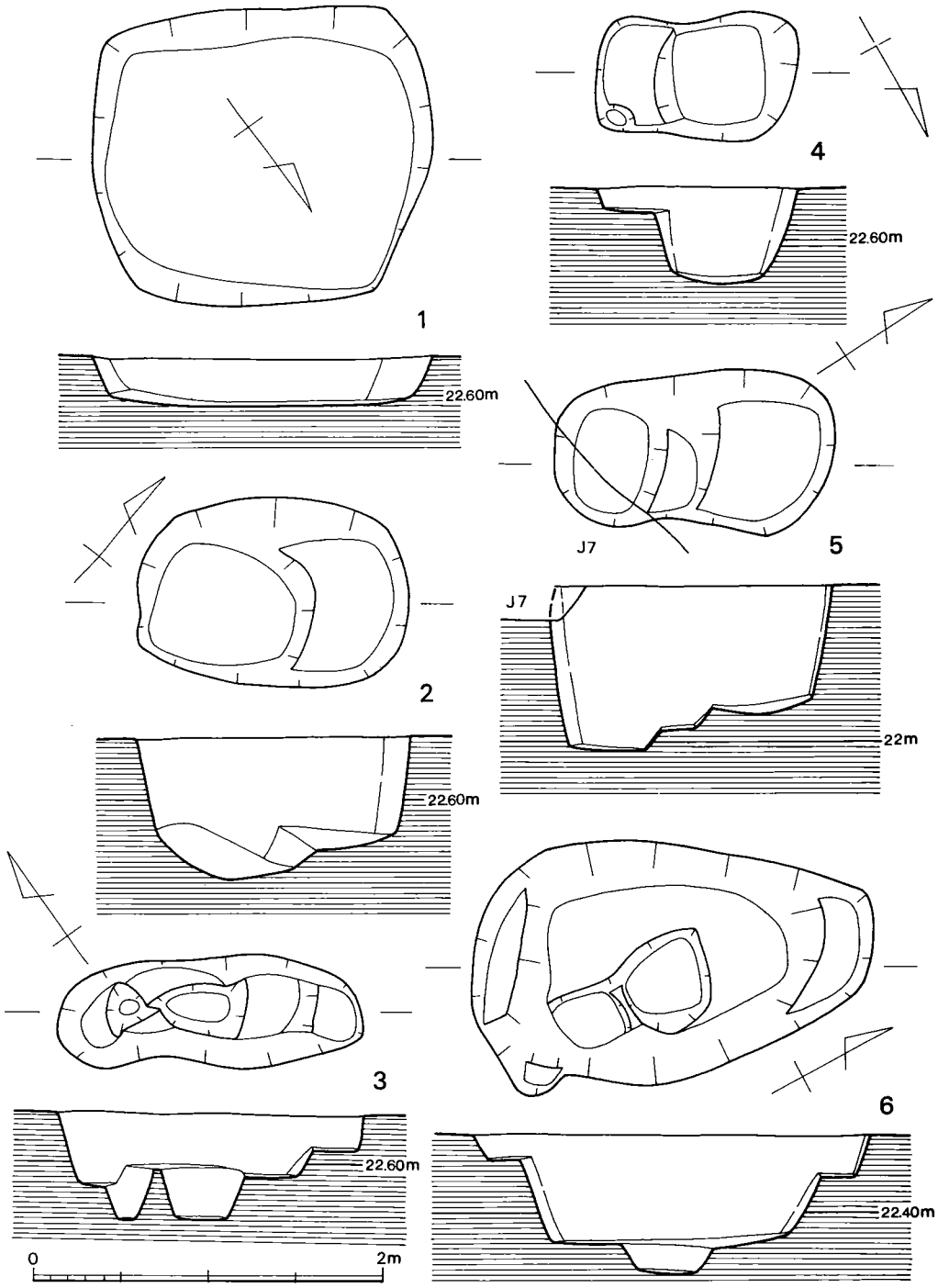
4号祭祀土壙（第98図）ＳＤ４

３号祭祀土壙の東側に接するように掘り込まれている。長径1.38m、短径0.68mの長方形に近い楕円形を呈する。二段掘りで深さは0.57mである。丹塗磨研土器を含めて、少量の土器が出土した。

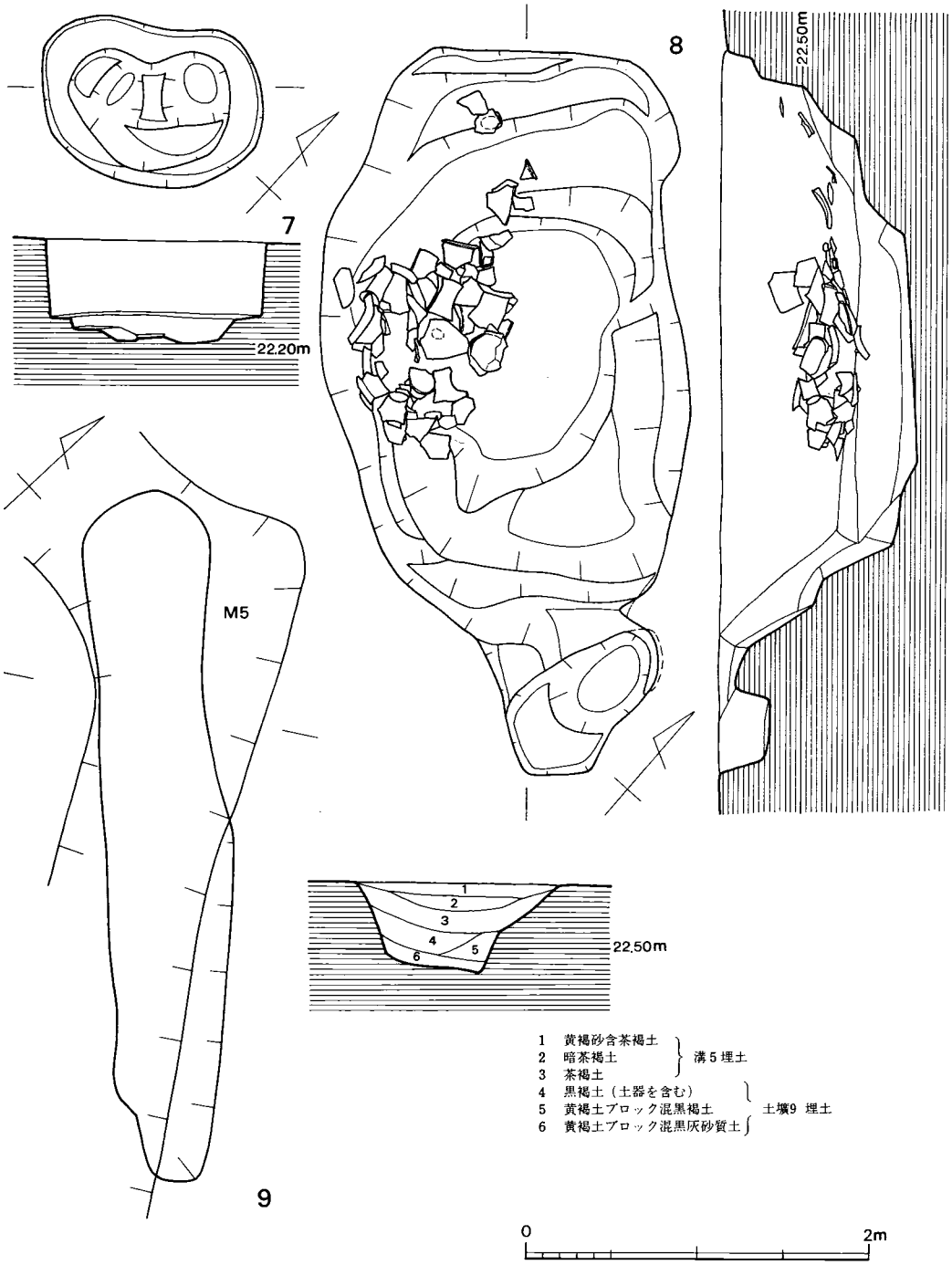
5号祭祀土壙（図版45、第98図）ＳＤ５

４号祭祀土壙の東側に掘り込まれ、一部を７号住居に切られる。長径1.6m、短径0.6mの楕円形で、三段掘りで深さは0.95mである。多量の祭祀用土器が出土している。

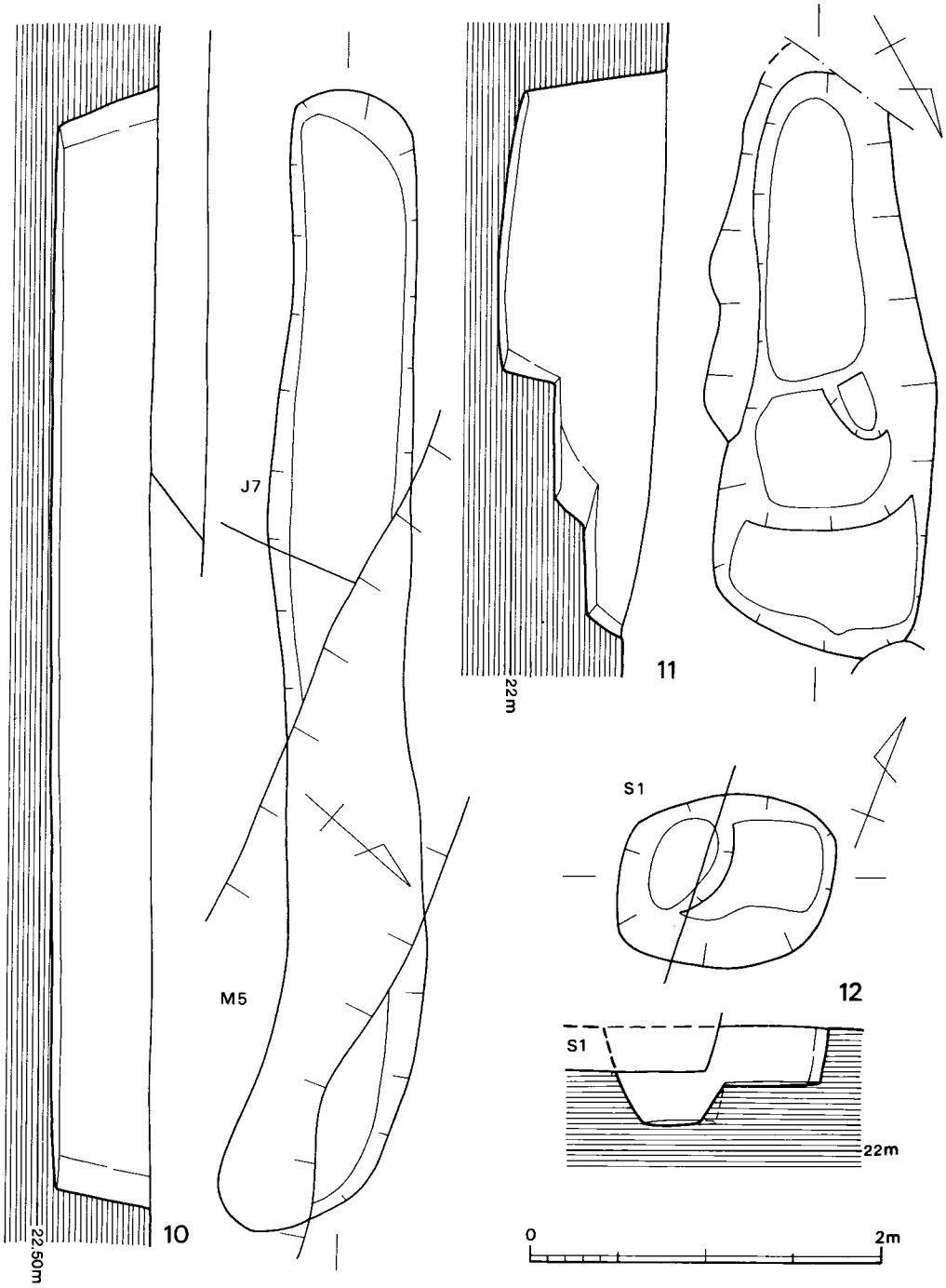
土　器（図版114、第181図）　図示できたのは極く一部である。１は口径32.7cmを測る。丹塗磨研された開口壺である。胎土は精選されて砂粒をあまり含まず、焼成は良好である。２～４は鋤先状口縁の壺で、小型の４は口径20.7cm、器高22.4cmを測るほぼ完形品である。２・３は口径26.4cm、32cmである。ヨコナデ、ナデによりハケ目が消されるが、４は口頸部に若干残る。また４は底部付近をヘラ磨きする。３～５は胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、２・４は黒斑がある。５は高坏で脚部を欠く。残存する杯部は口径26.8cmで丹塗磨研されている。口縁平坦部はヘラで細い線を容れる。胎土は精選されてあまり砂粒を含まず、



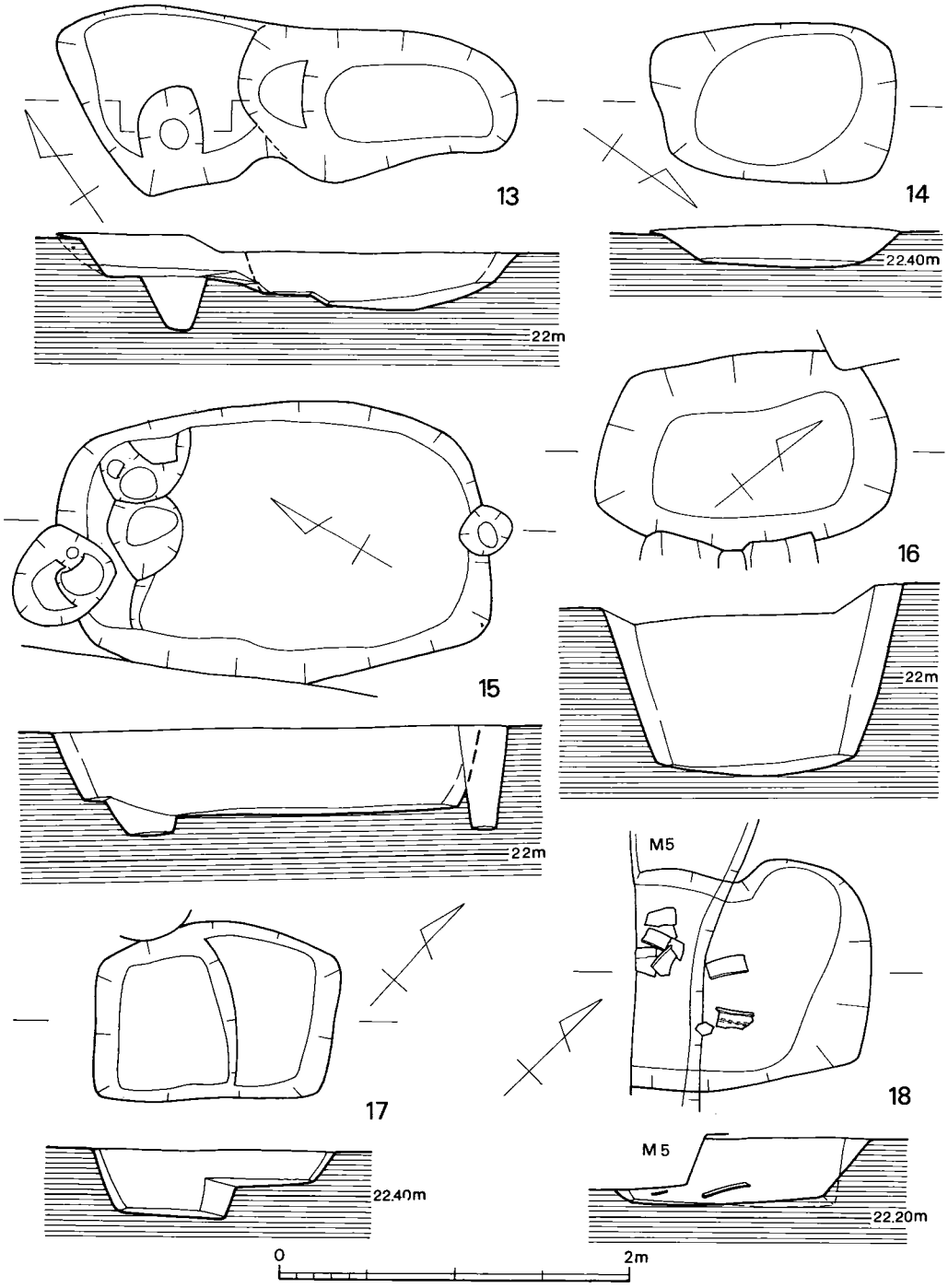
第98図　祭祀土壙実測図①（1／40）



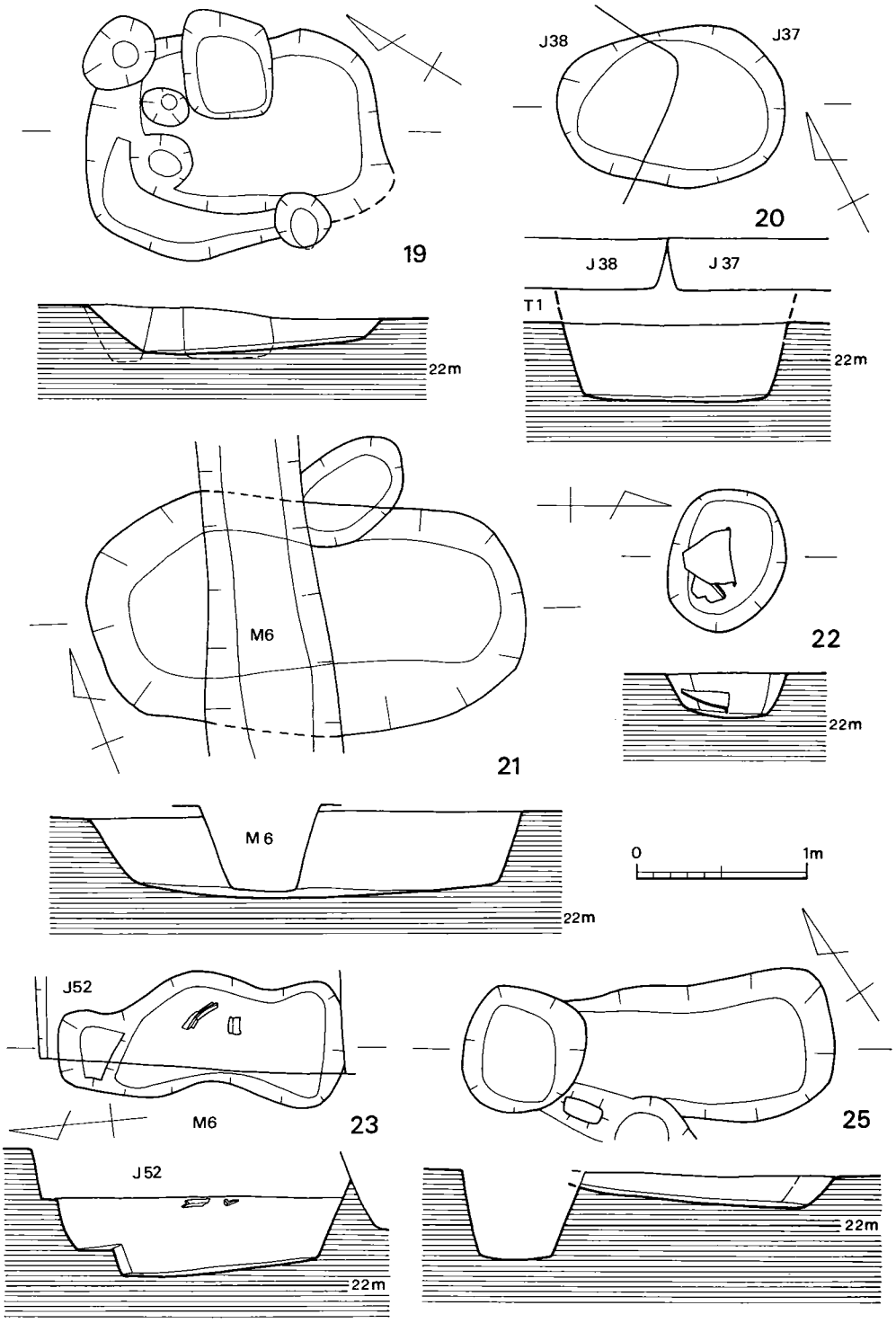
第99図　祭祀土壙実測図②（1／40）



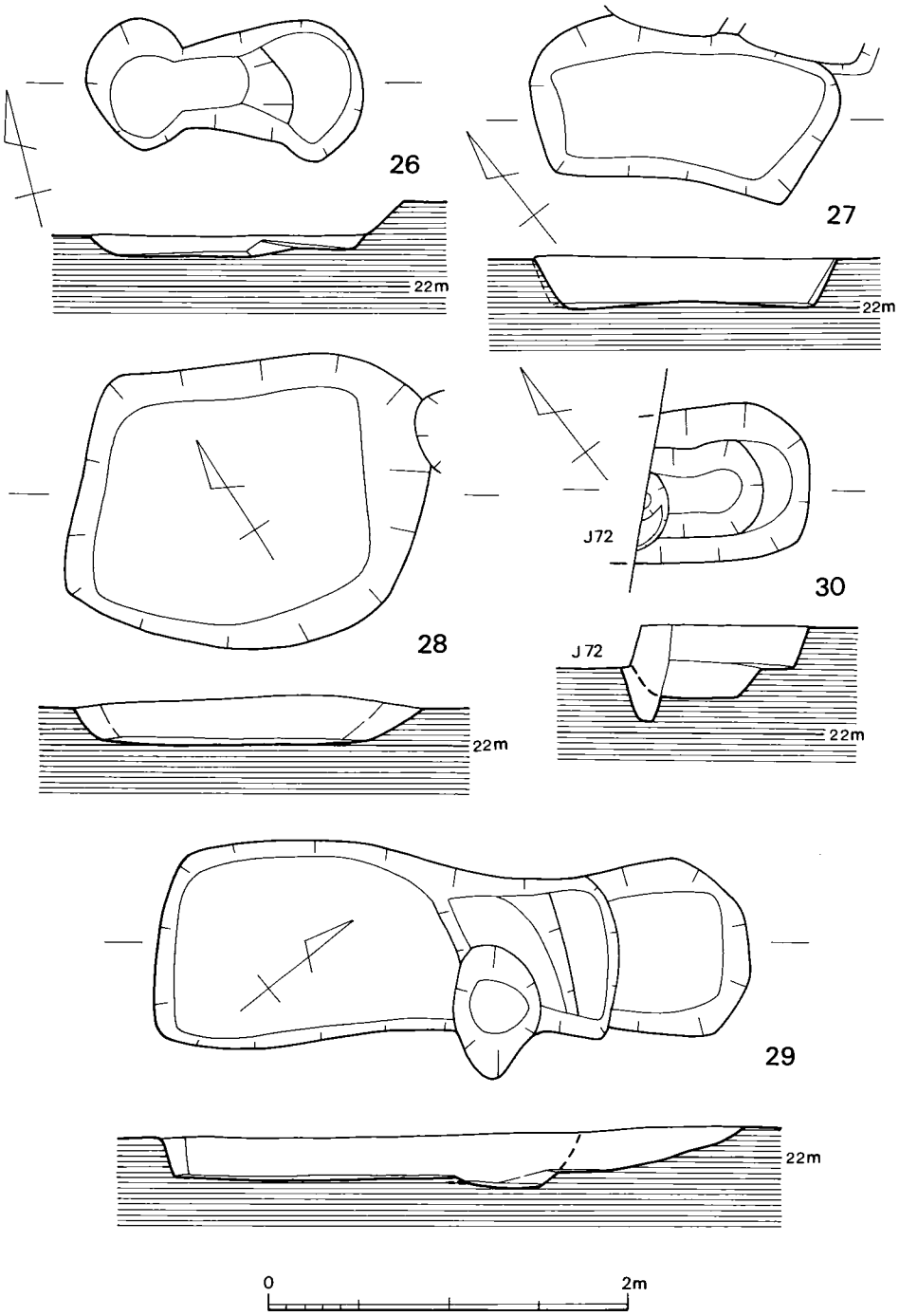
第100図　祭祀土壙実測図③（1／40）



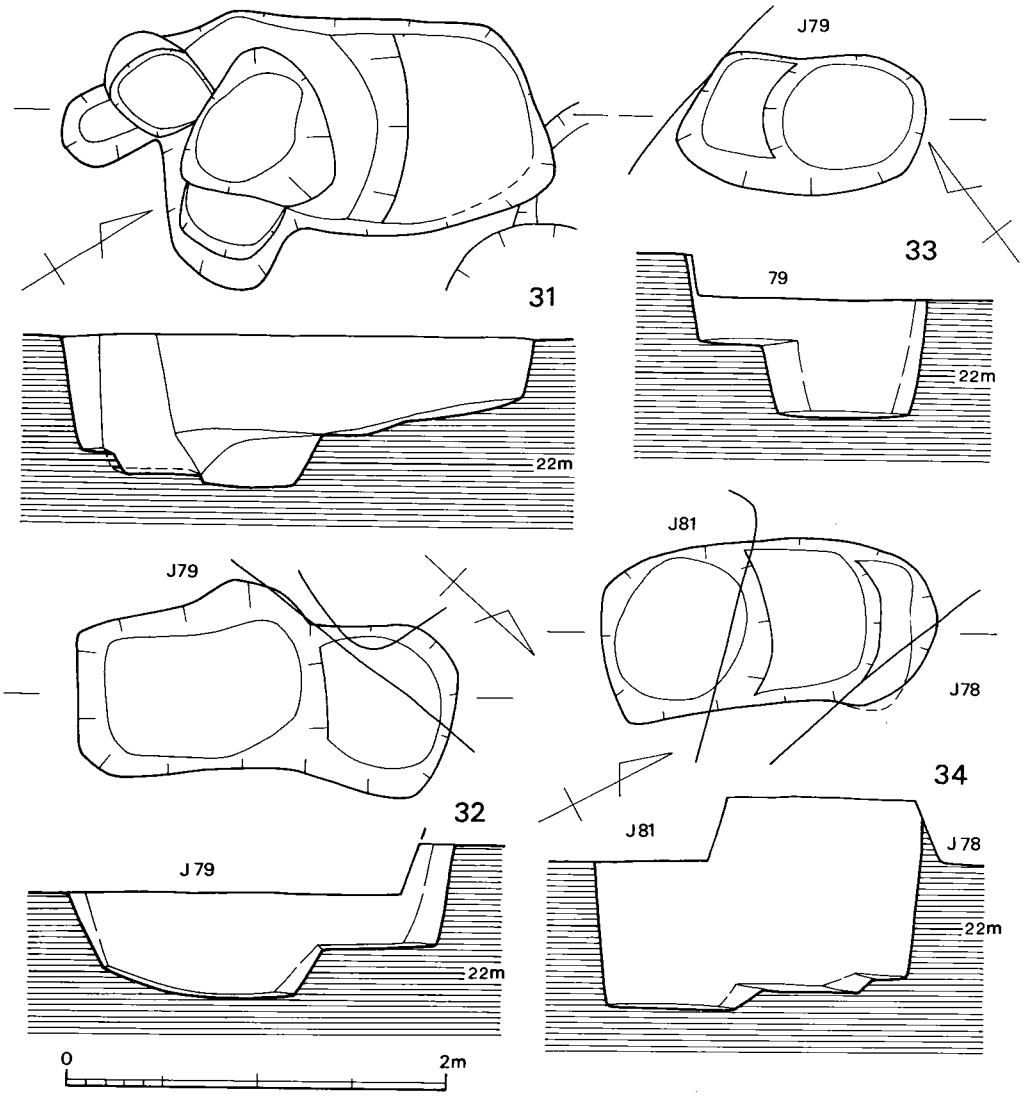
第101図　祭祀土壙実測図④（1／40）



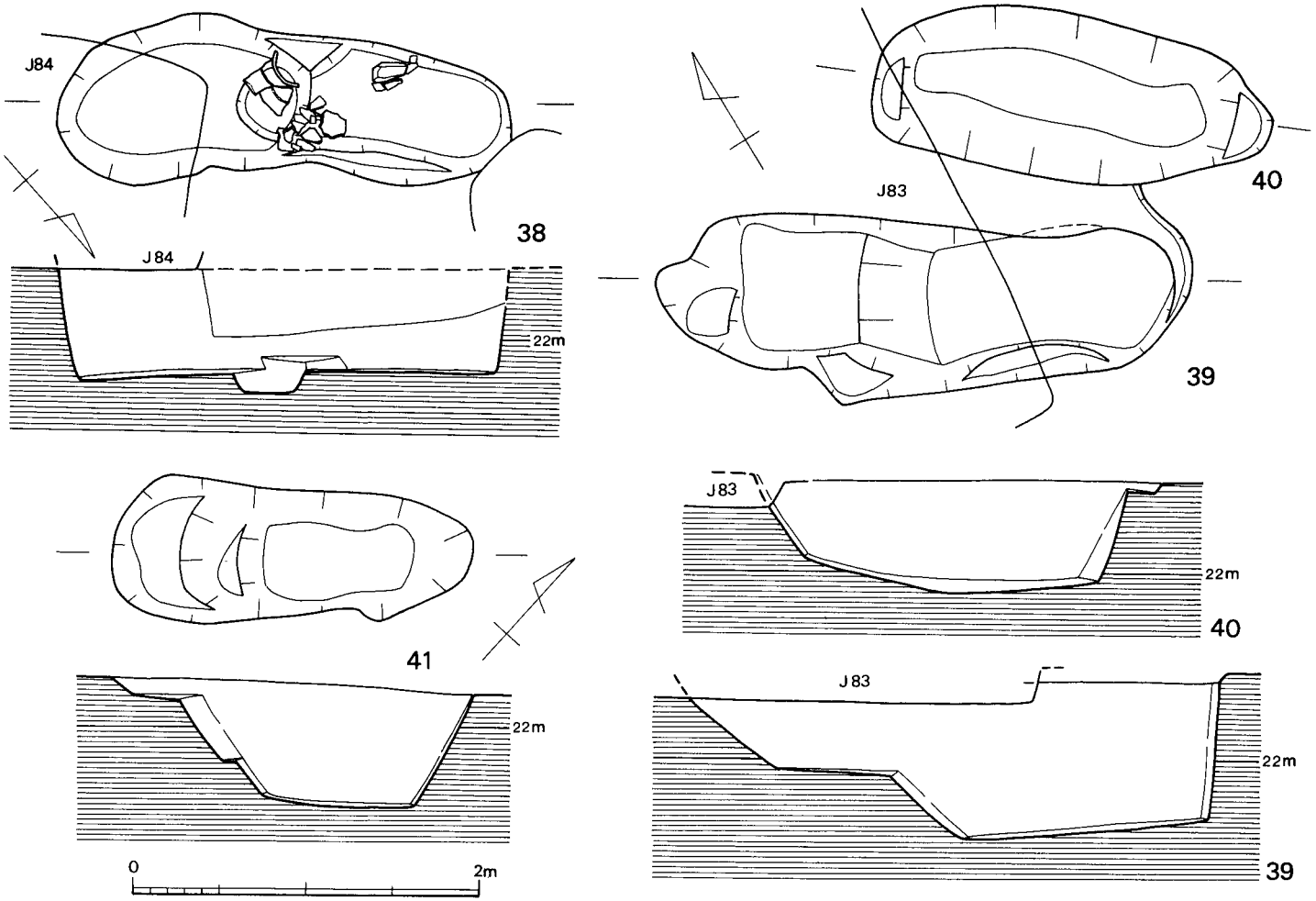
第102図　祭祀土壙実測図⑤（1／40）



第103図　祭祀土壙実測図⑥（1／40）



第104図　祭祀土壙実測図⑦（1／40）



第105図　祭祀土壙実測図⑧（1／40）

焼成良好である。6は甕で頸部の下に突帯を巡らす。小片の反転復原図で口径28cmほどである。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈し、煤が付着している。

6号祭祀土壙（第98図）ＳＤ６

溝２の南にある。長径2.3m、短径1.4m、深さ0.65mの二段掘りで、底面に深さ15cmのピットがある。土器の出土量は少ない。

7号祭祀土壙（第99図）ＳＤ７

６号祭祀土壙のすぐ南に掘り込まれている。長径1.28m、短径0.9mの不整楕円形を呈し、二段掘りで深さ0.6mである。壁を直に掘っており、他の祭祀土壙と異なる。土器は若干量出土している。

土　器（図版114、第181図）　口径33.5cmの甕で、胴下半を次ぐ。外面の頸部以下にハケ目が残るが、他の部分はナデられて消える。胎土は精選され、焼成良好で白黄褐色～褐色を呈する。

8号祭祀土壙（第99図）ＳＤ８

４号建物のすぐ南に位置する。長径2.6m、短径1.55mで、三段掘りで深さは0.8～0.85mである。土器は底面から20cmほど上に、割って投げ込んでいる。壙内の全面に散乱せず、中軸線より西側に一定のまとまりを持って検出された。

土　器（図版114・115、第181・182図）　１はほぼ完形の鉢で口径27cm、器高18.3cmである。外面は細ハケ目が部分的に残る。口縁部はヨコナデ、ほかはナデ調整である。胎土は精選され、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、部分的に煤が付着する。２～４は同一個体の壺であるが接合しない。口径33.2cmで、器高は30cmほどであろう。胴部に口唇状突帯を２状巡らせる。上段の突帯の上の一箇所に長さ５cmほどの粘土を断面三角形の突帯状に貼り付いている。頸部は暗文を入れるが、器面が荒れており、下半部は遺存しない。ほかの部分はヨコナデ、ナデ調整を行う。胎土は砂粒をやや多含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。５・６は甑と甕で、５は口径26.4cm、器高26.4cmで、６は同31cm、36.1cmを測る完形品に復原される。口縁部はヨコナデされ、外面の頸部以下はハケ目調整される。内面はナデ調整である。細砂粒を多く含み、焼成良好で５は淡黄褐色、６は黄褐色を呈し、黒斑がある。７～９は器台である。口径10cm前後、器高12cm前後である。外面はハケ目調整されるが、口縁部・裾部はヨコナデされて消えている。内面は強いナデによる指圧痕が残る。胎土は細砂粒を少し含む程度で、焼成良好で黄褐色を呈する。10も器台で、中実の円柱形を呈する。直径は6.7cm～８cm、器高は13.6cmである。表面は強いナデによる指圧痕が残る。胎土は細砂粒を少し含む程度で、焼成良好で黄褐色を呈する。

9号祭祀土壙（第99図）**ＳＤ９**

溝５の北東隅角部に検出した。そのほとんどを溝に削平されている。プランは細長く、長径４ｍ、短径0.8ｍ前後である。深さは0.5ｍ程度であろう。本土壙に伴なうと思われる土器は、溝に削平されているためか小破片ばかりである。

土　器（第182図）　１・２・４・５は甕の破片である。１・２は口径31.8cm、35cmに復原される。３は壺の底部であろう。

10号祭祀土壙（図版45、第100図）**ＳＤ10**

９号祭祀土壙と直交方向に掘られている。大半を溝５と７号住居に削平される。プランは長く不整長方形で、長軸6.5ｍ、短軸0.75ｍ、深さ0.56ｍ程度である。底面から浮いた状態で破砕された土器が、土壙西半部一面に検出された。

土　器（図版115・116、第183図）　１は筒形器台で４ケ所の方形透し孔の上縁以下は残存しない。おそらく、この部分で打ち欠いて別々に複数の祭祀土壙に埋められたものであろう。口径12.6cm、現存高7.9cmである。胎土は精選され、焼成良好で丹塗磨研される。２は口径11.4cm、器高2.6cmを測る丹塗磨研された短頸壺の蓋だある。２個一組で２ケ所に計４個の穿孔が認められる。胎土は精選され、焼成良好である。３は口径8.5cm、器高7.5cmの丹塗磨研されたコップ状の土器である。砂粒をほとんど含まず、胎土は精選され、焼成は良好である。４は鉢で口径17cm、器高9.6cmを測る。底部付近にハケ目調整時の痕跡として僅かな稜が残る。口縁部はヨコナデ、他は全面ナデ調整を行う。胎土は砂粒をかなり含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。６は口径31.1cm、器高11.2mmを測る甕の蓋である。口縁部はヨコナデされるが、外面はハケ目調整され、他はナデ調整である。胎土は砂粒をかなり含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。７は口径23.5cm、器高28cmを測ねーる高坏で丹塗磨研される。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で生地は明茶褐色を呈する。

11号祭祀土壙（第100図）**ＳＤ11**

１号周溝墓の西部に位置し、北半部を９号住居に切られ、南端部は調査区外に延びる。プランは不整長楕円形で長径3.4ｍ、短径1ｍ前後である。北側は階段状に三段掘りになっており、深さは最深部で0.93ｍである。土器は底面から浮いて二段目の掘り方より上層で検出した。

土　器（図版116・117、第183・184図）　１は甕の蓋で形が歪んでいる。口径33.8cm、器高12cmである。口唇部はヨコナデ、外面はハケ目調整、他はナデ調整を行う。砂粒を多く含み、焼成良好で淡明茶褐色を呈す。２は筒形器台で、４ケ所の方形透し孔の上縁以下は残存しない。10号出土例と同様に、この部分で打ち欠いて別々に複数の祭祀土壙に埋められたものであろう。口径14.3cm丹塗磨研される。胎土は精選され、焼成良好である。３～５は鋤先状口縁の壺で丹塗磨研される。最も残りのよい３は口径32.7cm、現存高26.3cmである。３・４は頸部に口唇状突帯を巡らし、４は胴部にも２条の口唇状突帯を巡らす。３・５は胎土は精選されるが、４は

砂粒を多量に含み、ともに焼成良好である。6・7は同一個体の壺だが互いに接合しない。口径36.2cm、器高は35cm程度であろう。頸部直下に三角突帯を、肩に口唇状突帯を巡らす。頸部外面は幅2.4cm～2.7cmの縦位のヘラ磨きを6ケ所に配する。ほかは、ナデ・ヨコナデ調整である。胎土は精選され、焼成良好で褐色を呈する。8は口径35.8cm、現存高17.5cmの開口壺で、丹塗磨研される。胴部上半に口唇状突帯を巡らす。胎土は精選されて砂粒をほとんど含まず、焼成良好である。9はほぼ直立する口縁の壺で口径16cm、現存高19.5cmを測る。10は壺の底部で横位のヘラ磨きを行う。胎土は精選され、焼成良好で黄褐色を呈する。11～14は甕で、いずれも底部を欠き、14を除いて丹塗磨研される。頸部のやや下に口唇状突帯を巡らし、残りのよい11・12は胴部中位にも口唇状突帯を巡らしている。口縁部の平坦面には暗文を入れ、同端部は12を除いて刻み目を施す。頸部の突帯との間は縦位のヘラ磨き（11・13)、ハケ目調整（12)を行っている。口径は小型の13が20.8cm、大型の12が31cmである。胎土は精選され、焼成良好である。15～17は同形の甕であろう。小型で完形の15は口径26.2cm、器高25.2cmである。口縁部はヨコナデ、他はナデ調整である。16・17は胴部下位に突帯を巡らす。16は口唇状突帯が1条、17は断面が台形の突帯が2条認められる。ナデ調整さけるが16の底部は工具による擦過痕がある。

12号祭祀土壙（第100図）**ＳＤ12**

11号住居の下層で検出し、1号周溝墓の東溝に切られる。長径1.2m、短径0.9mの不整長円形を呈する。二段掘りで深さは0.55mほどである。削平され土器の出土量は少ない。

13号祭祀土壙（第101図）**ＳＤ13**

17・18号住居の下層に検出した。二段掘りで長径1.6m、短径0.8m程の楕円形を呈し、深さは0.3mである。甕の破片が出土した。

14号祭祀土壙（第101図）**ＳＤ14**

16号住居の下層に検出した。長径1.35m、短径0.9m程の楕円形を呈し、深さは0.25mほどである。削平された土器の出土量は少ない。

15号祭祀土壙（第101図）**ＳＤ15**

溝5を挟んで4号円形周溝の東側に検出した。長方形に近いプランを呈し、長辺2.3m、短辺1.2m程で、深さは0.5mである。

16号祭祀土壙（図版46、第101図）**ＳＤ16**

33号住居の下層に検出した。長径1.75m、短径1.1m程の楕円形を呈し、深さは0.95m程で深い。削平された土器の出土量は少ない。

土　器（第185図）　筒形器台で丹塗磨研される。口縁部外面は縦位に6条一組の暗文を入れている。方形透し孔の上縁部で打ち欠かれている。口径14cmである。胎土は精選されてあまり砂粒を含まず、焼成は良好である。

17号祭祀土壙（第101図）**ＳＤ17**

溝５の東、15号祭祀土壙の南に存在する。二段掘りでプランは長方形を呈し、長辺1.3m、短辺0.8～0.85m、深さ0.4mである。

18号祭祀土壙（第101図）**ＳＤ18**

17号祭祀土壙の南に掘られ、西半部を溝５に切られる。甕を検出した。

19号祭祀土壙（第101図）**ＳＤ19**

34・35号住居の下層に検出した。削平されて遺存状態は良くない。土器も小破片が若干量出土しただけである。

20号祭祀土壙（図版46、第102図）**ＳＤ20**

37・38号住居に切られ、１号竪穴を切っている。長径1.35m、短径0.95mの楕円形を呈し、深さは0.45m（本来は１mほどであろう）である。37・38号住居の削平をまぬがれた部分から、割って埋めた状態で土器を検出した。

土　器（図版118、第185図）　１は筒形器台で口縁部～脚上半部を欠く。脚裾部径39㎝、現存高32㎝を測る。外面はハケ目調整後に丹塗磨研される。内面の脚裾部付近にハケ目を残すが縦方向のナデ調整を行い、強い指ナデ痕が残る。胎土は精選され、焼成良好で生地は明茶褐色を呈する。２は口径47.6㎝を測る甕で、頸部直下に三角突帯を巡らす。外面はハケ目がよく残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。

21号祭祀土壙（第102図）**ＳＤ21**

中央部を溝６に切られる。楕円形のプランを呈し、長径2.55m、短径1.33m、深さ0.5mを測る。土器は甕の破片と鉢が出土している。

土　器（第186図）　１は口径12㎝、器高5.5㎝に復原される鉢で混入品である。２は口径18.4㎝、器高8.9㎝を測る鉢である。外面にハケ目が残る。砂粒を多く含み、焼成良好で淡黄色を呈する。

22号祭祀土壙（第102図）**ＳＤ22**

52号住居の下層で検出した。削平され遺存状態は良くない。楕円形のプランで長径0.85m、短径0.68mを測る。甕を検出した。

土　器（第186図）　口径35.3㎝、器高37.2㎝を測る甕である。外面は黒漆を塗ったように見受けられる。胎土に砂粒をやや多く含み、焼成良好である。

23号祭祀土壙（第102図）**ＳＤ23**

51・52号住居の下層で検出し、西半部を溝６に切られる。長径1.65m、短径0.65㎜不整形のプランを呈し、二段掘りで深さは0.45m（本来は0.8m程度）である。甕が出土しているが、住居の竪穴部を掘る際に削平されて、大部分が失われている。

24号祭祀土壙（付図１）ＳＤ24

45号住居の北西隅に検出した。浅くて詳細は不明ながら、若干量の土器が出土した。

25号祭祀土壙（第102図）ＳＤ25

49Ａ・Ｂ号住居の下層で検出した。西端部を49Ｂ住居の主柱穴に切られる。プランは長方形に近く、長辺は1.7m程度と思われ、短辺は東側で0.8mである。削平されて浅く、深さは20cm足らずである。若干量の土器が出土した。

26号祭祀土壙（第103図）ＳＤ26

16号廃棄土壙の床面に検出した。長径1.5m程である。遺存状態が悪く、若干量の土器が出土したのみである。

27号祭祀土壙（第103図）ＳＤ27

72･73号住居の下層に検出した。長径1.7m、短径１m程の略台形状を呈する。深さは削平されて浅くなり、30cmに満たない。遺存状態が悪く、若干量の土器が出土しただけである。

28号祭祀土壙（第103図）ＳＤ28

73号住居の下層に検出した。長方形に近いプランを呈し、長辺1.8m、短辺1.3m程である。削平されて浅くなり、深さは30cmに満たない。遺存状態が悪く、少量の土器が出土しただけである。

29号祭祀土壙（第103図）ＳＤ29

73･74号住居の下層に検出した。長方形に近いプランを呈し、長辺2.5m、短辺0.9m～1.1m程である。削平されて浅くなり、深さは30cmに満たない。土器は若干量残っていた。

土　器（第186図）　筒形器台の脚裾部の破片である。脚裾部径37cm、現存高17.4cmである。ハケ目調整後、丹塗磨研される。その後、方形透し孔を４ケ所に配する。脚裾部付近はヨコナデ、内面ハナデ調整を行う。胎土に細砂粒を含むが精選され、焼成良好である。

30号祭祀土壙（第103図）ＳＤ30

72号住居の南東壁に切られる二段掘りの土壙である。プランは長径は不明であるが0.9mまで遺存し、短径0.85m、深さ43cmである。土器は若干残っていた。

31号祭祀土壙（第104図）ＳＤ31

72号住居の南東で、30号祭祀土壙の東に位置し、30・32号祭祀土壙と主軸がほぼ直交する。南側は後にピットが掘り込まれている。プランは不整長方形を呈し、長辺1.7m～２m、短辺１m程度である。二段掘りでは深さ0.8mである。かなりの量の土器が出土した。

土　器（図版118、第186）　２個体しか図示できなかった。１は丹塗磨研された壺である。胴部最大径の部分に口唇状の突帯を巡らす。２は坏部が椀状の高坏で脚部を欠く。全面を丹塗磨研する。口径15.4cmに復原され、残存高8.7cmである。１は胎土が精選されるが、２は砂粒を多く含み、焼成良好である。

32号祭祀土壙（第104図）**ＳＤ32**

大半を79号住居の西壁に切られる。プランは長方形に近く、二段掘りで長辺1.9m、短辺0.8m、深さ0.6m（本来は0.9m程度）である。土器がかなりの量出土した。

土　器（図版118、第186図）　1は口径34.3cm、現存高11.5cmを測る壺である。口縁部はヨコナデ、他の部分はナデ調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶色を呈する。2は甕の蓋で反転復原図である。口径32.6cmに復原され、現存高5.6cmである。内外面をハケ目調整し、口縁部はヨコナデを行う。3・4は甕でともに外面はハケ目がよく残る。3は口径31cmに復原され、現存高21cmを測る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色～茶褐色を呈する。

33号祭祀土壙（第104図）**ＳＤ33**

79号住居の北壁際の床面下層で検出した。プランは不整楕円形を呈し、二段掘りである。長径1.2m、短径0.72mで本来の深さは0.9m程度であろう。土器が少量出土した。

34号祭祀土壙（第104図）**ＳＤ34**

北端を78号住居に、南判を81号住居に切られる。プランは楕円形に近く二段掘りで、長径1.8m、短径0.9m、深さ1.15m程度である。かなりの量の土器が出土した。

土　器（第187図）　1は短頸壺の蓋であろう。天井部を平たく作る。口径19cm、器高4.2cmである。器面が風化して調整が不明瞭だが、一部にハケ目残る。細砂粒を含み、焼成良好で、明茶褐色を呈する。2～4は甕で完全形品の4は口径32.2cm、器高35cmを測る。ともに外面をハケ目調整するが、4はハケ目の下にタタキ目が部分的に残る。砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈する。5は坏部が椀形の高坏で、図上で完形に復原される。脚部内面を除いて全面を丹塗磨研する。口径は13.7cm、器高16.2cmに復原される。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で生地は黄褐色である。

35号祭祀土壙（付図1）**ＳＤ35**

34号祭祀土壙に西接して掘られた不整形の土壙である。祭祀土器の破片が出土している。

36号祭祀土壙（付図1）**ＳＤ36**

75号住居の西南壁際に検出した。祭祀土器が顔を出していたが、不幸なことに掘り忘れてしまった。

37号祭祀土壙（図版47、第108図－15参照）**ＳＤ37**

15号廃棄土壙の北側の底面に検出した。廃棄土壙に削平されていたが、土器の残りはよかった。全て破砕して埋められたものである。

土　器（図版119、第187図）　1・2は丹塗磨研された筒形器台の破片である。1は口縁部かに頸部にかけての破片で、意識的にこの部分で切り放したようである。口径12.2cm、現存高10.8cmである。4ケ所に方形透し孔を配する。2は脚裾部の破片で脚裾部径35cm、現存高15.5cmを

測る。４ケ所に透し孔を配する。ともに砂粒を若干含み、焼成良好で生地は明茶褐色を呈する。３は小型の壺で、口径14.7cm、器高15.4cmを測り、胴部中位に三角突帯を巡らす。底部は若干上げ底である。外面はハケ目が僅かに残り、内面はナデ消されて工具の跡だけである。胎土は精選され、焼成良好で明茶褐色を呈する。４・５は甕の蓋である。５は口径33.4cmである。ともに外面はハケ目調整される。胎土は砂粒をやや多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。６・７は甕で、６は口径30cmに復原される。ともに外面はハケ目調整される。胎土に砂粒をやや含み、焼成良好で黄茶褐色を呈する。８・９は器台で口径11cm、器高16cmである。口縁部、裾部はヨコナデし、外面はハケ目調整を行う。胎土は精選され、焼成良好で黄褐色を呈する。

38号祭祀土壙（第105図）**ＳＤ38**

南側を84号住居に切られる。プランは長楕円形で底面の中央に浅いピットがある長径2.6m、短径0.8m前後、深さ0.6m程度である。かなり多量の土器が破粋されて出土した。

土　器（図版119・120、第188図）１は直口壺で口径19.5cm、器高32.6cmを測る。外面は黒色顔料を塗布しているように見受けられる。頸部に三角突帯を巡らし、外面の底部付近はヘラ状のものでナデている。口縁部はヨコナデ、他の部分はナデ調整を行っている。細砂粒をかなり含み、焼成良好で生地は黄褐色を呈する。２は無頸壺で口径14.9cm、器高14.8cmを測る。外面は丹塗磨研される。細砂粒をかなり含み、焼成良好で生地は黄褐色を呈する。３は口径18.3cm、器高10.3cmの鉢である。外面は摩滅しているがハケ目が残る。口縁部はヨコナデ、内面ナデ調整を行う。細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。４・５は器台で口径10cm、器高15cm前後である。調整も酷似するが４の口縁部・裾部の外面はナデにより、ハケ目が消えている。砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。６は甕の蓋で、口径34cm、器高12.6cmを測る。外面はハケ目調整されるが口縁部はヨコナデ、天井部外面はナデによりハケ目が消えている。砂粒を多く含み、焼成は普通で暗褐色を呈する。７は甕で、口径30cm、器高38.2cmを測る。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ目調整され、内面はナデ調整を行う。細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。８は甑の底部片である。外面煤が付着する。

39号祭祀土壙（第105図）**ＳＤ39**

西側の大半を83号住居に切られる。不整楕円形の二段掘りの土壙である。長径３m、短径１m程度で、深さ0.9mである。若干量の土器が出土した。

土　器（図版120、第189図）頸部から口縁部を欠く、注口土器で注口部を欠失する。外面は丹塗磨研される。胎土は精選され、焼成は良好である。

40号祭祀土壙（第105図）**ＳＤ40**

39号祭祀土壙に平行してすぐ北に掘られている。プランは楕円形で底面の西半部は傾斜している。長径2.3m、短径0.95m、深さ0.65mである。若干量の土器が出土した。

土　器（第189図）高坏の脚部で丹塗磨研される。坏部を欠き、脚裾部径11cmである。胎土は

精選され、焼成良好である。

41号祭祀土壙（第105図）ＳＤ41

104号住居の下層で検出した。楕円形のプランを呈し、三段掘りである。長径2.06m、短径0.8m前後、深さ0.7mである。土器は検出していないが、土壙の形状から祭祀土壙と考えた。

42号祭祀土壙（図版47、付図１）ＳＤ42

85・86号住居の下層に検出した。掘り方はほとんど遺存せず、土器と壙底が僅かに残っていた。

土　器（図版120、第185図）１は甕の蓋で口径31.4cm、器高12.5cmである。外面の上半部はハケ目が残るが、下半部はナデ消される。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、黒斑がある。２～４は甕で残りの良い３は口径31.5cm、現存高28.5cmである。口縁部はヨコナデされ、外面はハケ目調整を行う。内面はナデ調整される。ともに細砂粒を多く含み、焼成良好で、黄褐色～暗褐色を呈し、３・４は煤が付着する。５・６は器台で作り、調整とも酷似している。１は口径10.5cm、器高15.6cm、２は同10cm、15.6cmである。口縁部・裾部はヨコナデし、外面はハケ目調整、内面はナデ調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。

43号祭祀土壙（図版47、付図１）ＳＤ43

84号住居のカマドと83号住居に切られる。土壙の遺存状態は良くないので図示していないが土器が多く出土した。

土　器（図版120、第185図）１は鉢で、底部を欠失しており、脚が付くかどうか不明である。口径21cm、現存高9.8cmを測る。細砂粒を多く含み、焼成良好で赤褐色を呈し、黒斑がある。２・３は甕である。２は口径32cmで、外面はハケ目調整、口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整を行う。３も調整は２に準ずる。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、外面に煤が付着する。４・５は作り、調整とも酷似している。口径10.8cm、器高15.3cmである。胎土は精選され、焼成良好で黄褐色～暗褐色を呈する。６はテズクネ風の器台で器高13cmである。砂粒を多く含み、赤明茶褐色を呈する。

44号祭祀土壙（付図１）ＳＤ44

６号祭祀土壙の東に検出した不整形の土壙である。土器が少量出土した。

土　器（図版120、第189図）１は黒塗りされた壺で、口径29.2cm、現存高25cmである。胴部に口唇状突帯が２条巡っていたようだが、剝離して遺存しない。口縁部はヨコナデ、他はナデ調整をしている。胎土は精選され、焼成良好で生地は褐色である。２も壺だが口縁部・底部を欠く。器面は摩滅しているが内面に僅かにハケ目が残る。砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈する。

7　廃棄土壙

溝２以南において18基（程）の廃棄土壙を検出した。１～７号廃棄土壙は当初、この部分の地山面が他よりも低く、大溝だと誤って調査を行い、土壙と認識していなかった。一定程度掘り下げた時点で土壙が多数切り合っている事に気付き、その時は切り合い関係を確認することができる状況ではなかった。よって、この部分では、掘りあげた後の遺構の状態から７基程の廃棄土壙が存在しそうだ、という程度のことで、数基の増加があるかもしれない。しかし、出土土器は、切り合っている２～５号住居に関係する土器を除けば、８世紀頃のものである。

この遺跡の調査区内では、廃棄土壙と同時期頃の遺構の存在が僅かしか確認されておらず、その性格については、“廃棄土壙”としたが、なお検討の余地がある。確かに、この種の土壙では、焼土・灰・壊れた土器等の実生活に密着した人口遺物（廃棄物）等が出土している場合がほとんどである。現象的側面から見れば、確かに“廃棄土壙”であろう。しかし、これらのモノを廃棄する行為の過程を考える時、現在の私共が現象論的に認知し得る背後の状況は古代人の奥深い情念を痛切に感じさせる。しかし「ソノ時ノ人」の精神の軌跡までここで考察することは至難の業で、“廃棄土壙”にはなお検討の余地がある、ということを問題提起しておきたい。

この遺跡の調査区内だけで判断すれば、廃棄土壙は一定程度のまとまりがある。大きく分ければ、ひとつは１～13号の北半部に検出されたグループ、ふたつ目は14号が鍵となり、調査区西側に展開が想定されるグループ、みっつ目は15～17号を含めて調査区の西側に展開が想定されるグループ、よっつ目が18号から東側に展開が想定されるグループである。広く調査する機会が今後あれば、それらに伴う遺構も明らかになろう。

１～７号廃棄土壙（付図１）ＨＤ１～ＨＤ７

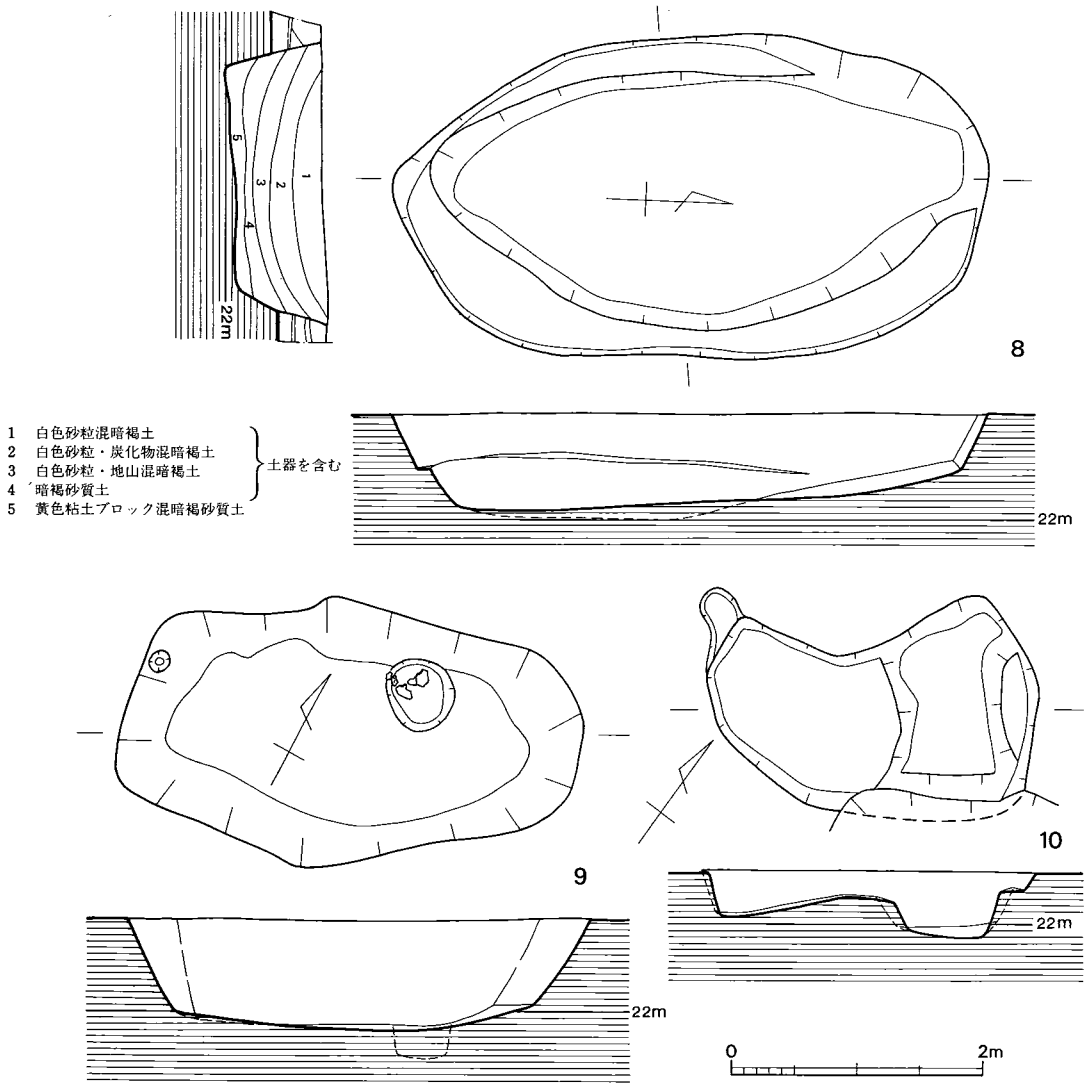
調査経過が上述のようで、説明できない。

土　器（第190図）６・７号廃棄土壙の土器を１点ずつ図示した。両者とも甕の口縁部で内面の頸部直下から強いヘラ削りを行う。口縁部はヨコナデ調整を行う。胎土に細砂粒を若干含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。

８号廃棄土壙（第106図）ＨＤ８

21・22号住居を切っている。プランは楕円形を呈し、長径4.7m、短径2.55m、深さ0.7m程である。土砂の堆積状況は、最下層（５）が自然に堆積した後、生活廃棄物を捨てている。

土　器（第190図）１・２は甕でともに小片である。３はカマドの支脚に使用された可能性が強い小型の甕である。ともに胎土に細砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈するが、３は外面に煤が付着する。



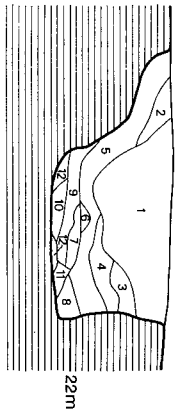
第106図　廃棄土壙実測図①（1／60）

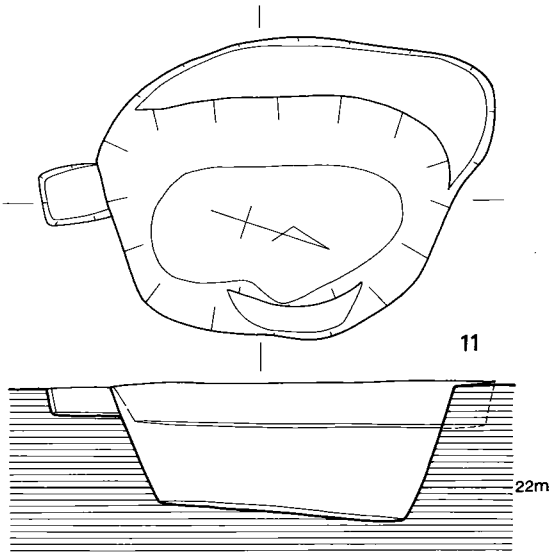
9号廃棄土壙（第106図）ＨＤ９

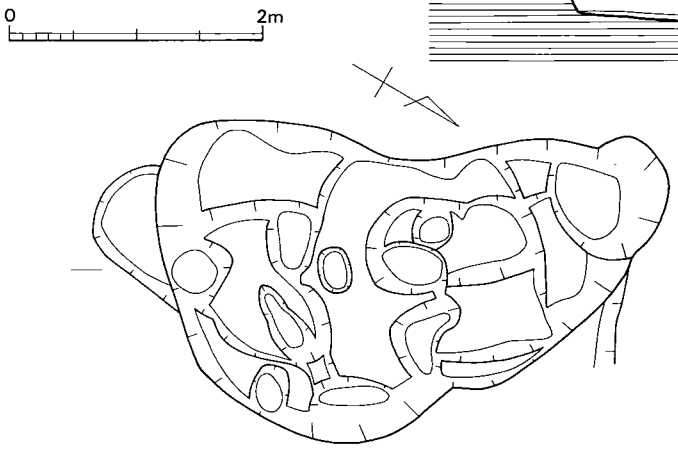
23・24号住居を切る。不整楕円形のプランを呈し、長径3.65m、短径２m前後、深さ0.85m程度である。多量の土器が出土した。

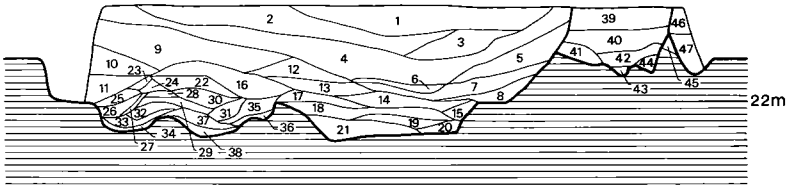
土　器（第190図）１・２はよく似た甕である。内面の頸部直下より下はヘラ削りされ、口縁部はヨコナデを行う。砂粒は若干量含み、焼成良好で淡褐色を呈する。３は須恵器の坏蓋である。光景14.5cmである。４は土師器で口径15.2cmで、焼成良好で茶褐色を呈する。５は土師器

1　焼土粒混灰茶褐色土
2　焼土粒混暗灰茶褐色土
3　焼土混暗黄灰褐色土
4　焼土・黄色粘土ブロック混暗灰褐色土
5　焼土・黄色粘土ブロック混灰黒色土
6　褐色粘質土
7　黄色粘質土
8　黄色・褐色土ブロック
9　黄色・褐色粘土粒混黒褐土
10　黄色・褐色粘土粒多含黒褐土
11　黄色粘土
12　淡黄色砂質土







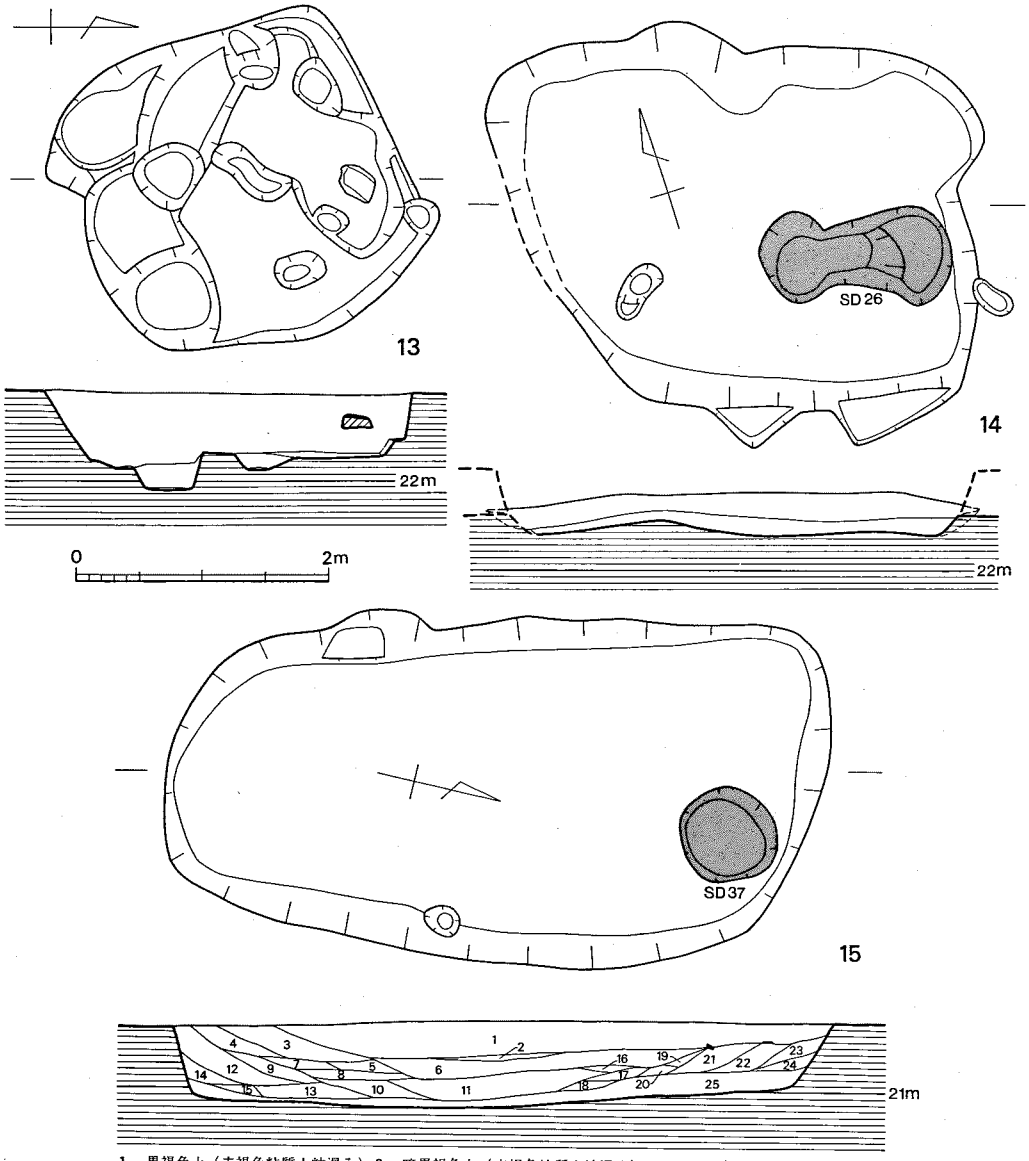


1　焼土混淡黄灰色土　2　焼土混黄灰色土　3　焼土ブロック含黄灰色土　4　焼土混暗黄灰色土　5　焼土混淡黄灰茶色土　6　焼土・黄色粘土粒混淡黄灰茶色土　7　焼土・黄色粘土粒混黄灰茶色土　8　黄色粘土ブブロック　9　灰黒色土　10　暗灰黒色土　11　黒色土　12　黄色粘土ブロック含灰黒色土　13　暗灰黒色土　14　黄色粘土ブロック多含灰黒色土　15　黄色粘土粒混淡灰黒色土　16　黄色粘土粒混暗灰茶褐色土　17　黄色粘土粒多含暗灰茶褐色土　18　黄色粘土粒少量含灰茶褐色土　19　黄色粘土ブロック混灰褐土　20　黄色粘土ブロック混明灰褐土　21　黄色粘土ブロック多含明灰褐色土　22　暗灰黒色土　23　黄色粘土ブロック混灰褐色土　24　黄色粘土粒暗灰茶褐色土　25　黄色粘土ブロック多含明灰褐色土　26　黄色粘土ブロック混暗茶褐色土　27　黄色粘土粒含暗茶褐色土　28　暗褐色粘質土　29　黄色粘土ブロック多含明灰褐色土　30　灰黒色土　31　黄灰色砂質土混黄色粘土　32　暗灰黒色土　33　黄色粘土　34　黄灰色砂質土混黄色粘土　35　黄色粘土ブロック混暗灰褐色土　36　黄色粘土ブロック混黄灰色土　37　黄色粘土ブロック混暗灰茶褐色土　38　黄色粘土ブロック混暗黄灰色土　39　暗黄褐色土　40　黄色粘土ブロック

41　黄褐色粘質土
42　黄色粘土粒混暗黄褐色土
43　黄色粘土・黒色土混黄灰色土
} 30号住埋土

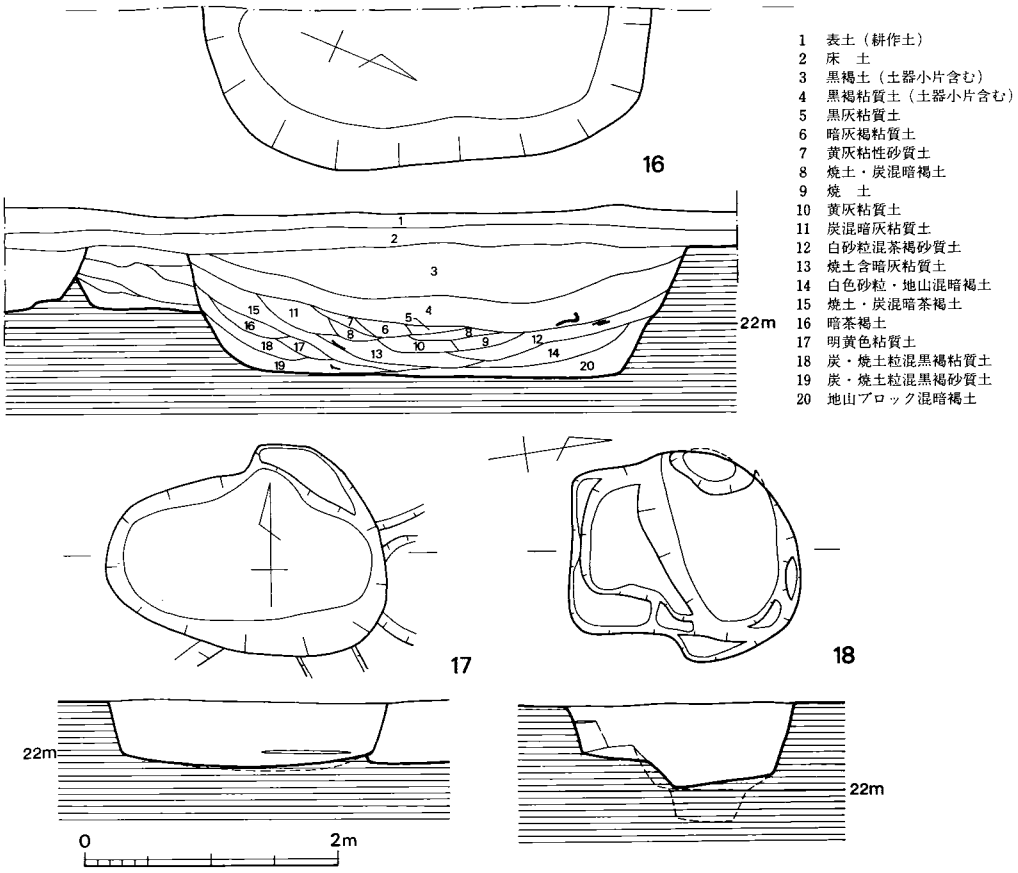
45　黄灰色土
45　灰黄褐色土
46　黒色土
47　黄色粘土ブロック混暗灰黄色土
} 住25埋土

第107図　廃棄土壙実測図②（1／60）



1　黒褐色土（赤褐色粘質土粒混入）2　暗黒褐色土（赤褐色粘質土粒混入）3　暗茶褐色土（赤褐色粘質土粒混入）4　暗黄褐色土（赤褐色粘質土粒混入）5　暗黒褐色土（赤褐色粘質土粒混入）6　暗黒褐色砂質土（赤褐色粘質土粒混入）7　暗黄褐色土混入黄白色粘質土（赤褐色粘質土粒混入）8　暗黄褐色土混入暗褐色土（赤褐色粘質土粒混入）9　暗茶褐色土（黄白色粘質土粒混入）10　暗黒褐色土混入黄褐色粘質土　11　暗黒褐色土（赤褐色粘質土粒混入）12　暗黒褐色土（明黄褐色粘質土粒混入）13　暗褐色土（黄褐色粘質土混入）13　暗褐色土（黄褐色粘質土混入）14　濃暗褐色土　15　黄褐色粘質土混入暗褐色土　16　暗褐色土混入暗黒褐色土　17　暗黒褐色土（暗黄褐色粘質土混入）18　暗黒褐色土混入黄褐色粘質土　19　灰褐色土（暗黄褐色粘質土混入）20　暗灰褐色土　21　灰褐色土　22　暗褐色土（暗黄褐色粘質土混入）23　暗灰褐色土混入暗褐色土（暗黄褐色粘質土粒混入）24　暗灰褐色土混入暗褐色土　25　暗黒灰色土

第108図　廃棄土壙実測図③（1／60）



第109図　廃棄土壙実測図④（1／60）

の坏で口径16cmに復原される。胎土は精選され、焼成普通程度で明茶褐色である。6・7は支脚に使われた甕の破片であろう。口縁部付近は摩滅している。8は丸底の大型の鉢であろう。口径37cmに復原される。外面に煤が付着している。9はほぼ平底に甕で、口径23.4cm、器高32.2cmである。内面の頸部以下はダイナミックにヘラ削りを行う。口縁部内面・胴部下半部に煤が付着する。

鉄製品（図版54・55、第117図－9・22）9は長さ11cmで断面が正方形を呈し、先端が細くなる。上端は銹のため形状は不明である。用途は不明。22は直径4.3cmの紡錘車である。中央の円孔は銹のため不明である。

10号廃棄土壙（第106図）ＨＤ10

9号廃棄土壙のすぐ西に接して掘り込まれている。不整形の土壙で、長径2.6m、短径1.3m、深さは最深部で0.6mである。出土資料は9号廃棄土壙と同様であり、図示していない。

11号廃棄土壙（第107図）ＨＤ11

28号住居・３号円形周溝を切っている。西側に深さ35cmほどの段が付き、プランは不整楕円形を呈する。長径2.8m、短径2.35m、深さ１～1.15mである。埋土は西から流れ込んだ状況を示し、灰・焼土等が土器とともに捨てられている。

土　器（第191図）１～４は須恵器である。１は坏蓋の小片である口縁部はかなり退化している。１～４は坏身の小片である。これらは胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で灰色～青灰色を呈す。５・７・８は支脚に転用された甕で胴部下半は二次加熱を受けて変色する。完形に図上復原される７は口径13.4cm、器高12.3cmを測る。６は甕の小片で、口径24cmに復原される。９は甑には小さく、把手付の甕であろう。10は上げ底風の底部の破片で全形は不明である。５～10の土師器は、６・８は砂粒を多く含むが他は砂粒の混入が少なく、焼成は良好で明茶褐色を基調とする。

12号廃棄土壙（第107図）ＨＤ12

30号住居の中に掘り込まれ、不整形プランを呈する。あるいは複数の土壙が切り合っている可能性がある。長径４ｍ、短径1.6m～2.5mで、底面は凹凸が激しいが深さは0.8～1.1m程度である。埋土に灰・焼土等カマド関係のものや地山の粘質土が含まれ、これらとともに土器・石製品が出土した。

土　器（第191図）１・２は須恵器で、２は生焼けである。１は口径15cm、器高2.7cmを測る杯蓋である。砂粒をやや多く含み、焼成は普通程度で白黄色～明茶褐色を呈する。２は口径12.6cmに復原され、器高4.2cmを測る坏身である。白黄色である。３～５は皿で図上で完形品に復原される５は口径22cm、器高3.5cmを測る。これらの皿は胎土にあまり砂粒を含まず、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。６は甕の小片である。口径26cmに復原される。内面の頸部以下はダイナミックにヘラ削りを行う。

石製品（図版62、第122図－16）粘板岩かと思われる石材で作られている。刀の柄のような形状をしている。残存長7.1cm、幅3.4cm、厚さ2.2cmである。

13号廃棄土壙（第108図）ＨＤ13

33・39・40号住居を切っている。不整方形の土壙でピットが多数存在する。長辺2.5m、短辺２ｍ、深さ0.5m程度である。焼土・灰・砥石等の生活廃棄物が出土した。

14号廃棄土壙（第108図）ＨＤ14

55号住居の西隅を切り、26号祭祀土壙を削平している。プランは不整形で長辺3.5m、短辺2.7m、深さは30cmほどだが、本来は60cm程度はあったろう。焼土・灰等の生活廃棄物に混じって土器・石製品が出土した。

土　器（第191図）１・２とも須恵器である。１は坏蓋の小片で口径17cmに復原される。２は平瓶で底部にヘラ記号がある。

石製品（第124図－40）砂岩製の粗砥の破片で、図の表・裏面を使用している。

15号廃棄土壙（第108図）ＨＤ15

83号住居のほぼ中央に掘り込まれている。略楕円形を呈し、長径5.25m、短径2.75m、深さ0.7m程度である。37号祭祀土壙を削平し、壙底に僅かに残る。埋土は他の廃棄土壙と同様に、焼土・灰・粘土等の生活廃棄物とともに、土器・土製品・鉄製品を検出した。

土　器（第192・193図）須恵器（１～７・10～12・20・21）と土師器を多量に検出した。図示したのは極く一部である。１～３は坏蓋で完形で小型の２は口径13.7cm、大型の３は18.9cmである。４～７は坏身で完形の６はゆがんでおり、口径11.2cm～14.8cm、器高5.8cmである。７は高台の付かないもので、体部を薄く作り、内湾する。口径14.7cm、器高4.5cmに復原される。これらの坏身・蓋は胎土に細砂粒を含み、焼成良好で灰色～青灰色を呈する。８・９は土師器の坏で小片である。10・11は高坏で、11の坏部は極端に浅い。細部に若干の作りの相違が認められる。10は口径20.7cm、器高9.5cmに復原され、砂粒を少しふくみ焼成良好で灰色～黒灰色を呈する。11は口径21.4cm、器高7.9cmに復原され、砂粒を少し含み焼成は悪く生焼けで、灰黄色を呈する。12は壺の口縁部の破片で口径13.6cmに復原される。砂粒をやや含み、焼成良好で青灰色を呈する。13は“塩”に関係する土器で、小片のため反転復原図である。口径9.8cm、器高５cmほどに復原される。テズクネ風で内面に工具の跡が残り、外面はナデている。胎土に細砂粒を若干含み、焼成良好で淡茶褐色～赤褐色を呈し、二次加熱を受けている。14は把手付きの甕の破片で、口径11.3cm、器高8.7cmを測る。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。15はカマドの支脚に転用された小型の甕である。16は鞴の羽口片である。この土壙から鉄滓も出土している。17～19は甕の破片で、口径25cm前後である。砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、17は煤が付着している。20・21は須恵器の大甕で、21は口径20cmに復原され、現存高44cmである。ともに砂粒を多く含み、焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。22は把手付きの甕で口径27.2cm、器高23.8cmを測る。作り・調整はダイナミックで荒く、器形もゆがんでいる。胎土に砂粒をやや多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、底部に煤が付着している。

土製品（図版52・53、第116図－９）９は大型の土製模造鏡の破片である。直径7.5cm～８cmほどである。紐は高さ２cmで荒い作りである。紐孔は径３mmである。鏡の表面にあたる部分は剝離し、裏面はナデ調整し、ハケ目が残る。胎土は精選され、焼成は普通程度で淡茶色を呈する。図版53の遺物は不整形の粘土（普通の土器の胎土と同じ）を焼いた（焼けた）もので、用途・性格は明確でない。

鉄製品（図版54、第117図－13）鉄鏃の茎片であろう。現存長4.3cmで断面は長方形を呈する。

16号廃棄土壙（図版48、第109図）ＨＤ16

86・87号住居を切り、土壙の半分は調査区外に延びる。プランは楕円形を呈し、長径3.5m、深さ1.05mである。埋土には焼土・灰・炭等とともに、土器が多量に出土した。

土　器（第194図）１・２は須恵器である。１は高坏の、２は坏身の破片で、焼成が悪く褐色～黄褐色を呈する。３～６・９は甕で完形近く復原される９は、口径23.6cm、器高31.7cmほどである。これらは胎土にあまり砂粒を含まず、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、６・９は黒斑がある。７は甑の口縁部片であろう。８は把手付きの甕か甑になろう。

17号廃棄土壙（第109図）ＨＤ17

16号廃棄土壙の東に検出し、86・87・89号住居を切っている。楕円形のプランを呈し、長径2.25m、短径1.5m、深さ0.5mほどである。須恵器・土師器が若干量出土した。が、図示していない。

18号廃棄土壙（第109図）ＨＤ18

99号住居の南隅に検出した。場合によれば、方形と楕円形の２基の土壙が切り合っているのかも知れない。出土品は他の土壙と同様であり、図示していない。

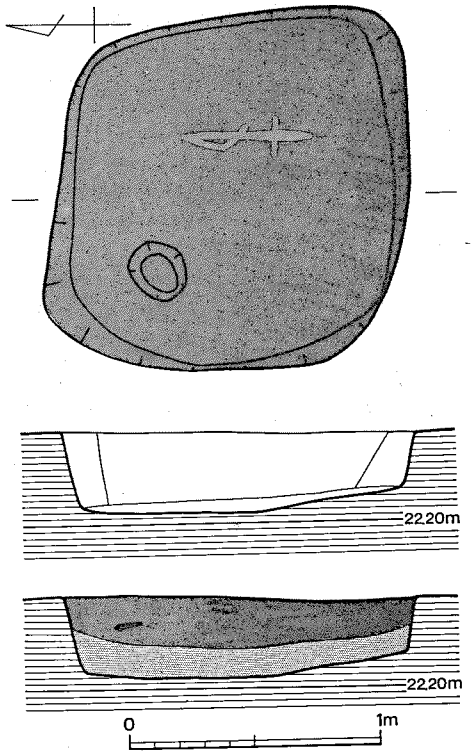
8　土　壙

単に土壙としたが、性格の不明な遺構を３基検出した。

１号土壙（図版48、第110図）Ｄ１

２号住居のすぐ北に検出した。1.2m四方のほぼ方形のプランを呈し、深さは30cmである。上層に炭化米が、下層に焼土を検出した。炭化米は、他の土を混じえずにビッシリとははいっており、焼土との分層も容易であった。土壙内から弥生時代中期の鉢を検出したが、調査区内の遺構から、この土壙の性格を判断するにはやや資料不足である。

土　器（図版195）焼土層から出土して、ほぼ完形に復原される鉢で、口径28.4cm、器高16.3cmを測る。細砂粒を多く含み、焼成良好で淡黄褐色を呈し、外面は煤が付着している。また口縁部には黒斑がある。



第110図　１号土壙実測図（１／30）

2号土壙（付図1）**D 2**

51号住居の西壁に切られた状態で検出した。プランは楕円形で長径1m以上、短径0.8m、深さ36cmほどである。土器は遺構検出面から埋土上層で検出した。

土　器（第195図）口径31cmに復原され、器高15.7cmを測る甕である。口縁部は“く”字形に近い。内外面にハケ目が残るが、ヨコナデ・ナデ調整で多くは消えている。胎土は細砂粒を若干含み、焼成良好で褐色を呈し、煤が付着している。

3号土壙（付図1）**D 3**

50号住居の北西壁際で検出し、住居を切っている。プランはほぼ長方形で、長辺1.7m、短辺1.2m、深さは26cmほどである。土器は遺構検出面から埋土上層で検出した。

土　器（第195図）1は二重口縁の壺の口頸部で、口径19.4cm、現存高7.3cmを測る。頸部内面に指圧痕が残り、他の部分はヨコナデされる。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。2は反転復原図で口径14cm、現存高27cmに復原される。口縁部内面、胴部上半外面にハケ目が残るが、多くはヨコナデ・ナデ調整により、消えている。細砂粒は多く含み、焼成良好で褐色～茶褐色を呈する。

9　落し穴状遺溝

調査区中央部以南で5基の落し穴状遺構を検出した。この種遺構は一般的に長方形に近いプランを呈し、壙底中央に円形のピットがある。本遺跡例の2・4号では壙底中央の円形ピットは検出していない。地山を少し掘り下げたにも関わらず、ピットは検出できなかった。3号は壙底にピットがあり、落し穴状遺構の中央のピットと考えていたが、この土壙だけから土器が出土し、壙底の計上が祭祀土壙と共通する部分があり、上述のように祭祀土壙の可能性が強い。当初、落し穴状遺構と考え、挿図を組んだので、ここで説明する。

1号落し穴状遺構（図版49、第111図）**O 1**

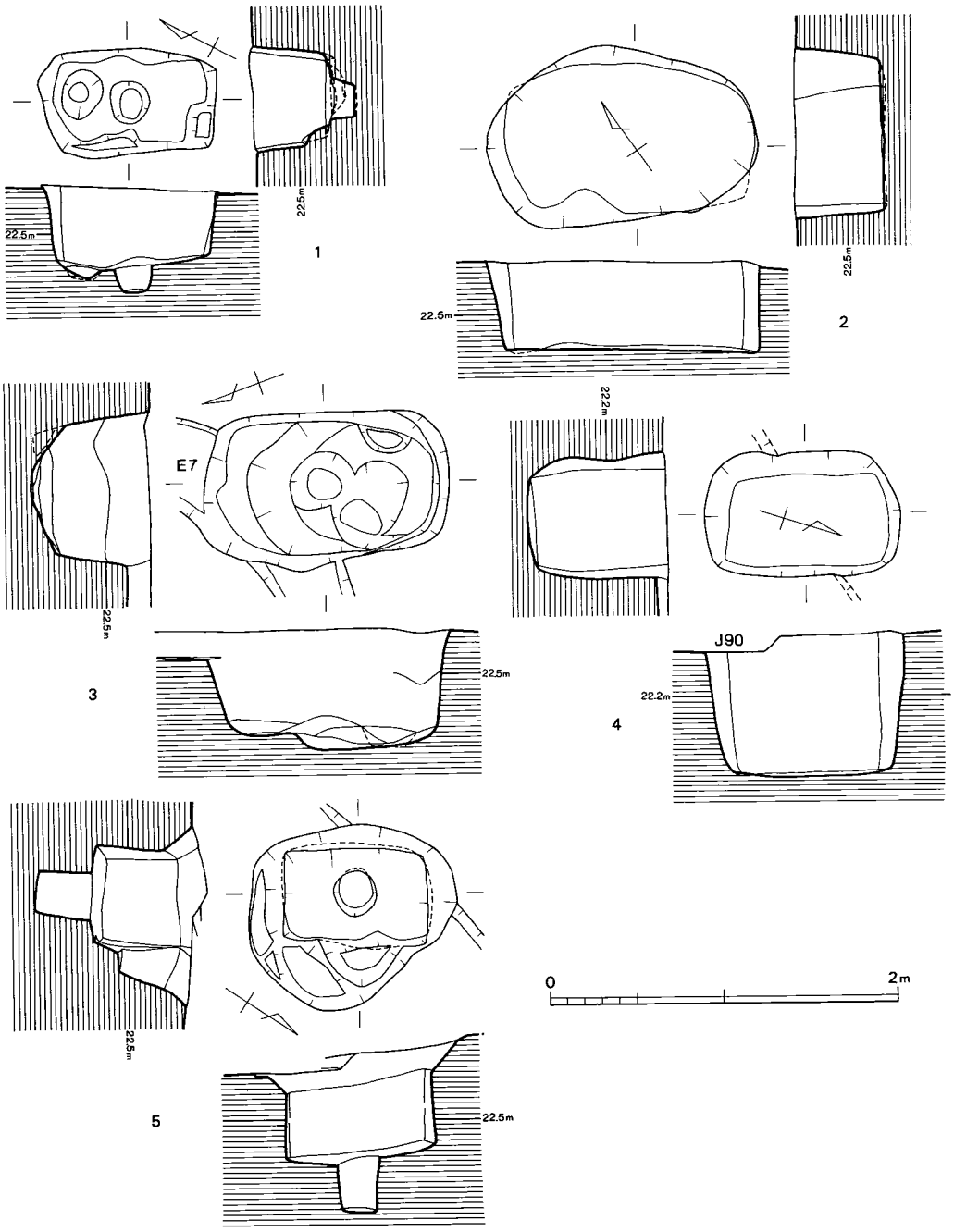
30号住居の東隅に検出し、4号円形周溝に切られる。略長方形プランを呈し、壙底中央にい径25cm、深さ15cmのピットがある。規模は長軸1m、短軸0.6m、深さ0.45mである。出土遺物は皆無である。

2号落し穴状遺構（図版49、第111図）**O 2**

52号住居の東に検出した。周壁が崩落したためか、楕円形を呈する。長径1.57m、短径1m、深さ0.52mを測り、底面は平で、中央のピットはない。出土品はない。

3号落し穴状遺構（図版49、第111図）**O 3**

7号円形周溝の南に検出し、周溝に切られている。隅円の長方形に近いプランで、壙底は二段になっている。長径1.4m、短径0.88m、深さ0.7m程度である。埋土上層から祭祀土壙から出土するものと同様の土器を検出した。



第111図　おとし穴状遺構実測図（1／40）

土　器（第195図）１・２は壺で、完形に復原される１は口径34cm、器高31cmを測る。頸部の下半に１条の三角突帯を巡らす。胴部内面にハケ目が残るが、口縁部はヨコナデ、他の部分はナデ調整されている。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、外面は黒ずんでいる。２は丹塗磨研され、内面に丹が垂れている。胴部分中位に口唇状突帯を巡らすが、摩滅している。胎土は精選され、焼成良好である。３は甕の蓋で天井部を欠くが、口径33.3cmに復原され、器高13cmほどである。外面はハケ目調整され、内面も口縁部にハケ目が残る。丹塗りされている。胎土に砂粒をあまり含まず、焼成良好で生地は白黄褐色を呈する。４は甕の底部である。砂粒を多く含み、焼成良好である。

４号落し穴状遺構（図版50、第111図）**Ｏ４**

90号住居の北西壁と３号竪穴に切られた状態で検出した。長方形に近いプランを呈し、長径1.1m、短径0.7m、深さ0.8mを測る。壙底は平坦で、中央にピットは検出されなかった。出土遺物は皆無である。

５号落し穴状遺構（図版50、第111図）**Ｏ５**

93号住居の主柱穴に切られた状況で検出した。主柱穴はこん土壙の中央から東側に掘り込まれていた。本来のプランはほぼ長方形を呈し、壙底は平坦で中央に怪25cm、深さ30cmほどのピットがある。規模は長辺１m、短辺0.7m、深さ0.6m程度である。93号住居の主柱穴に伴なう土器片以外の出土遺物はない。

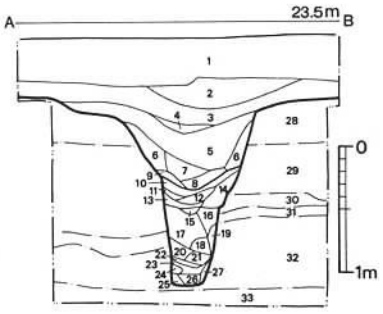
10　溝（付図１）

Ｂ地区では、太平洋戦争時の戦闘機の誘導路(調査区南の105号住居～４号周溝墓～76号住居の部分を走る）に関するものを除いて５条の溝（Ｍ２～Ｍ６）を検出した。なかでも、溝２・５は、本遺跡のどの時期に共存するのか、出土遺物に時間幅があり、出土品相互の時期的並行性から判断できる状態ではない。よって、出土遺物の示す時期幅とそれに重なる時期の遺構の面的拡がりとの関係を考慮して判断しなければならないだろう。

溝２（付図１、第122図）**Ｍ２**

１号住居の南で検出し、西南西～東北東に走る。１号住居との切り合い関係は、層位的に把握できなかった。が、住居はカマド出現前のもので、溝の埋土上層で６世紀後半以降の須恵器が出土していることから、結果的に溝２が１号住居を切っていると判断する。溝の断面は幅の細いＵ字形を呈し、幅1.2m、深さ1.4m～1.5mほどである。土層図（122図）の10～27は故意に埋め戻されたような状況である。土層断面を切った部分で杭等の痕跡を土層で検出することはできなかったが、故意的に埋め戻された状況は杭等が立っていた可能性を示唆する。溝の下半部は細く、よって全面を発掘しなかったが、下層から弥生土器・古式土師器片も出土している。この溝は上述の須恵器の出土から、７世紀ころ埋ったと考える。

溝３（付図１）**Ｍ３**



1　暗灰褐土（表土）
2　石英粒混灰黒色土
3　黒色土
4　褐色粘質土ブロック
5　褐色粘質土ブロック混黒色土
6　褐色粘質土ブロック混明褐色粘質土
7　黒褐色土
8　褐色粘質土ブロック
9　褐色粘質土ブロック混褐色粘質土
10　褐色粘質土ブロック混明褐色粘質土
11　褐色粘質土ブロック
12　暗黒褐色土
13　褐色粘質土ブロック混明褐色粘質土
14　褐色粘質土ブロック
15　褐色粘質土ブロック
16　灰黄色粘質土
17　明褐色粘質土
18　黒褐色粘質土
19　灰白色砂質土
20　黒褐色粘質土
21　明灰黄色粘質土
22　黒色土
23　灰白色砂質土
24　灰黄色粘質土
25　黒色土
26　灰黄色粘質土混灰白色砂質土
27　濁灰白色砂質土
28　褐色粘質土
　　明褐色粘質土
30　淡灰褐色砂質土
31　灰黄色粘質土
32　灰白色砂
33　淡灰褐色粘質土

28～32：地山

第112図　2号溝土層図（1／60）

溝２の南に検出した。東側は溝２に接続する。幅50cm、深さ10cm程度である。石鍋の破片が出土している。

溝４（付図１）**Ｍ４**

溝５の北側に検出した。南端は溝５に接続し、北側は溝２の東部を斜断して調査区外に延びる。幅１ｍ、深さ５㎡程度の浅いもので、途中で途切れている。摩滅した土器小片が若干量山土しただけである。

溝５（付図１）**Ｍ５**

調査区北半に検出した。９・10祭祀土壙が存在する部分で直角に屈折し、“Ｌ”字形を呈する。幅は１ｍ前後、深さは50cm前後である。溝の南北部分は屈折部から南へ46.5ｍを検出し、その南側は調査区外に延び、溝６と交差すると思れる。屈折部から西は14ｍを検出し、その西側は調査区外に延びる。この溝は多数の遺構と切り合っている。ほとんどの場合、溝が切っているが、７号廃棄土壙に切られる。よって、この溝は６世紀後半～８世紀の間に掘られたものと考えるが、細かい時期決定は出土遺物からはできない。

溝６（付図１）**Ｍ６**

調査区南半を斜断してほぼ南北に走る溝で、両端は調査区外に延びる。この溝は重複する遺構を全て切っている。よって、溝から出土する遺物は、切り合い関係がある遺構のものを含んでおり、弥生時代中期～奈良時代までのものが多い。しかし、51号住居と切りあった部分で中世の土器を検出した（図版27－中）。よって、溝６は中世のある時期に埋ったと考えられる。

土　器（第194図）　底部を欠くが、口径46.6cm、器高18.8cmを測る大型の鉢形の土器で、鍋として使用されたものであろう。口縁部の平坦面は工具による施文なされ、体部外面はハケ目調整痕がが明瞭に残り、内面は上半はハケ目が残るが下半はナデ調整により、ハケ目が消えている。胎土に細砂粒・粗砂粒を若干含み、焼成良好で褐色を呈するが、煤が内外面に付着しており、全体に黒っぽい。

11　その他の出土遺物

各遺構から出土した遺物の中で、その遺構と直接関係しない遺物についてここで簡単に説明する。

縄文時代の出土品（図版59・71～74、第120図－１～４）

１はサヌカイトの縦長剥片を素材としたスクレである。一側縁には自然面を残し、その反対側には、片側面から調整剥離が施され、緩やかに外湾する刃部が作出される。摩滅はなく遺存状態は良好で、風化との度合から縄文時代に属するものと考えられる。

その他に、石鏃・石斧・凹み石等が出土している。それらの出土遺構については極く一部を図示しただけで、ほとんど写真図版に掲載している。

2は83号住居の覆土中から出土した偏平打製石斧で、全長13.6cm、幅8cm、厚さ1.1cmである。偏平打製石斧は9号住居の覇土中からも1点出土している。3は86号住居から出土した摩製石斧で、全長17.2cm、幅6cm、厚さ3.9cmである。太型蛤刃や偏平の摩製石斧は他に、12・52・68・73号住居、4号廃棄土壙、溝5からも出土している。4は凹み石で表採品である。長径18.5cm、短径13.5cm、厚さ7.8cmである。表・裏面が凹み、四側面は打ち欠いており、重石としても使われたようである。凹み石は他にも多量に出土しており、大小様々ある。擦り石も数点出土している。

縄文時代の石製品はかなりの量が出土しているが、土器は一点も出土していない。

弥生時代の出土品（図版52・63）

投弾と石庖丁が出土している。石庖丁はすべて破片で、主に住居の覆土中から出土している。

古墳時代以降の出土品（図版65・70・75・76）

砥石・軽石製不明品・瓦片・滑石製石鍋片・陶磁器等か出土している。

砥石（図版65）は仕上砥が多く、石材は砂岩である。住居・円形周溝・溝等から出土している。すべて混入品である。

軽石製不明品（図版70）は住居と廃棄土壙から出土している。12号廃棄土壙品は円形の凹みがある。人工遺物であろうと考えるが、用途については不明である。

瓦片（図版75・76）は4号廃棄土壙から出土した（写真の注記は旧遺構名）。平瓦の破片で、斜格子のタタキが見られる。

滑石製石鍋片（図版75・76）は30号住居と溝3から出土した。ともに小片で煤が付着する。

陶磁器（図版75・76）はピットや住居から出土しているが、住居出土品も覇土中に掘り込まれたピットに含まれるとのであろう。

以上が遺構の説明の項で取り上げなかった出土品である。土器についても出土量が多く、整理期間に限りがあったため、割愛したものが多い。

表1　竪穴住居跡計測表

番号	図	主軸方位	屋内土壙	ベッド状遺構	竪穴部面積	床面積	ベッド比率	出土遺物	備考	旧No.
1	6	N－3°－E	無	－	15.4	－	－		溝2に切られる。	104(107)
2	9	N－68°－E	(A)	(A)－	(20.0)	－	－	鎌1　砥石1		90
3	10	N－60°－E	(A)	A－	(19.9)	－	－	鍬先1	主柱抜去後に、主柱穴に甕を埋納する	93・106
4	付図1		A	(A)－	－	－	－			92
5	付図1		?	(A)－	－	－	－	鍬先1		110
6	12		?	?－	－	－	－			
7	12	N－73°－E	(A)	A(11.8)	22.5	(10.7)	52.4	鍬先2　砥石1 石庖丁1		88
8	12		?	?－	－	－	－			108
9	13	N－64°－E	A	A(10.5)	22.4	(11.9)	46.9	石庖丁1 扁平石斧(鍬?)1		87
10	14	N－38°－W	?	(A)－	(5.1)	－	－			89
11	15	N－46°－W	無	無－	(18.6)	－	－			83
12	16	N－38°－W	無	無－	8.2	－	－	砥石1　石剣1 石斧(縄)1		86
13	17	N－44°－E	無	無－	(18.5)	－	－	石鏃2		82
14	18	N－20°－W	無	無－	(10.1)	－	－	鉄鏃?片1		81
15	18	N－48°－E	A	?－	(16.9)	－	－	不明鉄器1 投弾1		80
16	19	N－25°－W	無	無－	(13.8)	－	－	鉄鏃茎?1　砥石1 鏃未製品?　投弾1		78
17	20	N－66°－E	無	A(10.6)	(21.8)	(11.2)	48.6	投弾3		79
18	20	N－52°－W	無	無－	(10.1)	－	－			91
19	21			?－	(12.3)	－	－			96
20	22	N－40°－E	A	無－	(14.6)	－	－	鈍1　砥石1		77
21	23	N－18°－W	無	無－	(28.5)	－	－	砥石1	カマドを有する。古墳時代後期。	76
22	25	N－79°－E	A	A((16.9))	(39.7)	(22.8)	42.6	砥石1 投弾1	主柱穴は布掘りである。	94・84
23	付図1		?	?－	－	－	－			95
24	26	N－44°－W	A	A((14.3))	(27.3)	(13.0)	52.4			85
25	27	N－55°－E	?	?－	(26.8)	－	－			75
26	27	N－55°－E	?	?－	3.1 (+)	－	－			74
27	27	N－45°－E	?	?－	8.3 (+)	－	－			73
28	28		?	?－	13.3 (+)	－	－			97
29		N－25°－E	?	?－	－	－	－	土製紡錘車1		101
30	30	N－61°－E	A	C(22.8)	53.2	30.4	42.9	斧1　凹み石1 投弾1	主柱抜去後に、主柱穴に甕を埋納する。	66
31	31	N－26°－E	無	A((10.9))	(17.0)	(6.1)	64.1			63
32	32		A	無－	(12.1)	－	－			105
33	32		無	無－	(31.1)	－	－	土玉1		69
34	33	N－54°－E	B	無－	(13.4)	－	－	石庖丁1 不明軽石1		64
35	33	N－52°－E	A?	無－	(8.7)	－	－			103

注　①屋内土壙のA・Bは第2図を参照。　②ベッド状遺構のA～Dは第114図を参照されたい。　③床面積は竪穴部面積からベッド状遺構の面積を引いた面積を示す。　④ベッド比率は竪穴部面積に占めるベッド状遺構の比率を示す。　⑤出土遺物は土器を除く。

番号	図	主軸方位	屋内土壙	ベッド状遺構	竪穴部面積	床面積	ベッド比率	出土遺物	備考	旧No.
36	34	N－61°－E	A	無－	(14.7)	－	－	砥石 1		61
37	34	N－39°－E	A	無－	(17.2)	－	－	砥石 1		60
38	35	N－30°－W	A	B(18.0)	45.2	27.2	39.8	土製紡錘車 1 凹み石 1		62
39	36	N－39°－W	無	無－	－	－	－	滑石製紡錘車 1	カマドを有する。古墳時代後期以降に属する。	71北
40	36	N－57°－E	A	？－	(13.7)	－	－			71
41	36	N－40°－E	無	？－	(26.1)	－	－	鉄鏃1 摘み鎌 1 石鏃 1		72
42	37		無	A	(7.4)	－	－			115
43	37		無	A？－	(16.5)	－	－	すり石 1		100
44	37	N－13°－E	無	？－	(15.2)	－	－	雲母片岩紡錘車1 砥石		116
45	38		無	無－	－	－	－	石庖丁 1	カマドを有する。古墳時代後期。46号に切られる。	98
46	38	N－50°－W	無	無－	(25.5)	－	－		カマドを有する。古墳時代後期45号を切る。	67
47	40	N－39°－E	?	？－	(27.2)	－	－	石庖丁1 凹み石 投弾 1		68
48	40	N－61°－E	?	？－	(27.3)	－	－	鉈1　砥石 3		114
49A	40	N－38°－W	無	無－	－	－	－			
49B	40	N－38°－W	?	?	－	－	－			
50	付図1		無	無－	－	－	－	投弾 1		99
51	41	N－92°－W	無	無－	(17.0)	－	－	鉄鏃 1	カマドを有する奈良時代の住居。	65
52	42	N－93－W	A	B((13.4))	(32.4)	(19.0)	41.4	鍬先1 砥石1 石庖丁1 石斧(縄)1		37
53	43	N－80°－W	A	C((15.1))	(31.4)	(16.3)	48.1	鉄鏃1　不明鉄器1 紡錘車 1	主柱穴掘り方が布掘り的である。	47
54	43		?	？－	－	－	－			
55	44		?	A？(13.3)	(27.7)	14.4	48.0			78(134)
56	45	N－39°－E	無	A(8.7)	20.4	11.7	42.6	石庖丁 1	主柱穴は布掘りで、主柱を立てる時に壺を埋納する。	46
57	46		?	？－	10.3	－	－			48
58	46	N－38°－E	?	？－	(20.6)	－	－	石庖丁 砥石 1		49
59	47	N－15°－E	A	A？(12.6)	(25.0)	12.4	50.4			57
60	47	N－89°－E	?	C？－	(36.3)	－	－	鋳型（砥石）1 砥石 1	通常2本柱の竪穴部の状況であるが、特異な主柱穴の形状から4本柱と思われる。	35・57
61	48	N－49°－W	?	A？(18.0)	(20.7)	(12.7)	38.6	石斧 1 砥石 1		36
62	49	N－90°－W	無	無－	11.2	－	－		カマドの痕跡あり。	38
63	付図1		?	？－	－	－	－			45
64	付図1		?	？－	－	－	－			33
65	付図1		?	？－	－	－	－			
66	50	N－55°－E	A	？((13.0))	(22.4)	(9.4)	58.0	土製紡錘車 1 石剣 1　砥石 1 不明鞴石 1		32
67	51	N－50°－E	A	？－	(25.9)	－	－		上屋を解体しない状態で拡張したと考えられる。	39
68	52	N－85°－E	A	C(16.8)	34.6	17.8	48.5	鉄鏃茎？1　凹み石1 不明鉄1　石斧(縄)1		31
69	53	N－88°－E	A	D(15.8)	25.2	9.4	62.7	凹み石 1		30
70	54	N－39°－E	A	無－	(14.3)	－	－	石斧 1　投弾 1		34

番号	図	主軸方位	屋内土壙	ベッド状遺構	竪穴部面積	床面積	ベッド比率	出土遺物	備考	旧No.
71	55	N－40°－E	?	A？(16.8)	(33.7)	(16.9)	49.8	投弾1	西壁に小規模な張り出し部をつくる。	58
72	56	N－50°－E	A	C((15.8))	(29.5)	(13.7)	53.5	石剣1　石庖丁1		29
73	57	N－53°－E	?	A？((9.2))	(21.0)	(11.8)	43.8	石斧(縄)1		51
74	58	N－39°－W	無	無－	(43.4)	－	－	鉈2 石剣1 石庖丁2 スクレーパー1	4本柱の住居である。	52・55
75	58	N－39°－E	無	無－	(39.7)	－	－	土製紡錘車1 砥石1	4本柱の住居である。	54・56
76	59	N－56°－W	無	A？(7.3)	(16.7)	(9.4)	43.7			44
77	60	N－2°－W	無	無－	(14.2)	－	－		カマドを有する奈良時代の住居。	130(58)
78	61	N－83°－E	A	？－	(31.8)	－	－	砥石3 扁平石斧(鍬)1	張り出し部を持つ。	28
79	62	N－0°－E	無	？－	(22.0)	－	－	不明軽石1		27
80	63	N－57°－W	無	無－	(25.3)	－	－	土玉1 摘み鎌1	カマドは遺存しないが、古墳時代後期の住居である。	16
81	64	N－44°－W	無	無－	(21.0)	－	－	土製紡錘車1 砥石3　石庖丁1 凹み石1	カマドを有する古墳時代後期の住居である。	17
82	66	N－35°－E	無	A？((9.7))	(17.7)	(8.0)	54.8			53
83	68	N－5°－E	A	無－	43.0	－	－	石庖丁1	4本柱の住居である。	41
84	69	N－44°－W	無	無－	(15.8)	－	－	扁平石斧(鍬？)1	カマドを有する古墳時代後期の住居である。	42
85	70		?	?	－	－	－	摘み鎌1 石剣1 すり石1　不明軽石1	住居廃棄後に大量の土器を投棄する。	59
86	70	N－61°－E	B	C((23.5))	(46.4)	(22.5)	46.7	鉄鏃1　鎌1 鍬先1　石庖丁1	張り出し部をもつ。住居廃棄後に大量の土器を投棄する。	58(131)
87	70		?	？－	－	－	－			40
88	71	N－73°－E	無	A((10.2))	20.2	(10.0)	50.5	土玉1　石庖丁1 鉄鏃2		19
89	72		無	無－	(10.2)	－	－	砥石1		20
90	73		無	無－	(7.7)	－	－			18
91	74	N－77°－W	A	無？－	(26.3)	－	－		4本柱の住居である。	113
92	76	N－87°－E	B	C((24.9))	(52.8)	(27.9)	(47.1)	鉄鏃2　鏃先1 不明鉄器1 砥石1　投弾1	主柱抜去後に土器を埋納する。住居廃棄後に大量の土器を投棄する。	14・25・26・13南半・105・132
93	78	N－83°－E	無	C((14.0))	(25.8)	(11.8)	54.3	投弾1　鉄鏃先1 すり石1		13
94	付図1		?	？－	－	－	－			104(135)
95	79	N－80°－E	?	？－	(5.7)	－	－			6
96	80	N－36°－E	A	A((11.2))	(27.7)	(16.5)	40.4	鉄刀子1　砥石4		2
97	付図1		?	？－	－	－	－			1
98	付図1		?	？－	－	－	－			8
99	81	N－39°－E	?	A－	(21.0)	－	－	土鉢1		9・10
100	82	N－3°－E	?	A((12.5))	(23.8)	(11.3)	52.5	不明鉄器1 鎌未製品？1		11・12
101	83	N－41°－E	A	A((5.0))	(9.6)	(4.6)	52.1			15
102	84	N－28°－W	無	無－	(19.5)	－	－		カマドを持つ古墳時代後期の住居である。	21
103	85	N－85°－E	A？	C(9.6)	(23.9)	(14.3)	40.2	鍬先1　鍬先か？1 鉄斧1　鉈1 石庖丁1		21・22
104	付図1		?	？－	－	－	－			
105	付図1		?	？－	－	－	－			
106	付図1		B	？－	－	－	－			

第 4 章　おわりに

全章までに報告した遺構は、弥生時代後期末～古墳時代初期の集落遺構が量的に中心を占めるが、本遺跡で検出した全遺構の時期幅は、縄文時期に属すると考えられる落し穴状遺構を最古として、歴史時代にまで及んでいる。また、出土遺物は弥生時代後期末～古墳時代初期を中心とした竪穴住居跡から出土した土器は十分には整理しきれないほどの膨大な量であり、縄文時代の石製品・弥生時代中期の祭祀土器・弥生時代後期末～古墳時代初期の鉄製品や石製品等図示できないものも残った。土器編年については、その能力がないので割愛する。以下、調査・整理時に感じたいくつかの問題点について、簡単に触れてまとめかえる。

1　祭祀土壙（付図１、第113図）

Ｂ地区全体にわたって検出したが、大きくＡ～Ｄの４グループに分けられそうである。甕棺墓は調査区内では検出していないが、本遺構跡の西側約100mの地点で甕棺から２口の銅戈が発見されている（註１）。よって、調査区の西側に墓地が展開すると考えられ、遺構の分布状況から墓地と祭祀土器を廃棄する場所が明確に区分されていたと推測される。祭祀土壙の平面プランと規模は多様であるが、その配置は一定の規則性が認められるものがある。土壙の主軸が並行するもの、直交するもの、の二つが目立つ。これらは、互いに意識の内において掘られたものであろう。最後に、各祭祀土壙出土土器の相互の接合関係については検討していない。祭祀土器を意識的に割って廃棄したと思われる資料が多々あるので、今後、祭祀土壙相互の出土土器の接合関係の検討は重要な要素を占めてこよう。

2　竪穴住居跡の出土遺物

竪穴住居跡には種々の生活廃棄物や祭祀遺物が含まれている。これらは、

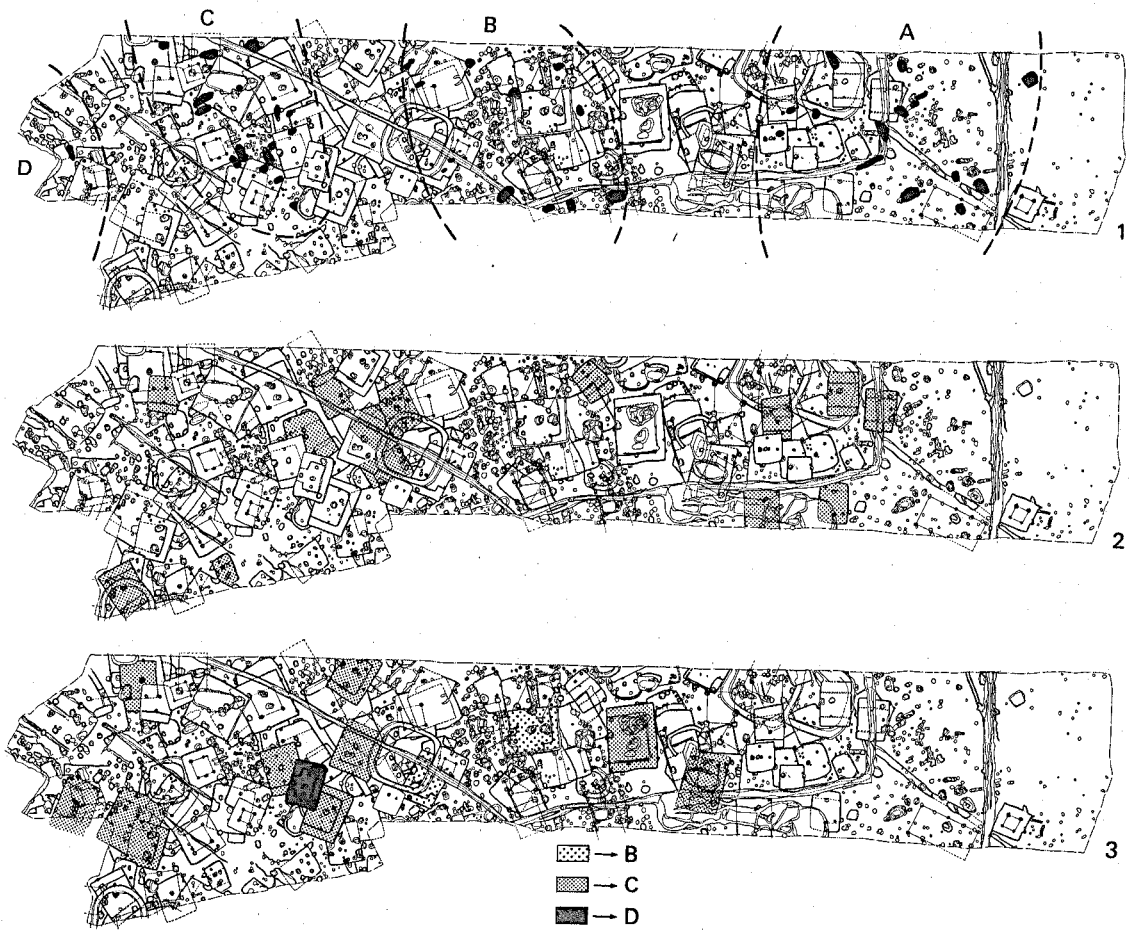
① 住居に伴なうもので、住居廃棄時にそのまま放棄されたもの。

② 住居の個別遺構（例えば主柱穴やカマド）に伴なうもの。

③ 貼床下層で検出され、住居を建てる時に他の遺構を破壊して偶然的に混入したもの。

④ 住居廃絶後に住居内に投棄されたもの。

というように、大きく見れば四つの性格の遺物が竪穴住居跡から検出される。後世に掘り込まれたピットをそれと認識せずに、住居の覆土と一緒に掘り上げる場合も考慮すれば覆土中の遺物についての価値判断は細心の注意を要する。本遺跡では、出土遺物をかなり検討して取り上げたつもりだが、出土遺物の竪穴住居跡との関係については、一部、不明確な部分を残した。



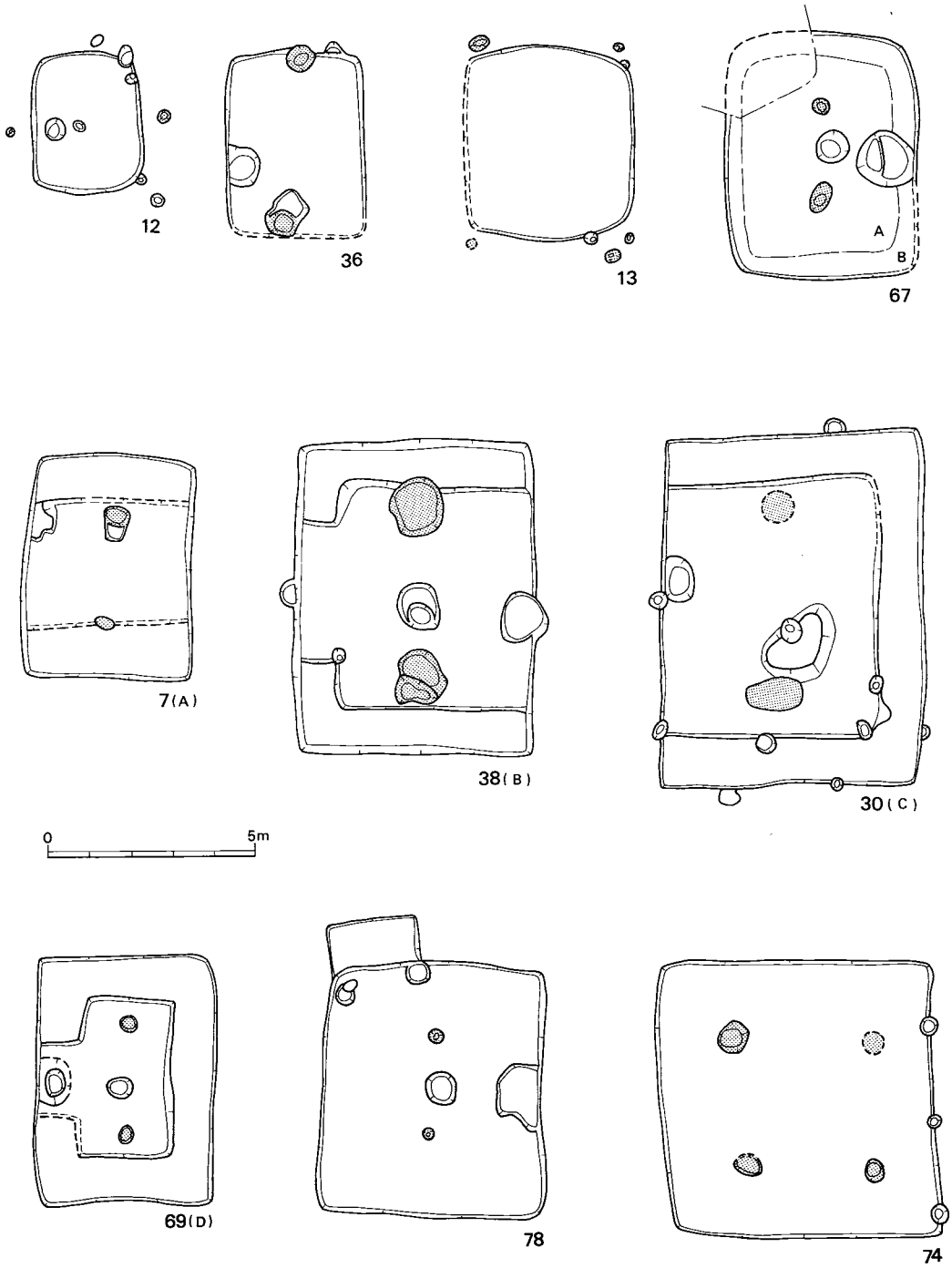
第113図　遺構配置図（１－祭祀土壙のグループ、２－Ａ型ベッド状遺構分布図、３－Ｂ～Ｄ型 ベッド状遺構分布図）

本文中でも触れたが竪穴住居跡に伴なう出土遺物は極めて少なく、伴なう土器にも検出場所によって時間差を認めなければならない。例えば、56号住居のように主柱を立てる時に主柱穴に埋納された土器は住居建築時のものである。が、3・30・92号住居のように主柱抜去後に主柱穴に埋納された土器や、住居に伴ない床面上で検出される遺物等は厳密には住居廃棄時のものである。両者に土器論上の形式差は無い場合が多い。そこに、また別個の問題を含んでいる。すなわち、耐用年数とは別の問題で竪穴住居の営続期間の問題である。それは、単に技術的な問題ではなく、極めて政治性を帯びて集落論に関わるものであり、内容が深く大きく、ここでは論及することができないので、後日の課題として残しておく。次に、廃棄された住居への生活廃棄物（土器・土製品・鉄製品・石製品等）の投棄の問題がある。出土量は土器が圧倒的に多いが、鉄製品がかなり含まれることは、今後、竪穴住居跡出土の鉄製品を考える時、細かい検討を要求されることを示唆している。まず、土器については、投棄された土器と住居に伴なう土器との間に形式差を認めることが困難な場合が多い。また、住居が切り合う場合でも、各々の住居に伴なう土器の間に形式差を認め難い場合が多い。しかし、出土状況は明らかに異なり、竪穴部内の覆土を細かく検討しても、住居に伴なうものはほとんど床面に潰れた状況で検出され、間層を挟んで投棄された土器がほぼ完形のまま丸ごと出土する。壁際と住居中央で出土する投棄土器はほとんど完形品である。また、時として、1個体の土器を割ってそれらの破片を廃棄された別々の住居に投棄することもあったようである。このような、土器の出土状況を考える時、竪穴住居跡の営続期間とともに、竪穴住居跡の同時併存を検討する上で極めて困難な状況である。少なくとも現在、本遺跡では土器の形式論から集落を考えていくことは難しく、現在の土器編年で考えれば一形式の中に十数軒～数十軒の住居が含まれるだろう。よって、土器の細かな相違と竪穴住居跡の形状や配置から、およそのことを想定するしかなかろうと思われる。次に鉄製品についてであるが、調査の段階から考えて自信を持って竪穴住居跡に伴なうと言えるものは無い。接合すれば完形品となるものがあるが、そのようなものでさえ、捨てている。再利用は考えてなかったのではなかろうか。集落遺構として本遺跡は拠点集落の可能性も残すが、鉄製品の捨て方は異常である。

本遺跡では、出土遺物について日頃考えていたことを考慮して取り上げたつもりである。が先述のように不明確な部分も存在し、出土資料を十分に報告できない面もある。竪穴住居跡の出土遺物についての検討は、単に遺構の所属時期や土器編年の問題を超える大きな問題点が存在することを提起して、この項を終える。

3　乙隈天道町遺跡の竪穴住居跡（第113・114・115）

カマドを持つ住居を除けば、本遺跡の住居の竪穴部の形状は規模の相違を別にすれば竪穴部のプランは、およそ集成模式図（第114図）に示すように集約される。本遺跡の初期の住居はベッド状遺構を伴なわないで、竪穴部のプランは12・13・36号住居のように、長方形・方形に近

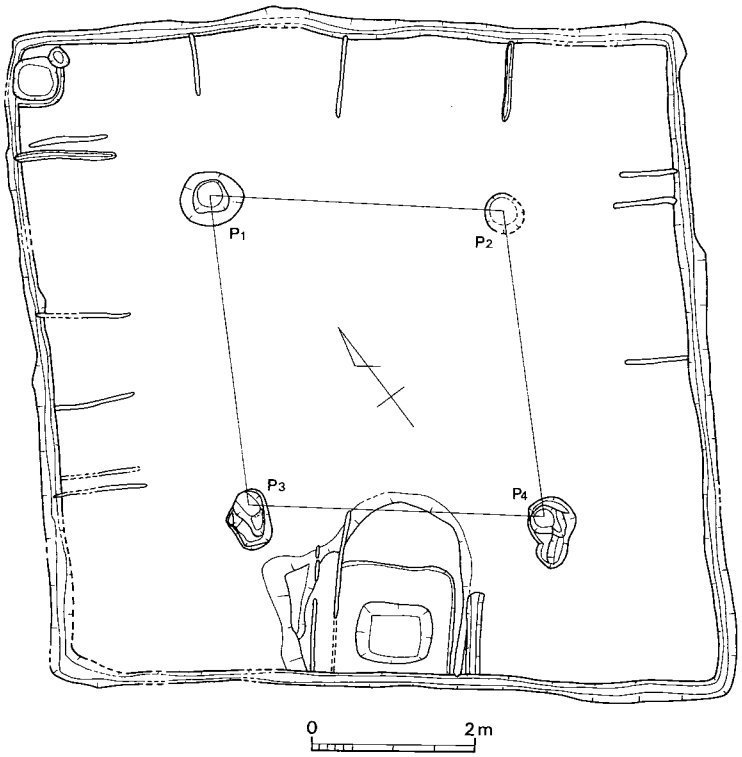


第114図　竪穴住居跡竪穴部集成図（A～Dはベッド状遺構のタイプを示す。）

い形状を呈する。これらの住居は通常見られるように竪穴部内に主柱穴を配置せず、36号住居が両短壁際に主柱穴を配置する他は、竪穴部外に求めざるを得ない。12号住居の場合は竪穴部長壁の外にある一対の小ピットを、13号住居柱穴の場合は竪穴部隅の外にある小ピット（一つは検出していない）が主柱穴であろうと考える。主柱穴配置を竪穴部に想定すれば、住居の拡がりは相当広く考えなければならないだろう。住居の竪穴部外への拡がりを推測し得る資料として“張り出し部”（註２）の存在（71・78・86号住居）、屋内土壙の竪穴部壁外への張り出し例（34･38号住居）、竪穴部外に想定される補助柱穴の存在等があげられる。張り出し部の規模や補助柱穴の配置状態から、竪穴部外への住居拡がりは、少なくとも壁から１mの範囲を想定することができる。このことを具体的に示俊する事例として67号住居がある。この住居は前章で説明したように柱を立てたまま拡張されたと考えられる住居（第114図－67、A→B）で、30cm～65cm幅で外側に拡げ、床を貼りかえている。住居の広がりが竪穴部外に相当程度なければ不可能な作業である。このように竪穴住居の場合、範囲は明確にし難いが、竪穴部外へ相当広がるようである。

本遺跡は弥生時代終末前後を中心とするため、ベッド状遺構を伴なう竪穴住居跡が多く認められる。これらはA～Dの四つのタイプに分けられる（第114図）。屋内の土壙Aの位置とベッド状遺構の関係からは、形式的にはA→Dへの発展（竪穴部内でのベッド状遺構の占める割りあいが増加する）が考えられる。どのタイプも基本的には２本の主柱で上屋を支える。数的にはAタイプのベッド状遺構を持つ住居が多く、ほぼB地区全体に存在する。Bタイプは38・52号住居の２軒で、大型の住居に認められる。Cタイプの明確な例は30・53・68・72・86・92・93･103号住居の８軒でB地区の南半に存在する。Dタイプは69号住居の１軒だけである。Aタイプは弥生時代後期半頃の土器を出土し、Dタイプは庄内式の新しい段階の土器を伴なっており、本遺跡では上記の４タイプのベッド状遺構は弥生時代後半期後半～古墳時代初期の間に採用されていることが分かる。これらのベッド状遺構は地山削り出しのものはなく、全て客土して造られている。その際、ベッド下層は溝状に掘り込んでいる。微高地上に営まれた時期の集落の場合、ベッド状遺構の構造は上記のようなものが一般的である。

ベッド状遺構を持つ時期の住居の竪穴部の平面プランは長方形を呈し、主柱は２本が一般的である、しかし、この中から正方形に近いプランの竪穴部が出てくるようで、ベッド状遺構は不明確ながら78号住居はその過程にあると考えられている。しかし、まだ２本柱の段階である。78号住居とほぼ同一のプランを呈する91号住居は４本柱であり、本遺構では91号住居の段階でベッド状遺構がなくなり、一般的に見られる４本柱となる。それ以降、74・83号住居のようにほぼ正方形に近いプランとなり、４本柱となる。ここで、60号住居が問題となろう。この住居は第47図のように、、正方形プランを志向する過程にあると考えられ、主柱は４本であったろうと推測した。主柱穴の掘り方が通常の２本柱のそれと異なり、竪穴部の短壁に平行に土壙墓状



第115図　甘木市宮原遺跡C地区３号竪穴住居跡

に掘り、その両端の底面を掘り下げて、各々２本計４本の柱を立てていたようである。このように、本遺跡では、２本柱から4本柱への移行と、竪穴部平面プランの正方形への志向は軌を一のしているようである。４本柱で正方形プランの竪穴部が確立した段階をやや過ぎた頃、本集落は断絶する。それは初期須恵器が出現する直前、５世紀初頭頃だと考えるが本集落ではまだ屋内土壙が残る。ほぼ同時期の甘木市宮原遺跡C地区３号竪穴住居跡（註３）では、竪穴部が菱形に近い正方形の平面プランを呈し、４本柱の配置も壁に平行で、二つの屋内土壙（A・B）を持っている。また、周壁に直交する多数の間切り溝が存在している。この住居は種々の重要な問題を含んでいるが、天道町遺跡との関係で当面する問題として、所属時期の近時性・方形に近いプランと４本柱・屋内土壙があげられる。本遺跡のこのタイプの住居は屋内土壙Aはあるが同Bは持たないが、上記３点については共通点が多い。屋内土壙周辺の土器出土状態も木蓋が腐食して土器が転落したような状態を示している。さらに、宮原遺跡でもこの時期で集落は一度断絶する。吉井町塚堂遺跡（註４）例ではこの直後の竪穴住居跡にカマド付設される。初期須恵器の出現も上記竪穴住居跡からなる集落の断絶直後頃であろう。このように、天道町遺跡では、須恵器の出現期の少し前に一度集落が途絶え、次の古墳時代後期（６世紀後半）まで集落遺構は見られない。橋口達也氏の説くように、「低地における聚落の爆発的増大ともいえる現象が５世紀初頭から前半にかけて急激に衰退する。これは聚落を山際や丘陵上に押しやり低地の聚落跡を水田化し生産性をあげるという手段であった。これと対応して地域の盟主的首長墓である、前方後円墳はその立地を変え、一般的共同体の首長墓である、小方墳・円墳の造営はほ

ぼ時期を同じく終焉している。これらの現象は強権力による規制としかいいようがなく、又北部九州における普遍的な現象であることから考えてもこの強権力こそまさに中央権力によるものであったと断言できよう。」（註５）という言葉を背景に考えれば、本遺跡の集落が遅くとも５世紀初頭には途絶えることとは、個別天道町遺跡だけの問題ではなく北部九州全体の政治・社会状況と密接に関わっていたことが理解できよう。

以上、乙隈天道町遺跡の問題点のうち、出土遺物と竪穴住居跡について簡単に触れたが、考えなければならない問題が山積している。ここで、各問題について詳述しかねるので、機会を改めて考えてみたい。

註　1　井上俊男・柴田泰典・渡辺正気　「福岡県三井郡小郡町大字乙隈発見の二口の銅戈」（『九州考古学』14　所収）　1962

2　児玉　真一　「竪穴住居跡に関する覚書　－主に床面構造からの検討－」（福岡県立小倉高等学校創立八十周年記念　『まがたま』）　福岡県立小倉高等学校　考古学部　1988

3　福岡県教育委員会　『宮原遺跡』　Ⅰ　（九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－14－）　1988

4　福岡県教育委員会　『塚堂遺跡』　Ⅰ～Ⅴ　（一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告）　1983～1988

5　橋口　達也　「聚落立地の変遷と土地開発」　（『東アジアの考古と歴史』中　岡崎　敬先生退官記念論集）　1987

県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告　3

乙隈天道遺跡

福岡県文化財調査報告書　第86集

上　巻

平成元年３月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７－７

印　刷　㈱西日本新聞印刷
福岡市中央区天神1丁目4番1号

福岡県行政資料

分類番号	所属コード
JH	2133051
登録年度	登録番号
63	5